

---

# MAX HEART!

XL エクセル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MAX HEART!

### 【ノード】

N0113M

### 【作者名】

X-L エクセル

### 【あらすじ】

MAX HEARTは全力の心。全力の心あればできぬものなど何もないっ！

夏の高校ちゃんばら「リトルウォーズ」優勝を目指し、青春を謳歌する。

全力で戦い抜いた、その先には一体何が待っているのか？コメント、感想などくれると喜びます。皆様のおかげでよくなりyal突破！

下部にあるランキングクリックしてもらえたと嬉しいです。勿論面

白いと感じていただけたらで結構です！

夏の時期に、執筆再開予定！

## 赤いハチマキの男！

> 8 9 8 8  
MAX HEART  
マックスハート

それは全力の心。 全ての物事は全力でやればできぬ事など何もない。

この物語の主人公「響ワタル」の絶対に揺らぐ事のない一つの正義である。

現代から少し、近未来のお話。

世の中では「ちゃんばら」に注目が集まり、本格的なスポーツ格闘技として人々がプレイヤーとしての活動をするようになった。

しかし世界に認知されるスポーツになつたとはいえ、知名度は野球やサッカーに比べても、いまだに低いのが現状である。特に大人の目はまだ「ちゃんばら」というものを認めていない人が多く、いわゆるプロスポーツとしての活躍は皆無に等しい。

そんな中、現在最もこのスポーツ格闘技に力を入れている年齢層がある。

それは高校生であり、ちゃんばらスポーツは「高校ちゃんばら」として太陽の熱を発しているかの如くの熱さを出している。

高校ちゃんばらは、野球の甲子園のような形で、「リトルウォーズ」という名の大会が設けられる。

リトルウォーズ（子供達の戦争）と銘打たれた戦いは毎年夏の時期に、名プレイヤーを生み、幾多の名勝負を送り出してきた。いわばプレイヤー達にとっては真夏の登竜門。

響ワタルは毎年のように、この大会を見てきた。

子供の頃から戦いを見て、いつしか自分もこの舞台で戦いたいと

願うようになる。

いつしかワタルも高校生になり、リトルウォーズの参加資格を得られる。しかしワタルには参加したくても参加できない理由があつた。

それはリトルウォーズの登録における決まり事 参加はチームとし、最低三名と最大五名のメンバー構成でなければならない。この最低条件がクリアできずに高校生活二年目の夏を向かえてしまう。

七月九日。

気合いの入った赤いハチマキをした少年、響ワタルが一人の少年と戦っていた。

「良いかマサ、それにケン、オレサマに一本でも太刀を浴びせられたらマックスハートのメンバーにしてやるぜー！」

「よーし、いくぞー！」

ワタル、それにマサとケンは木刀を持っている。まずはマサという少年がワタルに立ち向かっていく。

「いやああああ！」

「おっせえぞ、マサ！」

勿論、マサといつ少年は剣術など習つた事もない。我流といえば聞こえは良いが……つまりはめちゃくちゃである。

マサの一太刀を、ワタルは軽くいなし、鋭い一撃をあたえる。

当たつても良いようにマサの尻におもいつきり木刀をたたき込む。やや鈍い音がその攻撃の痛さを物語っている。

「ぐふつ、…………いてえ……」

情けなく倒れ込んでしまうマサ。もう既に半べそをかいている。

「次はテメーだケン、容赦なくかかつてきやがれえ！」

「ひいいいっ！」

情けないマサに呆れた為か、ワタルはケンに声をかけた。

だが既にケンはマサの姿を見て脅えて腰がひけてしまっていた。

ワタルは深い溜息をついた。

「はあ～……、おめーら、そんなんでリトルウォーズに優勝できつと思つてんのかつ！」

「い、いやー、実は参加できれば良いかなーつて……」

「そ、そうそう……」

マサとケンに対し鋭い眼光を放つワタル。マサとケンはその眼光に畏縮してしまう。

「ブワツツツカヤロー オオオオオオ！～！」

『ひいいいい～～～』

ワタルは感情のままに言葉をはき出した。

そのあまりの声の大きさに辺り一帯にワタルの言葉がやまびことなり響いた。

「そんな根性だから何もできねえんだ、良いかテメーらマックスハートは全力の心だ！」

『ぜ、全力の心？』

二人で脅え、二人で聞き返すマサとケン。

「そうだ、何事も全力の心を持つて物事を成し遂げるつ、オレサマのたつた一つにして搖らぐことのない正義だ！」

『……』

燃え上がるワタルに対してマサとケンは呆然としている。

「つまりつ、全力の心を持つて戦えばリトルウォーズ優勝も田じやねえぜー！」

「いや……そんな事言つたつてさあ～、なあ？」

「だよな～」

マサとケンはお互に田配せしあう。それに対してワタルは二人の態度に顔をムッとする。

「なんだよ、言いたい事があるなら言えつてんだけノノヤロー！」

「ひいいいい、言うから怒るなよお～！」

「そ、そうだよ、ワタルはただでさえその気合いがおつかないんだ

からせ

「良いからさつと喋れってのー！」

「怒るなよ？」

いつ手が出てきてもいいようにマサとケンは一人揃つて、自分の手で壁を作っている。

マサはワタルに注意を促し喋り始める。

「だつてリトルウォーズって言えば高校格闘技スポーツの中じゃ今の時代の激戦区になつてるんだぜ？」

「それがどうした！」

「ワタルだつて知つてるだる、三年連續優勝をしてい強豪チーム「絶対王者の松原」率いるT・O・ティカー、それに去年の「MVPプレイヤー」之宮小次郎のいるライジングス、そしてあの「天才・二崎」の率いるFエンゼル……優勝するにはこいつらと戦わなくちゃいけないんだぜ……」

「そうそつ……それが一般人同然の俺らがあいつらと戦うなんて物語さ」

マサが解説をし、その内容にケンが頷く。

「だつたらそいつらを倒してオレサマ率いるマックスハートが今年の王者になつてやるさ！」

『ははは……』

二人の他人事ともとれる笑いに、ついにワタルも頭に血がのぼつてしまつた。

「…………もういい、おめえら帰れ！」

『はっ……え、でもチームは？』

「ここはマックスハート、全力の心で戦う奴の集まりなんだよつ、おめえらみてえな奴等はとつとと帰れつ、コノヤロー！！！』  
『ひいいい……じゃ、じゃあ俺達は帰りまーす！！』

ワタルに一喝されたマサとケンは逃げるよつに走つていつた。ワタルは一人その場に取り残された。

大声を出したおかげか少しだけ落ち着きを取り戻す。

「……ふー……、わかつちやいるよ……でもガキの頃から夢見た舞台なんだぜ」

ワタルは幼い時からリトルウォーズの戦いを見ていた。それこそ何回も何回も。

見るたびにワタルは次は優勝の舞台に自分が立つてやると常に夢を見続けたのである。

リトルウォーズの大会参加資格は高校在籍である事。ワタルは今年は高校三年で最後のチャンスなのだ。

「……」

ワタルは一人手に持った木刀を見る。今まで自分が見てきた戦いの光景がよみがえる。

有名な試合どころか前座的な内容の試合でさえ奔放し、戦いを見てきた。

過去の高校一年、二年の時にも参加をしようとしたが人数不足の為に断念させられた。リトルウォーズは最低三人の人数で構成されたチームが必要なのだ。

「マサとケンが駄目となると……どうすつかなー……もうアテがねえや」

すっかり意気消沈したワタルはその場をあとにした。

七月十日。

マサとケンをチームに入れ損ねてから翌日。

一応は真面目に高校生をやっているワタルは、普通に登校し普通に授業を受け、普通に昼飯を食べた。

そんな昼休みの学校の屋上で出来事である。

「兄貴、マサさんとケンさんをチームに入れられなかつたんだね……」

「うーむ、残念といえば残念だがなつ、でもあいつら参加できればそれで良いなんてぬかしやがつたんだぞ！」

「……気持ちはわかる気がするよ」

ワタルの事を「兄貴」と呼ぶ、やや小柄な少年。

彼は同じ学校の高校一年生の十六歳、ワタルの舍弟で名を「川崎ヒロキ」という。そしてマックスハートのメンバーである。

「ヒロキっ！」

「なつ、なんだよ兄貴？」

「じゃあ何かっ、お前も参加できれば良いなんて口か！？」

「いや……そうは言わないけど……さ……」

煮え切らない態度のヒロキに対しても頭にきているワタル。

「僕は兄貴の弟分だ、戦いが恐いなんて言わないさ」

「じゃあ……なんだってんだよ？」

「つまりこういう事が、僕は恐くないけど、やっぱり他の人にどうては恐いよ」

「戦いがか？」

「うん、それもあるけど痛い目を見るのが嫌なんだと思うよ、リトルウォーズって大怪我する人が大多数だし、過去の歴史で死人も何人か出たって……兄貴だって知ってる事だろ？」

最もな話だつた。

誰だつて大怪我や下手すると死んでしまう事に首をつつこみたくはない。

自分でやるのは嫌だがそれを見るのは良い。エンターテインメントはこういうものなのだと思う。

「知つてはいるが……でももう期限が無いんだぜ、リトルウォーズ参加登録まであと一週間しかないんだ、一週間後の七月十七日までに最低三人集めて登録を済ませないと今年も出場できなくなっちまう……そうなつたらオレサマは……」

「兄貴……」

期限が迫り、焦りそして落ち込む兄貴分のワタルを見てヒロキはどうにかしたいと頭を働かせた。

この二人のコンビは基本的にはこんな感じなのだ。

気性の荒さと持ち前の運動神経で喧嘩などの揉め事はワタルが解決する。逆に頭を使つたり作戦を立てたりするのは弟分のヒロキが担当するのだ。

「そうだ、兄貴！」

「どうしたー、弟よー」

相当、落ち込んでいるのか返事には気持ちが入っていなかつた。  
「そんな悠長な返事してる場合じゃないよつ、思い出したんだよ参加してくれそうな人！」

「……本当か！？」

落ち込んでいたワタルの顔が一瞬で喜びの顔になる。

「まあ入ってくれるかはわからないけどね」

「それでどんな奴なんだ？」

「僕の覚えが確かならその人は蹴り技格闘技の天才と呼ばれている人だよ」

「蹴り技の天才だと？」

「そうさ、そんな人が仲間になつてくれれば間違いなく大きな戦力になるはずさ！」

「それにメンバーも三人で出場資格も得られる……か、よつくやつたなヒロキ！」

ワタルに讃められ照れ笑いを浮かべるヒロキ。

「それで、そいつはどこにいるんだ？」

「えつ！？」

「えつ……じゃないよ、どこにいるんだっての！」

「いや……『めん、噂を知つてるぐらいでどこにいるかは知らないんだ』

「はああああ！？」

「『めんつ、一日だけ待つてよ、絶対に調べてみせるから！』

やつと掴みかけたチャンスを手放したくないのはヒロキも同じだつた。なによりワタルの為になる事、今の彼はそれが喜びだったのだ。

「よしひ、任せせるぜヒロキ!」

「任してくれよ兄貴!」

二人はハイタッチを交わす。

そのまま昼休みが終わり、午後の氣だるい授業も終わる。そして放課後。

「じゃあ兄貴、明日には情報を掴んでみせるからね!」

「ああ、お前のやる事になんの不安もねえ、全力で探してこい!」

ワタルとヒロキはそのまま別れる。

ヒロキは一晩かけて「蹴り技格闘技の天才」の事を調べたのだった。

## 天才蹴撃少女！

七月十一日。

朝を向かえた。リトルウォーズ参加登録締め切りまであと六日。大勢の生徒が歩く道をワタルもまた歩いていた。

ふと見ると生徒達の朝の挨拶が行き交う。学校が近くにある道の特有の光景なのかもしない。

(蹴り技格闘技の天才……か、そんな奴が簡単にいるもんかな?)

ワタルは歩きながら普段は気にしない生徒を見ていた。

(おっ、あいつなんてガタイも良くていかにも格闘技って感じだな)見ると確かにガタイの良い男が道を歩いている。

(いや、しかし最近の「天才」というからには案外と優男があるとあいつか)

さらに見ると髪の毛サラサラな見るからに整つた顔立ちの男が歩いていている。

結局は天才という題目の想像は限りなく広がりどんな人間なのか、という想像の人間が数人出来上がってしまった。

天才、というヒントしか得ていらないワタルが詮索は無意味な事と

いう結論に至るまで数分かかった。程なくするとヒロキが合流した。

「兄貴ー！」

「おう、ヒロキか、どうだつた？」

「バツチリさ、蹴り技格闘技の天才、調べられる範囲の事を全部調べたさ！」

ヒロキは自信満々な顔をする。自信の表れかガツツポーズまで披露している。

「そうか、それで……？」

「いや兄貴、もう学校着いたし昼休みで良いでしょ？」

気がつくと目の前には学校があつた。考え方と人間觀察に夢中で全く周りが見えていなかつたらしい。

校門前で話すのも気が引けるという事でワタルとヒロキは昼休みに「いつも屋上」で会おう、という約束をする。屋上はいつしか二人の秘密基地となっていた。

そしていつものように朝の睡魔と戦う午前の授業が始まった。体育以外の科目の全てが苦手科目のワタルにとって授業とは退屈そのものである。睡魔と戦いながら四時間が経過し、やつと昼休みを向かえる。

適当に机の上を片づけて、急いで屋上へ走ると既にヒロキが昼飯の準備を整えていた。

早速、朝の話の続きを話し始めた。

「それで天才さんって結局のところなんだつたんだ？」

「うん、話す前に本当に兄貴知らないの？」

「知らないから聞いてるんだって、勿体ぶるなよ、早くしてくれよ！」

「わかつたよ」

ワタルは勿体ぶられるのが嫌いなのだ。それをわかつての事が、

ヒロキは話し始める。

「うーん、兄貴きっと謎かけされるの嫌いだらうから单刀直入に言うけどさ……」

「おう！」

「ここの学校の三年B組の人らしいんだよ」

「……はっ！？」

素つ頓狂な声をあげてしまった。もつと違う学校とか違う学年とかにいるものかと想像していたワタルには意外な答えだった。

同じ学校の同じ学年、ワタルには全く記憶にない事だった。それにワタルは三年A組、隣の教室に天才はいるというのだ。

「兄貴、本当に知らなかつたの？」

「いや全く全然知らなかつた！」

「まあ……兄貴らしいけどね」

「それでどんな奴なんだ？」

「いよいよ天才の核心に迫るとあつてワタルも興味津々で聞き返す。

「うん、またの名を「天才蹴撃少女<sup>てんさいしゅうげきしょ</sup>」っていうんだってね」

「ふーん、天才蹴撃少女ねえ……」

「ワタルは何かに違和感を覚えてもう一度ヒロキに聞き返す。

「んー……、またの名をなんだって？」

「だから天才蹴撃少女だつて！」

「……お、女あ！？」

再び、素つ頓狂な声をあげるワタル。

ガタイの良い男や、意外性について優男を想像していたワタルは再び驚かされた。蹴り技格闘技の天才がまさか女だと。

「相沢かな、つて名前の人みたいだよ」

「ふーむ、三年B組の相沢<sup>あいざわ</sup>かな、ねえ」

「心当たりあるの？」

「いや、全くないっ！！！」

ワタルは気持ちの良いぐらいはつきりと否定する。

他人に全く興味を示さずにオレサマ主義なワタルを常に見ているヒロキにとつてワタルの反応は、もはや日常のそれと全く変わらなかつた。

「まあ良い、『ゴリラ男<sup>ゴリラお</sup>だろ』うが、優男だろうが、女だろうが関係ねえ、放課後にでも会いに行つてくらあ！」

「僕も行こうか？」

「あつたりめえだろ、ヒロキがいなけりやオレサマは困るー！」

「あつははは、そうだね」

天才の正体は「天才蹴撃少女、相沢かな」だとわかった。ワタルとヒロキは放課後に「相沢かな」に会いに行く。

七月十一日。放課後。

ワタルは自分のクラスでヒロキを待つ。しばらく待つているとヒロキが走ってきた。

「お待たせつ、兄貴！」

「遅えぞ、ヒロキ」

実際はそんなに時間がかかったわけではないのだが、気が短いワタルにとつては長く待たされたような感覚に陥つていたようだ。

そんなワタルの反応も、いつも通りとヒロキは受け取つていた。

「さつてど、いざB組！ 相沢かなに会いに行こうではないかっ！」

「おつけー！」

相変わらず偉そうな態度のワタル。それを見て嬉しそうについてくるヒロキ。

隣のクラスというだけあって、ものの数歩でたどり着く。

「相沢かなは、いるかあ！？」

B組の扉を勢いよく開けて、大声で名前を呼んだ。突然の事で残つていた生徒は驚いて目を丸くしている。

「兄貴、落ちついて！」

ワタルを落ちつかせながら、残つた生徒を見回すヒロキ。近くにいた女生徒に声をかける。

男に聞くよりも、女人に聞いた方が情報が得られると判断した為だ。

「あの……このクラスに相沢かなさんつて、いますよね？」

「さあ、出できやがれつ、相沢かな！！」

「ちょっと……兄貴、落ちついて」

声をかけられた女生徒はワタルを見て怖がつていたが、ヒロキを見ると距離をおきながらも話しかけてくれた。それを悟つてか満面の笑みを浮かべる。

「あの……相沢さんに何か？」

「あ、いえ、ちょっとお話したい事がありまして……」

ヒロキの穏やかな態度に女生徒も少しばかり落ちついたようだ。

「うーん、ちょっと待つてね」

女生徒はクラス内を見回しつつ他の生徒にも聞いてくれているようだった。

内心、緊張していたヒロキも優しい人に話しかけて良かつたと、密かに安堵の溜息をついた。

「ごめんね、相沢さん……もう帰ってしまったみたいなの」

「そうですか？」

「ふんっ、逃げたかっ！ 相沢かなめ！」

ヒロキは一人暴走をしているワタルを放つておいて女生徒と話を進めた。

「では宜しければ、伝言を頼まれていただけますか？」

「ええ良いわよ」

ヒロキは女生徒に「明日の放課後にまた来るから、待っていてほしい」という旨の内容を伝える。

これで何とか相沢かなに、会えるとヒロキは再び安堵の溜息をついた。その後、丁寧にお礼をして校門前へと向かった。

「兄貴、少しは落ちつこうよ」

「へんっ、すぐそこに仲間がいるかもしけねえってのに、落ちついてなんかいられるかつてんだ！」

校門で言い合い……もとい、いつものトークをする一人。しかしワタルの興奮も最もな話だった。

もう少しで自分の夢の一歩目が達成できる。普通なら嬉しさのあまり興奮するものだろう。

ヒロキもそれを知つてか、あまり強くは言わない。

「やれやれだね……兄貴は」

「ヒロキ！」

「うん？」

真面目な口調でワタルはヒロキの名を呼ぶ。今まで興奮していた為に、あまり相手にしていなかつたヒロキも、それを聞いて耳を傾ける。

「絶対優勝しような、オレサマとお前でも」

「当たり前さ、兄貴」

いつの間にか、二人の背中に真っ赤な夕日が照らされていた。

「ははは、ベタだなあ」

「バーカ、王道つてんだよ！」

「……そうだね！」

「二人は夕日に向かつて誓つたのだった。リトルウォーズに「優勝」するという事を。

いつも持ち歩いているハチマキを、ポケットから取り出した。ワタルは赤いハチマキを、ヒロキは青いハチマキを。一人で優勝の気をハチマキにこめた。

七月十一日。放課後。

そして二人は再び、B組の前にいた。今度はヒロキがB組の扉を開ける。

昨日の女生徒が気づいてくれれば良いな、と密かに思いながら声をかける。

「あのー……」

「あっ、きたきた」

昨日の女生徒がヒロキを見てかけよつてきてくれた。3度目の安堵の溜息をもらす。

「あ、どうも」

「待つててね、……おーい相沢さーん、この人達だよ」

その女生徒はクラスの教壇前にいたショートヘアの女の子を呼ぶ。格闘技をやつていてるだけあって、動きやすそうな髪型に、スラッシュした体型。身長も女人としては高い方だ。160cm前半はあるだろうか。

相沢かなは、ワタルとヒロキの前についに姿を現したのである。

「で、用事は何かな？」

「え、えつと……」

ヒロキは初対面の人にはどうしても緊張してしまつ。人見知りなのだ。

「」には「オレサマの出番！」とばかりに、ワタルがヒロキの前に立つ。

「相沢かな！ お前をリトルウォーズに参加する為に、オレサマのチーム『マックスハート』にスカウトしに来た！」  
「つ……！！ ちょっと！」

「な、なんだよ！？」

突然、相沢かなに引っ張り出される一人。されるがままに一人は、学校の外まで連れてこられた。

辺りを見回し、誰もいない事を確認すると相沢かなは、喋り出す。「ちょっと、みんなの前でそういう事を言つのは、やめてくれるかなっ！」

「そういう事って、どういう事だ？」

「リトルウォーズの事よ」

なんでかわからぬといふ顔をするワタルとヒロキ。それに対し、怒りと困惑が入り交じる相沢かな。

「なんで？」

「ふー、かなを誘いにきたつて事は、かなの噂を知つたからなんでしょ？」

「まあ、ねえ？」

「うん」

相沢かなが、問いかけて返答するワタル。その返答に同意を求めるかのようにヒロキを目で会話をする。

「別に、誘ってくれても構わないの」

「じゃあ、お前はオレサマの仲間だな！」

「話を聞け！」

相沢かなは、ワタルに対して空手チョップを打ち込む。

「誘つてくれても構わないんだけど……、みんながいるところで、格闘技の話はしないでほしいの。勿論、リトルウォーズ関連の事も」「どうしてですか？」

今度はヒロキが質問する。相沢かなもそれに答える。

「い」では……普通の女の子でいたいから、それだけっ！  
ヒロキは何となく納得する。ワタルはいまいち、わかつていなかつた。

「あとね……、リトルウォーズには実は前から参加したい……と、  
いうか参加しようと決めてたの」

「それならお互いの目的の為に、一緒に戦えますね！」

そんなヒロキの言葉を前に、相沢かなはクスリと笑つた。  
「そもそもなんだけどね、かなには絶対に譲れない目的があるの  
「目的？」

「うん、絶対に負けられないの……だからね、仲間にに入る前にあなた達をテストしてみよっかなーって思うの！」

スカウトしに行つたら、逆にテストを出されたヒロキは驚きの顔を浮かべる。

逆にその言葉について、「あの男」が立ち上がつた。

「面白え、なんだよそのテストってのは？」

「あ、兄貴！？」

「簡単だよ、かなと戦えば良いの、あなた達が強いかどうかをかなが見極める！」

相沢かなの出してきたテスト。それは蹴り技格闘技の天才と言われた女の子「相沢かな」と戦い認められる事だつた。

## かなの星蹴拳！

ワタルとヒロキは、相沢かなと一旦別れていた。

相沢かなが言う「戦いによるテスト」これを行う為には、お互に準備が必要だからだ。

「兄貴……勝てる？」

「バー力、そんなのやつてみなければわからないだろう？」

相沢かなが、要望もあって人気のない広場での戦いになる。公園らしき広場だが、文字通り何もなく公園としては廃れていた。

しかし戦うにはこういう場所の方が絶好の場なのも確かである。

「イッチニイ、サンシツ！」

ワタルは一人、黙々と準備運動をしている。ヒロキは、そんなワタルを心配そうに見ている。

三十程して、相沢かながやつてきた。

「おつ待たせーーー！」

相沢かなは、制服姿のまま現れる。鞄などの持ち物を置いてきただけのようにも見える。

「つておい、三十分も待たせておいて明るく登場するな！ しかも

準備つてお前何してきたんだよ？」

「乙女に時間は必要な事じゃないかな？」

「ふんっ、とつとと始めようぜ、暗くなつてきたしな

「そうだね！」

相沢かなは、蹴り技主体の為に武器は無し。ワタルは赤いハチマキを額に巻き付け自前の木刀を持つ。

軽くステップを踏む、相沢かな。その身のこなしさは素人の目で見ても流麗である。

対するワタルはステップなどなく、気合を張る。この気合の入れ具合も素人目で見ても凄まじい。

「じゃあ、早速だけど時間もないし、行かせてもらひよー！」

「おう！ どんどん来やがれ、ヒロキ合図してくれー。」

「わかつた！」

ヒロキはポケットに入っていた十円玉を取り出す。

「この十円玉が地面に落ちたら開始だよ……行くよー。」

十円玉を空高く、指で弾く。この宙に舞うわずか一瞬の事。ワタルと、相沢かなの視線が交差する。

十円玉が地面に落ちた。試合開始だ。

開始と同時に相沢かなが動く。テストする、とは言っていたが実際のところは先手必勝である。

ワタルは我流の構え、ワタルいわく構えのない構え。つまりはこれも、無茶苦茶。

「すうううう……ッハ！」

静かに息を吸い、そして吐くと同時に蹴りを繰り出す。まずは小手調べの左ロー・キックである。

その蹴りが見えていたのか、ワタルは軽くバックステップし、キックをかわす。

「やるう！」

「へつ、見え見えだつての！」

小手調べとはいえ手抜きのない一撃だつた。当たれば並の相手なら足の骨を折つていたかもしない。それ程の一撃。

「なら……、これはどうかな！」

「むつ！？」

バックステップし、着地の硬直がある。その隙を相沢かなは見逃さない。

後退したワタルに対して槍の突きのような、鋭い蹴りを繰り出す。（着地の硬直……普通は動けない、動けてもこのタイミングなら致命傷は避けられない！）

「ちいっ！？」

相沢かなの思惑とは裏腹に、ワタルは持ち前の強靭な運動能力で

左横に回転し、受け身をとる事でこの蹴りをかわす。

右足で蹴りを繰り出した相沢かなに対し、左横に受け身をとったワタルは相沢かなの背後をとる。

「もらつたぜ！」

ワタルは女といえども容赦はしない。渾身の一撃を相沢かなの中間に当てようとする。

「……！」

が、ワタルの一撃を、後ろ回し蹴りのような形で防ぐ。

ワタルは木刀越しに、相沢かな蹴りの一撃を受ける。この一撃のあまりの重さに「ここは危険だ」と直感がよぎる。

ガードしながら吹き飛ばされるような形で、相沢かなとの間を離す。

「攻めも守りも、足技かよ……さすが天才っての？」

「君こそ、運動神経が常人のそれを越えてないかな？」

まだお互いに息もあがつていない。そんな戦いにヒロキは目を奪われていた。

いつも一緒にいるワタルがこんなに動けるなんて、という感情が強い。一度も勝てた事がないとはいえたが、ヒロキはワタルとよく練習試合をする。

いつもワタルを見ていたからこそ、ワタルの強さを知っていたはずだった。

しかしそこにいるワタルは自分の知るワタルの強さのそれとは比べものにならないぐらい強い。

自分が兄貴と慕う人間の、新たな面を見て改めて凄いと思う気持ちと同時に、少しのショックがあつた。

「さつてと、先に攻められちまつたわけだし今度はこっちから行かせてもらおうか！」

「どうぞ、『自由に』」

「余裕かましてられるのも今のうちだぞー」

ワタルはそれだけ言って、軽く前傾姿勢になる。前傾姿勢は攻撃

姿勢だ。

相沢かなも、余裕をみせて「『自由に』とは言つたが、ワタルの構えを見て顔を真剣にさせた。

「ほつ……！」

ワタルも一息を吐くと同時に、相沢かなに向かっていく。スピードだけなら相沢かなよりも早いと、ヒロキは感じた。木刀を下から上にぶんまわす。力任せに振るつ一撃は、そのままの通りぶんまわしている。

相沢かなは、小さくステップを踏んでかわす。これぐらい朝飯前だというような動きである。

「すう……ふつ！」

ワタルの攻撃のモーションが終わるよりも早く、反撃の左ミドルキックを繰り出す。

そのキックをさらに前傾姿勢になり避ける。前傾姿勢と言つよつも地面に張りついている。

そのまま、相沢かなの中足の右足に向かい木刀を振るつ。しかし片足でこの地面スレスレの一撃をせらうに避ける。

(お前の運動神経もどういう神経だつてのつー)

(本当にやる……一撃一撃がきわどいー)

飛び上がりざま、ワタルを踏みつけようと着地をする。

その踏みつけも体が反応し、後ろに回転しかわした。

「やるね、君」

「お前もやるな、相沢かな！」

「君と戦つてると楽しいけど、心臓に悪いかな」

「それはオレサマも一緒だつてのー！」

ワタルも相沢かなも、うつすらと汗をかいてきた。最もワタルは夏の暑さから戦う前から、既に汗をかいていた。

しかし汗をかいているとはいえ、相沢かなにはどこか余裕がある。

「もう君が強いのはわかつたよ、だからそろそろ終わりにしようかな」

「ああ、やつしてほしー。俺もお前が強いのはわかったから早く仲間にしたい」

お互に構えをとる。我流のワタルに対し、手はフリーにして右足を軸に左足でステップを踏む。

恐らくはどの蹴り技格闘技にも属さない格闘技なのか。

「じゃあ最後だから見せてあげよつかな！」

「何をだ？」

「かなの星蹴拳！」

「はつ……！」

宣言と同時に突進する。そのスピードは今までのスピードの比ではない。

「これが星蹴拳！ そしてこれが星蹴撃！」

走り慣性をつけながらの左足での踏み込み。普通ならただの簡単なショートジャンプといいたいところだが、その速さの慣性がついたショートジャンプは鋭利なジャンプへと早変わりした。

そして着地と同時に、例えるなら足の正拳づきのような一撃を繰り出した。

先ほど槍の突きのような一撃が、まだ様子見だったのがわかるぐらいいの威力だ。

「う、うおおおおおお……！」

自分の体にひたすら動けと命じたワタル。命中直前になつてやつと反応するぐらいいの早さで襲つてくる蹴り。

完全に避けきる事はできずに、木刀を盾にしながら受け流すような形になる。

なんとか相沢かなの星蹴撃をさばいた。その瞬間、ワタルの後方の地面が蹴りの衝撃波で吹き飛ぶ。

「なつ……！？」

「ええ……！」

現実的に考えればありえない現象がそこにあった。それを目撃してしまったワタルとヒロキは驚きに言葉を失う。

女の子の蹴りで地面が吹き飛ぶ、なんて漫画の中の話だと思つていた。二人は同じ事を考えていた。

「うつわ、よく避けたね！」

「いや、ちょっと待てい！！」

考えるよりも先に体が動いていた。相沢かなは元へ足早にかけよつていく。

「お前、あんなので殺す気か！？」

「大丈夫でしょ、君、結構頑丈そうだしね」

相沢かなは、明るく言い放つ。あまりの開きっぷりにさすがのワ

タルも、言葉を失う。

「まあ……良いか。生きてたし」

「うむ！」

「しかし……白か」

ワタルは聞こえないように、ボソッと喋る。その言葉を相沢かなは、聞き逃さなかつた。

「ちょっと、まさか見たの？」

相沢かなは、恥ずかしそうにスカートをおさえれる。

「バツカ、短いスカートはいてあれだけ足をぶん回せば、田の前にいたオレサマに丸見えなのは当たり前だろ！」

「ムツキーー！ 見たな、このエ、変態、スケベ！－」

恥ずかしさと怒りで、相沢かなは顔を真っ赤にしてワタルに襲いかかつた。

「大体、スカートはいて蹴り技やるんだつたら『スパツツ』とか『見えてもいいやつ』とかはいとけつてんだ、家に帰つたんだから準備できただろ、コノヤロー！－」

「つるさこつるさこつるさこつるさこつるさこつるさこつるさこつるさこつるヒロキ。」

心強い味方が増えたな、そう思つていた。

しばらくすると第一ラウンドが終了し、一人ともよつやく落ちつ

いたようだ。

「まあ良いわ、その神経の岡太さに強さ、あなた達となら参加しても良いかもね！」

「当たり前だ！ オレサマは優勝を目指す男だぞ！」

こうして「相沢かな」が仲間に加わる。

メンバーが響ワタル、川崎ヒロキ、相沢かな、3人が揃い参加資格を得る。

「そういえば、まだ名前を聞いてないんだけど？」

「そうでしたね、僕は川崎ヒロキです、よろしく！」

「オレサマは響ワタルだ！ その、おっぱいによっく刻んでおきやがれ！」

その後、かなの鋭い蹴りが飛んでくる。それを紙一重で避けるワタル。

「下ネタ言つな！」

「はつはつは、H口い事は男の口マンだろうが！」

追いかけられるワタル。追いかける、かな。そしてその一人を追うヒロキ。

マックスハートはようやく全力で夢を追いかけられる状態になる。

## 三人の気持ち！

> .+10405 — 1198 <

七月十一日。夜の事。

ワタルは日課の筋肉トレーニングをしていた。

「ふんっ ..... ふんっ ..... !！」

腕立て100回、腹筋100回、背筋100回、スクワット200回、ランニング10KM、そして木刀の素振りが1000回がワタルの日課である。

勿論、これはあくまでノルマとして設定した内容であり、もつと回数をこなす時もある。

やつと念願のリトルウォーズに参加できるとあって気合が入りすぎ、結局はノルマ + 100回、ランニング5KM、素振り1000回をやつてしまっていた。

それでも気が済まないのか、最後のストレッチも念入りにやる。「よっしゃっ！！」

ワタルは自分の頬を思い切り叩く。弾けるような良い音がする気合一閃、ワタルは汗を流すべく風呂に向かつ。あつといつ聞に素つ裸になり適当に体を洗う。

湯船にダイブすると一人、意氣揚々と鼻歌を歌い出す。「オレサマたちやーマックスハートおーゆうじょうゆうひゅうひゅうしうだー！」

あまりの下手さだった。

ヒロキの家。

ヒロキもまたワタルに言われ、筋肉トレーニングをしていた。

しかしヒロキの場合はワタルの半分の回数である。

「よんじゅう ..... せゅう ..... じゅ ..... つじゅう！」

腕立てを50回達成する。腕がふるえて自分の体を支えきれないなる。

床にすこしまれるよつヒロキは倒れた。

「はあ……」「

軽い溜息をはき出すと同時にヒロキは数時間前の事を思い出す。ワタルと、かなに戦い。二人ともさすがといつべきで動きが超人

的だった。

「僕に……あんな戦いができるのかな……？」

誰に問い合わせたわけでもない。そんな言葉を言つヒロキ。もしも自分が相沢かなと戦つていたら。

勝てただろうか。答えはノーだ。自分で心強い味方になると書いていたのに、今となつては強すぎるメンバーの存在と弱い自分にコンプレックスを抱くようになつていた。

ヒロキは誰よりも強くなりたい。だからその強さを持つワタルに惹かれ兄貴と慕うようになった。

強い人の側にいれば自分も強くなれる。しかし結果は甘くなく、成長しない自分に対しさらに強くなるワタルに焦りと苛立ちを感じるのだった。

根が真面目で素直だから、余計にあるがままを感じてしまう。「くそっ……！」

その苛立ちを床を思い切り殴る事で発散させる。

拳に伝わる痛みに、発散させて良かったといつ気持ちと、やつぱりやめておけば良かつたと思う気持ちが入り乱れていた。

相沢かなの家。

「あら……かな、また自分で弁当作つたの？　お母さんが作つてあげるつて言つてゐるのに」

「良いのつ、かなは料理大好きだもん！」

Hプロンをして、台所に立つ姿は「蹴り技の天才」という言葉が

似合わない姿である。

知らずに見れば立派に女の子の姿そのままだ。

「よし、下味はこんなもんでも良いかな……お母さん、かなはもう寝るね！」

「はいはい、おやすみなさい」

「おやすみー！」

母親に挨拶を済ませて、かなは自分の部屋に向かう。

部屋にたどり着くと写真立ての前に、かなは立っていた。

その写真には今よりも少し幼い、かな。その写真のかなは、今のようにショートではなく長い髪をポニーテールで束ねていて、とてもおしゃれかそうである。

そしてその写真には、かなともう一人の少女が写っている。

逆にこの少女はショートヘアであり活発そうな女の子である。

「みな、今日はね、面白そうな人達に会つたんだよー！」

かなは写真に向かつて話しかける。

「……かなね、その人達とリトルウォーズに出ようつて決めたんだ！だから……みな、応援よろしくね」

いつもの元気な少女の顔がそこにはない。

みな、というのは、相沢かなの実の妹である。みなは、かなの一つ下である。

だが3年前に突然の事故により、この世を他界している。普通に生きていれば高校二年生だった少女。

「みな……がんばるからね」

かなは写真を力一杯抱きしめる。

七月十一日。

「兄貴、おはよー！」

「おうヒロキ、ちゃんとノルマになしたか？」

「もうひるんやー！」

「そりがそりが、オレサマはノルマ以上の事をやつちまつて久々に筋肉痛だ……」

体中が痛いのか、動きがぎこちないワタル。同じくヒロキも動き

がぎこちない。

ワタル程ではないにしても、筋肉の張るよつた痛さが少しあるのだ。

「おひ、かなっぺだ」

「本當だ」

少し前を、かなは友達と歩いている。いつして見ると本当に普通の女の子である。

「あれ兄貴、かなさん呼ばないの？」

「んー……、いやいい。人には人の空間ってのがあるもんだ」

ワタルはかつこつけた言葉を言い放ち、歩いていく。

そんな意外なワタルの言葉にヒロキは呆然としている。

「こらあ！ ヒロキ置いてくぞ、コノヤロー！」

「あ、待つてよ兄貴！」

いつもの日常である。そんな日常が変わるまであと五日。あと五日でリトルウォーズの開幕である。

この日は土曜日であり、学校も午前のみの半日授業である。授業も四時間で終了するとあって、生徒達もがんばって授業を受けている。

ワタルもがんばってみようと決意するのだが、十分程して睡魔に負けて結局、四時間の授業は、八割寝ていた。

そして、いつもの屋上に行こうと歩いていると、かなに声をかけられる。

「あ、響君」

「ワタルで良いよ」

「じゃあワタル君、今日のお昼つてどうするのかな？」

「どうするつて、屋上行つてヒロキと雑談しながら適当に」

その言葉を聞いて、かなは嬉しそうに鞄から弁当箱を取り出す。

「じゃーんじゃじゃーん！！！」

「うお！？ なんだそれ？」

「かな特製のスタミナ弁当なのだ！」

「お前が作ったのか？」

「あつたぼうよ、兄ちゃん！」

昨日、蹴りで殺人未遂な事をされた為に、かな＝料理といつ式を思いつかない。

しかも弁当箱を包んでいる袋がまた可愛らしい柄なもので余計に思いつかない。

「すっげえな、料理もできて蹴り技も……っー？」

言いかけた時に、かなはワタルの口を塞ぐ。

「それは言わない約束だつたんじやないかな？」

「そうだつたな、悪い悪い」

ワタルは本当に軽い平謝りをする。とりあえず反省せしているみたいなので、かなも手を放す。

「で、早く行こうよ！」

「どこに？」

「屋上に」

「誰と？」

「かなと」

「なんで？」

「仲間でしょ」

「……それもそうだな」

変なやりとりの後、ワタルは納得する。

ヒロキが来ないって事は、きっと昼飯の準備をしてくれてこるはずだ。相変わらずワタルの都合の良い解釈である。

いなかつたとしても屋上で待つていればヒロキは来るだろう、と判断してワタルとかなは、屋上へと歩いていく。

歩いている最中、ちらほらと生徒からヒソヒソ話をされる。

どうやらワタルとかなのツーショットがめずらしいといふ事。当然だ。

「お前、結構人気なんだな」

「え、そうなのかな？」

「そうだろ」

「そうかな」

本人は人気があるとは思つていよいようである。

だが事実、相沢かなは可愛い。美人タイプか可愛いタイプかといわれば、後者だろう。

そんな可愛い女の子が殺人キックしてくるのだから、と思つたところでワタルは考えをやめる。

「何か想像してないかな？」

「いや、なんもしてない」

変な殺氣を感じた為に、ワタルは考えるのをやめた。どうやら直感も鋭いようだ。

「でも屋上つて解放されてないでしょ、良いの入つて？」

「オレサマは顔パスなんだよ」

「つてそんなの、あるわけないと思うけど！」

「屋上はオレサマの場所なの！」

なんとなく納得してしまう。ワタルのオレサマ主義により本来は解放されていない屋上を開放した。

「納得はしたけど、ワタル君……不良の人とかに狙われない？」

「向かってくるなら返り討ちにすれば良い話だ」

どうやら狙われているようである。だが、自分と互角にわたりあつた人間という事であまり心配はしない。

「オレサマは暴力反対なんて言わねえ、むしろ喧嘩上等だからなー」「喧嘩バカそうだもんね」

一度殴り合つた方が人間つて奴は良いんだよ、痛さを知れば怖さも知るだろ」

「はー……」

まともな言葉に少しだけ見直すかな。

階段を上りながら喋り、程なくすると屋上へとたどり着いた。

## 突然の来訪者！

屋上へたどり着くと、相変わらずヒロキが昼飯の準備をしている。ヒロキもワタルと同じく、適当なコンビーフ弁当などが主な食事だ。ヒロキのオススメはデカストップといつコンビニのデザート各種である。デカストップは有名な大手メーカー「コンビニ」である。

「お前も甘いもん好きだよな」

「うん、唯一好きだと言えるものだね！」

ヒロキは満足そうにデザートを食べている。バーラのアイスにマンゴーが入っているパフューラしい。

「ちょっと、ヒロキ君！」

「は、はい？」

突然の、かなの登場に田を丸ぐするヒロキ。ワタルの方を見ると、ワタルは「なるようになれ」と田で合図をする。

今までの付き合い上から、その合図を一瞬で読み取り実行する。「まだ、かなの料理も食べないでデザートとは早いんじゃないかな？」

「え、料理？」

「どうやら、かなっぺがオレサマ達のために料理を作ってくれたらしい。しかも特製のスタミナ弁当らしいぞ」

かなは意気揚々とシートを敷き、弁当を並べ始める。

良い匂いがするとワタルとヒロキも中身を覗きはじめめる。中身もなかなかの出来映えだ。

「へー、凄いな……人は見かけによらないってやつだ」

「冗談、それは失礼だよ」

「そいつか？ 事実を言つたまでだぞ？」

「いやいや、いや言つてないで、早く食べてみてほしいかな！」

かなに急かされるので、弁当の中身を口に運ぶ。スタミナ弁当というだけあって、料理のほとんどが「にんにく」を使用したもので

ある。非常に食欲をそそる。

「……うまい」

「うん」

「おっ、おっ、おおおー!？」

「うん、うんうん!—!」

非常に好評である。あまりの美味しさに一人で取り合いでするほどだった。

「うわっ、こんなに好評とは思わなかつたかな……」

「いや、めっちゃうまいぞ!—!」

「凄いね、かなさん!」

「えへへ、かなにまつかせなつさー!—!」

かなは一人で自慢げに胸を張る。ワタルとヒロキは、そんな事にも目もくれず全滅させる。

わずか5分で全ての弁当を完食する。きれいにわっぱり、とはこの事だ。

「いやあ、マジでうまかったぞ!」

「まあ……ちょっと気合入れて作ったからね

かなは照れ笑いを浮かべる。

料理が少し多かつた為か、ワタルとヒロキはしばらく休憩をする。

「しばらく動かないの?」

「ああ、休憩する」

「じゃあ、ちょっと教室に行つてくるね

「がんばれよー!」

ワタルはやる気なく手を振る。ヒロキを見るといつの間にか熟睡していた。

そんな二人と一回別れて、かなは自分の教室がある1Fへと移動した。

かなが、1Fへと降りてみると、校舎内は騒がしかつた。

廊下の向こう側を見ると、なぜか人が集まっている。

「何があつたの？」

「あ、相沢さん」

かなは、近くにいる友達に事情を聞く。

どうやら同じクラスに在校している不良生徒が顔を出してきたらしい。

「不良……一一之宮さんね……」

三年B組在校の不良、一一之宮小次郎。年齢自体は十九歳で、かな達の一つ上にある。

つまりはダブリである。七月現在までの出席日数の関係で今年も留年だろうと言われている。

かなは、人が集まる場所へと走る。

「てめえ、何を見てやがんだ！」

「い、いや、僕はなにも……」「……」

「ああ！」

「うわっ……！？」

不良、一一之宮は近場にいた氣に入らない生徒を一方的に殴りつける。

その光景に近くにいた生徒は道を開けていく。その場にいた全員、恐怖の目で一一之宮を見ている。

髪の毛は長く後ろで結んでいる。背も高く体つきもいい、それにギラギラした目つきが、生徒にとつてはさらに恐怖心を煽った。

「へつ……、それで良いんだよ……」

「ちょっと、一一之宮さん！」

わがもの顔で廊下を歩く一一之宮の前に、かなが立つ。

自分を邪魔する奴がいるとは思わず、一一之宮は少し呆気にとられる。

「なんだ、てめえ！」

「突然やってきて、他の生徒を怖がらせないでほしいんだけど…」

「ああ？ 何をざけた事を言つてやがる？」

「……」

「迷惑かけるなら帰れって言つてるの！」

悪態をつく一一之宮に、かなは一步も引かない。

大変な事が起きないかと、見守る生徒達。その場に緊張が走る。張りつめた空気見ている生徒は誰も動けないでいる。

「俺は女だろうが、容赦はしねえぞ！」

拳を振り下ろす一一之宮。言葉通り、その拳の勢いに容赦はない。が、容易に拳をかわす。かなにとつては喧嘩の拳ぐらい避けるのは簡単な事である。

「……！？」

「暴力はいけないんじゃないかな？」

「てめえ……」

身長差は10cmはあるか、それ以上か。一一之宮はかなを悠然と見下ろす。

かなも臆する事もなく、一一之宮を見上げる。

「……ふんっ、かつこつけると痛い目を見るぜ」

「それは」「ち富さんも、一緒にじゃないかな？」

「けつ……ー」

根負けしたのか、一一之宮は来た道を帰つていぐ。置き土産のように、帰りながら睡をはいていく。  
よつやくしなくなつた一一之宮に、生徒達は安心した表情を浮かべた。

「ふー、恐かつたあ……」

かなも、安堵する。一一之宮はただの不良ではない。対峙した瞬間に感じた。

周りの生徒もそんな、かなの姿を見てざわつきだしている。

(やばっ、少し目立ちすぎたかな……?)

あまり目立つても困るので、かなは屋上へと戻つていぐ。

かなが戻ると、ワタルも休憩が終わつたのか軽く体を動かしている。

「おう、かなっぺ！」

「その『かなっぺ』ってなに？」

「知らないのか？ あだ名つてこうんだぜ」

「そんな事知ってるって！」

ワタルはいつの間にかに、かなに「かなっぺ」というあだ名をつけていた。

「まあ……良いけど」

「ところで下の方が騒がしかつたけど、何があつたのか？」

「ちょっとね、野暮な事かな」

「ふーん、まあ良いわ」

あまり乗り気じゃないように見えた為か、ワタルは深くは聞き入らなかつた。

そんなワタルの態度に、内心良かつたと思つ、かな。ワタルはその辺に關してせつぱりしてゐる。

「さつて、今日は早く学校も終わつてるわけだし……」

「だし？」

「マックスハートの練習試合とこきますか！－」

「練習試合？」

一人で熱が入るワタル。何をするのかと、かなは興味津々である。まだ寝てゐるヒロキを起しす。ワタルの起こし方はいきなり顔面ピンタだ。

「ヒロキ、起きろ！」

「んあ、冗貴？ 痛いよ……」

「シャキッとしろ！ 練習試合やるぞ！－」

練習試合とはなんなのか。かなはそれだけが楽しみだった。

逆に寝起きが悪いのか、ヒロキはあまり乗り気ではない表情をしている。

「昨日の公園で戻りな、今日せひロキと、かなっぺで戦つてみるか！」

「…………って、えええええ！－？」

「なんだ、練習試合つてそのまま戦うのね」

全く余裕のないヒロキに対して、涼しい顔のかな。

昨夜の考え方事は一瞬で現実のものになってしまった。

## 対決 ヒロキ vs かな！

ワタルとヒロキ、かなの三人は学校から公園へと移動する。相変わらず何もない、殺風景な公園。公園といつよりも広場の方が近い。

但し、手入れはその代わりにいき届いているようで綺麗な公園だ。よく見ると、かなーの吹っ飛ばした地面はまだ、えぐれている。「んじゃ、さつき言つた通りだ！ ヒロキとかなつべで練習試合してみつか！」

「兄貴……本当にやるの？」

ヒロキはかなり逃げ腰になつてゐる。乗り気じゃないのが田に見えてわかる。

相手が天才蹴撃少女でなければ、少しはがんばれただろう。しかし田の前にいるのは嘘でも幻でもない天才蹴撃少女と呼ばれる「相沢かな」の人。

かなは、学校と同じく涼しい顔をしてゐる。

「ヒロキ君、覚悟を決めよう！」

「かなさん……やる気だ……」

前にヒロキは「戦うのは恐くない」と言つた。その言葉は今のヒロキに届かない。

田の前で衝撃波で地面が吹き飛ぶ、常識外れの攻撃を見れば当然の話である。

普通の神経ならば恐いのが当然。逃げても構わない戦い。しかしヒロキは覚悟を決めてしまう。

「よしひ……僕はやれる！」

自分で自分に暗示をかける。手に人という字を書いて飲み込むといつとと同じ原理なのかもしれない。ヒロキはひたすら言葉に出して「僕は強い」と何回も言つてみせる。

「よーし、いくぞー！ はじめーー！」

ワタルの馬鹿でかい声が空に響く。戦わない本人が一番気合が入っている。

ヒロキの構えはワタルの見よう見まねで我流。だが構えのある構え。両手で木刀を握りしめて、相手に向ける、剣道の中段のような構え。我流中段である。

かなは星蹴拳ではなく、手はやや上に構え自由にして、軽いステップを踏む。

「行きますよつ！」

「おつけー！」

ヒロキは律儀に攻めるといつ合図をする。この辺がヒロキらしいといえる。

全力で、かなに走るヒロキ。全力で走っているものの、ワタルや、かなに比べ速度が遅い。

それでも一般的に見れば早い方の部類である。事実ヒロキは50Mを七秒台で走れるぐらいだ。

「やあああああ！！」

力任せに木刀を振り下ろす。

が、その攻撃は呆気なく、かなに避けられてしまつ。当然といふような顔をする、かな。

「ううっ……！？」

するとヒロキの左足に突然の激痛が走る。いや激痛が走ると同時に、左足が浮いている。

かなは、右足によるロー・キックを繰り出した。その威力と衝撃により、ヒロキの蹴られた左足が浮いたのだ。

「大振りは禁物。すぐに防御姿勢に入らないと狙われるよ」

左足が宙に浮いた事により、バランスを崩す。態勢を立て直す事ができずにそのまま倒れ込む。

「…………！」

倒れたヒロキの顔を、かなは容赦なく踏みつけようとする。

間一髪でその踏みつけを回避するヒロキ。あの踏みつけを喰らつ

たら危険だという、危険信号がいち早く察知し、なんとか避ける。

「ほらほらほら！」

なんとか立ち上がったヒロキに、更なる追撃をする。

口一、ミドル、ハイといった蹴りの基本アクションを小さく鋭く当てていく。

「ぐつ……！」

「ガードばかりじや、敵には勝てないよ！」

冷静にアドバイスする、かな。しかしヒロキにはそんな暇がない。小さく鋭いモーションの割に、蹴りの重さは凄まじい。まるでバットで殴られたような重さ。

「くそぅっ……！」

なんとか打開しようと、大振りの一撃をたたき込む。

しかし、そんな一撃も軽くかわされてしまつ。直後、ヒロキの胸部に鈍痛が走る。

「うえっ……！」

ヒロキの胸板に強烈なミドルキックが炸裂している。やや遠田にいるワタルにも聞こえるぐらい鈍い音。

その蹴りの勢いを受け止める事ができず、転がるように飛ばされる。

「うつへえ……、ありや痛いぞ……」

あまりのその音に、ワタルも自分が技をくらつたような錯覚をしてしまい、気持ちが悪くなる。

蹴られたわけでもないのに、自分の胸板をさする。他人事として見ても、あまりの衝撃。

「うつげえええ……！」

「だから、大振りは厳禁！」

嘔吐はしなかつたものの、その場でのたうち回るヒロキ。

さすがに、やりすぎたと思ったのか、かなも少し心配な顔をする。

「ワタル君……もう、このへんで」

「いや、まだだろ」

「でも……っ？」

ヒロキは立ち上がりつていた。しかし蹴りのダメージが激しいのが目に見えてわかる。

我慢をして顔が赤いどころか、青白くなっている。どうみても酸欠の状態である。

「かなさん、僕はまだ……やれるよっ！」

息も絶え絶えに言葉をはき出す。声を出したら呼吸ができなく、さらに苦しそうにする。

「でも……」

「僕だつて……、マックスハートだ！！ マックスハートは全力の心、全力でやればできぬものなど何もない！ ……だろ、兄貴？」

「その通りだ、ヒロキ！ かなつぺなんてぶつづぶせ！」

ヒロキの口から出た言葉に、嬉しそうな表情のワタル。めずらしくヒロキに乗せられてしまっている。

「ふう……、じゃあ、かなも全力でいくよ！」

かなは、手を完全にフリーにして、右足を軸に左足で独特的のステップを踏む。星蹴拳だ。

一方、ヒロキも今まで両手で木刀を握っていたのに対し、今度は右手のみで木刀を持ち、がむしゃらに振り回す。

「行くぞー！ 必殺・みだれうち！」

その言葉と同時にヒロキは技を繰り出す。技と呼べる代物かはわからないが、「みだれうち」と言われたその技は、先ほどの大振りな剣線とは対照的に、小さく小さく細かい剣線が乱れる。

かなには大振りな一撃が避けられてしまうと判断しての策である。そして、これがヒロキの得意技であり必殺技である。

先ほどまでやっていた大振りなスタイルは、憧れのワタルを模した戦い、それに対し小回りと手数で戦うこのスタイルは本来のヒロキの戦い方といつてもいいかもしない。

（小回りと手数で、逃げ道を塞ぐ技。これだけの剣線を避けるのは至難の業、全部迎撃するしかないと、攻撃は最大の防御つてね！）

かなは、一瞬で必殺・みだれうちーの対処法を考えつく。

ステップを踏んでいた左足を、胸元近くまで持ち上げる構えにシ

フトした。

「星蹴拳

れんせいげき  
連星撃！」

ヒロキのみだれうちーと同じく、田にも見えない高速の連続蹴りが剣線を潰していく。

星蹴撃が一撃で勝負する技ならば、連星撃は手数で勝負する技である。

まさにヒロキのようなタイプと戦うにはつづけな技。

「や、そんな！？」

これで仕留めきれるとは思つていなかつたにしろ、何かしらの勝利への糸口になると思つた技は、連星撃により潰されていく。

手数も小回りも互角となると、この打ち合いでを制するのは技の破壊力。

しかし、プレイヤーとしての力は、かなに傾いている。ヒロキはこの乱打戦が、少しずつ押されているのがわかつてしまつ。連星撃の重さに耐えられずに、ヒロキは再び吹き飛ばされる。

「ぐうっ……！」

重さにより飛ばされ、受け身もとれないままに地面に落ちる。

「そこまでー！」

さすがにワタルも勝負を止める。負けたにしても、ワタルは健闘を称える。

事実、かなも言つ方は悪いが、ヒロキ相手に星蹴拳の技の一つ、連星撃を出すとは思つてもいなかつたであろう。

しばらくそのまま倒れていたヒロキだが、自分で起きあがる。

「やつぱり無理だったか……」

「つづん、ヒロキ君。結構強い！」

右手を貸しながら、左手でペースする。それにヒロキも照れながらもペースで返した。

「全くだぜ、ヒロキ！ かなつペ相手にあそこまでやるたあ、正直

思つてなかつた

ワタルも弟分の強さに嬉しさがこみあげていた。そんな感情が既にオーラとなつて出ていた。

やぶれはしたものの、ヒロキも立派なマックスハートメンバーである事を見せつける。

「ま、痛かつたかもしないけど、明日は幸い日曜日で休みだぜ」

「ああ そうだつたつけ、今日は土曜日だつたかな？」

「そつだろ？ 明日はオレサマ自らコトトルウォーズの会場に行つて参加登録してくるぜ！」

いよいよマックスハートの大会参加登録である。

それぞれの思いを胸に、感情の高ぶりを感じる三人。マックスハートの戦いはこれから始まるのだ。

しばらくの間、三人で雑談していると田中も暮れていた。

「じゃあ、かなは帰るね！」

「痴漢に襲われないようにな」

「バー力、かなつべに襲つ奴がいるなら、痴漢のがかわいそつだつての！」

「さりげに酷い事を言つてゐる気がするけど……、まあ良いや、ばいばい！」

相変わらず明るく去つていぐ。今田の戦いに疲れを感じさせない軽やかなステップだ。

「じゃ、オレサマも帰るかな……」

「兄貴、明日は一緒に行こうか？」

「いや、いい。オレサマ一人で行く」

「良いの？」

ワタルは謎の高ぶりを感じる。わたくしのよつと期待の高ぶりではないのは確かである。

ただ、その感情を抑えられずに自分の拳を、思い切り握りしめていた。

「良いカードを手に入れてくるぜ！」

感情をヒロキに悟られないようにする為か、表情を見せずに言つ。握りしめたその拳は、血が滲んでいた。

そして、七月十三日。

リトルウォーズに参加登録しに行くのであった。

## リトルウォーズ登録！

七月十三日。

ワタルは一人、マックスハートのリトルウォーズ大会参加登録をしに行動している。

場所は、関東と関西の中間に位置している「りょうごくくじゅくじょう両国国技場」である。この両国国技場は、代々リトルウォーズのベスト4から決勝戦での、戦いの場となっている。

リトルウォーズ優勝を目指す者ならば、憧れの舞台である。

一体、何チームが参加登録に来ているのだろうか。

登録締め切り最後の、日曜日だけあってかなりの人数が集まっている。参加者、見物人と、色々な人がいるだろう。この人の多さを見るだけでも現代のリトルウォーズの人気が伺える。

「あの、参加登録をしたいんですけど……」

全身黒ずくめの、まるで黒子みたいな人が受け付けらしき場所にいる。

いくら「ちゃんばら」だからといって、こだわりが凄い。雰囲気作りからして熱が入っている。

「はいはい、登録ですね……えーと、チーム名はなんですか？」

「マックスハート！」

「マックス……ハート、ヒ。メンバーは何人の参加で？」

「3人だ」

受付人……せっかく格好も真似てくれているのだから黒子といおう。

その黒子は、登録用紙らしきものに書き込んでいく。しっかりと紙に書いてもらつ事で、俄然としてリトルウォーズ参加が現実味を帯びてきた。

ワタルは一人、例えよのない余韻にひたつている。

そして、その余韻と共に昨日のヒロキとの会話を思い出していた。

練習試合後の事である。

かなが、帰った後も少しの間だけワタルとヒロキは話をしていた。いつも通りの他愛もない話である。

「お前もよくやつたよ、かなっぺを相手にあそしまでやれりやあな！」

「まだまだだよ……、僕、正直などこ不安だよ。こんな強さでリトルウォーズに通用するかつて」

「ふむ……」

不安は最もな話である。善戦したとはいえ、結果は惨敗。ワタルは類い希なる戦闘能力。かなは天才蹴撃少女。そしてヒロキには何もない。

戦いは肩書きでやるものではないのは、ヒロキもわかっている。それでも強さの証明が一つでも良いからほしかったのも事実である。そういう不安もわかつていたからこそ、ワタルも安易に大丈夫とは言えない。ワタルはその場の雰囲気を和ませようと、一つだけ思い出した事がある。

「ヒロキよ！」

真面目な声をしたワタル。ヒロキは知っている。こうじう時のワタルは必ず「重要」な事を言ってくれる。

どんな言葉が飛び出すのか、わらにもすがりたい想いのヒロキは、真剣に聞き耳を立てる。

「兄貴！」

「今日の、かなっぺのパンツは何色だった？」

「…………っは？」

空気が、時間が止まった。大げさに言つと、周りの景色の色も灰色になつたかもしれない。

そんな、変な時間が一瞬だけだが訪れる。ヒロキの真剣な思考は音を立てて崩れ去つた。

「で、何色だつたんだ？ 見たんだろ？」

「……青」

「青かあ！ 良い趣味してるぜー！」

ヒロキは、ほんのり頬を染める。別に恥ずかしがるのではなくはずだが、彼はまだウブだった。

横で勝手に「パンツの色」で盛り上がるワタルに、シリアルスな空気は一瞬で壊れる。

「良くないよつ、兄貴ー！」

つい、言葉が出てしまう。この空気にはヒロキ自身も譲れないものがあつたからである。

声をあげるヒロキに、眞面目に見据えるワタル。さすがにふざけすぎたかとも思ったのか、今度はワタルがヒロキの言葉に聞き耳を立てた。

「僕は……僕はつ……！」

「ヒロキ……」

「僕はピンクのが好きなんだ！」  
再び空気が、凍り付く。

じつして変な余韻と、思い出し笑いを耐える。体が震え出すワタル。

じばらくじうじていろと、聞き覚えのない声が後ろから聞こえてくる。

「あれ、どうしたの？ 緊張してるのかな？」

振り向くと、そこにいたのは会場には似つかわしい、髪型もキメて清楚な顔立ちの男が立っていた。

身長も、ワタルよりもやや高めだろうか。175cm前後はあるだろう。

ガタイが良いわけではないが、引き締まつたその筋肉。相当な鍛錬を積んでいるのがわかる。

「緊張じゃねえ、武者震いつてやつだー！」

「ははは、なら良いくけど」

改めて、その男の顔を見る。ワタルにとつて見に覚えのある顔である。

いや、覚えどころではない。鮮明にその顔は焼き付いている。

「Fエンゼルのリーダー。天才、三崎清純！」

「光栄だなあ、僕の事を知つてくれるなんて」

心中穏やかではないワタルに対して、どこか余裕な表情にオーラを纏う三崎。

天才という人間はこういうものだろうか。口調もどこかマイペースである。

だが、同じ天才でも、相沢かなとは似ても似つかない雰囲気を持つている。かなが努力型と例えると、この三崎は生まれながらにして天才と思わせる雰囲気がある。

「ところで、君は？ 僕と……どこかで会つたつけ？」

「いや、アンタはオレサマの事を知らない。だがつ、オレサマはアンタの事を知つている！」

「……ふーん」

鋭い眼光を放つ。対して、三崎は柔らかな視線を送る。視線と視線がぶつかり合う。そんな光景はこの二人だけではない。よく周りを見ると、既に威圧戦、情報戦が始まっている。

「ま、僕にそれだけの敵意を向けるつて事は……だ。君も僕の『敵』と見ても良いわけだよね？」

「ああ、その通りだぜ」

「そうかそうか。それがわかれば安心だよ

「ん……？」

三崎は再び、ワタルを見る。その三崎の眼にワタルは一瞬ながら凍り付く。

先ほどまでは、うつてかわって冷徹な目である。まるで獲物を狙う強者。邪魔をするならば、弱者ですら狩る。そんな事を考えさせられてしまう眼。

こんな冷たい眼をする人間は今までに見た事がない。今の自分の

立場と、三崎の立場。それをわからせるには十分な威圧戦だった。

「一つだけ、忠告がある」

「忠告?」

「T·O·ティイカーの、『絶対王者の松原』の事は知っているね?」

「それがどうした?」

「彼を狩るのは、僕たちFエンゼルだ。君がその障害になるのなら

……容赦はない」

それだけを伝えると、三崎は人混みの中へと消えていく。

あの冷たい眼から感じ取れた事は錯覚ではなかつた。幸運の天使とは全く違う。三崎は狩る者、ハンターである。

見てるだけでは感じなかつた。目の前に対峙して初めてわかる威圧感である。

「へつ、それがどうした! 優勝するのはオレサマ率いるマックスハートだ、コノヤロー!!」

そんな残る威圧感を振り払つよつて、大見栄をきるワタル。

会場でこんな事を言つてしまつては、公開宣戦布告である。しかしワタルには、そんな事すらも小さくとれるぐらいの大きな大きな高ぶりがあつた。

その高ぶりを抑え切れなく、発散させる為にワタルは走り出す。いよいよトルウォーズ開幕まであと四日である。

## 天才の視点！

Fエンゼル 天才、三崎清純が率いるチームである。今までの戦績は、過去三年間の連続出場。そして三年間ともベスト4に入るという、真の強豪チーム。

事実、現在までに三連覇を果たし、今年で四連覇を成し遂げようとする王者、「T.O.・ナイカー」の最有力対抗団体である。プレイヤーとしての能力も、王者松原と天才三崎と言われる程の知名度である。

一昨年は、準優勝の二位。去年は惜しくも三位。そして今年こそはと炎を燃やすチームだ。

七月十四日。放課後。

学校の事を片づけて、一人部室に向かう三崎。

三崎の学校は、リトルウォーズの為の「ちゃんばら部」なるものが、正式に部として活動している。

剣道部との違いは、と取れるところは「ちゃんばら」の名前にしてしまが、武器がいわゆる剣だけではないところである。真剣や銃といった、いわゆる本物の使用は禁止。それ以外ならなんでも了承されている。それこそ喧嘩だろうと格闘技だろうと、だ。

「三崎！」

「やつ、勇！」

三崎を出迎えた男。いけいさま池勇という男であり、三崎と同じく今年で三年生。つまりは今年で最後のリトルウォーズの為、三崎と共に優勝の一文字を目指している。

身長自体は165cmと小柄な方の部類だが、恵まれた筋肉隆々の体格が、小柄と感じさせないほどの迫力を持っている。頭も丸坊主にし、気合の入り具合を伺わせる。

「どうだった？」

「うん、まあまあ」

ハキハキと喋る池に対し、相変わらずマイペースを崩さない三崎。『J』の一人はうまい具合にバランスがとれている。Fエンゼルの代名詞である「天才三崎」の他にも「攻めの三崎と守りの池」と称される程の一人である。

「だけど……何人か良いのがいたね、この戦いを盛り上げてくれるだろうって奴が、さ」

「お前にそれ程の事を言わせるとは……いつしか俺達の足下を搖るがすかもしねんな」

「……それはない。良い素材だがまだ弱い。才能という点だけ見てしまえば、うちの『仁』に匹敵するぐらいの才を見出せたんだけどね」

「ほお……！」

池は内心、今までの考えが改まる程に驚いていた。

ここが守りの池、と称されるとこだ。楽観的に物事を見てしまう三崎に対して、常に計算しつくされた考えを持つ用心深さ。才能に秀てる奴が、いかに恐ろしいものかという事。池は不安に駆られる。

「ところで『仁』は?」

「いや、俺にもわからん」

「ふーん。ま、『J』ってマイペースな奴だからな」

「お前が言うな、お前が」

不安に駆られていた池だが、このマイペースさが三崎である。三崎にはそういうオーラがある。どんなに不安に駆られていても、この男ならなんとかしてしまつ。なんとかできてしまつ。

そんな気持ちにさせるオーラ。天才のオーラとでもいうのか。

「じゃあ、僕はちょっと先生に会つてくるよー」

「了解した。練習は適当に切り上げさせるぞ」

「任せたよ」

部活として活動をしている為、Fエンゼルには顧問となる先生が

い。

一応、本人に自覚はないのだが、三崎は部長である。前日の参加登録の事を、顧問の先生に報告するために職員室を田指す。

「失礼します！」

職員室に入る時の「お決まりの台詞」を言つて、三崎は田で顧問の先生を探す。

放課後という事もあり、職員室に残っている先生は少ない。田当ての先生はすぐに発見できた。

「先生…」

「やあ、三崎君ではありますか？」

三崎とは違つた意味でマイペースな先生。

名を「石田孝三」<sup>いしだこうぞう</sup>といつ。外見だけ見れば、年齢は五十代にさしかかつてそうである。白髪交じりの髪の毛に、やや、やせ氣味の体型。<sup>ジョントルマン</sup>一言で表すなら紳士だらう。

「昨日、参加登録を済ませてきたんで、報告にきました」

「ご苦労様です。本来なら私が行くべきなのですが……」

「いえ、気にしないでください。良い人間觀察もできましたよ！」

「はつはつは、そうですか？」

石田先生は、過去何年間もリトルウォーズの大会を見てきている。しかし優勝の席だけはいまだに着いた事がない。Fエンゼルの部員とレギュラーメンバーは今年こそ、石田先生を優勝の台座へと座らせあげたいという一心だ。

三崎も、そう考えている。

それに石田先生は、最近になつて体の具合がすぐれなくなつていって、顧問として活動できるのも今年が最後と噂されている。

参加登録日も、突然の不調により、三崎が登録に行つている。

「じゃあ、先生。僕はもう帰ります」

「はい。気をつけて」

三崎は一瞬だが、今でも辛そうにする先生を見ている。

辛い体を押して、王者チームにどうしたら勝てるか。的確な練習方法は。　などといった、対策を熱心に研究していた。

そんな先生の熱心な姿を見て、さらに優勝の意欲をかき立てた。

校舎から出ると、池が待つている。

「なんだ、帰つてなかつたのか？」

「構わんだろ？　ちょっと色々と話もしたくてな」

「ふーん」

「めずらしくもない。池はいつも眞面目だからだ。

そんな池が、眞面目に話だがつていろよつに見えた為、三崎も案に乗る。

「正直、どうだ？　今年は優勝できそつか」

「おいおい、メンバーのお前がそんな事……」

「勿論、俺は優勝する氣がある。しかし嫌な予感もある」

「勇は心配しすぎなんだ。もつと前向きにポジティブにいかないと、やれるもんもやれなくなっちゃうだ？」

「そうなんだがな……」

池の心配性は今に始まつたわけではない。

だが、三崎にも覚えがある。前に池の悪い予感が的中したのは、去年の事。

一年連続で優勝決定戦は「T-O-テイカー vs Fエンゼル」だと誰もが予想していた。その絶対に覆るはずのない予想を、覆される。

去年の最優秀選手である「一ノ宮小次郎」　この男の存在により、Fエンゼルは、一ノ宮のいるライジングズに敗北。結果は三位終了という苦汁を飲まされた。

「……わかつた。僕も少し楽観視は控えよう」

去年の嫌な思い出が、三崎の頭の中に広がっていく。

三年連続の優勝候補チーム。「候補」という二文字がついてるか、ついてないか、という差が今の王者チームと、Fエンゼルとの差な

のかもしない。

今年の戦いは、三崎にとつてジンクスとの戦い。

三崎と池のFエンゼルもまた、優勝の一文字へ歩き出していた。

## ショッピングかな！

七月十六日。

相沢かなは、一人で街を歩いていた。

都會という程でもないが、それなりに栄えた街。暮らしが自由する事もないぐらいに物品があり、人も多いとはいえないぐらいの人口であり、暮らしやすいといえる街並みではないだろうか。

七月に入り、本格的な夏の暑さが照りつける。白い清純なワンピースを身につけて歩く姿は、涼しさを連想させる。

かな自身もそれ程、暑いとは感じていないのか涼しい表情をうかべる。

ただこいつやって歩いていると、年相応の女の子である。実際、かなの目的もショッピングであり、あてもなく「良い物」を探して歩く。

参加登録に向かったワタルは何故か、気合が入っていた。

十四日に会つてから、ヒロキを連れてトレーニングや練習試合をしている。かなも、それなりの付き合いをしてから今に至る。

かなにとっては、基本的なトレーニングというのも「今更感」が拭えないのだろう。何故ならそんな事は田課のようにやっているからだ。引き締まった美しいボディラインは日々の修練の賜物といえよう。

それにワタル達とは会つてまだ数日しか経っていない。いくら同じチームにいるとはいえ、あまりベタベタした付き合いは好ましくはなかった。

何よりも、相沢かなという人間は束縛を嫌う思考がある。根本的には自由人なのだ。

だが自由人とはいっても、人付き合いの作法は承知している。だからこそ「それなりの付き合い」をこなしてからのショッピングな

のだ。

「あいたつ！？」

鼻先に衝撃がある。恐らくは誰かにぶつかったのだろう。

「てめえ、どこ見て歩いてやがんだ、コラー！」

やけにチンピラ風味な口調。明らかに格下な感じがする。

実際、顔を見ると今時リーゼントな感じの髪型。ちょっと昔の暴走族漫画に出てきそうな髪型。強面じわもてとは言い難い、面白い顔がそこにいた。

人数を見ても三人。ただのチンピラならば三人という数は、かなにとつて雑魚と変わらない。

だが三人の内の一人。雑魚一匹に囲まれた大物はいた。

「あ、二之宮さん」

「ああ？」

二之宮小次郎 以前、学校に現れて騒ぎを起こした人。

街中に不良三人の構図。非常に「あり」な構図だと、かなは思う。

「雑魚一匹つれて……何してんのかな？」

この問い合わせて、周りの一人がやたらと騒ぐ。この反応がいかにも雑魚。

二之宮はギラつかせた目で、かなを見ている。よく「殺す」という言葉で殺意を表明する事があるが、二之宮の目は殺意といつとうきすぎるが、それに近い何かを秘めている。

まるで「復讐や妬み」といった負の感情からくるそれと、なんら変わりがない。

「おい女。あまり調子に乗るな、女なら我が身もかわいいだろ？」

「どういう意味かな？」

その質問に質問で返す。うすうすだが意味はわかっている。

善ではない人間に近づいて、その結果で女相手に何をするのかわかつているのか、と問う。

勿論、かなはそうさせる気は無い。だがそれは、かなの過剰な自信からくるものだ。その証拠に、二之宮を相手にする際は、かなも

警戒だけはしてこる。

「ふん。とにかく、あまり調子にはのるんじゃねえ」  
捨て台詞だけを吐いて、二之宮は歩いていく。それにつられて歩く、雑魚一匹。

街中で喧嘩沙汰にしないところが、二之宮の器の測りとなる。  
だが、かなには一つ疑問として思う所がある。何故、二之宮が不良なのか。二之宮は不良という枠に收まるべき人間ではない……か  
なの直感が告げている。

二之宮に会うというアクションはあつたものの、かなは気にせずシヨツピングを続ける。

明日からはリトルウォーズ開幕である。戦いの毎日になる為、今だけが唯一普通の女の子として活動できる瞬間。

ふと思つ。ワタルとヒロキはどうしているのか。

恐らくはヒロキがこつこつと絞られているのだろう。それを想像するだけでも面白い。

結局は変なアクションと、適當な考え方をしていくと日も暮れていった。

立派に夕方といえる時刻なのだが、それでも暑さを感じる。根本的に風もぬるく、涼しい要素が一個もない。それでも夏の太陽が照りつけなくなつてきてこるだけでも良いのかもしれないが。

「そうだっ！」

恐らくはまだ練習をしているだろう、一人の為に飲み物を買っていこうとする。

練習に付き合わなかつたのだから、せめてもの付き合い。

水分補給に適している、清涼飲料水を人数分だけ購入して恐らくは「いつもの公園」へと向かう。

街から公園までは、およそ十五分の距離。

何もない殺風景な公園に、一人の姿はすぐに発見できる。相当な

練習をしたのだろうか。一人とも汗まみれで倒れている。

「お、やつてるねー」

かなは一人に声をかける。

ワタルは完全燃焼しているのか、やる気のない声で返事をする。対してヒロキは、しつかりとかなを見る。

「ほらっ！」

かなは、ワタルとヒロキに買つてきた飲み物を渡す。

「お、サンキュー！」

今まで死に体だつたワタルが、飛び起きる。

ヒロキは疲労困憊なのに対し、ワタルはなんだかんだと余裕がある。このあたりがワタルとヒロキの「差」なのだろう。

それにワタルは疲れた、といつよりも暑さにやられたという方が近い。

二人とも、渡された飲み物を一気に飲み干した。

「で、どうだつたのかな？」

「何が？」

「練習はうまくいったかつて事」

「見ての通りだ！」

つまりは上々だという事だつ。汗もさる事ながら、砂地にある跡が物語つている。

「明日からいよいよ、念願のリトルウォーズだからな」

そう言つたワタルの目には、自信に満ちている。

汗に染まつたトレーデマークの赤いハチマキは、さらに赤く見える。ワタルにとつても、かなにとつても、最初で最後になるリトルウォーズ。

それぞれの想いをのせて、時間が動き出していた。

そして、七月十七日。

いよいよリトルウォーズ開幕を向かえる。

## リトルウォーズ開幕！

> 19729 - 1198 <

七月十七日。午前八時。

開会式を行う会場 「両国国技場」へ向かう為、響ワタル、川崎ヒロキ、そして相沢かなの三人は、新幹線にて移動を開始していった。

残念ながら学校の方は欠席扱い。大々的に高校ちゃんととして活動をしている学校ならば、それなりの処置もしてくれるらしいが、ワタル達の学校は待遇が悪い。

いずれにしても学校の夏休みが始まるのは七月十八日。つまり明日からである。

一日あるいは二日の欠席になるので、出席日数の被害自体は小さなもので済む。ある意味では不幸中の幸いともいえよう。

それに三人共、出席日数に関しては花丸がつけられるぐらいなので、この程度の事はまさに「この程度」で済んだ。

「…………」

ワタルはただ、窓の外の景色を見ていた。ただ流れしていく景色を見ていると、意識を集中させる事ができたからだ。

無理もない。念願叶つてのリトルウォーズへの参加。一人夢を見続けた舞台に、今となつてはヒロキにかなという、仲間もいる。

そして、リトルウォーズ優勝の最大の弊害となるであろう、「王者松原」と「天才三崎」の存在。さらには「前大会MVP・一之宮」も侮れない相手となる。

いや、それだけではない。ワタルは長き歴史を見ていて知つていたのだ。リトルウォーズは肩書きだけが全てじゃない事を。名もないダークホースが首をかき切る可能性だつてある。

現に前大会MVPの一之宮小次郎は、無名のプレイヤーだったの

に対し、わずか一年ぽっきりで最優秀賞選手に成り上がっている。  
それが夏の大会 リトルウォーズの「魔力」といえるところなのだ。

「ちょっとワタル君！」

「なんだ、かなつべか」

いまいちやる気のない返事に、ふくれつ面をする。

最も、今日という日を待ち望んできていた張本人のワタルが、ずっと押し黙っている。

かなにしてみれば、心配して声をかけただけの事。リーダーが黙つていてはチームの士氣に関わると判断しての事もある。かなは、車両内で買つてきた蜜柑を手渡す。とても甘そうな蜜柑で香りも良い。

「なんだよ、これ？」

「見てわからないかな？」  
蜜柑

無言でその蜜柑を受け取り、無言で口に運ぶ。

「お、こりゃ甘くてうまいな」

「でしょ！　おいしかったから全員分買つてきたの」  
見ると確かに全員分の蜜柑が買つてあった。持参してきた鞄いっぱいに買われた蜜柑。

どう見ても全員分 + おかわり分も含まれている。それどころか、お土産分も含まれているか。

先ほどの蜜柑の香りは、どうやらこれだけの数があつた為らしい。しかし蜜柑がおいしかったのも確かである。

「元気でた？」

「オレサマは元々元気だぜ？」

「嘘。明らかに『意識』してたでしょ」

ワタルは図星をつかれる。確かにかなに話しかけられる直前まで「まだ見ぬ強豪」の存在を意識していた。

「大丈夫……もう元気になつた」

「しっかりしてよね。ワタル君が元気なかつたらヒロキ君だつて不

安がるでしょ」

言つだけ言つて、かなはどこかへと歩いていつてしまつ。きっと、あんな感じで新しい食べ物や掘り出し物を見つけてくるのだろう。かなの性質がそうなのか。女の子がそうなのか。ワタルにはわからない事である。

ふと、かなの言葉が気になり、後ろに座つているはずのヒロキを見る。快適な椅子に寝転がり、気持ちよさそうな表情で眠つている。よく見ると口から涎も垂れそうである。

「何が、『不安がる』だつてんだ！」

ヒロキのめずらしく見せる馬鹿っぽい表情と、かなの行動にすっかりシリアスな感じを台無しにされる。

だが、結局はこれが良かつたのかもしね。ワタルの心の中の緊張はいつしかとけていた。

数十分ほど経つと、両国国技場へと着く。

天気は晴れ。絶好の開会式日和である。暑い事に変わりはないが、カラツと晴れている為に心地よさを感じる。

新幹線から降り、駅の外へ出ると数百人、いや数千はいるだろうか、もの凄い人だかりができる。

恐らくはもつと増えてくるだろう。事実、ワタル達が着いた後も、駅からは見るからに参加者といえる人達が大勢出てくる。

まるで何かのイベント会場に向かう人だかりのようにも見える。イベントな事には変わりがないが、中には明らかにただ「楽しむ」事を目的とした人間もいるようだ。

こういう人間ほど大怪我を招きやすい。それに「参加する事がステータス」のように考えているような奴には、一度怪我をして思い知つた方が良いとワタルは考える。

「兄貴、会場はあつちみたいだよ！」

こういう場で活躍するのはヒロキだ。実際のところワタルとかなは、人の多さにのまれてしまっている。かなに至つては放つておく

と迷子にならぬか。

ワタルとかなは、ヒロキを頼りに会場へと向かう。

会場の中心部、恐らくはここで開会式が行われるだろうと思われる場所には、先ほどのいわゆるミーハーな人間らしき人はいなくなっている。

三人は明らかな空気の違を感じる。浮いた雰囲気は一転、重苦しい空気がその場を支配している。

「凄いんじやないかな……」

「ああ、良い感じだぜ」

「こんな人達と戦うのか……」

三人共、思つた事を口にする。根本となる感覚は同じ事を思つ。恐らくはその場にいる人間が、ほとんど同じような事を感じているだろう。

「みなさん、本日はリトルウォーズ開催地の両国国技場へとお集まりいただき、ありがとうございます！」

突然の大音量の声が響く。会場全体に届くぐらいの音量に設定してあるのか、スピーカー近くにいるワタル達にとつては耳が痛くなる。

そしてその言葉を発した人物をワタルは知つていて、登録に行つた際に担当してくれた黒子。

周りを見るといつの間にか、黒子がたくさんいる。すると今、話している黒子はワタルの登録担当してくれた黒子ではないのかもしれない。

「まずは簡単なルール説明をさせていただきます。ここにいるみなさんは、もう知つての通りですが本大会の参加条件はチームとし、最低三名から最大五名までとします」

その黒子がその後に言つたルール説明の内容はこののような内容である。

一、 メンバーの追加登録は大会期間中に最大六名までの登録と

する。

二、 真剣や拳銃といった明確な殺傷能力のある武器の使用は禁ずる。

三、 田つぶし、金的などに該当する反則行為を意図的にやった者は大会資格を剥奪する。

四、 試合決着判定は、KO、TKO、判定、引き分けとし、時間切れ決着の際は、予選を引き分け。ベスト8以降は黒子による判定決着とする。

五、 試合時間は予選を十五分、ベスト8以降を三十分、そして決勝戦を時間無制限とする。

六、 試合ルールは黒子あるいはプレイヤー達の意志により決定する。

「 なお、大会期間中の試合による怪我の負担は大会本部により責任を持たせていただきます、が……期間中および試合による死亡に関しては一切の責任は負いませんので、」ご注意ください。それでは、この内容にて本大会開催を宣言いたします！」

開催宣言に熱狂的なプレイヤーもしくはファンによる大歓声が響く。

まさしく一年に一回。真夏の祭典であるリトルウォーズによる光景である。良い意味でも、悪い意味でもお祭り騒ぎ。

そんな歓声に、ワタルの鼓動は大きく激しく、胸打っている。興奮している。

「 す、凄いな。これがリトルウォーズの熱気か……」

「 これには、さすがのかなも呑まれちゃうかな」

ヒロキとかながら、その場で思いつく言葉を口にする。しかし思わず言葉が出てしまう迫力。

「 くつ！ 面白え、オレサマが待ち望んだ舞台だぜ！」

ワタルはとにかく興奮している。自分自身でも興奮が抑えられないうくらいに。

その大歓声は開会宣言後もなお続いていた。

そんな大歓声の場から少し離れた位置に、その男はいた。日焼けした褐色の肌に、鍛え抜かれた肉体。髪はオールバックにまとめ、何よりその男を存在させているのは、まごう事なき王者の風格。

三年連続優勝チーム「T-O-ティカー」の主将、絶対王者といわれる松原要(まつはらかなめ)である。

「やあ、松原」

「……三崎か？」

王者に話しかけたのは、天才三崎。熱狂的なファンならば、この一人のツーショットというだけで金が取れる組み合わせである。王者の風格と天才のオーラ。素人でもこの二人には何かが見える程の威圧感があるのは確かである。

「驚いたね、王者である君がこんな隅っこにいるなんてね」「ふん……なに、俺はうるさいのが嫌いでな」

言葉通り、松原の顔には鬱陶しさからくる苛立ちがある。対して、三崎はこういう場には慣れているというべきか、居心地良さそうな表情をうかべる。

「今年はどうやら……ライジングズの二之宮は参加しないらしい。最も彼は去年の段階で高校三年生、普通ならば卒業しているはずの人間だけだね」

「そうか、二之宮は出ないのか……それはそれで残念ではあるな」「……今年は、僕達が優勝の座をいただく。君に二度と優勝の二文字は飾らせはしない！」

伝えるべき事と、自分の感情を松原にぶつけ、三崎は人混みの中へと消えていく。

そんな天才の背中を冷静に見つめる。

「……ふつ。お前には無理だ」

その背中に王者はただ一つの言葉を投げかける。

七月十七日の午前十一時　いよいよ役者の揃つた今年度のリトルウォーズの火ぶたが切つて落とされた。

## 予選トーナメント開催！

遂に今年度の、リトルウォーズ開幕の言葉が発せられた。

リトルウォーズは今年で二十三回目の大会となる。第二十回の大會から王者の歴史に名を連ねるのは、T-O-TEIKAKERUの名。どのチームも王者チームの優勝阻止を日論んでいるのは当然である。

ワタル達のチーム「マックスハート」も今年の歴史に名を刻もうとするチームの一つ。

「ヒロキ、ちょっと」

ワタルはヒロキに声をかける。どうやら予選第一回戦の組み合わせを決めるとの事で、チームリーダーが集まるらしい。

人の多さも凄いものがある。待ち合わせ場所を決める為に、ワタル達は話し合う。

結果的に少し大きめの木が、近場にあるという事で、そこで待ち合わせる事にしてワタルは大会本部へと足を運ぶ。

大会本部にいるのはチームリーダーだけであり、ついさっきまでいた場所よりは落ちついている。

しかし、リーダーだけの割に目測で数百はいる。と、いう事は最低でも数百のチームが参加しているわけである。

まずは大会本部の役員黒子から、用紙を一枚受け取る。AブロックとBブロックと書かれた紙だ。

「まず、今大会の出場者数は例年に比べ、非常に多い。なので、今大会はブロック分けを行い予選トーナメントを開催します」

確かに今年の参加者数は多いとワタルは感じる。子供の頃に見ていた大会に比べ、人数は倍以上に増えている。ある意味では、それだけこのジャンルを注目する人が増えたという事にもなる。

「渡された紙に「A」と「B」の文字があると思います。赤丸で印が付けられているのが参加するブロックのグループになります」

ワタルの用紙にはBに赤丸がついている。つまりワタル率いるマックスハートは、予選トーナメントにおいてBブロックでの出場となるらしい。

用紙で自分のブロックを確認していると、大きな歓声がわき起る。

なんの騒ぎかと確認する為に、近場にいる人に声をかけてみる。

「なんだ、どうしたんだ？」

「あ、ああ。どうやら王者チームと三崎のチームのブロックは分かれたらしいよ」

「どっちがどっちなんだ？」

「王者チームがAで、三崎のチームがBらしい」

三崎　　あの天才がいるFエンゼル。

と、いう事は、大会ルール次第によつてはFエンゼルとの戦いは避けて通れない。

トーナメントの組み合わせにおいては、予選トーナメント中にも当たる可能性がある。

「お静かに！　係の者に従い、速やかに「ブロック」とに移動を開始してください！」

黒子の指示に従い、移動を開始する。Bブロックは大会本部から出て、すぐのところにある体育館らしき場所へと誘導される。

体育館の中は、空調がない。ほとんどサウナ状態であり、一瞬で汗がしたり落ちる。周りを見るとほとんどの人間が汗まみれである。

「やあ、君も同じブロックかい？」

声のする方を見ると、三崎が立っている。周りが汗まみれだというのに、一人だけやけに涼しい顔をしている。

そんな涼しい顔が、暑さで頭に血が上つているワタルにとっては、少しの苛立ちを感じさせる。

「残念だったな。王者チームと、せつせと対戦できなくてよ」

「なあに、このブロックトーナメントを勝てば良いだけの話だ」

さすがは、優勝候補チームといつていいのか。やはりどこか余裕がある。

決して自惚れではない、絶対の自信があるのでだろう。

「恐らくだけど、ブロック分けしてさらに分けられると思うよ」

「どういう意味だ？」

「Bの1とか2とかで分けられるかもしない、って事さ。実際に前大会にもその手法が使われたしね」

三崎の予想は正しかった。ブロック分けしてさらに分ける。そして更に分ける。

つまりはBの1と分けられたとしよう。そのBの1の1ブロック。そこが予選トーナメントらしい。

そこからAとBを合わせたベスト8戦、さらに選別されたベスト4による総当たりリーグ戦。最後にリーグ戦にて上位一チームによる決勝戦へと進むのである。

「ふむ……どうやら僕はB2の2ブロックらしい。君は？」

「オレサマはB1の1だな」

「ふーん。どうやら君との戦いはしばらく無さそうだな」

相変わらず、自分の言つ事だけ言つて、三崎は人混みの中へと消えていく。

とりあえず優勝候補チームと、いきなり当たらないという事は良い事である。早い段階に叩けるのなら叩いた方が良いが、それは向こうとて同じ事だ。

「それでは、B1ブロックの方は、一回戦目の相手を決めますので集まつてください」

このブロックを担当する黒子が呼びかける。恐らくは先ほどの黒子とは違う人物であろう。顔はひらひらした布で隠されている為に見えず、どの黒子も根本的に声が似ている為に判別が難しい。

声から察するに今のところ見た黒子は、全て男であろうと推測できる。もしかしたら全員同一人物かとも思えるが、複数人が一堂に介しているところを見ると、その説はない。

あるいは全員、兄弟なのか。もしくはクローン人間なのか。いずれにしても黒子の正体は謎に包まれている。

何の変哲もない、木箱の中身を順番に取つていくように指示される。

その木箱の中には紙が入つていて、この紙にも番号が書いてある。ワタルの引いた紙の番号は「B1・1・4」と書かれている。

トーナメントの法則からいくと「B1・1・3」のチームが恐らく初戦の相手になるのだろう。

次々にチーム名が書かれていく掲示板を見ると、対戦相手の名前は既に書いてあった。

リバティーズ それが、マックスハート初戦の相手になる。

ワタルは衝動にかられて、リバティーズのリーダーを探す。が、顔もわからない相手を探す事に意味はない事に気づく。対戦時になれば嫌でも顔を合わせるのだ。

十分程すると、全てのチームの配置が終わつたようである。ワタルのいるブロックにはぱつと見て、強いチームはいない。「いな」というのは、いわゆる前大会などで注目するべきチームがないという事である。

「B1およびB2の1ブロックにいるチームのみなさんに連絡します。日程の関係により、該当するチームの方は明日よりトーナメントを開始します。場所の詳細につきましては速達で『白毛の方へ送らせていただきます』

どうやらワタル達は、明日から試合の開始みたいだ。これで学校の方は一日の欠席が決まる。

いずれにしても、ルール説明もトーナメント表も決まった。ここにいる理由はないと判断して、ワタルはヒロキ達との待ち合わせ場所へと向かう。

外に出ると、風がある分涼しさを感じる。密閉された体育館より

はマシとも思える。

この数分の間に、大分人が減つたらしく、ヒロキ達を見つけるのは容易だった。

「あ、兄貴。どうだつた？」

「いや、なんとも……明日から試合開始らしい」

「明日から！？」

驚くのも無理はない。実際の予想も、もうちょっと間をおいてから、やるものだと思っていたからだ。

「それで、どこでやるのかな？」

「オレサマの予想だが、戦いの場は関東方面のどこかだろ？」「

「どうして？」

「AブロックとかBブロックとかで分けられたんだが、関西方面のチームはAブロックで、関東方面のチームはBブロックに意図的に集められている」

これは長年見てきた、ワタルの予想である。

事実、王者チームは関西のチームである。ワタルや三崎のチームは関東にある。勿論、これはただの予想であり、本当にそうとも限らない。

だがそうしなければ、例えば関西方面のチームが関東の会場で戦う場合など、移動の方法が非常に大変という事を考へると、当然の处置なのかもしない。

「それで会場とかつて細かい事は、多分オレサマの家に送られてくるみたいだ。だから、連絡の為に電話番号とか教えておいてくれよ」ヒロキの番号は既に知っているので、かなの番号だけを教えてもらひつ。

そして三人は、長い帰宅の路へと向かうのだった。ここからの移動料金は全て大会本部が負担してくれるのが、良いところなのかもしない。

その夜 速達は届く。

時間は、午後十三時。場所は東京後楽館の近場にある、大会専用の広場である。

ワタル達の住んでいる場所からは、そう遠くはない。速達の内容を伝える為に、ヒロキとかなに連絡をする。

ついで、第一十三回リトルウォーズ 予選トーナメントの開催である。

## 太陽の下に星は落ちるー

> 10406-1198 <

七月十八日。東京後楽館、近くの指定会場。

その会場は、ワタル達の練習に使つてゐる公園に近い雰囲気を持つてゐる。

つまり、何もない。障害物がない為に戦いややすいという事にもなる。この見通しならば、見物人にも見やすいだろう。

今日も夏の太陽が照らす。何もない会場には日陰すらも無い為に、太陽の光は直射で受ける。

男には良いが、女の子には配慮が足りない。だがワタルの記憶だと過去、女の子のリトルウォーズ参戦は無いとは言えないが少ないのも確かである。事実、男の出場者が大半を占める割合だろつ。

「はあ……これじゃ日焼け止め塗つても、意味ないかな」

直射日光の降り注ぐ会場に、一人愚痴を言つ、かな。

もう既に予選試合は始まつてゐるのだが、ワタル達の試合はこの日の第一試合のようである。

ワタル達は、第一試合の様子を見ている。恐らくはワタル達だけではなく、この後に試合を控えているチームは会場でみんな見てゐる、と思われる。

この会場には見物人が少ない。実際、ワタル達の他に見物人はちらほらといふぐらいである。その気になれば数えられるぐらいの人しかいない。

理由は簡単である。同時に、この会場とは違う第一会場にて優勝候補チーム「Fエンゼル」の試合があるからである。名もないチームの試合を見るよりも、優勝候補チームの試合を見た方が勉強にもなる。

「ちつ、なんだってんだよ！」

「こきなりどうしたのさ、兄貴？」

ヒロキの心配も最もである。いきなり機嫌が悪かつたら一緒にいる方は、気持ちの良いものではない。

「どいつもこいつも、エンゼルエンゼルってよ！」

「ああ、その事か」

ワタルの気持ちもわかる。いくら無名のチームだからといって、扱いがこうも違えば多少なりとも、良い気持ちはしない。

それは普段から穏和なヒロキでも、思えた事である。だが、ヒロキはどこか仕方がないと納得する。

「勝負あり！」

十五分程して、第一試合が終了する。

戦いは「ブルース」と「夏の男たち！」のチームが戦い、ブルースが勝つようだ。相当な接戦だったのか、両チーム共ボロボロである。

「つて事は、オレサマ達の相手はブルースだな！」

「兄貴、もう勝った氣でいるの？」

「当たり前だ！ オレサマは今年の優勝者だぜ！」

ワタルにとつて予選トーナメントは眼中にない。あくまで優勝のみである。

「とりあえず、早く黒子さんとこ行こうよ」

かなに急かされ、二人は見物席からバトルリングへと向かう。バトルリングといつても、慣らされた砂地である。足が砂によつて滑らない程度に、整備されている。

「あれが、リバティーズか……」

ワタル達が向かう場所には既にリバティーズのメンバーが集う。ワタル達と同じく三人。

黒子を中心に、ワタル達とリバティーズは向かい合つ形となる。

「どうも、リバティーズリーダーの江藤一です」えとうはじめ

「マックスハートの響ワタル。優勝する男だ」

「ふふふ、面白い人ですね」

挨拶を済まし、お互に握手をする。これといった威圧感はしきものはない。

ワタルにとっては、メンバー全員がなよなよした優男に感じられる。近いといえばヒロキに近い印象を受ける。

「試合方法は、一試合田と同じく10n1ので良いかな？」

「え、10n1だったのか？」

「あれ、見てなかつたの？」

「いや見てた。まあ、それで良い」

試合内容は10n1である。リトルウォーズの試合形式の中で、最もポピュラーな形式である。

10n1の名の通り、先鋒や中堅それに大将戦といつた、個別の戦いが行われる。総当たり戦なども形式によつてはありえるが、主に行われるものは一戦終了の形式である。

つまりは三対三の戦いなら、先に二勝した方の勝ちになる。もしも一勝一敗一分けなどになつた際は、リーダー同士によるサドンデス戦となる。

試合形式を審判の黒子に伝える。あとは先鋒、中堅、大将の順番を決めるだけである。

「まあ、大将はオレサマだな！」

「意義はないかな」

「うん、大将は兄貴だ」

大将はあつという間に決まる。あとは先鋒と中堅である。

特にワタル達にとってこの試合の先鋒といつのは、まさに先鋒であり一番手である。この一戦、いやこれから戦いを占う大事な一戦目といつても過言ではない。

「……よしつ、先鋒はかなつペ！ 行つてくれないか？」

「ふつふーん。かなに、まつかせなつさい！」

めずらしくワタルは頭を使つた。かなの強さはワタル自身が体験したものだ。この第一戦の時点でかなが負けるはずがない、とワタルは判断する。

ヒロキの先鋒も考えてはいた。ヒロキの先鋒としての緊張感とうものを考へると、かなに先鋒で勝つてもらつて勢いをつけて中堅戦で終わらせてほしいとふんでいた。

こうして先鋒はかな、中堅ヒロキ、大将ワタルとして順番が決まる。

そして、その決めた順番を両チーム共、審判黒子に伝える。

「それではこれよりBブロック第一試合。リバティーズ対マックスハートの試合を開始します。それでは、先鋒戦 西岡住吉と相沢かなの試合を行います！」

黒子の合図で、かなはリング中心へと移動する。戦いのないメンバーは、少し離れた位置に移動するよう指示される。

相手の構えを見る限りでは、武器は使わないようだ。恐らくはボクシングか ステップを踏む機敏さからの予測である。動きを見た感じでは、なかなか強そうな相手である。

「それでは、先鋒戦 始め！」

黒子による試合開始の合図が切られる。

相手の西岡はボクシングのスタンダード。試合開始でそれは確信へと変わる。

対するかなは、初っぱなからの星蹴拳。相変わらず手はフリーにして、右足を軸に左足で細かなステップを踏む構え。

「なんだ、お前。素人か？ そんな構えなんて見た事ないぜ」

西岡の言葉に返す言葉はない。かなは、それほどに集中している。ワタルからすれば、意外な事である。かな程の実力があれば、間違いなく目の前の敵を倒すのは造作もない事のはずだ。

「返事なしかよ、じゃあ良いさ。こっちから行かせてもらひぜ！」

西岡は、無言のかなに対して素早いステップで間を詰める。電光石火とはいがまでも、素人にこの速度を見せたら電光石火と感じられるぐらいの早さ。

早いのはステップだけではない。ボクサーらしくパンチの一発が早い。むしろステップよりもパンチの方が早い。

「シッシッシッ！」

ボクサーらしいかけ声と共に放たれる無数の拳。手がフリーの星蹴拳では当たれば致命傷。

それどころか屈強な男だったとしても、ボクサーの拳などをまともに受けたら危ない。かなは拳の一発一発を丁寧に避けていく。相手がボクサーでも、かなにはこれぐらい避けられるはずである。相手が格闘家であつても、かなも格闘家である。打つ西岡と、避けるかなの構図は開始一分ほど続く。

「どうしたあ、避けてばっかじや試合には勝てないぜ！」

一分間も高速の拳を、出し続けても息が上がらないところは、さすがボクサーというべきところか。

ペース的には西岡が優勢。攻めも守りも足技の星蹴拳では間合いが足りない。西岡はそれを知つてか知らずか、かなに反撃の隙を与えないように攻めていく。

「かなつぺ！ 星蹴拳にこだわるな、お前なら他の足技もできるはずだろ！？」

かなの勝利を信じている。しかし押され続けている展開に我慢ができずに、ワタルは叫ぶ。

事実、かなが蹴り技の天才と言われるように、星蹴拳の他の戦法もできる。だが、かなはそれをしない。

高速の拳の弾幕。これの前では、一瞬の溜めを必要とする星蹴撃も、その場で軸足を固定してしまつ連星撃もできないのは明確である。

大きく後方へ飛んで間合いを離そうにも、西岡の前進速度は恐らくかなを捉える。

「君、強いけどそれだけだね」

かなは拳を避けながら、試合開始初の言葉が出る。その口調は押されながらも冷静そのもの。

「攻められてるくせに偉そうな事を！」

かなの安い挑発に血がのぼったのか、高速の拳がわずかだが大振

りになる。

その一瞬の大振りの隙をかな程のプレイヤーが見逃すはずはない。かなは間を離すでもなく、反撃に移るわけでもなく、ただ空高く飛び上がる。

蹴り技を使うだけあって、脚力が常人よりもあるのだろう。かなは空を飛んだかのように跳躍する。

「バカが、どんなに高く飛ぼうと、それじゃパンチの餌食だぜ！」これは事実だ。どんな人間でも着地の際に硬直が起きる。それは例えば、身体能力に優れるワタルでさえも例外ではない。

まして、空高く飛び上がったかなの硬直は予想もつかない。そんなおいしいチャンスを、西岡が見逃すわけがない。

「ふうう……星蹴拳　落星撃！」

静かな呼吸と共に繰り出される無数の蹴り。連星撃のよつにも見えるが違う。

落星とあるように、星が落ちていくかのよつな無数の蹴り。空中で真下に落とす連星撃　それが落星撃。

着地際を狙おうとしていた西岡は、避ける事もできない。空から落ちる無数の星を避ける事が、できるわけないのだ。

無論、西岡の拳が一撃必殺の一撃ならば、かなの蹴りも一撃必殺。直撃を受けた西岡は、そのまま倒れ黒子からのTKO宣言が出される。

その常識はずれの技を見せられ、その戦いを見ていた人達は絶句する。

真夏の太陽の下　星が落ちた。

## ヒロキ奮戦！

会場に一時の静寂。そして大歓声が巻き起こる。冷めた観客の態度は、一気に熱く上昇する。

先鋒戦　かなが、西岡を倒しマックスハートに白星が飾られる。

「つたく、危ねえ戦い方しやがって！」

「大事な先鋒戦でしょ？ インパクトは大事と思つてね」

かなは、ワタルの考え方を見抜いている。初戦の先鋒戦だからこそ、インパクトが必要。

マックスハートというチームの存在を、観客に示すには効果抜群の魅せ方。

その効果は観客だけではなく、相手チームにも及ぼす。先鋒戦開始まで、自信に満ちていたリバティーズの面々も、かなの落星撃の前に唖然とする。

精神的な奇襲攻撃は、まさしく大成功といったところであろう。

そして、これがワタルの狙い。中堅のヒロキは間違いなく緊張で、いつもの動きができないはず。それは長い付き合いのワタルからすれば、手にとるようにわかる心理。

この奇襲攻撃で相手も、気負っている。単純計算すればこれで五分五分であり、ヒロキに勝機ができる。

勿論、ワタルはヒロキが負けるなんて事は思っていない。むしろ氣負っているのは、ワタルの方なのかもしれない。

「さて、次の中堅戦はヒロキだ！ 気張つていこうぜー！」

「うん、兄貴！」

ヒロキは気持ちの良い返事をする。思いの外、緊張は見られない。

「それでは、中堅戦　リバティーズ金田徹雄かねだてつおと、マックスハート川崎ヒロキの試合を行います！」

木刀を握りしめ、ワタルに似せた青い気合ハチマキを、額に巻き付ける。呼吸を整えて、神経を集中させていく。

いざ試合が始まるとなると、やはり緊張する。鼓動が徐々に高鳴つていくのがわかる。

バトルリング中央に行くと、既にリバティーズの金田はいる。かなの技を見た後の為か、それなりに動きが堅い。お互いに緊張しているのだ。

「中堅戦 始め！」

黒子の合図で、中堅戦が開始される。先鋒戦が開始された時に、適当に見ていた見物客も、かな効果で今回は最初から視線が釘付けである。

良い傾向だが、ワタルはそこに「嫌な予感」を感じる。

ヒロキは、木刀一本の我流中段。

金田はいわゆる喧嘩スタイルなのか、こちらも我流。やはり予選始めの方では、そこまでの手練れはいないうつにも見える。いわゆる素人に当たる確率が高い。

当然の話だが、構えがめちゃくちゃ いわゆる我流だからと「弱い」「下手」という事は当てはまらない。予選第一回戦だからと思いつみで、戦つてはいけない。現に、かな相手の西岡は一撃で負けはしたものの、相当な手練れだった。

「行くぞ、オラ！」

金田が先手必勝とばかりに、ヒロキに向かい走る。先ほどの西岡と違い、格闘家ならではのステップはない。

大振りの拳を、木刀を盾にするようにして捌く。捌きながら間を離すヒロキ。

（相手の武器は、拳だ。間合い（リーチ）は僕が有利だ！）

ヒロキは自分の武器と、相手の武器による適正距離を把握する。リーチを活かして戦うのも戦術では、必要不可欠な事である。

木刀で距離を計りながら、一定の間合いをキープする。金田の拳は西岡の拳と違い、大振りで遅い。遅いというには少し違うが、喧嘩の拳とボクサーの拳を比較しての事。

金田の大振りを見計らい、そこに一撃を打えていく。切つ先を当

てている為に、致命的なダメージにはならないが、確実に体力を奪つていく。

「ヒロキ君、良い攻め方だね」

「だろうな。あいつた戦い方はヒロキの性分だ」

ワタルと、かならず見てもヒロキの戦い方は安定して見える。派手さは無いが、堅実でセオリー的である。

「ちい……この野郎がっ！」

ちまちまと攻める戦い方に苛立ちを感じたのか、金田は攻撃を受ける事も気にせずに、拳を振る。

「……ぐつ！」

その大振りの拳が、ヒロキの顔面を捉える。

衝撃で大きく後方へとよろける。拳自体はなかなか重いらしい。

「ふん。ちまちまとウザつてえんだよ！」

「くそう……！」

今の一撃で足にきている。決してヒロキが打たれ弱いわけでもない。意外にも金田の拳の威力が高い。

ワタルからすれば優男に見えたが、ヒロキにとつては金田も屈強な男に他ならない。

「この中堅戦で、負けたら俺達は終わりなんだ。さつさと終わらせてやるぜ！」

金田の拳が、ヒロキに襲いかかる。先程のただの大振りとは違い、気合も乗り早さを増したように見える。

盾にする木刀越しに、拳の重さが伝わる。この拳が直撃すれば、間違いなくKOされるだろう。

「おらあ！」

攻撃の重さに耐えられずに、吹き飛ばされるヒロキ。

見ると、審判黒子は試合を止めようとも見える。予選第一回戦クラスで大怪我でもされては困るからだ。無理をして大怪我をさせない為の配慮ともみえる。

間違いなく、このまま金田の拳に押され続けければTKOは必至だ

る。「

「よしひ……」

ヒロキは攻めに転ずる決意をする。手数には手数で相殺する構え。  
「必殺……みだれうち！」

金田に走り込みながら、無数の剣線を繰り出す。かなどの練習試合にも見せた、必殺のみだれうちである。

「な、なんだと！？」

あまりの剣線の多さに身を固め、防御態勢になる金田。いや、防御態勢でなければ金田は防げない。

木刀が体を打つ音が、まるで機関銃のように聞こえる程の手数。一瞬でもガードを外せば、下手したら致命打をもらいしかねない。

本来のみだれうちの、効力はこうなるはずだった。かなのようこそ、迎撃できる程の能力は希である。

「つてんだよ……」「う！」

みだれうちを耐える事に、業を煮やした金田はやぶれかぶれの一撃をヒロキに向ける。その拳は運良くも無数の剣線に妨げられる事もなく、ヒロキの顔面へと直撃する。

拳をもらった瞬間に、ヒロキの視界は真っ黒になる。一発で意識を断ち切られてしまった。

「そこまで！ 中堅戦はリバティーズの金田の勝利とする！」

黒子による勝利宣言。それはマックスマートのものではなく、リバティーズのものだつた。

奮戦の割の呆気なさ。ある意味では、実力が拮抗していたからこそその結果であろう。似たようなパワー・バランスの相手との戦いは、極端に長引くか、極端に呆気なく終わるかの、どちらかになるパターンが多い。

「おーい、ヒロキ！」

「ヒロキーん！」

結局、ヒロキが目を覚ましたのは三十分後の事だった。

黒子の判断により試合は一時中断。大将戦は予定よりも遅い開始時間となる。

ワタルとかなに、たたき起こされてヒロキの意識が戻る。余程のパンチをもらつたのか、わずか三十分でヒロキの顔面左側は大きく腫れ上がっている。

「そこまで腫れちまうと、左側の視界は見えないだろ？」

「うん……見えないね」

負けた事への悔しさか、あるいはパンチをもらつたショックか。ヒロキの声には元気がない。

「まあ、負けちまつたもんはしようがねえさ…」

「でも、兄貴。僕が緊張しないようにした作戦……だつたんだろう?」「……バーカ。良いからあとはオレサマに任せとけってんだよ」

落ち込むヒロキに、ワタルなりの励ましを送る。

赤い気合ハチマキを頭に巻き付け、木刀一本を握りしめる。バトルリングへ向かうワタルの背中を、ヒロキはただ見送る。

「ヒロキ! オレサマは負けねえさ、安心してそこで待つてろ!」

それだけを言い残し、黒子とリバティーズリーダーの江藤が待つ中央へと歩む。

西岡と金田が、拳主体の戦い方の為に江藤も同じタイプかとワタルは思っていたが、木刀を持っているところを見ると剣術主体。

「待たせたな!」

「いや。仲間の様子は大丈夫かい?」

「あいつは、あんなもんでへコたれるような奴じゃねえさ」

敵のチームメンバーの事を気遣うあたりに、この江藤という男の優しさを感じる。

リトルウォーズの参加者の多くは、いわゆる「不良」連中が参加する事も多い。いわゆる「ボコして終了」という人種が多く、大体の人間は相手チームの心配などしない。

最も、この江藤がそういう意味で希な人種というわけでもない。近年の参加者はマナー やモラルを重んじる人も増えてきている。

「それではこれより、リバティーズ対マックスハートの大将戦。江藤一と響ワタルの試合を行います！」

黒子により、最終戦という顔を高らかに宣言される。

「悔いの無い一戦にしよう、響君」

「当たり前だ！ オサレマ達はこんな一回戦でやられるわけにはいかねえからな！」

お互いの木刀を高く掲げ、それを十字に合わせる。木と木が当たる乾いた音が、辺りに響く。

「それでは……大将戦。始め！」

リバティーズ対マックスハート。大将戦がついに始まる。  
響ワタル 念願のリトルウォーズ初試合である。

## 江藤の罠！

黒子の合図により、リバティーズ対マックスハートの大将戦が始まる。

相手は大将であり、リーダーの江藤一。木刀一刀にして構えは手本のような中段の構え。中段は構えの中でも最もポピュラーな構えである。

一回戦の相手だからと侮ってはいけない。現に目の前の江藤からは凄まじいぐらいの気迫を感じる。

「君たちもそうだけど……僕たちも負けられない。お互いに大将戦を落としたらお終いだからね」

「そうだな」

「全力でいかせてもらいつよ。悪いけど君たちを、踏み台にさせていただく！」

一気に間合いを詰める江藤。その突進力は凄まじいものがあり、一瞬でワタルの懷に飛び込む。

逆にいうなら、ワタルが簡単に懷を許す程の速度。見た目や口調に騙されたが、江藤は強い。

「はあっ！」

気合と共に、剣線を横に走らせる。その剣線は鋭く、ナイフのような切れ味を連想させる。木刀のはずなのに、真剣で切られたような錯覚を起こさせる。

しかしワタルも、その剣線を上手くさばいてみせる。並の相手なら初撃これでやられている。

「ふう……とんだ伏兵だぜ。一回戦からアンタみたいなのと当たるとはさ」

「それは僕も同じ事さ。最初の横薙ぎで完全に仕留めるつもりだったからね」

柔らかい物腰とは裏腹に、その気質は非常に攻撃的。剣線もそう

だが、動き、気質、どれをとってもナイフである。

ワタルも木刀を構え直し、江藤の攻撃に備える。若干だが速度は江藤が上。下手に先手を取らざつとすると、逆に手痛いしつべ返しをもらひ事になりかねない。

「行くよ！」

言葉と同時に再び一足飛びで、一気に間合いを詰めてくる。

しかし、ワタルもその一足飛びに反応する。速度は負けているが、反応速度ならワタルに分がある。江藤の剣線を再び捌き、反撃する。江藤の肩口を狙うように、右袈裟けさを狙う。読んでいたかのように、その一撃を江藤はいなす。その動きは、まるで木の葉のよう。実戦と経験に裏打ちされた動き。

避けた江藤に反撃をさせず、ワタルは手数で押していく。その攻撃のほとんどを木刀を盾にして、華麗に捌いていく。

「コノヤロー……」

ほとんど空振りに近い事をやつた為か、ワタルの呼吸が少し乱れつつある。いつも素振りもして鍛えていたるワタルが、この程度の戦いで呼吸の乱れが生じるなどあり得ない事である。

「あそこまで動かしたのに　　その程度の乱れか。なかなか鍛えているね」

「……何！？」

「普段の君ならば、この程度の攻防で息が乱れるなんて事は無いのだろうね。しかし君の呼吸が著しく乱れたのには理由がある」「汗を流し息があがっているワタルに対し、一人だけ余裕の表情を浮かべる江藤。

ワタルはその態度を「とある男」に連想してしまい腹が立つ。

「まず一つ目。君の運動能力には正直な所、感服する。僕が今まで試合をしてきた中でもピカイチの能力だ。だが君には絶対的な『経験』が足りない」

「絏……驗……だと」

「そうだ。君はこの舞台で緊張しているんだ。緊張は何よりも体力

を消耗させるからね」

これは事実である。確かにワタルはリトルウォーズに参加できた事により、嬉しさもあつたがそれ以上に緊張感が支配している。いつもの練習試合でみせるような、柔軟な動きが緊張によって固い動きになってしまっている。

この事がワタルの体力を消耗させた一つの要因。

「へん！ 緊張なんてるかつてんだ！」

ワタルは更に加速する。その速度は第一撃の動きを大きく超えている。

そして、強烈な攻撃を江藤に向ける。その攻撃は一撃目同様にいなされる。

「……！？」

「気づいたかい。この感覚に？」

ワタルの攻撃は江藤から大きくそれている。ただの空振りではなかつた。

「僕の得意技の一つでね 相手の攻撃を必要以上に大きく空振りさせる」

これが江藤の技。初舞台による緊張と、江藤のいなすテクニックにより、ワタルはいつも以上の体力の消耗をさせられている。

「そして弱った相手は僕の攻撃を避ける事はできない！」

再び、ナイフのような斬撃がワタルを襲う。

ワタルはこれを紙一重で回避する。しかしその斬撃を完璧に避けるに至らず、頬をかすめ赤い血が滲む。

「……まいったな」

体の重さを感じている。思つてはいる以上に体力の消耗が激しく、ワタル自身も焦りが生まれてくる。

「悪いね。君たちには一回戦 で消えてもらうよ」

獲物を射程内に捕らえた江藤の攻撃が始まる。練習により、何発も打ってきた斬撃は消耗したワタルには、避けるのも酷なものである。

ワタルは避ける足が動かずに、木刀を盾にして江藤の攻撃を耐える。

木刀を盾にしているとはいえ、鋭く重いその斬撃はさうにワタルの体力を奪っていく。

「くつそ……！」

からうじて反撃の一撃を振るつても、わかっていたかのように攻撃をいなされる。

ただでさえ大振りなワタルの攻撃が、さらに大振りの空振りにされる。おまけに夏の太陽により精神までも消耗させられていく。

「タフな人だ。よくもここまで耐えられる……」

今まで涼しい顔をしていた江藤にも、若干の疲労が見て取れる。ワタルは反撃の糸口も見つけられずに、ただ江藤の攻撃に耐えている。

「どうした……そんな程度の攻撃じゃ、オレサマは倒れないぜ」

ワタルの顔、体にはまるでミニマズ腫れのように赤い線が浮き出ている。それだけ江藤の攻撃はスナップの効いた攻撃である。

「はあ……はあ……。なんなんだ、そのタフさは。ただ打たれ強いだけでは説明がつかない……」

「当たり前だろうが！」

「……何？」

「オレサマ達は優勝するんだ。こんな所で負けられるわけねえだろうが！」

ワタルという人間を支えているのは、類い希なる身体能力ではない。その絶対不動の精神力である。

「そして優勝する為には……マツクスハートだ！」  
金方の心

愛用の木刀を、まるで大剣でも担ぐかのように構える。下半身も大股に開き、重心を完全に地面に伝える。

体中はボロボロだが、防御に回つてただ耐えていた分の体力を回復させる。対して江藤は今までの攻め疲れから、息を荒くさせ大量の汗をかいている。形勢は逆転する。

「兄貴……『あれ』をやる気だ」  
「え……。あれって？」

ヒロキはわかつている。ヒロキにも必殺の「みだれうしづ」がある  
よつに、ワタルにも必殺技がある。

かなどの、戦いにも見せる事のなかつた大技。

「一回戦突破はオレサマ達だ！ 行くぞ、必殺ぶつたぎり！」

持てる全能力をその攻撃に乗せて、ワタルは江藤に向かつ。

## 必殺ぶつたぎり！

必殺技・ぶつたぎり！

その一言を発して、ワタルは力強く山なりに弧を描くように飛ぶ。そのスピードは遅い。遅いといつても、並の相手には速く感じる勢いである。だが江藤に限ってはそれにはまらない。

江藤の程のプレイヤーからすればワタルのモーションを見ながら、いなすも良し、カウンターをするも良しだ。肩に担いだ愛用の木刀は、空中においても「タメ」の姿勢を崩さない。

「響君。それが必殺技だつて！？ パワーはありそつだが……この勝負、僕たちがいたくよ！」

やはり江藤には、ワタルのモーションが読めている。事実、ワタルの動きを見ながら捌いてから、カウンターをあびせようとしているのがわかる。

対するワタルは、そんな事も構いもせずに直進する。いや、どっちにしても大きなモーションの空中姿勢では今更やめる事もできない。

時間にすれば一秒もないぐらいの時間だろう。しかし、時間が止まつたかのように見えたその読み合いにも終わりが来た。

「おおおおおおおお！」

「つ…………！」

突然、叫びだしたワタルに呼応するかのように、江藤も構える。肩に担いだ木刀を両手で持ち、力の限り相手に叩きつける。対する江藤は、今までの剣の捌きのように、ワタルの攻撃を受ける。そして、ワタルと江藤の木刀が合わさった瞬間だった。

「…………！？」

江藤の木刀を持つ右手に、まるでハンマーで叩かれたような重圧がかかる。咄嗟に、捌きるのは不可能と判断し、剣の腹を盾にして両手で防御の姿勢をとる。

「なつ……！」

両手で受けたにもかかわらず、江藤にその重さを耐える事ができない。

いや、正確には耐えられるのは、その江藤の剣。

「残念だつたな江藤。俺の「ぶつたぎり！」はヒロキいわく……」  
〔ソードブレイカ〕

「……武器破壊剣！！」

ワタルの言葉に続くように、ヒロキは言葉が出ていた。勿論、ヒロキは会わせる気も無かつたはずだ。

木刀の耐久力を無視するかのように、まるでオモチャの剣が壊れたように、音を立てて江藤の剣が破壊される。

そして、その勢いのままに着地する。着地の衝撃が、遠くにいる見物人にも伝わるかのような迫力。

かなの落星撃が披露された時のようになり、会場には一時の静寂、次には大歓声が巻き起こる。

「江藤君、君が続けると言つのなら、私は止めはしないがどうするかね？」

黒子が武器を失った江藤に、続行の意志を聞く。

「いえ……剣を失った時点で……僕の、負けです」

「わかった。二対一にてマックスハートの勝利とする……」

黒子から高らかに、勝利宣言がされる。再び巻き起こる大歓声。

「響君。完敗だよ……まさかあんな大技だとはね」

「当たり前さ、何年も前から天下取るために、暖めておいた技なんだからな」

「そうか、君の意志は固いようだね。……僕たちの分もがんばってくれよ、応援する」  
〔マックスハート〕

「サンキューな。お前らの魂も、連れていくてやるからな！」

江藤とガツチリと握手をかわす。改めて手を握ると、江藤というプレイヤーの凄さが伝わってくる。

戦った者同士にしかわかりえない感覚である。

江藤はそのまま、仲間達の元へと戻っていく。ワタルも後ろに待

つ仲間達の元へと戻る。見知った顔がそこにはあった。

「兄貴！」

「ワタル君！」

ヒロキとかなが、ワタルの、いや、マックスハートの勝利を祝福してくれる。

「バッカヤロ、これはみんなで取った勝利だぜ！」

「僕は、負けちゃったけどね」

顔を腫らしたヒロキが照れ笑いを浮かべる。そんなやりとりを見る、かなが楽しそうに笑う。

全勝とまではいかなかつたが、これはみんなで掴んだ勝利である。「さつて、このまま天下一まで行こうぜ！ まずはFエンゼルだぜ！」

「……へつ、あの程度でFエンゼルをやろうとは……笑える話だぜ」

ワタルの言葉を小馬鹿にするような口調で、その声は聞こえた。

「なんだと、コラ！」

その言葉に黙っているワタルではない。声がした方を向き、相手に睨みを利かせる。

そこには髪の毛を逆立たせた、非常に丑つきの悪い男がいる。身長はワタルよりほんの少し高い。恐らくは175cm前後、体つきはやせ型だが、見るからに柔らかいしなやかな筋肉を身に纏っている。

木刀を持っている所を見ると、プレイヤーなのだろうがワタル達はその木刀を見て、驚愕する。その木刀は、男の身長と同じあるいは長いぐらいの長刀である。

「あの程度の雑魚を倒したぐらいで、図に乗られても頭にきちまつからなあ」

「つだと、コノヤロー！」

「何度も言つてやる。雑魚を倒したぐらいで調子こくなコラ」

一触即発の雰囲気に、ヒロキとかな、いや、その近場にいた全員が動けないでいる。

ワタルの怒氣に触れただけでも動けなくなるぐらいだが、田の前の男はそんな事も氣にもとめない様子でワタルを睨み付ける。

むしろワタルの怒氣よりも、この眼光の方が動きを止めさせる。

まさに蛇に睨まれた蛙の状態そのままである。

「なんならここで殺つてやつても良いんだぜ？　変な言い訳しねえならな」

「てめえ……！」

安い挑発だが、今のワタルには火に油。怒氣から殺氣へと変わったのが嫌でもわかる。

「どうしたよ、ビリッてんのか？ 小魚が」

「上等だよ、殺つてやんよ、コノヤロー！！！」

怒りの声と同時に、ワタルはその男に向かっていく。一試合終えたばかりにも関わらず、その速度は一番速い。右手に持った木刀で、男を思いきりぶつたぎる。

男は木刀を盾にしてワタルの攻撃を受ける。が、その受けた腕は衝撃によって大きく激しく、ブレる。

お構いなしに、手加減無しの全力攻撃を浴びせ続けるワタル。男の腕はその攻撃を受けるたびに、吹き飛んでしまうのではないかと、いつ程、弾かれる。

「おかしい……」

「えつ！？」

「あの人を受け方受け切れてなくて、あんなに激しくブレてるんじゃないような気がするの」

かなは男の受け方に、違和感を感じている。いつものワタルならば、そんな事にも気がついていて良いはずなのである。

実際、男の腕の弾けようは異常である。普通ならばどんなに強い攻撃でも、こんなにもブレたりはしないはずである。

「おいおい、いつになつたら俺を殺してくれんだ、ええ！？」

「うつ……の…」

挑発により、さらに攻撃の度を増す。しかしその攻撃は全て直撃

には至らない。

むしろ第三者由線から見ると、ワタルの剣が攻めているのではない  
く、男の剣が遊んでいるように見えてしまつ。

「そらよ…」

受けに回っていた男が、初めて攻撃をする。その剣線は一般的な  
剣のように直線的ではなく、蛇行的。文字通り蛇のような剣線である。

スナップの効いたどこの話ではない。効き過ぎたその剣線は下  
からとも、横からともつかないような位置からワタルを襲う。

「つ……！？」

持ち前の反射神經スナップイングソードで、突然の攻撃を間一髪で避けるワタル。

そのスナップの効いた剣線は、ついさっきまで戦っていた江藤の  
比ではない。

「ほお、避けたか。頭はクズでも、運動神經だけはまあまだな」

「…………」

その一撃で怒りが支配していた頭は吹き飛んでいた。ワタルは一  
瞬で目の前の蛇が、ただの蛇ではない事に気がつかれる。

「ま。俺も暇人だからな、少しほ遊んでやるぜ？」

男は中腰になり、手をブラブラと揺らし始める。まるで間接でも  
外れているのではないかと、錯覚させるぐらいに柔らかい腕の動き  
である。

蛇の目が ワタルを捉える。

天使と蛇と悪童と！

「まあ、死なねえ程度に遊んでやるよ」

男の腕が揺れる。その柔らかな筋肉を纏う腕は、腕というよりも一匹の蛇がそのまま体についたように見える。この男は筋肉だけではなく、関節そのものも柔らかい。

たちは、男の持つ長刀で、まるで蝶のようにはざむけている。外語  
だが錯覚だ。しかし男の剣捌きはそれ程に柔らかい。無駄が一つも  
ない動きである。

.....!?

奇声をあけながら、男は斬撃を繰り出す。その斬撃速度はさうに蛇のようにうねる剣線が先読みすら不可能にさせる。

運動神経と反射神経に優れる「タルガ」のスナッフのきく銃線を避けられず、いや、反応できずに胸部に直撃をもひつ。「おいおい、この程度も避けてくれねえとな……。まあ、もう寝ろ」「ぐつ……ー。」

蛇がワタルに襲いかかる。柔らかな筋肉と関節、そして長刀。一度受けに回つてしまえば、蛇の毒により相手は終わる。

まるでボクシングのフリッカー・ジャブのような変則的な軌道を描き、襲いかかるその剣線にワタルはなす術もない。防御も回避も許されず、ただ直撃のみを受け続ける。

江藤との一戦で消耗しているとはいえ、何もできないワタルに対し、ヒロキは信じられないといった瞳で、その光景を見つめている。何よりワタルの凄さを知っているからこそその反応である。

「あ、冗貴……、冗貴っ、何やつてるんだ、攻めるんだよ、冗貴！」

!

心の底から出た言葉。憧れであり慕っている人間が、なす術もなく目の前でやらされたい放題になつてゐるのは、その人間にとつては

苦痛そのものでしかない。

誰だって、慕う人間には輝いていてほしい。そんな心から出てきてしまった言葉が、ヒロキの口から発せられている。

「ハツハツハ、無駄だ、小僧オ！…」

「ぎつ…！」

ヒロキの声に突き動かされてか、ワタルはスナッピングソードを奇跡的にかいぐり、男に対してこの戦い初の反撃を試みる。

「な…めんな…よつ…！」

体も心もボロボロの状態で放つ渾身の一撃。フォームもクソもない、ただのがむしゃらな力任せの一撃。

しかし、反撃は無いとふんでいた男には、それで十分。ただの力任せの一撃は男を捉える。

「チツ！」

リーチ的にも避けるのは不可能と悟つてか、男はバックステップをしながらワタルの攻撃を、左腕でガードする。その一撃で男の体は、宙へと飛ばされる。

「馬鹿力がつ…！」

男はワタルの力加減に悪態をつく。死に体だつた男のどこにそんな力があるのだろうか。

ワタルは相手が空中で停滞するわずか一瞬を、逃さないよつに合わせ、再び渾身の一撃を与えるべく飛び上がる。

どんな人間でも空中にあれば、動く事はできない。ワタルの攻撃はクリーンヒットする。

「あああ…ああああああ…！」

残った力の全てをはき出すよつに、声を出す。いや、そうでもしないと自分がダメージに押し潰されてしまうからだ。最後に残るものは、体力でも、理屈でもなく、ほんの一握りの根性。<sup>マックスハート</sup>

残る力を男に浴びせる。それがワタルにできる最後の攻撃。

「クックック…、それが小魚だつてんだ。甘エ…！」

ワタルの攻撃に、合わせ男は飛び上がる。

「なつ……！」

ワタルの木刀は空を切る。そこに男の姿はない。

当然である、男はワタルの一つ上にいる。いや、飛んでいる。上空から男のスナッピングソードが展開される。フリックカー効果の軌道の見えない弾幕が、ワタルを捉える。第三者から見れば、それは蛇の雨。スネーク・レイン

ワタルの考えは逆手に取られる。空中にあれば動く事は不可能。ただ一人をのぞいて。

「……ぐはっ！」

受け身をとる事もできずに、弾幕の直撃を受け、地面に叩きつけられるように落ちる。

「ぬつ……つぎ。まだだア！」

ワタルは諦めない。男が空中で一段ジャンプするのなら、着地を狙う。着地の硬直ならばどんな相手にでも例外はない。重力がある限り、この法則からは逃れる事はできない。

「一本足……」

ワタルは野球のバッターフォームのような格好をする。狙い打つは、落ちてくる男の着地際である。

「打法……」

一本足打法。ホームランでも打つかのような豪快なスイングで落ちてきた男を狙う。

一度のジャンプができるても、三度のジャンプはない。ワタルは、いや、誰もが思う事である。

「もう一度言つてやひつか」

「……？」

「だから、小魚だつてんだろ、クソが！」

男は空中で、ワタルのモーションに合わせながら身をよじる。爆音をたて、爆風を巻き起しにんばかりの、スイングを前に男は空中で一瞬、止まつた。

「なつ……！」

ワタルの攻撃は豪快に空振りする。そして無防備になつたワタルに、男の長刀<sup>スネーク</sup>が確実に噛みつく。

攻撃の威力を耐える事もできず、そのまま後方へと転がるようにな倒れ込む。

空中における一段ジャンプ。そして空中停止。ワタルを越える運動神経と反射神経。人間技を超えたその動きに、ヒロキもかなも、戦っているワタルすらも言葉を失うしかなかった。

「フフフ、クツクク……ハハハ、ハーハツハツハ……！」

着地した男は、ただ笑っている。その場に男の高笑いだけが響いた。まるで世界には「それ」しか音が無いのではないかと錯覚する程。

「ま……だ、だア……！」

その音の世界を、碎く一声。ワタルの声が、男の高笑いをかき消す。

「チツ、まだ、くたばねえ氣……ん？」

男は、今までと違うワタルの雰囲気に気を払う。全体重を地面に乗せ、木刀を力一杯担いでいる。そう、ついさっき江藤を倒した大技「ぶつたぎり！」である。

「へつ、ちつたあ楽しめそうな技があるじゃねえか」

男は再び中腰になり、蛇の構え（スネーク・スタイル）になる。（へへへ……、いよいよもつて、これが最後の技だな。……これが通用しねえと……）

そこまで考えてワタルはやめた。悪い方に考えるのは簡単で、それをやっても勝てない。重要なのはどんな時でも上を見る威風堂々『ポジティブ・シンキング』である。

「すうううう……。行くぞ、コノヤロー……！」

本当に持てる全ての力を出し切る。江藤に放つたものよりも、威力も体捌きも上回っている。

逆境に追いつめられたからこそできる、最大の大技。当たれば勝

利、外れれば敗北である。

「うああああああああ！！」

正に全力。全てをその木刀に、その攻撃に乗せて男を斬る。

江藤でも捌けなかつた武器破壊剣ソードブレイカ、それに加え全てがその時の「ぶつたぎり！」を超えた技は確実に男の長刀を粉碎するはずである。

「シャアアアアアア！！」

剣と剣が触れる。男は江藤と同じく、その長刀を盾にしてワタルの攻撃を防ぐ。ワタルは男の長刀を粉碎するべく、ただ渾身の力を込める。

「うぐつ！？」

江藤と同じく、そのあまりの威力と重さに、完全防衛態勢へと移行する。こうなれば、江藤と同じく武器破壊が成立する。まして男の剣は長刀であり、たたき割るという点に置いては弱点と言つても過言ではない。

「クツ……クツクツク。なるほどなあ、こいつは大した技だぜ……。でもなあ、シャアアアア！」

再び放たれる男の奇声とともに、二つの剣は交差する。ワタルの剣と、男の剣が離れる。

その威力そのままに、地面上に激突するワタル。江藤の技で捌けなかつた大技を、この男は持ち前の筋肉のバネと関節の柔らかさを使い 大技ぶつたぎりを見事に捌ききつた。

「…………！」

ワタルは、誰にも聞こえない小さな声を発した。その声を聞けたのは、会場中探しても誰もいなかつただろう。

「ま、小魚にしてはがんばつた方だよ、クソ野郎」

最後の蛇が放たれる。何もできないワタルは、その攻撃をただ受けられしかできなかつた。糸が切れた人形のように、ワタルは前のめり倒れる。

「兄貴！！！」

「ワタル君！」

どう見ても危ない倒れ方をした。ヒロキもかなも、何も考えないでワタルに向かつていた。

そのワタルの状態は、江藤と戦つた時の傷がわからない程にやられている。スナッピングソードによる剣撃により、ミミズ腫れのような痕が体中に見られる。まるで、剣ではなく鞭で叩かれたような痕である。

「よお、野郎に云えておけ、まだ殺る気があるんなら上まで来いつてよ、ハツハツハ！」

「待つて！」

去つていく男を、ヒロキは無意識に呼び止めていた。

「貴方は、一体……？」

「……ふん。仁だ。俺の名前は速水仁。はやみじん」

ヒロキは去りゆく仁の背中を見続けていた。ただ固く握られた拳と、噛みしめた唇から流れる血が、今のヒロキを物語つっていた。

## 夢の中の少女・前編！

予選トーナメント第一回戦が行われてから一日後。七月一〇日。

速水仁との戦いに敗れたワタルは、ヒロキ達の手により病院へと運ばれる。持ち前の回復力で体力の面では「ほぼ完治」したものの、問題は精神の回復である。

ワタル達が不在の中、在校する学校は夏休みを向かえていた。学校には、部活をする者、補習を受ける者、ただの暇人の集いなど、生徒は思い思いの事をしている。

今では恒例の「屋上」にて、昼の支度をしている。  
さんさんと照りつける太陽を避けるように、日陰を陣取り、そこにシートを引く。その上にこれも恒例となつた、かなの手料理を囲うように座る。

ただ一人を除いて

「ワタル君……今日も来ないのかな？」

「うん。僕も兄貴がどこにいるのかわからんんだ」

二人で昼食を口に運ぶ。どこか素つ気ない。

「悔しかつたんだと、思つ

食べるのをやめて、ヒロキは話し始める。かなも黙つて、その話に耳を傾ける。

「正直、僕だつて悔しいし……何よりもずるいって思つた。安っぽい言い方だけど、あれば才能なんだつて

「うん、そうだね……」

一回戦を突破した矢先に、どん底へと突き落とされた気分を味わう。

その「絶対的な才能」を前にする。これを越えなければいけない、  
最大の才能である。

「ヒロキ君。でも、越えなきやいけないんだよ。かな達ができるのは、ワタル君が復活した時に向かえてあげる事じゃないかな」

「うん。一番ショックを受けているのは兄貴のはずだからね……」

夏の太陽の下、二人はワタルの復活を待つ。それができる最大の事であると信じて。

ワタルは病院から出てから、自分の部屋のベッドに寝ていた。前向きが取り柄のワタルだが、内心のショックは大きい。今まで、どうしようもなく強い敵と戦った事は幾度となくある。

しかし、それはただ「強かつた」それだけの事である。絶対的な才能を見せつけられ、自分の考えていた事の愚かさを知る。

「…………」

ただ沈黙。何も話したくなかったからだ。

悔しい感情も、悲しい感情も何も出でこない。何もできなかつた敗北という真実が、ワタルの頭の中を真っ白に染めている。

考えれば考えるほど、頭の中の白は深く、そして大きく広がつていいく。

その一面の真っ白が嫌になり、わざと大きな溜息をついて頭の白を消し去る。だが一瞬の事で、すぐに頭の中には白が充満していく。今はその白をどんな方法でも良いから、消し去りたいという願望だけがあった。

目を瞑ると、その白は消える。今度は一面の黒がワタルを覆った。まだ黒の方が良いと考え、ワタルはひたすら目を瞑り続ける。

そして気がつかない間に、ワタルの意識は混沌の中へと墜ちていった。

見覚えのある景色が広がつていいく。

この景色は一体なんだつただろ？ ワタルは頭を働かせ、なんとかその景色を思い出そうとする。

思い出さうとするが、辺り一面に聞こえてくる怒号の大歓声が、頭に響く。

(うるさい！ 思い出せねえじゃないかよ！)

その正体不明の歓声に、一人で悪態をつく。そんな一瞬、脳裏にそれがかすめる。

(あ、思い出した。これは俺が見てきた過去のリトルウォーズだ) そう、そこには決勝戦を戦う参加者と、それを応援する観客の姿がある。まるでお祭り騒ぎのような、大熱狂が見える。

まだ小さいワタルは、いち早く良い場所を陣取り、特等席でその戦いを見ている。

「いけーっ、そこだ、ぶつとばせーーー！」

剣術や格闘術のいろはもわかつていな。わかっているわけがない。

ワタルにとって、決勝戦は夢の舞台。自分が何回も見てきて、自分もこの舞台に立ちたいと、そんな色あせない夢を大きくしている。

しばらくすると、その決勝戦も終わりに向かえる。どっちが勝つても良かつた。

幼い頃のワタルは、特別応援をしているチームがあつたわけでもない。ただリトルウォーズ（ちゃんばら）が好きだった。だから木刀のような木の棒を探し回った事もある。

いつも戦いを見ていた、真似をするように棒を振るつた。勿論、それで満足するはずも無かったが、そうする事で参加できない鬱憤を晴らした。

そして、一年が経ち再び夏。リトルウォーズの季節がやってきた。

毎年恒例の当たり前の事。日常的に会場に足を運んで、一試合目

から試合を見る。会場が一つあるなら、全速力でダッシュして会場を目指した。

一試合目から決勝戦まで、全ての戦いがワタルにとって光輝いていたのだ。

そんな、とある日の事。いつものように会場に足を運び、走り回つている。

「きやつ！――

「あつ、ごめん、大丈夫？」

他の会場に行くのに夢中だったワタルは、人にぶつかってしまう。当然の話だが、リトルウォーズは「教育上宜しくない」として、小さい子供を会場に行かせはしない。ワタルも止められていたが、親の目を盗んでは会場に来ていた。

ぶつかった人を見ると、どうやら女の子。ワタルよりも一つか二つ年下の女の子だろうか。長い髪をポニー テールで結んで清楚な感じがする。

急いでいたが、放つておくわけにもいかないので、ワタルは女子に手を貸して起こす。

「ごめんな！ 怪我は無かつたか！？」

「……

女の子は、転んで泣くわけでもなく、かといって怒っているわけでもなく、無表情にワタルを見ている。その漆黒の瞳は、見つめていると吸い込まれてしまいそうになる。

「あ、あのせ……大丈夫？……えと、俺急いでるんだけど、や」

「……好き」

「ええ！」

突然、女子に「好き」と言われ困惑する。一瞬だが、会場に急がなければいけないという事を忘れる。

「リトルウォーズ」

「え？」

「リトルウォーズ……好き？」

ワタルはちょっとガツカリする。だが、その女の子の問いに考えもせずに答えた。

「当たり前だろ、俺はリトルウォーズが大好きさー。」

「……そう。良かつた……」

わからないぐらいに、女の子は微笑む。その小さな微笑みをワタルは可愛いと思う。どこか神秘的な雰囲気を漂わせていたが、ワタルは「良い奴」と判断する。

「お前は？」

「……え？」

「お前は、好きなのか。リトルウォーズがさ？」

「……うん」

少し間をおきながら、遠慮がちに頷く。

ワタルが少し驚いていたのは、女の子でもリトルウォーズが好きな奴がいるという事。事実、この当時の大会には女の子の姿はほとんど見られず、男しかいなのではないかと思える程だった。

まさしく男の為の、男の戦い。ここ数年で、その傾向は薄れ女性参加者が増えていくてはいる。

「じゃあ、一緒に行こうぜ！」

ワタルは女の子に手を差し出す。

「……でも、ママが知らない人についていつちゃ駄目だつて……」

「む……ふう。俺はワタル、響ワタルだ。いつかリトルウォーズで優勝する男なんだぜ！－！」

「響……ワタル君……」

「ああ、ワタルで良いぜ」

「じゃあ……ワタル君。私は、桐華、さくら 桜井桐華、です」

女の子の名前は桜井桐華。常に遠慮がちだが、とても礼儀正しいと思える雰囲気を持っている。

改めて手を差し出したワタルの手を、躊躇いながらも握る。ためら

「行こうぜ、『トーク』－！」

「……うん－？」

次の会場へ向けて、二人で走り出す。何故、トーコなのか疑問に  
思いながら。

## 夢の中の少女・中編！

幼き日のリトルウォーズ会場で、ワタルは一人の女の子に出会う。女の子の名は桜井桐華さくらいとうかという。この少女もワタルと同じく、リトルウォーズが大好きな女の子であり、今ではワタルと一緒に会場中を走り回っている。

そんな一人の待ち合わせ場所がある。リトルウォーズの開会式や閉会式が行われる広場　　そこの真ん中にある一際大きい大木。小さな子供でも、間違いないほど着けるとの理由から、ここが二人の待ち合わせ場所になつた。

「ごめん！ 遅くなつた！」

「……ワタル君。いつも遅刻」

「本当にごめん。昨夜きのよさ、興奮して眠れなくて……そしたら、寝坊しちゃつてさ」

「…………」

桐華はひたすら無言で、顔を合わせないように明後日の方を見ている。怒らせてしまつたかと思い、ワタルはひたすら謝り続ける。そんな謝罪の言葉も百回は言つたぐらいの時だつた。

「……ふふ

「ん？」

「……良いよ。実は私も少し寝坊したから」

「あっ、なんだよ、トーコ」

そんなに深くは怒つていなかつた事に安堵する。しかし、百回も言わせる事はないだろうと、少々ふてくされてもいた。

そんなワタルの気持ちも知つてか知らずか、桐華は楽しそうに試合が行われる会場へと駆けていく。

走る桐華を追いかけてワタルも走る。もう、ふてくされは無かつた。ただ、この瞬間が楽しかったからだ。

その日も、いつものように試合を見て、お互に思つた事などを

話し合つ。基本的に感じる事は似ているのか、あまり言ひ合ひにない事も無かつた。

全ての日程が終わると大木の前に集まつて、次の約束をする。そこで別れて、またそこで会つ。

ある時、桐華がワタルに問いかける。

「……ワタル君は」

「なんだよ？」

「……なんで、私の事を『トーノ』って呼ぶの？」

この呼び方は会つた時から、何故かワタルが呼んでいた名前である。

「んー、なんであつて言われてもなあ」

ワタルにしては頭を使った方である。それなりの時間悩んでから一つの結論が出てくる。

「言いやすいからかな」

「……言いやすい？」

「うん。トウカつていうよりもトーノのが言いやすいから、だと思つ。わからぬいけど」

「……ふーん」

可もなく不可もなくといった反応を見せる桐華。事実、ワタル自身も「何で？」と問われても明確な答えが見つけられないのだ。しばらく無言が続いたが、ワタルが口を開く。

「嫌か？」

「……え！？」

「いや、トーノって呼ばれるの。嫌ならけやんと桐華って呼ぶよ」

「……」

桐華自身も、別に嫌という気持ちはない。だから曖昧な返事で返す。

「……嫌ではないと思う、かな」

そんな返答に、ワタルも流すように相づちをうつた。桐華と会つ

てから楽しい事は多かつたが、こうこう変な雰囲気になる事は今まで無かつた。

ワタルはこの雰囲気に対し、ちょっとした「くすぐったさ」を感じる。

「だあー、やめやめ……」

この雰囲気を吹き飛ばしたくて、力の限り大きな声で叫ぶ。

そんな大声を気にするようになり、桐華は周りを気にする。周りを見ると大人はみんなワタル達を見ている。

見られている事に恥ずかしくなり、顔を真っ赤にしつつ桐華は、ワタルの服の袖を引っ張り足早にその場を離れる。桐華本人も驚くぐらいに、速く走った。

そのまま試合会場へと向かい、結局いつも通り一人で試合を見ていた。

「……ワタル君」

「なんだよ、最近は質問が多いなあ」

「……ごめんね。ワタル君は大きくなったらリトルウォーズに参加したいんでしょ？」

「参加したいだけじゃないぞ。前にも言つたけど俺は優勝する男なんだぜ！」

気持ちに嘘偽りはない。この大会で優勝するといつ事は、変わらぬワタルの夢である。

「……何で？」

「なんであって、何がさ？」

「……そこまで優勝したいっていうからには、曲げられない何か理由があるからでしょ」

試合中でいつもは熱狂的に見て居るはずの桐華が、真面目に聞いてくる。試合が気になつたが、ここは真面目に答えるべきだと、ワタルも思う。

「好きだからだ。理由が小さいと言われるかもしれないけど、好きなもので一番を取りたいと思う気持ちは決して軽くはないからだ

と

「……大好きだから、一番を取りたい……優勝したい?」

「うん」

「……じゃあ、私はワタル君を優勝させてあげたいから、ワタル君と優勝を目指してみたい」

一瞬、その言葉の意味がワタルはわかつていなかつた。

その日はあまり言葉を交わさずに一人は別れる。それから数日が経ち、その年のリトルウォーズ優勝決定戦の日を向かえる。

毎年の事だが、リトルウォーズは夏休みに行われて、夏休み終了間際に全日程が終了する。

リトルウォーズの終了は、夏休みの終了とほぼ同義である。最も、それはリトルウォーズを熱狂的に見ていた子供に該当する概念かもしれない。

一般的にいう「普通の子供」は友達と遊んだり、宿題したり、家族と過ごしたり、そんな事をいっぱいして夏休みの終わりを向かえるのだろう。

しかしワタルと桐華は、夏休みの時間をほぼ全てリトルウォーズに使っている。

「やつと決勝戦だな、どっちが勝つと思つ?」

「……うーん、わからないよ」

そんな会話をしながら優勝決定戦の会場、両国国技場を目指す二人。

決勝戦はすぐに始まり、大熱狂のうちに終了する。二人は相変わらず応援チームなどなく、ただ思い思いの応援をしていた。

決勝戦の熱気は年々増加していく傾向にあり、今年度の決勝大会は終わってから数時間の間も、お祭り騒ぎは続いている。

「……ワタル君」

「なんだよ、トーコ。もつと遊ぼうぜ」

「……ワタル君。前から優勝するって言つてたよね」

「……ああ、俺の夢だからな」

「……今日の試合も凄かったよ、優勝するって事は今日みたいな試合をしなくちゃいけないって事でしょ？」

自信の無いような、不安がっているという表情で真っ直ぐにワタルを見る桐華。その吸い込まれるような漆黒の瞳の少女を見ながらワタルは言つ。

「まあ、そうなるよな

」

不安な表情の次は、いよいよ沈黙してしまう桐華。

そんな桐華を見て、ワタルの口から思いついたように言葉が出る。

「マックスハート

「え？」

「マックスハートは全力の心。全力でやればできない事なんてない！」

「何それ？」

「さあ？ 僕にもわからんねえけど、でも全力で走るんだ。どんな相手が出てきたって、全力で走る。そいつが凄い奴で強い奴で、全力でやつて勝てない奴がいても、もっと全力で練習して、もっともひとつ全力でやつて勝つ。そしたら優勝だ」

「マックスハート

「ああ！」

その言葉を聞いた桐華の顔に、不安の表情は少し消えていた。これがワタルの信条であり、たった一つの正義「全力の心。マックスハート」が誕生した瞬間である。

思いつきで突発的に口から出た言葉だが、これはずつと前からワタルの心の中にあった、心の声なのかもしれない。

「ワタル君。あのね……」

「え、何！？」

いつしか、目の前の景色がだんだんと薄れていく。目の前の少女が、視界に入る景色が、体感できていた熱気が、全てが無に還つて

いく。

そんな全てが黒になり、そして一面の白が視界に入ってきた。

「…………つ！？」

白が終わると、そこには見慣れた天井があった。

汗をたくさんかいしている。まるでタイムスリップでもしたような奇妙な感覚に陥りながら、窓から外の景色を見てみる。

夏の太陽はいつの間にかいなくなり、綺麗な月が顔を覗かせる。いつの間にか、寝てしまっていたようだ。相当長い時間眠っていたのか、逆に頭が覚醒しきっていないくて、軽い頭痛もおきている。

「トー…………」「？」

薄れゆく夢の記憶の中から、ワタルは一人の女の子の名前を口にしていた。

夢の中の少女・後編！

夜が明けて、七月二十一日。

月が姿を隠し、日常を辿るよう夏の太陽が現れる。毎日のように気温は三十度を超えて、ただその場にいるだけでも、ほんのりと汗をかいてくる。

しかし、そんな暑さに影を潜めてしまうが、爽やかな一陣の風が吹き抜ける。風と共に草や土の、自然の香りを運んできてくれる。「ヒロキ……オレサマだ。確か今日、試合だったよな？ 先に行つてるから……かなつべと一緒に会場に向かつてほしい、じゃあ頼んだから」

「シチガツニジュウイチニチ。ゴゼンヨジサンジュップン……」  
ヒロキの携帯にワタルからの留守電が入っていた。

同日。六時四十三分。

「ハアツ、ハアツ……！」

混濁する意識の中で、ワタルは走っている。寝過ぎた為なのか、まだ頭が覚醒しきっていない奇妙な感覚を持ち続いている。

今まで知らなかつた、いや、忘れていた事が何かの「キッカケ」により起こされている。

ただ頭の中の片隅にある、しかし、まるで真ん中にあるような大きな存在。夢の中の少女が頭の中で喋り続けている。なんの確信もないのに、ただその場所へ向けて走つている。

向かつた先は両国国技場の中央広場。朝も早い事もあり、人はまばらにいる程度。通勤する会社員や、大会役員の黒子が目につく程度のものだ。

中央広場にある大木。初めて会場を訪れた時から、ずっとこの場所にある大きな木。一体いつからここにあるのかも、人は知らない

ぐらいの年月を得た老木。その老木の下に、彼女はいた。

「はあ……はあ……」

「…………」

「よお、早いじゃねえか」

ワタルの言葉に、田の前の少女は振り向く。

長く綺麗な黒髪はポニー・テールに束ねて、吸い込まれるような漆黒の瞳。やや大きめの制服を纏つてはいるが、スタイルの良さが服の上からでも見てとれる。

相変わらず、ワタルよりも少しだけ小柄な少女。いや、彼女は数年前の面影そのままに存在していた。

「……やつと来た？」

「ああ、やつと来たぜ」

田の前にいる少女は昔の面影そのままだ。だが唯一といつべきか、昔と違う点は無愛想になつた、といつべきか。

「いつからここにいたんだ？」

「……一年ぐらいい前から」

問いかけに、少し間を開けてからの返答。一年前、それはワタルが高校へ進学した時期であり、つまりはリトルウォーズ参加の権利を得た年もある。

「一年つて……お前なんでそんな」「……

「約束したから」

ワタルの言葉は、少女の言葉に書き消される。その言葉には、感情がこもっている。

「約束……？」

「……忘れたの？」

「いや、その……」

約束、というワードに何か思い出す。「忘れたのか？」と問われれば「たつた今まで忘れてた」といえるぐらいのもの。

ワタルが夢で思い出せたのは、少女との思い出のほんの一瞬なのかもしれない。

事実、夢の最後の言葉。ワタルはここから先の記憶が曖昧だった。約束の話をはぐらかす為に、違う話題を提供する。

「やういえば『あの時』さ、何を言つてたんだ？」

「……ふう。やつぱり忘れてる」

無表情だが、明らかに怒つているのがわかる。ワタルの聞きたい内容と約束が関係しているらしいのは、今の会話でわかる。

悪い事をしたという軽い罪悪感と、思い出せない約束との間でワタルの心は揺れ動いていた。

「わかつた。オレサマの負けだ。約束つてなんなか教えてほしい……頼む」

「……私と見たリトルウォーズの年は覚えてる？」

「ああ、何年前だったかまでは忘れたけど、それは覚えてる」

正確には夢で思い出したのだ。<sup>トーコ</sup>少女と見たあの景色を。

「……私とワタルは、あの年の夏だけしかリトルウォーズを見てい  
ない」

「……だろうな。それ以降でオレサマはトーコといった記憶がない」

「……それはあの年で私は遠くへ引っ越してしまったから」

引っ越しした、その言葉が頭の中をかけめぐっていた。何かを思い出せそうな、しかし、それでいて手を伸ばすと遠のいていきそうな。パズルのピースを一つずつ解いていくよ<sup>ヒ</sup>、慎重に記憶の糸をたぐり寄せていく。

(……ワタル君。あのね……私、引っ越さないといけないんだ……)

ふと一つのピースが音を立ててはまる。そう確かにあの時に桐華はそういう事を言つていたのだ。

(ごめんね。突然……だつたよね？　でもね、私達が高校生になつたぐらいにね、なんとか戻つてくるからね……私は、ワタル君より一つ下だから、次に会う時は私が高校一年生で、ワタル君が高校二年生だね。……えつ、なんで高校生になつたらのかつて？　それ  
は……)

一つの糸をたぐり寄せていくと、一体なぜ今まで思い出せなかつ

たのかと、自問自答するほどに記憶が蘇つてくる。

先ほどの混濁した意識が、徐々に鮮明になっていく感覚をワタルは覚えていく。

「お前は……」

「……あの人との、速水仁さんとの戦いを見ていた」

「つ……！」

突然、現実に引き戻されたような気分になる。あまり良い気分とはいえない。元を正せば今の自分がこんなにも落ち込んでいるのは、速水仁にボロ負けしたからだという事を思い出す。

「……もうあの人とは戦わないの？」

「いや……戦うさ」

「……嘘つき」

その一言がワタルの心中をえぐった。当然である。

ワタルは言葉でこそ「戦う」といつたが、その言葉の中に「勝つ」という感情がこもっていない事を桐華に見透かされる。それがその一言。

「……ワタル」

「えっ！？」

「……今度は私もいるから。もう一度、戦つて……全力で」  
（……えっ、なんで高校生になつたらなかつて？ それは……そ

うすれば私もワタル君と一緒に夢を追える（戦える）から……）

今、ワタルの中で最後のピースがはまつた。パズルは完成した。幼き日の夏。少女と出会つた夏。それは幼いワタルにとつてはかけがえのないもの。

しかし、突然訪れた別れは、その時のワタルにショックを与える。人の別れの辛さ、それは万人に与えられる一つの試練であり、いつか訪れる苦痛。

ワタルにとって、こんなにもショックを与えたのは桐華が、かけがえのない人だつたからなのかもしれない。

「……トーロ」

「……全力で走るんだ。どんな相手が出てきたって、全力で走る。そいつが凄い奴で強い奴で、全力でやって勝てない奴がいても、もつと全力で練習して、もつともつと全力でやって勝つ。そしたら優勝だ」

「ハハ、よく覚えてたな、それ」

「……うん。次は……もつともつと全力、だよ」

「ああ……」

戦いの心の空白感が埋まつていく。圧倒的な才能を見せつけられ、一瞬でも戦意を失われてしまった。それなら全力である。今の自分に足りない部分は全力で補い、そして全力で挑戦し、全力で勝つ。もしかしたら、自分よりも自分を見ていた桐華にそれを気づかされる。

いつしか、周りに人も集まり始め、夏の太陽が本格的な活動を始める。

「トーロー！」

「……？」

「遅くなつたけど、最後の夏になつちまつたけど、一緒に戦つてくれないか」

「……うん！」

四人目の全力、桜井桐華がメンバー入りした瞬間である。

試合開始も残り時間迫る中、ヒロキとかながやつてくれる。

「おーい、兄貴！」

「ワタルくん！」

いつものように、ワタルを向かえてくれる一人。それが戻ってきた時にワタルがほしいと、わかつっていたからこそその反応。

「トーロー、紹介するぜ。マックスハートに所属する頼れる仲間だぜ

！」

ワタルの復活と、新しい仲間を連れて、マックスハートは予選トーナメント一回戦へと挑む。

## 武器が無いもの……！

桜井桐華。幼き日のワタルと共に、リトルウォーズ会場を駆けた人。ある意味ではワタルの最初の同士なかもであり、今はマックスハート四人目の仲間である。

響ワタル、川崎ヒロキ、相沢かな、この三つの輪の中に、桜井桐華という四つ目の輪が加わる。

「こいつは、ガキの頃の知り合いだつたんだ。そして我がマックスハートの新たな仲間だ、よろしくしてやつてくれ！」

いつも通り、ワタルの切り出しから話は始まる。

初対面の人にも関わらず、可もなく不可もなくの反応をするヒロキ。まるで新しいオモチャを買ってもらった猫のように、目を輝かせるかな。そして無表情ながらも、どう見ても緊張している桐華。三者三様の反応を、ワタルは一人で楽しんでいる。

「……えっと」

最初の言葉をどう出すべきか、それに悩む桐華を見て、かなが口を開く。

「相沢かな。ワタル君と同じ学校の高校三年生で、十七歳。よろしくね！」

簡単な自己紹介をする。初対面の人間に会い、これから一緒に戦っていく仲間には、当然の反応である。それに続くよつて、ヒロキも自己紹介をする。

「えっと、川崎ヒロキです。僕も兄貴達と同じ学校です。高校一年の十六歳です。多分、一番年下です」

いつもの優しい笑顔を振りまきながら、ヒロキも自己紹介を終える。

それでも無言の桐華に、ワタルは肩を叩きアイコンタクトを交わす。そのワタルの仕草に、意を決したのか、桐華の口から言葉が出る。

「……桜井桐華。学校は、多分みんなと違うけど……高校二年生がんばってそれだけの言葉を出したのだろう。」これから後に続く言葉は無かった。

あまり桐華をこのままにしておくのも、可愛そうと判断したワタルは早速リトルウォーズ一回戦の、参加メンバーを決める話に、取りかかる。

「さて、自己紹介はこれぐらいこじょうづけ。とりあえず一回戦のメンバー決めをしたいんだが……」

それだけ言うと、早速ワタルは桐華を見る。その視線を感じ取り、見返す。

桐華が見回すと、ワタル他二人も同じ考えなのか、桐華を期待の眼差しで見ている。

「じゃ、メンバー決めだが、桐……！」

「……待つて！」

もう自分に振られるのがわかっていたかのように、ワタルの言葉を遮る。それには一つの理由があつたからだ。

「なんだよ、トー？」

「……私は出られない」

その言葉に、期待に満ちた表情は一瞬で崩れ去る。桐華からすれば予想通りの反応である。

全員が一体なんだ。という表情で見つめる中、桐華は一つの答えを出す。

「……だって、武器が無いもの」

それは出られない、と三人が納得する。結局は桐華はこの試合参戦はできず、一回戦と同じ三人で臨む事になる。

一回戦になると、一回戦よりもギャラリーが少し増えた。勿論、そんな気がするといつてしまえば、それで終わってしまうぐらいの数だが、増えている事は変わらない。

「おいおい、あの一回戦で凄え勝ち方した所あつたよな、なんてい

つたっけ？」

「ああ、えーと。確かにマックスなんただっけ？」

「そりそり、俺そのマックスなんたらの一回戦の試合見てないんだよね、今回はそこ見にいこうっと」

偶然だが、ワタル達の耳に入った見物客の言葉である。

よく聞き入ると、マックスハートの事を話してギヤラリーも、ちらほらと見受けられる。そんな会話を聞いて、嬉しさから体中にくすぐったさを覚える。

ワタルの策略は見事に、大当たりしたようだ。唯一まだ第三者として見れてる桐華は、みんなに「気を引き締めて」と一応ながら、激励の言葉を贈る。

一回戦の時と同じく、ワタル達の前の試合が長引いているようだつた。ディーパー・ディーパーとダンスフィーバーズの一戦だ。この試合はディーパー・ディーパーが勝つと予想されている。このチームは前々回、前回とそこそこ良いところまで行つたチームである。

「さて、長引いてくれてるなら順番決めをしておこつか」

「兄貴！」

「どうした？」

さつきまで朗らかだった表情が、今はすっかり戦いの顔になつている。

「この試合は僕を先鋒にしてほしい。絶対にヘマはしない」

「…………」

ワタルはヒロキの眼を見る。緊張もなく、気迫に満ちた眼をしている。その気迫はワタルを感じても凄いものがある。  
しばしば無言で、そのヒロキの眼を見続けた。

「…………」

「つ…………！」

「よし、先鋒はヒロキ。中堅はかなっぺ。大将はオレサマでいくぞ！」

「兄貴……」

気張りすぎていたのか、今度は逆にほつとした顔つきのヒロキ。

そんなヒロキの気合が抜けないように、少し強めに背中を叩く。

「任せたぜ、今度はオレサマにまわってこねえようにな？」

「任されたよ、兄貴！」

二人はお互いに拳を合わせあう。そんな二人を、かなと桐華は見ている。

「あーあ。良いな、男の子は」

茶化してるように口調で、かなは言つ。しかし半分は冗談だったが、半分は本気だった。

程なくするとワタル達の前の試合が終わる。予想通りディーパーディーパーが勝利する。メンツを見ると確かに強そうな雰囲気は持つていて。

「つて事は、次のオレサマ達の相手はあいつらだな！」

「ワタル君、前もそんな事を言つてたよね？」

「まあ、こんぐらいの方が兄貴らしいよね」

「……ワタル。落ち込んでるよりも、元気であつてほしい」

今まで三者三様の意見が、今では四者四様の意見が飛び交っている。復活したワタルを筆頭に、新しいマックスハートが動き出している。

ワタル達は、バトルリングへと向かう。一回戦と同じく、細かな内容を黒子に報告する為、リーダーだけが中央に集められる。先ほど決めた順番を、黒子に伝える。

「おうおうおう！！ 僕様がブルースのリーダー。人呼んで炎の男こと田中太郎だあ！！」

その男、田中太郎は異常なまでの熱血さと、異常なまでに平凡な名前が合わさった男だった。

「オレサマつてどこが被つてるのが気にくわねえが……マックスハートの響ワタルだ」

「おう、ワタル！ 僕様の事は太郎つて呼べ！」

「こら、田中太郎君。試合前だから少しばかり口を慎みなさい」

あまりの勢いに、黒子に注意されている。ワタル自身はあまり気にはしていない。

「では、これよりブルース対マックスハートの試合を始める!」

いつも通りの黒子の宣言。この宣言と共に選手は握手をする。最もこの握手をするのは大体リーダー同士がやるだけなのがほとんどである。握手が終わると、お互いのチームへと引き返す。

「向こうのリーダーさん、なんか熱い人みたいかな」

「ああ、あつあつだぜ」

戻ってきてヒロキを見てみると、青いハチマキを巻いて、木刀のチェックを入念に行っている。

試合直前になつても緊張は見られない。気迫もさつきよりも上を行く、体調も見る限り良さそうである。今回はいけるとワタルには確信があった。

「勝つてこい、ヒロキ!」

ヒロキは言葉で返さずに、親指を突き立てて「大丈夫だ」というような雰囲気で返す。メンバーが見送る中、先鋒のヒロキはバトルリング中央へと足を運ぶ。

「これより先鋒戦 室田誠対川崎ヒロキの試合を行います!」

相手の室田は武器を持つていない。構えから察するに何かの格闘技。リバティーズの金田と似たようなタイプかもしだれない。

「それでは……始め!」

予選トーナメント第一回戦 ブルース対マックスハートが始ま

る。

そしてその先鋒戦。室田とヒロキの戦いが始まった。

「室田パンチ！」

奇怪な必殺技を叫びながら、試合開始と同時に拳を繰り出す。咄嗟の出来事だったが、この拳を難なくかわすヒロキ。

「ふふん。この室田のパンチを避けるとはな！」

「不意打ちかい？ 戦法といえばそれまでだけど……あまり好きではないね」

言葉のやり取りで、時間を稼ぐ。実際のところ、パンチを避けた拍子に態勢も崩していく、この時間帯は態勢直しの絶好のチャンスだった。そのまま構えをとる。

「不意打ち？ 挨拶代わりだぜ！」

言葉に力を込めながら、またしても不意打ち気味な攻撃をしてくる。さすがに構え直していただけあり、今回は拳を綺麗にかわし反撃をする。

「ぐがあー！」

「……あれ？」

「これこそヒロキにとつては「挨拶代わり」の一撃だった。倒すつもりもなかつた攻撃が室谷ヒットする。そのまま倒れ込み、情けなく地面を這いざりまわって距離を離す。

心なしか室田の呼吸が荒い。しかも、変な汗までかいている。

「て、てめえ……この室田に一撃をおお……！」

「あ、いや、こめん」

何故か誤るヒロキ。試合中の一撃で謝る必要はないのだが、荒い呼吸と変な脂汗をかきながら、そんな事を言われては謝ってしまう。「いや、謝つても許さないぜ……この室谷に一撃を『えたんだからなあああ！！』

気合を入れたのか室田の顔が真っ赤になり、纏う雰囲気も緊張が走る。咄嗟に気持ちを切り替えて、武器を構え攻撃に備える。

「いぐぜ、室田キーイック！」

まるでどこの「バイクに乗ったヒーロー」のよつた飛び蹴りを繰り出す室田。フォームもどことなく変で、まるで酔っぱらいが真似たキックのようなフォームである。

隙だらけで、力一杯飛んでいる為に空中で姿勢制御もできていなし。何よりも遅い。

「あ……」

そして着地……もと落す。ヒロキの皿の前で室田は落ちた。

「ぐぬぬ……ぬぬ……！」

「あ、あのー……大丈夫？」

落ち方が危なっかしく、鈍い音と共に落ちた室田を気遣つてしまふ。チラリとワタル達を見ても既に、室田の行動に言葉も無いのか、放心状態で試合を見ている。

いや放心状態ならまだしも、既に試合を見ているのかさえも怪しい。戦っているヒロキ自身が早く試合を終わらせたかった。

「ぐ、ぐそおおおー……！」

突然叫びだして、大粒の涙を流し始める。さすがに心配になつたのか黒子が室谷に歩みよる。

「室田君。大丈夫かい、まだやれるかい？」

「うう……足、捻挫したっぽい」

その言葉に皿を点にさせるヒロキ。黒子も立場上では心配はしているが、余程まぬけに思つたのか笑いをこらえてる様子が見てとれる。

「でも、まだやれるぜえ！」

捻挫したっぽい足をおして、再び立ち上がる室田。激痛が走るのか、再び大粒の涙を流す。

立ち上がった事により、黒子から続行の合図がされる。「立ち上がってしまった為」一応、武器を構え直す。

「ヒロキとかいったな、てめえ」

「は、はい」

「この室田のスペシャルで葬つてやるぜ？」

怪しい笑みを浮かべる室田。その後、室田の雰囲気がさらに変化する。今までと違う雰囲気にこの試合で何度田かの構え直しをするヒロキ。

まるで筋力とかという単純なパワーではなく、まるで未知の何かを集めるようにパワーを溜める室田。

(ま、まさか、いくらこの人が奇怪な事はかりするからって、超能力とか使うのか！？)

咄嗟に思つた感想。だが、ヒロキの真面目な回答だつた。室田を

まるでどこかのバトル漫画にでも入ってしまったような、錯覚がヒロキの頭を駆けめぐる。

この試合を見ている見物人も、ワタル達も、目の前にいるヒロキ

も、アーリー・スマッシュバー以外の全ての人間が室田に引き寄せられてし  
る。

「あれ……？」

ふと、ブルースメンバーを見ると次の中堅の人が、戦闘準備をしている。

「室田……スペツシャルツツツー！」

卷之三

よそ見をしている間に、室田のパワー・チャージは完了したようで、その力を解放している。

が、目の前で室田は腕を十字に組んで何かをやつている。まるで「光の巨人のヒーロー」の必殺技みたいなポーズである。

「…………」

意味不明な発音を自分の口で発見していない。しかし、口の中には何も異常が見られない。

「アーティ」

『卷之三』

なおも変な音を真似し続ける室田。どうして良いかわからず、黒子に指示を仰ぐとそれを察したのか、黒子は動いてくれる。

「そこまで。先鋒戦はマックスハートの川崎ヒロキの勝利とする…」高らかに黒子からの勝利宣言。やつとこの珍妙な戦いから解放された嬉しさから、ヒロキは安堵の顔を浮かべる。ある意味ではシリアルスな試合よりもシリアルスである。

室田はどうなったのかと見ると、チームメンバーに止められ怒られているようだった。チームリーダーの田中と田が合いつと簡単なお辞儀をしてくれる。

変な人の集まりではないのだ、と、思い改めながらマックスハートへと帰っていく。

「あ、兄貴」

「ああ……お疲れ、大変だつたな？」

「うん、色々とね」

同情の視線を三人はヒロキへと送る。ヒロキにとって今は、その同情の視線が心地よかつた。

「とりあえず、かなづペ！ ある意味だが気をつけろよ！」

「うん、わかってるよ。それにサークルに付き合ひう気はないから一瞬で終わらせてくるよ」

かなは真剣な表情で言う。表情とは裏腹に何やらスカートの中をゴソゴソといじくっている。そのまま中央のバトルリングへと向かう。

スカートの中をいじるかなを、じつと見つめるワタル。

「……ワタル」

「なんだよ？」

「……やらしい」

冷ややかな視線を送る桐華。すかさずスカートから田線を離す。そして中央ではブルースのメンバーは既にスタンバイしている。かなも準備ができたのか「いつもOK」な状態を作っている。

「それでは、中堅戦 鈴木次郎対相沢かな、の試合を行います」

前試合の変な雰囲気は無くなり、緊迫感のある場が作られる。室田とは違い、目の前の鈴木はとても真面目そうな人相をしている。特徴的なのは異様なツンツン頭。どれだけ固めればそうなるのか、といつぐらいの髪型である。武器は木刀、名前もそつだが髪型以外は至つて平凡である。

「試合始め！」

黒子の合図により、予選第一回戦の中堅戦が始める。開始早々、鈴木は木刀で遅いかかってくる。それに対してかなは、右足をゆっくりと天に突き上げるかのように上げる。

「なつ……！？」

何故か、鈴木の動きが止まる。かなの目の前で中途半端に止まり、それにねらい澄ましたハイキックをくらわす。ハイキックとともに顔面に受け、人形のように倒れる鈴木。確認の為に黒子が近寄る。

「これまで。中堅戦はマックスハートの相沢かなの勝利とする。そして一勝した事により、マックスハートの勝利とします！」

わずか三秒足らずの電光石火試合に、室田の試合とは別の沈黙が訪れる。

## カウンターソード！

静寂。

そして、怒濤の歓声が巻き起こる。

まるで、一回戦目の再現。落星撃の時とはまた違ったインパクトを残す。わずか三秒足らずの電撃試合に見ていた人間全てがその偉業に歓声を送る。

ブルースの田中と室田も、まさか鈴木がこんなに呆気なく倒されるとは思いもしなかったのか、ただ呆然と敗北という事実の前に立つていて。

「あれは……凶器だな」

「うん、そうだね」

うつすらと、いや、明確に何が起きたのかわかるワタルとヒロキは、その事実に相手の事を同情していた。

「かなっぺ。あれは……セコいんじや……？」

戻ってきたかなに、思つた事を口にしていた。

「え、何が？」

「いやだつて……なあ？」

かなの返答に困り、ヒロキに田を合わせる。ヒロキも返答に困り、目を合わせないようにしている。念の為に桐華にも助けを求めるが、相変わらずの無表情で助け船も意味がなかつた。

「冗貴、リーダーは中央に集まらないと！」

ヒロキからの助け船があつた。結局はうやむやになつたまま、黒子と田中が待つバトルリング中央へと向かう。

「ぬう……」

ブルースのリーダー田中が、納得いかない様子で低いうなり声をあげている。ワタルも気持ちがなんとなくわかり、居心地の悪さに早く終わらせたい思いだった。

「一体……」

「うん？」

「一体、鈴木はなんでやられたんだ？ 過信しているわけじゃねえが、うちの鈴木があんな簡単にやられるなんて納得がいかねえぞ」話すべきか、黙つていいべきか、ワタルは一瞬迷つたが結局話す事にする。

「あれはな……男の深層心理をついた巧みすぎるセコ技なんだ」

「セコ技だと？」

「ああ、スカートはいた女の子が、あんなに足を上げたら田の前にいた奴は何が見える？」

「…………むつ！！」

「わかったようだな。そういう事だ、あとで色でも聞いてやつてくれ」

それだけ言つてワタルは、その場を離れる。呆氣ないといえばそれまでだが、とりあえず一回戦を突破できたのだ。次の三回戦はディーパーディーパー戦となる。

一回戦のリバティーズ。二回戦のブルース。この二チームとも予想以上の強さはあったものの、前評判だけをとると、ディーパーディーパーの強さは圧倒的に上回るだろう。三回戦にいくまでの期間で、どれだけの戦力アップができるかに勝敗は分かれるといつても過言ではないだろう。

マックスハート陣地へと戻ると、仲間がワタルを迎える。

「ま、何にしても次の相手は強敵で間違い無しだぜ！」

「…………ディーパーディーパー。個々の能力は前大会出場時よりも上がつてゐる。今の私達と同じくらいか、あるいは上か、それぐらいの力を持つてる」

現在のマックスハートと、ディーパーディーパーの戦力を的確に言い放つ桐華。あまりの分析ぶりに全員が目をしている。

「…………と思う」

みんなの視線が痛くなつたのか「と思う」と付け足す。

「と、とつあえずだ。トークの言つ通り相手は強い事は確かだ、きつちり練習して強くならねえとな

みんなが頷く。三回戦までの宿題は「各々のレベルアップ」であり、今以上に強くならなければならぬ。ワタルは「打倒速水」に向けて動こうと目標を決めていた。

「んでだ。合宿つてわけじやねえが、マックスハート内で練習試合でもやらねえか?」

「……練習試合?」

桐華が聞いてくる。ヒロキとかなは、既に察しがついているのか、了解したと言わんばかりの表情でワタルを見ている。

「まあ、つまりはチーム内でバトルする。いわゆる組み手とかってやつだな」

「……ふむ

「僕と兄貴は暇があればやつてるね、いつも僕がやられてばかりだけね……」

「前にかなとヒロキ君とでやつたよね」

桐華はとつあえず納得した様子である。ヒロキとかなも、それなりに乗り気らしく、ワタルもつられてモチベーションが上がっていく。

「よつしやー、じゃあ明日なんてどうだ?」

「……明日は無理」

「なんでだ、トーク?」

「……だから私にはまだ武器が無いもの」

「じゃあいつなら良いんだ?」

ワタルの問いに少し考えた結果、明後日なら大丈夫、という結果になる。よつてマックスハート内公認練習試合は七月一十三日に行われる事になった。一日だけの休養、その一日が終わったら熱い夏の日々が再び始まる。

ワタル達は、それぞれの帰路につく。

同日。予選第一会場。

ワタル達の試合が行われた予選第一会場から、場所を移したこの場所でFエンゼルとミラクルハイの試合が行われていた。

試合内容は先鋒の池が、相手の先鋒である火野から貫禄の勝利をあげる。火野の攻撃は、池にガツチリとブロックされ、自分のブレーザーをさせてもらえず、火野の完敗。続く中堅戦の速水仁と三坂の試合は、速水のボイコットによりFエンゼルの不戦敗で終わる。

後々に三崎達が聞いたとしたところ、「あの場に殺れる相手がいたのか?」との事。

一対一で向かえた大将戦 天才三崎と花坂と一戦である。試合開始わずか三分の光景で、見物人はその三崎の剣技に酔いしれた。

「はあはあ……つ、強い。これがあの天才の剣か……」

「ありがとう。しかし君の剣もなかなかのものだよ、是非もう一度でも手合させ願いたいね」

既に切羽詰まつた表情の花坂に比べ、相変わらず冷ややかな表情と、爽やかな笑みを浮かべる三崎。炎天下の中にして汗もかかず、息も乱さずにただ試合をたんたんと進めている。

「くそつ、せめて一矢報いてやる!」

氣合のかけ声と共に木刀を振りかざす、花坂は三崎に渾身の一撃を与えんと全力の攻撃に打つて出る。

三崎は手に持つ木刀を腰に、鞘があるかの如くしまう素振りを見せる。勿論木刀の鞘などはない。まるで抜刀術でもするようなボーズでひたすら花坂の攻撃を待つ。

「うあああああ！」

花坂は攻撃の間合いに入ると、一撃を三崎に繰り出す。まさに三崎にその攻撃が当たると誰もが思った瞬間、花坂の木刀は一瞬の剣線により弾かれる。その剣速をその会場にいた者が、見切れたかどうかもわからない。それ程の瞬剣。

「三剣返技の一つ。涙流……超速の抜刀術、残像が出るぐらいの速度で打ち込む剣線なんだけど、『ごめん見えなかつたかな?』嫌みとも取れる言葉だが、三崎がその台詞を言い終わると会場に大歓声が起きた。それと同時に試合終了。一対一にて、Fエンゼル

が貫禄勝ちをする。

三崎への大歓声が降り注ぐ中、三崎はたつた今負けて悔し涙を流す花坂を見る。

「君、一年だつけ?」

「…………。俺は負けたんだ、勝者が敗者にかける言葉なんてないはずだ!」

「……ふーん。あのわ、嫌みっぽくなつちやつたけど僕に涙流を見せたのにはワケがあるんだぜ?」

「む…………?」

「君、良い剣を持っているよ、だからこれはそのお礼。剣が好きなんだろ、お互いさ」

言つだけ言って、その場を後にする三崎。三崎が去ったその後も、会場には三崎コールが鳴りやまなかつたといつ。

## 天使の輪！

七月二十一日。

前日に試合があつたにも関わらず、Fエンゼルチーム内は練習風景が見てとれる。といっても、主に練習をしているのは、いわゆる補欠組などであつて主力メンバーは姿を見る事ができない。

それというのも、主力メンバーの三人は顧問の石田先生に結果を報告する為に、職員室前に集まつていたからである。そしていつまで経つても職員室に入れないのは、池と仁の二人のせいでもあつた。「仁、昨日はどうして試合を放棄した？　お前はもうただの不良ではないんだぞ」

「良いじゃねえっすか、どうせ勝つたんでしょう？　それにたかだか予選程度で殺られる二人じゃないんだろ？」

真面目で厳格な態度を以て仁に接する池に対し、反省している態度もなくいつもながらの態度で話す仁。相対的な一人の正確がかり合うはずもなく、仁がFエンゼル入りしてから毎日のように喧嘩が絶えなかつた。

「そういう事を言つているんじゃない。もつとスポーツマンらしく……」

「スポーツマン？　ハツ、俺は石田に殺人許可をもらつたからいるだけだぜ。スポーツなんてちやちな考え方やつてるわけじゃねえよ」池の言葉を遮つてまでも、自分の言葉を並べる。いよいよ空気が殺伐としてきた頃合いを見計らい、三崎が二人の間に入る。

「はい、そこまで。一人とも喧嘩するなよな。職員室の前だし……騒ぎを起こすのはまずいだろ？」

「……すまない。熱くなりすぎたようだ」

自分にも非があると考へ、素直に三崎の言葉に従つ池。やつと収まつてくれたかと安堵の顔を見せる三崎を余所に、仁は続ける。

「ハツ、こりゃ傑作だぜ」

「の言葉に三崎と池は、仁に視線を送る。だが仁は言葉を出すわけでもなく、ただ笑っていた。

「のままでは仕方がないと判断し、池に合図をして半ば強引に職員室へと入室する。

「失礼します！」

職員室に入った際の決まり文句を言い、石田先生を探す。言つてしまえばどこにでもいる中年のおじさんなのだが、職員室内で石田先生を発見するのは容易で、見つけるとそそくさと石田先生の元へと向かう。

「石田先生。昨日の試合の報告をしに来ました」

「ん、ああ。ご苦労でしたね、結果はみんなの顔を見ればわかりますか……どうしたんだい？ 三人ともどこか険しい雰囲気だが……？」

年の功とはよくいったものか、石田先生には今のチーム内の雰囲気が掴めるらしい。現在のチーム内部状況を、報告するべきか三崎は迷っていた。その三崎の仕草を見据えた石田先生は、ある提案を出した。

「ふむ……仁、君はちょっとここに残つてはくれんかな？」

「……構わねえぜ、じじい」

「仁、お前、先生に向かつてその口の利き方は………」

池がほとんど怒ったような口調で仁に注意するのを、石田先生は手で制する。その後、三崎に田配せして合図をすると、三崎は言いたい事がわかったのか池と共に、職員室を後にする。

「さて……仁。私は、別にお前に仲良くしろとは言わんよ」

「ああ、まさかその程度で俺を呼び止めたのか？」

「まさか……だが、お前を少し押さえつける為にな、一つ約束をしてくれんか？」

「なんだ？ 殺人許可の取りやめなら聞かねえぜ？」

変わらぬ態度を見せる仁に、真剣な目つきでその視線を仁に向ける。その眼光にやられたのか、仁もいつもの軽口を叩かなくなり、

石田先生の目を見る。

「あまり、人に知られたくない事だから小声で一回しか言わない、よく聞いてくれ」

「ああ……」

「私はね……なんだ。だから…………を見てほしいんだ。その為に仲良く協力しろなんて言つつもりもないし、仁も聞くつもりはないだろう？ だが、戦天使の三人が力を合わせれば、それは叶う事なんだと解釈しているよ」

「……じじい！？」

それ以上、石田先生は言葉を出さなかつた。その場にいても意味はないと考え、無言のまま職員室から退室する仁。そして仁が退室したのを見計らつて、三崎が入れ替わりに職員室へ再び入室する。

「先生……」

「うむ。まあ、大丈夫でしょう。君たちは若いんですから、これぐらい血の氣が多い方が良いもんだよ」

「あ……？」

いまいち煮え切らない表情の三崎に、石田先生は付け足す。

「それに、まとまりますよ。時が経てば崩壊している天使の輪は、かつての丸の形に戻るでしょう」

そう言つて、石田先生は自分の手で輪つかを作る。あまり綺麗な輪ではなく、いびつな輪だつたが三崎はあまり氣にしていなかつた。それどころか笑顔で天使の輪返しをしてみせる。石田先生の輪に比べて、三崎の輪は非常に綺麗な輪である。

「はっはっは……ふう。三崎君、あと一ヶ月です。頼みましたよ」

「……先生。僕は……普段のキャラ上では『やります！』なんて事は言えませんけど『全力を尽くします』と、とりあえず言つておきます」

「それで良いです。最後の一年、全力で、悔いを残さないようひやかしてください」

その後、ある程度の小言を話して三崎も職員室から退室する。退

室すると相変わらず、池が三崎を待っていた。

「今日は暑すぎるからな……部員には練習を切り上げさせて解散させておいた」

「サンキュー！ 丁度、石田先生にも言わってきたから丁度良かつたよ」

「……なんの話を……いや何でもない。すまなかつたな、さつきは熱くなりすぎてしまつて」

「いや、構わないさ。石田先生もそう言つてたし、僕もそう思う」詳しく述べ何を言つているのかわからないという表情の池。しかし長い付き合いから三崎が、何を言いたかったのかを表情で判断する。

チーム内のしこりは消えなかつたが、何かが進展したと感じる。

「そういえば三崎。マックスハートってチームは知つてゐるか？ どうやら今年はそこも優勝候補に入るみたいだぞ」

「マックスハート……彼のチームか。そうか、やっぱり上がつてくるか」

「なんだ知つていたのか？ 今現在で特筆すべき点はあの『蹴り技格闘技の天才・相沢かな』が、いる事だな

「相沢かな……？」

三崎は池の言葉に、違和感を感じる。「相沢かな」その名前が自然と口からこぼれる。

「知らないか？ わずか一、三年で高校蹴り技格闘技界の頂点に君臨したらしい。是非手合させしたいものだな」

「本当にそれつて相沢かなつて名前なのか？ 相沢みな、じゃなくて？」

「相沢みな？ いや知らない名前だが、誰なんだ？」

「……いや、良いんだ」

変な違和感は拭えなかつたが、今はそんな事で悩んでいる時でもない。今はチーム内をまとめる者として、そして最後の夏を勝ち抜く事に全力を注ごうと、三崎の頭の中に駆けめぐる。

だが、三崎には確信があつた。自分自身も去年に比べレベルアッ

ブしている事もあるが、頼れる池の存在に、なによりも切り札ともいえる仁の存在が、三崎の考えを確信させている要素である。今年のリトルウォーズも前年に比べ、強豪が増えているがそれでも優勝はFエンゼルだという、絶対の確信である。

三崎の表情には、自信の一文字だけがあった。

# 「一つのマジックガン！」

七月二十二日。午前九時。

桐華は基本的に、いつも早起きである。毎朝、五時ぐらいには既に起床し、女の子らしく朝風呂を済ませ、ほとんど自分で用意した朝食を食べる。その後に、父親と母親が起きてきて桐華が作った朝食を食べる。

「ああ……桐華、今日も早起きだね」

これは半ば決まりきった、桜井家の朝の挨拶である。

別に見たい番組があるわけでもなく、全員分の朝食を作りたいわけでもない。早寝早起きをしているうちに身に付いた習慣である。それに当然の事だが、桐華の父と母が起きるのが遅いわけではない。この朝の光景が見られるのは早朝六時半の出来事だからだ。つまり普段なら七時には父と桐華は、それぞれ会社と学校へと出て行く為、家にいるのは母親だけとなる。しかし今は、学生の特権でもある夏休み中なので、桐華も家で少しの時をくつろいでいた。

「桐華、宅急便が来たわよ。出でちょうどいい」

母親に応答するように頼まれる。桐華の母親の名前は桜井華織さくい かおりと

いう。

宅急便の応答のために、印鑑など必要な物を持つていく。恐らくは自分の物だと桐華は直感でわかった。今まで散々言つてきた「武器が無い」という事態を解決する為の物である。

「どうも、お届け物です！」

そう言つて宅急便のお兄さんは、元気に挨拶をして目的の物を運んできてくれている。やや大きめだが、それでも小包といえるぐらいの大きさの箱である。外も朝だというのに相当暑いのか、宅急便の人は今の時点で相当な汗をかいしている。汗が小包に落ちないようにしてくれているようだった。

桐華は必要な代金と、領収書へのサインを済ませる。すると宅急

便のお兄さんは笑顔で「ありがとうございました」と言つて、足早に退却していく。

「……あ」

何かを言おうとした時には既に手遅れで、その人は既にトラックに乗つて次の目的地へと向かう。丁寧な気配りをしてくれたお礼として、桐華はせめてお茶でも出そうと思ったが、時は既に遅かつた。仕方がないので桐華は自分の部屋へと向かい、肝心の小包を開けてみる。そこには特注品と書かれた、さらに小さな箱が入っている。さらにその箱を開けると中からモデルガンの箱が二つ程出てくる。桐華は商品の箱を開けて、現物のチェックをする。一つ目は「M1911A1 ガバメント」と呼ばれる銃である。二つ目は「デザートイーグル」である。ガバメントはいわゆる普通の銃だが、デザートイーグルは女性が扱うには大きすぎるぐらいの大口径ハンドガンである。ふと見ると、桐華宛に一枚の手紙があつた。

「桐華ちゃんの注文通りに仕立ててあるよ。ちょっとした噂で聞いたらんだが桐華ちゃん、リトルウォーズに参加するんだってね。この銃はその為の武器なんだと勝手に解釈させてもらつたよ。だからその一丁の銃の調整もかなり念入りにやつておいたから安心してほしい。ちょっと特殊な魔法を組んだ魔法銃マジックガンだ。オモチャだが限りなく本物に近い。だが殺傷能力は備えていないので安心してほしい。……では、お得意様の桐華ちゃんが優勝する事を祈つて。マジックアバターより」

これが手紙の内容である。マジックアバターというのは、桐華が注文した店の名前であり、店の主人の名前もある。実際にマジックアバターなんて名前ではないとは桐華も思つてはいるが、自称「魔法使い」と言つているだけあって、この世界の住人ではないのかもしれない。桐華もそんな不思議な雰囲気に魅入られて、一目でお気に入りになつた。

早速、魔法銃といわれる一丁のチェックをする。いわゆる弾を入れるマガジン部分に特殊な改良が加えられている。弾を入れるので

はなく水を蓄えるタンク。そつつまり水鉄砲である。

「……時間」

時計を見ると、約束の時間である十一時になりかかっている。母親に岡田の旨を伝えると、早速届いた二丁の銃を持って、約束場所の公園と向かう。

今日も相変わらずの晴天である。ここ数日間、ずっと夏の太陽がてりつけていて、朝に流れるニュースなどでも熱中症対策を題材にした、特集が毎日のように組まれている。

「あっちー！ かなっぺとトーコはまだか！？」

「仕方がないよ、女性陣は色々と準備があるだらうし」

「準備つて何だよ？」

「男の僕に野暮な事を聞かないでくれよ、兄貴」

練習試合をしようつと約束をしている。待ち合わせ時間は午前十一時のはずなのだが、興奮して待ちきれなかつたワタルによつて、一時間も早く一緒に待たされるヒロキ。待ち合わせ場所にもなつてゐる「いつもの公園」には毎度の事だが何もない為に、日陰も無く、この炎天下の中を直射日光全開で浴び続けている。既に練習試合前から暑さで日が霞んでいるヒロキを尻目に、相変わらずの元気で、この暑さを苦にもしていないワタル。

「…………暑い…………」

あまり言つものではないのは、ヒロキ自身もわかつっていたが、つい口から定番の言葉が出てしまう。しばらくボーッとしていると、あまりに暇だったのかワタルは素振りを始める。その素振りをしている光景を見ているのも嫌なヒロキは、ワタルを視界に入れないとしている。

「……待つた？」

「おわつ！？」

いつの間に来たのか、桐華が立つていて。ワタルもヒロキも突然の出来事にパニックになる。と、いつても実際にそうなつてているの

はワタルのみで、ヒロキは完全に暑さでダウンしている為に、既に  
つっこみすら億劫になつてゐる。

「あ、それがトーコの武器か？」

「……うん」

「へー、モーテルガンか。ガバメントとトザートイーグルですね？」  
ヒロキは桐華の銃を言い当てる。お金が無いから買えないという  
だけで、ヒロキは銃好きでもある。実際、このリトルウォーズもあ  
ればエアガンを使おうと思つていた程である。実剣と実銃の使用禁  
止とあるだけで、実際のところガスガンやエアガン、はたまた電動  
ガンなどの使用は、事実上認められてゐる事にヒロキは気づいてい  
る。桐華もその落とし穴を見抜いた故の武器選択なのだと、直感的  
に見極める。

「な、なんだ。そのガバガバってのは？」

「兄貴、それ下手したらセクハラだから氣をつけてね。まあ是非と  
もガバメントについて語りたいんだけど……」

自主的にその先の言葉を引っ込める。一度話し始めると延々と話  
が続くといふ事にヒロキは気がついている為だ。助けを求めるよう  
に桐華を見ると、まるで同士を発見したかのような瞳でヒロキを見  
ている。

「……今度、一緒に語りあいましょう」

「喜んで！」

実際に喋つたわけではなく、アイコンタクト上の会話である。

「……相沢さん、遅いね」

とりあえず助け船は出しておく。だが、時計を見ると既に十一時  
十五分であり、約束の時間を少々オーバーしている。しかし一向に  
来る気配が無い事と、この頃垂れるような暑さで心配するどころで  
はなかつた。それから十五分後の十一時半。

「おつ待たせー！」

「おつせえぞ！！」

待ち合わせ時刻から三十分遅れて、たつた今、相沢かな到着。

長い時間、この暑さの中にいたせいで、ヒロキはほとんど死に体になっている。桐華でさえも既に涼しい顔はできずに、見るからに「暑い」と言つてゐるのが伺える。直前までワタルですら、ぐつたりしていた。

「じめんじめん。代わりに冷たいジュース買つてきたから飲んでよ！」

「ちつ、この暑さで待たせたんだ。ジュースぐらいで収まるかつての！」

かなはコンビニで大量に買つてきたコーラを配る。

「って普通はスポーツ飲料水とかだろ？」

「男なら細かい事、言わないの！」

遅れてきたのを説教していたはずが、いつの間にかに叱られていふ事に気づく。かなは、ヒロキと桐華にコーラを配つているようなので、仕方が無くなつたはコーラを口に運ぶ。冷たい炭酸が喉を駆けめぐつていく感覚に浸つてゐる。

「ワタル君」

炭酸の余韻を楽しむワタルに、かながら突然話しかけられる。

「なんだよ？」

「今日はかなが戦いたい気分なの。ワタル君、お願いできるかな？」

「……いや、かなつべの相手は俺じゃねえさ」

その言葉に一同がワタルの方を向く。かなの相手をワタルはしないと言うのだ。

「今日の対戦カードは……かなつべとトーロだ！」

ワタルの思いつきか、考へがあつての事が、今回の練習試合は女性陣一人の試合となつた。

## かなと桐華の戦い！

ワタルの提案により、かなと桐華の戦いになつた。かなは何故だか妙に好戦的になつてゐるのに対して、先ほどの暑さの顔は見せずに再び無表情に極めて冷静に、準備を進める桐華。

「兄貴、何か考えがあつての事なの？」

「考え……つて程の事じゃねえが、かなつへは好戦的になつてゐる、だから戦わせて発散させた方が良いだろう。それにトーコに至つては登場したは良いが、ここまで一切の戦闘が無い。そもそも戦わせておくのがベストタイミングだろう」

あまり大した考えではなかつたが、ワタルなりの考えがあつての事だったのは確かだ。どっちにしても止める事はできないし、止める意味もないと判断したヒロキは、目の前で進んでいく光景を静かに見ている。ただ一つ心配なのは、かなの強さに対する桐華は戦えるのかという事だ。もしも、桐華の強さがヒロキ自身と同程度ならば桐華は一発でやられる。それだけならまだ良いが、大怪我をしてしまうかもしない。女の子だからという理由だが、これはヒロキなりの配慮のつもりだった。

「よつし二人共、準備は良いな！？ 試合時間は予選と同じく十五分な！」

準備が整つたと判断し、ワタルが大きな声を出して仕切り始める。かなは既に説明も不用な、足技である星蹴拳だろう。あるいは足技格闘技に値するどれか。桐華は先ほど見せてもらつた通りだが、武器は銃である。エアガンやガスガンに該当するものがカスタムガンであり、その実体はウォーターガンである。言ってしまえば水鉄砲だが、この銃の特筆すべき点はマジックアバターという自称魔法使いが作成した魔法銃であるという事だろう。

かなも、桐華も、お互に準備は万全だという雰囲気を出す。それを感じ取つたワタルは試合開始の合図を出す。

「んじや、始め！」

ワタルの声と同時に試合開始。

桐華が銃であるという事は、かなは如何に桐華に接近して懐に入り込むか。それとは逆に桐華は如何にして、かなの接近を許さずに自分の距離を保つていられるかだ。かな自身もそれがわかっているのか、巧みなフットワークを使い、桐華に接近を試みる。桐華もその接近を予測してか、始まつた瞬間から既に距離をとり、一丁の銃をかなに向ける。その銃は「M1911A1 ガバメント」である。桐華はガバメントで、かなを狙い打つ。するとガバメントからは本物さながらの爆発した発砲音が響きわたる。まるで漫画に出てくるような気功弾のように、目にも止まらぬ速さで標的に向かっていく。これをかなは、当然の如く足技で対処にかかる。直進してくる水弾を迎撃するように前蹴りを放つ。

「つ……！？」

蹴りと水弾が当たると、かなの体が衝撃でブレた。

かな自身、この弾を避ける事など造作もない事である。しかし確かめたい事があったのだ。それは桐華の持つ銃の「威力」だ。中距離あるいは遠距離主体の相手と戦う際は、十中八九今のかなと桐華の構図になる。接近する際に確かめられる事の一つとして、相手の攻撃力 つまりは相手のストッピングパワーを知る事が必要になる。その結果として導き出された答え。

「受けてたら下手に体力の消耗しちゃうってわけね……」

やはり回避主体。相手はハンドガンであり、事実上の連射能力は無いとみて良い。どうしても避けられない弾だけを迎撃するという答えに至る。

一方の桐華は、弾幕として水弾をばらまく。先の先を読んで弾を回避するかなに、当てるのは非常にきびしいと桐華は思った。事実、かなは紙一重で避けてはいるものの、どこかに余力がある。ここで桐華はこのマジックガンの機能を使った作戦を使う。それは威力を落として弾数を増やすというもの。

「……セット完了」

恐らくは改良の際に、マジックアバターが取り付けたものだろ？。威力調節用のダイヤルを最低にまで落とす。手に響くブローバックの衝撃と水の威力が弱められた事により、トリガーを引く速度が飛躍的に上昇する。だがそうする事で一つだけ問題点があつた。威力が弱められた事により手数は上がる。現にかなは避けるのが精一杯になり、いよいよ迎撃にてる。

再び、水弾と蹴りが激突する。が、一回目の衝突とは違い、かなの体がブレる事がない。

「手数が増えたのはそういう理由ね……でも付け入る隙かな！」

威力を落とした桐華のガバメントは、痛くないといえば嘘になる威力である。しかし、かなは判断した。この程度のダメージならガードして一直線に進んだ方が早い、と。かなはめずらしく、手で弾をガードして突き進む。今まで一定の距離を保たれていたが、その間合いは試合開始から初めて大幅に縮まる。

「…………！」

「せいっ！」

そのまま懷に飛び込むと、かなはロー・キックを繰り出す。逃げる相手にミドルやハイを当てる必要はない。それにこれまで接近を許さなかつた桐華が、そんな大振りの隙を見逃すはずがない。機動力のある相手を落とすには「足」を止めさせる。

しかしそのロー・キックすらも間一髪で避けられる。再び、かなと桐華の差はふりだしに戻る。

桐華は決して、ワタルやかなのように、元々の運動能力で戦つているわけではなかつた。全ては予測と頭の中で超回転している思考能力による先読みである。

「あれを避けるなんて桐華ちゃんやるねえ。シチュエーションはちよつと違うけど、ワタル君と戦った時の事を思い出すかな」

「…………スー……ハー……スー……ハー……」

身体能力と体力の面では、やはりかなが有利である。桐華は今ま

での攻防で息が上がっている。桐華にとつてはこの間は体力の回復と、水切れ寸前のマガジンを代えるには絶好の機会である。新しいマガジンに代えると、ふともう一丁の銃 デザートトイーグルが目につく。初弾をガバメントで撃つた時の威力から、デザートトイーグルだけは仲間に使うべきではないと考えていた桐華だが、かなに戦闘力を前にして、そんな事を言つてもいられない状況になる。

「……五十口径ハンドガン」

ガバメントよりも、正確には通常サイズの全てのハンドガンよりも、一回り以上の大きさを誇る大口径ハンドガン いやハンドキヤノンといった方が正しいのかもしれない。

通常サイズのハンドガンでさえ、威力はかなの蹴りとほぼ同等である。このハンドキヤノンがもしも、かなに直撃したらと思うと、桐華のデザートトイーグルを持つ手は震え出す。

「残り時間五分だぞお！」

ふと、戦いに集中しすぎていたあまり試合時間の事を、かなも桐華もすっかり忘れていた。

「ようし、時間も無い事だしね。桐華ちゃんラストスパート！」

かなは、やはり余裕のある声で、再び前進を開始する。桐華もその前進を妨げるよう、ガバメントで弾幕を形成する。だがコツを掴んだのか、あるいは集中力が更に高まったのか、弾幕重視の戦いでさえ、かなの前進を少しでも止められなくなつていた。

桐華は思う、かな凄い所は蹴り技でも、身体能力でもなく、わずか短時間の攻防で相手の攻め方を理解してしまう「学習能力の高さ」なのだと。

完全に水弾は当たらなくなる。そして懐を捉えたかなは、桐華の足を狙う。これも先読みでなんとか避けきる。しかし避け方は初撃よりも危うい。恐らくは次の一撃で完全に捉えるだろう。

「……覚悟を決めて、桐華」

自分で自分に言葉をかける。練習試合故にある程度の手抜きは簡単だつた。だが、それは桐華自身が許さなかつた。何よりもワタル

がそれを許すはずがない。

(……マックスハートは全力の心だ。全力でやれば……)

「……できない事はないっ！」

桐華は距離をとる事を止め、その場に立ち止まる。ガバメントの威力を最大に上げて、かなに対して狙いを定める。かなも、桐華の気迫を感じ取り立ち止まり、そして距離を少しだけ離す。

「……相沢さん、威力を最大まで上げました。避けてください、相沢さんなら避けられるはずです」

「な、何を……？」

桐華は照準を、かなから少し手前の地面へと向ける。

「……トリックワン！」

ガバメントの銃口から、最大威力に調整された水弾が放たれた。

## リフレクターバレット！

放たれた水弾。それは、かなに向かうわけでもなく、地面に向かつて真っ直ぐに飛んでいく。

「おいおい、水なんか地面に向けたら染みこんじゃつぞ！」

咄嗟に言つたのは、ワタルだつた。その場にいたヒロキも同じ考え方をしている。どんなに勢いがあるうとも、威力があるうとも、大概是地面に染みこんでしまう。まして公園の土の地面ではなおさらである。

しかし対峙している本人であるかなは、桐華が何の考えも無しにそんな行動をするはずがない、と、考えている。これはわずか十数分の戦いの事からの推測である。わずか十数分の出来事が濃密な時間であり、戦う者にとつてはこれだけで、お互いの事がある程度だが把握していた。

「つ……！？」

そして放たれた水弾はついに地面へと激突する　　そして弾は跳ねた（・・・）。

「……嘘！」

「マジか！！」

「ありえない……」

桐華以外の三人の反応である。三人の反応も当然だろう。水が地面に染みこむ事もなく跳ねる。どう考えてもありえない出来事が三人の前で起きたのだ。

そしてまさかの跳弾を避けきれずに、かなにヒットする。かなは避けきれないと判断し、咄嗟に後方へと飛びながら、持てる力を腕に込めて水弾をガードする。

「かつは……！」

衝撃が体を突き抜ける。ガードした腕は痛さを通り越して麻痺している。何よりも衝撃は腕を通り超えて内蔵にまできていた。まる

でボディーブローでも喰らつたかの衝撃。そしてそのダメージはそのまま、かな足を止めるのに十分すぎる一撃になる。

「……トリックワン。リフレクターバレット跳弾する弾」

これがトリックワンの正体。通常ではありえない水弾の跳弾。桐華の銃を扱う技量と、マジックアバターの作ったマジックガンが、融合して初めてできる究極技である。そして通常ではありえないからこそ、デザートイーグルを使わなかつた。いざ戦つてみて桐華は、かなの強さを身に染みてわかっている。だからこそ使わなかつたのだ。

「……今のがデザートイーグルなら……正直やばかつただろうね」

「ヒロキ……。そんなに、なのか？」

「うん。ガバメントの威力が、水鉄砲とはいえそつくりそのまま再現されている。だつたらデザートイーグルの一撃も再現されていると判断してもいい」

かなは決して体格に優れているわけでもない。防御力という観点で見てしまえば、一般的の女の子と大差はない。だからこそ防御したとはいえ、悶絶するのは当たり前である。その証拠に、かなはまだ動かない。

そんな動かない相手に対しても、桐華は極めて冷静に水弾を撃ち込む。大きなモーションで避けられないと判断したかなは、転がりながらも弾の軌道を読み一つ一つ丁寧に避けていく。ハイパワーに設定したガバメントの弾速では、今のかなですら捉えられないと判断した桐華は威力を落として、再び手数重視で押していく。かなは半死人も同然であり、桐華が勝つにはこのタイミングを逃すわけにはいかない。

しかし、手数重視にしたにも関わらず、かなは全ての水弾を避けきつている。そこに華麗に避けるいつも姿はなく、砂埃にまみれながら無様に転がり避ける。

(……さすが相沢さん。これだけ撃ち込んで全部避けてる。でも……何でそこまでボロボロになるのですか？ トリックワンがヒツ

トした時点で降参しても、誰も咎めはしないというのに……何が貴方をそこまで『勝利の執念』を燃え上がらせるんですか？）  
埃まみれになり、無様に転がり続けても、桐華はそこに執念を見ていた。

練習試合。仲間同士の試合。敵チームとの戦い。かなには変わらない勝利の執念がある。それは仲間である桐華に対しても同じ事である。

「……でも、私も負けられない。ワタルが見ているから」

桐華は通常の弾の軌道に加え、トリックワンを含めたリフレクターバレットを軌道に加えて、かなを仕留めにかかる。

「兄貴……ちょっと止めた方が良いよ。二人ともかなり熱くなってるよ！」

一人のただならぬ雰囲気に危険と悟ったヒロキ、は残り時間に關係なく試合を止める事を提案する。

「いや、あと三十秒だ」

「兄貴っ！」

「三十秒だ！」

たかだか三十秒。しかしながら桐華の戦いは三十秒あれば、致命傷になり、選手生命を失つてしまつレベルの戦いなのだ。現に二人の雰囲気は既に試合ではなく、ただ自分の勝利の執念のみの戦いになつてている。

そしてラスト五秒、最後に試合が動く。ガバメントから水弾が発射されなくなつたのだ。

（……弾（みず）切れ！？）

わずか五秒。このチャンスをかなは見逃さなかつた。今まで攻撃に転ずる事もしないで、ただ転がり回避し続けていた。全ては最後のチャンスを逃さない為に。全ては今できる最大攻撃を当てる為に。

「星蹴拳……！」

「……っ！？」

ただ真っ直ぐに走るかな。その突進力はこの試合中で最速の動き。

桐華は迷っている暇は無かつた。いや迷うという事さえもしなかつた。ただ反射的にもう一丁の魔法銃のデザートイーグルを向けて発射していた。

「星蹴撃！…」

凄まじい爆音にも似た号砲と共に、デザートイーグルから水弾が発射される。そしてその水弾と、星蹴撃は激突する。再び爆音が響く。デザートイーグルの弾は、かなのは星蹴撃によつてかき消される。しかし、かな自身も弾の威力により大きく後方へと吹き飛ばされる形になる。

「そこまでだ！ 二人とも！」

試合終了。たつた十五分の試合だったが、そこで見ていたワタルとヒロキ。いや戦っていた二人こそが最も長い十五分を終えたのだろづ。

「この勝負……引き分けだ」

ワタルなりの配慮はしていた。ワタルの正直な感想は、終始桐華が安定したペースで試合をコントロールしていた。時間切れ引き分けであつたものの、内容的には完全に桐華が押していたのは変わりない。

「……いいよ、ワタル君」

静かに言い放ったのは、かなである。表情は読み取れないが、声色はどこか震えている。

「かなの負けだよ、桐華ちゃんの勝ちだよ。また修行のやり直しだね！」

服の砂埃を払いながら、明るい声で言葉を発する。だがやはり、その表情はまつた見えなく読めない。

「かな……？」

「ごめんっ。先に帰るね」

「おいつ！」

「ほら、結構汚れちゃつたし……シャワー浴びたいから」

有無を言わさずに、かなは足早に走つていってしまう。その背中

をワタルとヒロキは見送っていた。

「……相沢さん。きっと今よりも強くなる」

「トーロー？……つふ。そうだな、でもな」

「……？」

「別に悪いって言つわけじゃねえが、女の子が男を差し置いて熱血バトル漫画の展開にならないでくれ」

白熱しそぎてしまい、後味の悪い練習試合になってしまったが、名田上は引き分け。そして事実上のかなの初敗北という形で練習試合は終わった。よく見ると桐華もかなりの汗をかいている。この暑さでは立っているだけでも汗をかく。あれだけ激しく動けば当然の結果である。

「トーロー。お前も家に帰つてゆつくり休めよ」

「……でも」

「大丈夫。オレサマとヒロキは適当にやつてるわ、こいつだってそうしてきた」

アイコンタクトでヒロキに合図すると、大きく頷くヒロキ。

「……わかった。試合……ところよりも、この暑さには気をつけよ。

熱中症になつたら大変」

「ああ、わかつてゐる」

数分の休憩後、桐華も一足早く家路につく。

「さつてヒロキよ。次はオレサマ達の番だ！」

暑い炎天下の中での、熱い赤いハチマキを額に巻き付ける。

## 一人を巡る歎車！

「ああ、オレサマ達もやるか！」

暑さに負けないように、気合を入れて腹から声を出すように言葉を出す。全員集合までの待ち時間。十五分とはいえ、かなと桐華の戦いを見ている。ワタルもヒロキも正直な話、あまり長くはいられない。

「兄貴……本当にやるの？ 熱中症になっちゃうよ……？」

「うむ……確かにやらないといつのも考えたけどな。でも男に一言は無い！ やるといつたらやる！」

それはトレードマークの赤いハチマキにも表れていた。これも長い付き合いからか、赤いハチマキをしたワタルは「やるといつたらやる」男である。ヒロキはそれを手に取るようにわかつていた。

「ふう……」

色々な感情の入り交じった溜息を一つ。用意してあつた木刀を構える。勿論の事だが、手抜きや手加減などしようものなら、後々ワタルにどんな罰ゲームを出されるかわからない。故にヒロキはどんなに暑くても、辛くとも、全力でこの試合を臨まなければならない。

「よし、良いぞヒロキ」

見せつけたヒロキの気迫が嬉しいのか、あるいは暑さのせいなのか、ワタルの目はやけにギラついている。ただそれに不気味さはない。むしろ歓喜の不気味といった方が良いのだろう。

「試合時間は同じく十五分。ストップウォッチで時間はわかる予定だ」

「わかった。十五分だね、兄貴。……あ

ヒロキは何かを思い出したかのように言葉を出す。

「どうした、何か忘れ物か？」

「いや、兄貴や、僕たちの戦いがこれで通算何戦目になるか覚えてる？」

「なんだそんな事か……九百九十八戦、九百九十八勝の零敗零分だな、これはオレサマの記録だが」

「はは……僕の負け越しなんだよね。……もつそろそろ僕たちの戦いも千戦目だね」

「ああ、千戦目の勝利もオレサマが頂くぜ」

「そうは、いかないさ！」

二人はお互いの木刀を、相手に向け構える。一人揃つて既に見慣れた構え。だから一人に合図は必要なかつたのだ。

「よつしやあ！」

「ふつ……！」

お互いの心のタイミングというのか、それが合図となり、その剣を交差させる。重く強い攻撃をヒロキへ。鋭く切れる剣線をワタルへ。これが一人のいつも通り。

最初の牽制は力で勝るワタルがヒロキを強引に吹き飛ばす。この強引さをわかっているからこそ、ヒロキは吹き飛ばされても難なく着地をする。そしてワタルは、容赦なく力任せの攻撃をヒロキに浴びせる。

「ぐつ……！」

その一撃を剣を盾にする事によつて受ける。受けたところでワタルの豪腕を、ヒロキが完全に受けきれるわけでもなく、衝撃により後ずさる。間髪入れずに再度、ワタルからの追撃を受けきる事ができず、ヒロキは大きく後方に吹っ飛ばされる。

「イ……テテ。くそ、わかつてはいるけど、全く反応できない」

言葉通りの意味である。何戦もこなしているからこそ、一人はお互いの手の内や呼吸がわかつていた。しかし、ヒロキからするとわかつているという程度のものであり、わかつていても圧倒的な戦闘能力を備えるワタルを相手に、何とか受けきるのがヒロキにできる精一杯である。

「バカ。お前が攻めないだけだぜ。もつと攻めてこいよ」

「わ、わかつてゐるさ。わかつてはいるけど……」

わかつてはいるけど、攻撃できない。それはヒロキのできる事なら相手に痛い思いはさせたくない、という考え方からくるものである。今までの戦いでも時として攻撃はしていたものの、それでもヒロキは極力攻撃を控えていた。

「わかつてるよ、ヒロキ。お前は優しいからな……でも攻撃しないとお前が攻撃されちまうんだぞ？」

「そう、なんだけど……」

「……ふう。止め止め」

「え、兄貴？ 大丈夫だよ、僕はやれるよ」

「暑いんだよ、これ以上やつたら本当に熱中症になっちゃう」「聞く耳持たず。ワタルは突然試合を止めて帰ってしまう。

「お前も早く帰つて頭冷やせよな！」

「え？」

「暑いからな！」

それだけ言つて本当に帰つてしまつた。誰もいない殺風景な公園の真ん中に、ヒロキは一人取り残された。

「兄貴。怒つたんだろうな……そりや そりや、兄貴、あまり態度に出さないけど本気で優勝目指してるんだから」

一人、真夏の太陽がある空を見上げる。晴天ともいえる天氣で、雲もほとんど無い。あるのは眩しいぐらいに照りつける太陽だけだ。その太陽の熱が自分を包んでくれているのが、ヒロキにとつて心地よさを感じさせてくれている。

「僕は……強くならなくちゃいけないんだ。肉体的にも、精神的にも」

砂利を踏みしめる音が聞こえる。自分の考えに夢中で、人の接近が全くわからなかつたのだ。

「もし。ちょっと良いですかな？」

見るとこの暑さなのに、長袖の紳士服を着た老人が立つていて。老人と判断したのは髪の毛、そして立派な口髭が白に染まっていた為である。何よりも物腰が非常に落ちついている。

「えっと、貴方は？」

「失礼。私はこういう者です」

老人は胸ポケットから名刺を取り出し、それをヒロキに手渡す。

「……なんですか、これ？」

「一言で言つてしまえば、貴方を強くしてさしあげようと思いまして」

「いや、それは名刺を見ればわかるんですけど。これってその……道場みたいな感じの？」

「まあちょっと違いますが、コンセプトとしては、似たようなものですね。今すぐ返事がほしいわけではない。ゆっくりと考えてくれても良い。但し時間はそう長くは取れない、だからできる限り急いでほしいんだ」

老人は名刺とその言葉だけを残し、その場を立ち去りうとする。

「あ、あの、なんでこんな事を？」

「なんで……ですか。君には才能があります。一週間……一週間だけでも私の所へ来ていただければ、君を先ほどの少年の強さに匹敵するぐらいの、能力アップをしてさしあげましょう」

「兄貴に、匹敵する……？」

公園の外に待たせていたのか、老人は高級そうな車に乗つていつてしまう。

「一週間で兄貴に匹敵する？ そんな事が、だつて兄貴は僕よりも数段強くて、憧れで」

ヒロキは悩んだ。それしか頭の中に無くなる程に。それぐらいに老人の言葉と要求はヒロキを突き動かしていた。何よりも自分自身がワタルと同等近い能力を備えれば、リトルウォーズ優勝に一步近づく事ができるのだから。だが、一週間である。一週間の間には三回戦目にあたるディーパーディーパー戦がある。いや日程の組み合わせによっては、そのまま四回戦も通り越してしまつかもしれなかつた。

「……大丈夫、きっとみんな勝つわ」

携帯を取り出して、登録されている電話帳からワタルの番号にかける。

突然響いた携帯の着信音。誰かと思い携帯を確認する。

「ん、ヒロキ？ なんだよ一体。もしもし、ヒロキか？」

「あ、うん。兄貴ちょっと話があるんだけどさ」

「なんだよ、別にさつきの事は怒つてないぜ？ 次がんばれば良いんだからさ」

「いや、うん、それもあるけどね。ちょっと一週間だけチームから離れようと思うんだ」

突然の提案に、ワタルは目を丸くさせる。普段から突拍子もない事を言わないヒロキが、突然こんな提案をしてきた事に心底驚いていた。

「突然、どうしたんだ？」

「いや、本当に一週間だけだから。もつと強くなつて戻つてくるから」

「……お前……いや、何でもない。一週間だな、なら二回戦は絶対突破してやる。だからちゃんと戻つてこいよ？」

「うん、絶対に戻つてくる。兄貴、優勝しよう」

「……当たり前だろ」

そのまま携帯の電源を、二人同時に切る。全ては突然の出来事。これは偶然なのか必然なのか。一人を巡る歯車に歪みが生じ始めた。

## カナトミナ？！

携帯の電源を切ったワタルは、同じくして空を見上げている。場所が変わっても全く変わらぬ、真夏の太陽がワタルを照らす。

「ヒロキ……信じてるからな」

三回戦の『ディーパー・ディーパー』戦へ向けて。その為の戦力強化を図った練習試合だった、だが思っていた方向とは予想もしない事が起きてしまっている。微妙ながらも険悪な感じになってしまった、かなと桐華の今後。突然のヒロキの申し立て。まとまるはずのチムが少しだけ、バラバラになっていくような錯覚がワタルを襲っている。

「バカ、信じろワタル。仲間を……信じるんだ」

今はそれしかできない。もう戦いは始まっているのだ。何があるうと優勝へ向けてマックスハートは走っている。そして仲間達も思いは違えど、優勝の一文字と共に目指してくれているのだ。リーダーとして今のワタルにできるのは信じて待つ事のみだ。

ワタルはおもむろに、携帯を取り出し電話をかける。

「……はい」

「あ、トーコか？」

「……ワタル？」

「ああ、無事に家に着いたか？」

少しの間があつたが、桐華はいつもと変わらぬ口調で話す。

「……うん。無事に着いてる。どうしたの？」

「いや、ちょっとな。ほら、今日なんか少しだけ険悪な雰囲気になっちゃつたら？ それで」

「……相沢さんの事？ 大丈夫、相沢さんと私は別に喧嘩になつてゐわけじゃないから。それに相沢さんはそんな人じやない。見た目通りもつとサッパリした性格の人、ただちょっと感情的になつただけだと思う

たつた今、戦つた者が感じ取つた事だからか。同じ女だからのか。いまいち理解できずにワタルは話を進める。

「あ、ああ。まあ。大丈夫なら良いんだけど、や」

「……何かあつたの？ ワタル、何か迷つてる

「いや、大丈夫。とりあえず今日は休めな、三回戦の日程が決まつたら即連絡するからよろしくな！」

電話を切ると、妙な虚しさがワタルの心にあつた。「何か迷つてゐる」そんな桐華の言葉が何故か心を刺している。何が刺しているのか、何故刺されているのか、今のワタルにそれを知る術は無かつた。桐華は大丈夫だと言つていたが、ワタルは気になつっていた為に、かなにも電話をかけてみる。しかし、数回の「ホールをしたにも関わらず、かなは電話に出ない。

「……ふう。まあ、トーコの言葉を信じよ。俺つてこいつこいつ時に無力だな。じうじう時つていつもヒロキが……やめよう。ワタルの馬鹿野郎。一週間じやないか、テメエはヒロキの兄貴分なんだろ？ しつかりしやがれ！」

自分で自分に喝を入れる。とにかく雲がかかつたような、モヤモヤした感情を晴らしたかったからだ。

同日。相沢かな宅。

そこには浴室で頭から冷水を、自ら被るかなの姿がある。その表情は相変わらず見えない。ただ頬をつたうものだけが確認できる。シャワーを止めて、そのまま浴室を出る。バスタオルで全身を拭き、新しいバスタオルで頭を拭きながら、二階へと上がつていく。そして自分の部屋へとたどり着くと、倒れるように自分のベッドに横になる。そして飾つてある妹の相沢みなみの写真を眺める。それを眺めていると、まるで引っ張られるかのように睡魔が襲い、かなを暗闇へと誘う。

目が覚めた先は、自宅の庭だった。そこには死んだはずの妹、みんなの姿がある。かなは一瞬でこれが夢の世界なんだと認識する。

しかし夢の中とは「え、田の前にいるみんなの事が気になつてこる。

とても悲しそうな、いや悔しそうな表情を浮かべている。そしてその表情と共に、蹴りの練習をしている。その蹴りは夢の中とはいえ鋭く、当たれば致命傷は免れないだろう。

「もづ、お姉ちゃん聞いてるー?」

「……え?」

みなは、かなに話しかけた。かなも夢の中の自分は第三者だとばかり思っていた為、ピンポイントで自分が呼ばれるとは思っていないかったのだ。かなは夢の世界であると考え、適当に話を合わせようとする。

「え? ジャニィよ、全く! 悔しょよ、負けたりやつたよー。」

「……どひしたの、みな?」

「また試合に負けちゃつたの。あと少しつて内容じやないの、なんか完敗したような感じ!」

「負けたんだ、じゃあ今のかなと一緒にだね」

みなはその言葉に、少し驚いたような表情でかなを見ている。

「お姉ちゃんも、負けたの?」

「うん、完敗つてわけじゃないけど、紙一重な内容でもなかつたかなって」

「ふうん。お姉ちゃんが負けたつて何、料理とか?」

「違うよ、試合。戦いだよ」

「え……?」

かなの言葉に、再び驚きの表情を見せるみな。夢にしては妙に生きないと、この時かなは思っていた。まるで夢を見ているというよりも、過去に戻つてきているようなそんな感覚。

「お姉ちゃん、だつてお姉ちゃんは格闘技とか、暴力的な事は絶対に嫌いって……」

「え、あ、うん」

「……そつか、お姉ちゃんも格闘技やつてたんだ。じゃあさ、みなと組み手やつてよー!」

「え……」

「みなが今、試行錯誤して改良中の最強の蹴り技格闘技を見せてあげちゃうよー！」

みなは凄くやる氣に満ちている。みなの性格上から、このパートンは断れない事をかなは知つていて。妙に生々しい夢といえばそれまでだが、所詮は夢である事に違いはない。不謹慎かもしれないが、かな自身も、みなと戦つてみたい気持ちはある。

「わかったよ、みな。但し五分だけだよ」

「やつたね！　あ、お姉ちゃん、その前にその長い髪は邪魔にならないようにしないと」

言われて初めて氣づく。夢の世界では自分の髪の毛も世間に戻つている。長くて綺麗なその髪を後ろで束ねる。思えばこんな風に束ねるのが日常だった事を、かなは思い出す。ショートのみなはゴムや髪留めを持ち歩く事がないので、仕方がなく自分の部屋まで髪留めを取りに行く。今となつては、かな自身もショートの為に現実では髪留めを持持はしていない。しかしこの世界では当時のように、髪留めを保管していた場所にそれはある。

みなを待たせていいので、髪をまとめの作業に時間をかけるわけにはいかない。適当にポニーテールにまとめて、みなの元へと向かう。戻つてみると、みなは蹴りのフォームチェックをしている。その当時のかなは、みなが何をしているのが全くわからなかつたが、今見えてみると、みながやつしている事は後々の星蹴拳そのものだつた。

「お待たせ、みな」

「お姉ちゃん、まさかお姉ちゃんと戦えるなんて思つてなかつたから、凄く楽しみだよ！」

「うん、そうだね」

かな自身も少しの楽しみはあった。夢の中とはいえ、今となつては叶わない相手との戦い。

「じゃあ五分間。行くよ、お姉ちゃん！」

みんなの構えは、やはり星蹴拳。しかし今の完成した星蹴拳とは少

し型が違う。例えるなら堅苦しい。星蹴拳は自由奔放な構えと動きが主体の格闘術である。どうやらこの世界の、この時期のみなは星蹴拳を完成させてはいらないらしい。

「お姉ちゃん、ボーッとしない！」

「はつ……！？」

今のかなの実力をもつてしても、みなのは突進力は凄まじいものがいる。いや、あるいは速度の点で見れば、今のかなよりも早いのかかもしれない。その突進力と共に蹴り出されるミドルを丁寧に避ける。改めて見ると、みなのは攻撃は大振りなものが多い。丁寧に捌いていけば早々当たるものでもない。

「えい！ やあ！」

大振りな攻撃をしてくる割に、その回転は早い。大振りの中に抜群の小回りを持つている。かなは自分との絶対的な運動性の違いを見せつけられる。何よりも、みなのは突進力がより凄く感じるのは、みな独自の単純明快な攻め方にあるだろう。自分自身とは違う星蹴拳に発見する所は多かつたのだ。

「……あれ？」

その世界観に違和感を感じる。今までそこにいたのに、途端にその世界の住人ではない感覺が陥る。目の前のみなが、徐々に消えていく。次に視界が開けた時は別の世界観が構成されていた。

## カナトミナ？！

> .i 1 1 5 7 6 — 1 1 9 8 <

夢の中で、夢を見る。かな自身もこれは夢なのか、現実なのか判断がつかなくなつてきている。この夢が持つ特有の生々しさすらも、既に慣れていつてしまつ。現実の住人と、夢の住人の区別とはどこから始まるのだろうか。

「お母さん、今日も勝つたんだあ！」

「そうなの。みなは本当に強くなつたわね」

かなは自分の部屋にいる。そこからでも聞こえるぐらいの元気が良い、大きな声でみなは母親と話をしている。恐らくはその後に、かなの元へと報告に来るだろう。みなの中純明快な性格は非常に読みやすく、その筒抜けの思考にかなは思わず笑みをもらす。

と、予想通りに大きな足音と、かなを呼ぶ大きな声が近づいてくる。その騒音の主は、大まかな合図<sup>ノック</sup>もせずに、かなの部屋を開け放つ。

「お姉ちゃん！」

「勝つたんでしょ？　ふふふ、ちゃんと聞こえてるよ」

「やつたんだ、みなの星蹴拳は遂に頂点に立つたんだよ！」

かなはその言葉から理解する。意識が飛ぶ前の世界では、まだ星蹴拳は完成していない。それがみんなの口ぶりから完成したとすると、どうやら時系列は大きく進んだらしい。よく身なりを確認すると、髪の毛が「あの時」よりも若干伸びている事からも予想がついてくる。

「あとは……リトルウォーズだ！」

「……え？」

夢の世界に来て、ようやく現実に戻されたような言葉を耳にする。「あれ、お姉ちゃん、知らないの？　今はまだ知名度的にいうと知られていないのが現状なんだけど、実は全国から隠れた強豪がひし

めく大会なんだ。みんなの星蹴拳は完成した。だからあとこの歳で取れる最後の、そして最大の栄光であるリトルウォーズ。これに優勝して星蹴拳こそが最高の蹴り技格闘技だつて事を証明するの！」

まるで生涯の自分の夢を語っているかのよつた、自信と期待を内に秘めた目をしている。その目を見ていると、かなも心が躍つていくのがわかる程だった。

「最後の栄冠つて？」

かなはわかつていたが、今の世界観を把握する為にあえて聞いてみる。

「あれ、お姉ちゃん。何回も見せてあげたじゃない。まあ良いや、お姉ちゃんこっち来て！」

慌ただしく、部屋から出て行くみな。行かないとまた大きな声でワガママを言われてしまうので、仕方が無くかなはみんなの後を追う。行き先は恐らくはみんなの部屋であり、仮に違うとしても血宅なのだから迷う事も無い。

かなも部屋を出て、とりあえずみんなの部屋へと向かう。予想は的中して、やはりみんなの部屋である。その部屋には色々なトロフィーが飾られている。よく見てみるとそれら全てが格闘技の大会のものであり、全てが一位のトロフィーばかりではなかつた。中には参加賞としての安物のような飾りもあつた。

「相変わらず、この飾りの多さは圧巻ね」

「うん、みんなの誇りなんだ」

「誇り……？」

「うん、見ての通りだけど、一位のトロフィーが飾られるようになつたのつて最近なんだよね。それまではベストスリーにも入れない日々が続いたし、名前も残せないような完敗も続いた……。でもそいつた敗北とかの悔しさがバネになつたから今のみながいるの。全ての経験は今のみな。負けた経験も勝つた経験も全てが大事な欠片なの。だから誇り！」

みなはそれらの経験を、かなに聞かせる。勝つた話よりも、負け

た時の話を嬉しそうに話すみなに、かなは不思議な気持ちを抱いていた。

「だから全ての経験をリトルウォーズにぶつけるんだ！」コノヤロ

ーって！」

「あとはリトルウォーズだけか……がんばれよ、みな！ 負けるなよな、みな！」

せめてこの世界のみなには自分の手で栄光を掴んでもらいたい。そう思ったからこそ、かなは心の底から応援する。みなのは星蹴拳は最強で最高である。そんな夢を追い続けていてほしいから。

それから、みなはフォームチェックをするとの理由で、再び外へと出て行ってしまう。かなも頭の中を改めて整理したいと思い、自分の部屋に戻り横になる。

「忘れてたのかな。あれ程意識していた事なのに、みなと会った事でまた思い出せた……みな、ごめんね。かなのは負けは、かなだけの負けじゃないんだよね。……みなはサッパリしてるから許してくれると思うけどさ……でも、かなは悔しいよ」

夢の世界で、睡魔に襲われていく。夢の中で夢を見るという奇妙な感覚が、かなを襲っている。これはこの夢の世界の時代よりも、少しだけ現代に近くなつたお話である。

「じゃあ、行つてきます！」

自宅の玄関先で、みなが立つてゐる。真夏の太陽と、蝉の鳴き声が鬱陶しく感じた、中学三年生の夏。みなは相変わらず自信満々といふか、とにかく明るい笑顔でそこに立つてゐる。中学生活の最後の大会があるらしく、これに優勝して来年のリトルウォーズに弾みをつけたいと、みなは言つていた。

「みな、気をつけるんだよ」

「あなた、みななら大丈夫。きっと余裕で優勝よ！」

「うん、みなは勝っちゃうよ！」

お父さんと、お母さんがそれぞれ言葉をかける。

みなは軽口を叩いているけど、これがみんなのペースなのはわかっている。みなはいつだってこんな感じで、いつも自信が無い私とは大違ひだった。

「お姉ちゃん！」

「うん！？」

突然、話しかけられてしどろもどろした返事になってしまった。普通は緊張するのは、みんなの筈なのに、何故か私が緊張している。そんな私の事を察してか、かなは元気いっぱいな笑みを浮かべてくれる。どっちが姉だかわかったものじゃない。

「みなは勝つてきます。勝つてリトルウォーズに出場して、最高の栄光を掴みたいと思います！」

「うん、がんばってね」

「ノンノン」

「え……？」

みなは人差し指を立てて、違うという旨の行動をとる。たまに出てくるみなのは癖。ちょっとかわいい。

「みなは、お姉ちゃんとその栄光を味わいたいの！」

「え、と……」

「……だから、お姉ちゃん。みんなの事をうんと応援してね、いや、しなさい！」

その立てていた人差し指を私に威勢良く突き立てる。おでこに突き立てられて、少しだけ痛かった。でも何だか可笑しくて、お父さんとお母さんがいるのも気にせずに、一人で大笑いしていた。

「じゃあ、今度こそ行つてきます。帰るのは三日後になるから。あ、お姉ちゃん、帰つてきたらしばらく暇になるし、お料理でも教えてもらおうかな」

「うん、良いよ。みなも女の子なんだから格闘技ばかりじゃなくて料理の嗜みぐらいできないとね！」

「もう、お姉ちゃん、それ言わないで！」

そう言って、かなは玄関の扉をくぐり、外へと走つていった。夏の日差しに、みんなのショートヘアが快活に映つたのを覚えている。それに帰つてきたら、みなと料理を作れるのが何よりも楽しみだつた。三日間に及ぶ、中学生活最後の大会。子供から大人まで様々な年齢層の人々が集まつて、そこで試合をすると聞いている。

何にしても、今の私ができるのは、みなが無事に優勝できる事を祈るだけ。それとみなが帰つてきた時に備えて、簡単な料理を考えておく事だつた。

「ふわああ……眠いなあ。お母さん、ちよつと一度寝するね」「かなが一度寝？ めずらしいね、良じわよゆっくり寝なさいね」

みんなの見送りが朝早かつた事もあって、微妙な睡魔と共に瞼の重さを感じる。きっとこのタイミングで一度寝すれば気持ちよく睡眠できるはずだ。それに今は夏休み、みなが帰るのも二日後で結構暇だし、時間をこんな風に使うのも、学生の特権として考えれば良いものだと思った。

「みなには悪いけど……おやすみなさい」

私は深い心地の良い闇の中へと埋もれていった。

## カナトミナ?!

みなが大会へ出発してから一回。その日は何事もなく過ごした。お父さんがいて、お母さんがいて、でもみながいなくて少し寂しくて、それでも時間は進む。

その日の夜中に、みながらの連絡があつた。どうやら会場に到着してからも、慌ただしく日程が進んで連絡ができなかつたみたいだ。私は何事もなく過ごした事、みなは慌ただしく過ごした事なんかを、長電話で話しあつた。そして長電話しそぎてお父さんに怒られた。「また明日」その言葉をお互いに掛け合つて電話を切つた。

「かな、気持ちもわかるけど、長電話も程々にな」

「はーい！」

お父さんは注意したものの、さびしきは怒つていなかつた。お父さんは優しいから滅多に怒らない。

時計を見ると夜の十一時。もしかしたら明日は、みながらの連絡が早いかもしれない。そんな事を想いながら、明日は早く起きていつでも連絡がとれるようにしておこうと思つ。

「明日は早く連絡が来ると良いな」

「お父さん……うん、そうだね！」

なんだかんだ言つて、気持ちをわかつていってくれるお父さんがいて嬉しかつた。

「お父さん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

その日、私は眠りについた。

そして一回がくる。何故か気持ち的にも興奮していたのか、あまり寝付けなかつた。何度も水を飲みに起きてしまつてもいた。最近は熱帯夜だった事もあって寝苦しかつたのも、理由の一つだと思つ。

「かな、寝られなかつたの？ 田の下でクマができるわよ」

「うん……ちよつと寝付けなくて」

「連絡が楽しみなんでしょう。連絡がきたら起きてあげるから寝れば？」

「うーん……」

正直なところ確かに眠さはあつたけれど、一度寝したい気分でも無かつた。

「大丈夫、起きてる」

「そう、あまり無理はしちゃ駄目よ」

「わかってるよ」

とは言つたものの、本当に眠い。でも連絡が来るかもしれない。なんだか不思議な気分のまま日中を過ごしていく。しかし睡眠時間が足りていないせいで、変なテンションになってしまっているのか、何故だか変、といふか嫌な感覚がつきまとつていて。まるで何かがスッポリと、抜け落ちてしまつていてるような感じが気持ち悪い。

「お母さん、お父さんは？」

「お仕事よ。それがどうしたの？」

「ううん、なんでもない」

当然だ。学生は夏休みでずっと遊んでいる時期だが、社会人のお父さんに基本的なお休みは日曜日だけだ。平日の午前に家にいるわけがない。だから今、家にいるのは私とお母さんだけだ。

「かな、暇ならちよつと手伝ってくれない？」

「あ、はい」

みんなの連絡を待つにしても、手が空いてる事に変わりはない。私は、お母さんの家事の手伝いをする事にした。ただ手伝っている間も一種の胸騒ぎが消えなかつた。爆発するように鼓動を刻む心臓。何故こんな胸騒ぎが起きているのかもわからなかつた。

私は手伝いを一時中断して、部屋に置いてある携帯を取りに行つた。みなと、お父さんに連絡をしてみたいと思つたからだ。

「できたら連絡してほしい」

こんな感じの内容のメールを、一人の携帯に送った。その内、お父さんはタイミングが良かつたのか、すぐに連絡が返ってくる。

「どうした？ 何かあったのか？」

「ううん。何か急に心配になっちゃって、忙しいのにめんなさい

「いや構わないよ。みながらの連絡はあつたのかい？」

「まだだね。一応メールはみなにも送ったんだけど」

「そうか。気持ちはわかるが、信じて待ちなさい。父さんから言えるのはそれだけだ」

お父さんも忙しそうだったので、手短に用件を伝えて電話を切った。「信じて待ちなさい」お父さんのその言葉が何となく嬉しかった。お父さんの言つとおり信じて待とうと思つ。そう考えたら何だか、気が楽になってきた。お母さんの手伝いが終わつたら、少しだけ寝ようかなと思つた。

「こら！ ビニに行つてたの、もう全部終わっちゃつたわよ！」

戻つてくると、お母さんが全て片づけた後だった。私はその場で怒られた。お母さんは怒つてもあまり恐くはない、説教がダラダラと続くタイプ。数分のお説教の後、許されて台所でお茶を飲む事になる。

まだ妙な胸騒ぎは消えなかつたが、お茶の温かさからか、包み込まれるように不安は和らいでいつた。やっぱり日本人はお茶だなと一人で実感する。ただあまり飲み過ぎるとお茶の利尿作用によつて、トイレが近くなつてしまつから注意しなければいけない。

明日にはみなも帰つてくる。みんなの約束の料理の為の食材でも買つておこづかと思う。料理が苦手なみんなの事を考慮したメニューにしてい。

「お母さん、ちょっと出かけてくるねー」「早く帰つてきなさいよ

私は家を出た。考えていても仕方がないので、とりあえず食品売り場でも適当に歩いてみようと思った。でも一応教える候補はあつた。それは「肉じゃが」女の子としては覚えておいて損はないメー

ユー。作り手によって全く違う食べ物になるとこいつ点で、ある意味では「みそ汁」並に自分が出でてしまう一品かもしれない。それを言つたら料理はほとんどがそうなのかもしないけど、とりあえずみなが作れるメニューを考えると、やはり「肉じゃが」にしようとした考えた。

歩いていると赤いハチマキをした男の子が、元気に遊んでいた。遊んでいた、というのは表現的におかしいのかかもしれない。その男の子は木刀を振り回していたからだ。あまり変な人に目をつけられても、女の子という立場上で非常に困るので無視して歩く事にする。食品売り場に着くと、高速肉じゃがのメニューをかき集める。はたしてみなは作れるだろうか。それだけが心配だった。運動に関しては何をやらせても凄いのに、家事的な事は一切できない子だからだ。いやただ単純に「できない」というよりは「やらない」という方が正しいのかもしれないけど。やればできる子のはずなのだ。家を出てから帰るまでに約一時間。あたりも少しづつ暗くなってきたので、足早に帰る事にした。

「ただいまー！」

「おかえり。意外と早かつたわね」

「何それ。意外って？」

「かなは出かけると必ずフラフラと歩き回るから、もつと遅く帰ると思つていたわ」

実の母親から酷い言われようだ。そんなフラフラ歩き回るなんてそんな事はないはず。

お母さんが既に夕飯の用意をしているようで、家中はとつても良い匂いがする。日本の食卓の定番のみそ汁だらけ。お母さんのみそ汁は「ややしそっぱめ」相沢家の味付けは基本的にややしそっぱめなのだ。

「あ、そつか。みなには味付けもしそっぱめで教えないとな」

みんなに料理を教えるのが楽しみで仕方がなかつた。

みなが大会に行ってから一皿の夜。私はお父さんとお母さんに

囲まれ、平凡な日常を過ぐす。こつものようにみんなで夕飯を済ませ、いつものようにお風呂を済ませた。そして時刻も夜の十時をまわった。

「いよいよ明日か。みな早く帰つて来ないかなー」

私はワクワクした気持ちを落ちつかせながら眠りにつく。心臓の音がうるさくて、なかなか眠れなく時間だけが過ぎていく。すると途端に家の電話が鳴ったのが聞こえる。まだ起きているお父さんかお母さんがいるだろう。時計を見ると既に一時間が経過した十一時。いつの間にか忘れていたが、嫌な予感が今更になつて走る。家の中が途端に慌ただしくなつた気がした。

私の部屋の扉がノックされた。

「かな。起きてくれ、かな」

お父さんの声だ。普段から冷静なお父さんの声が、いつもよりも冷静に聞こえる。いや冷静に努めようとしている。

「何、お父さん？」

お父さんは静かに私の部屋を開けて、明かりをつけた。

「かな……落ちついて聞いてほしいんだ」

「何……？」

嫌な予感が体中を包んでいる。むつきの心音とは違つタイプの心音がうるさい。

「今、病院から電話があつたんだ。その……みなが、みなが……亡くなつたって……」

私の体がフリーフォールのように墜ちていく感覚が包んでいった。今聞いた言葉が信じられなかつた。

## カナトミナ？！

気づけば私は自分の部屋で、一人何もせずに座っていた。  
みなが大会へ出てから今日が三日目。時間は十五時を回ったところだ。本来ならば、みなはこれぐらいの時間に帰つてくるはずだった。今頃、汗を流して、みんなで適当な雑談なんかして、それで私とこの三日間の事を一緒に話すはずだったのに。みなのはどこにもない。

今から約九時間前。私達はみなが運び込まれた病院にいた。緊急だつた為、みなが向かつた大会会場の近くの病院へ緊急搬送されたらしい。早朝だつた為か、人気はありませんでした。

「残念です……我々も全力を尽くしましたが……」

私達家族が着いて第一声がそれだつた。お父さんは果然と立ちつくし、お母さんはその場で泣いていた。私は涙も出なかつた。それ以前に目の前で起きている真実が、いまだに理解できていなかつたのだ。それ以前に心も体も全く機能していらない自分に気づく。しばらくすると泣き崩れていたお母さんを立ち上がらせ、お父さんが声をかけてくる。

「かな……これから、みなのが所へ行くよ。一緒に行こう」「いい」

椅子に座り、視点の定まらない目でどこかを見ていた。お父さんの言葉をただ遮つた。

「かな」

「あなた……」

お母さんがそれを制していた。

「ふう……私達は先に行つてゐるから、かなも落ちついたら来なさい。良いね？」

お父さんの言葉にとりあえず頷いた。いや頷いたのかもわからぬ

い。本当は行きくなかった。

見知らぬ天井を見上げ一人つぶやいていた。

「みんなの所……それってどこ?」

あまりに実感がわかない。だってほんの一日前まで、みんなで笑つて過ごしてた。みなが大会で出かけるのだって半ば当たり前の事。出かける度に帰ってきては、離れてた空白の期間を一緒に話し合つた。……今回だつてそうなるはずだつた。

「いきなり亡くなつたなんて言われたつて……信じられるわけないよ……」

私は人目も気にせずに、涙を流した。ただ嗚咽は出なかつた。ただただ静かに涙が頬を伝つていく。

「すみません……相沢みなさんのご家族の方ですか?」

突然の声に私は涙を拭き、声がした方を見ると体つきの良い男の人が立つていた。

「そうですけど……貴方は?」

「私は相沢みなさんを含めた選手管理の責任者をしていた赤羽努あかばねつとむという者です」

「はい……」

赤羽さんという人は申し訳ないといった顔で私を見ていた。

「何と申し上げたら良いか……私達の管理が甘かつたせいで……」

赤羽さんは本当に申し訳なさそうにしている。それが何故か私の心を苛つかせた。多分、今は誰に何を言われても苛立つと思う。ただ一つだけ、この人に聞きたい事があつた。

「謝らなくても良いです。何回謝られたつて……みなは帰つては来ないんだから。それよりも聞きたい事があるんです」

「……なんでしょう?」

「みなはどうして死んだのですか?」

それだけが知りたかった。夜中に突然の知らせを受けただけで、死因が全くわからなかつた。誰かのせいならその人を恨みたかった。そうしないと私の心が押し潰されそだだから。

「私も、その場にいて見ていたわけではないので……これは聞いた話なんですが」

「…………どうぞ」

「昨夜ほぼ全ての日程が終り、ほとんどの選手が帰り支度を済ませていた時の事です。……修学旅行のような気分もあったのです。うね。小さな子達が数人、階段の近くで遊んでいたらしいのです。その時に通りがかつた相沢みなさんが階段から落ちそうになつた子を助けたらしいのです。そして……」

「もういいです！」

もう聞きたくなかった。子供を助けて自分が落ちた。みならしいといえば、みならしい。

「それで……その子供はどうなつたんですか？」

「…………怪我もなく…………無事でした」

「…………そう、ですか」

遊んでいた子供は無事だった。みなは死んだ。どうしてみなが死ななければならなかつたの。みなに対する自問自答だけが頭の中を走っていた。いつの間にか、赤羽さんはいなくなつていた。

『気がつけば、私はみんなのいる部屋へ来ていた。お父さんすら頃垂れている。お母さんのすすり泣く声だけが響いていた。私は扉を開けて、みなに……いや、みなだつたものに近づく。

顔にかけられていく白い布を取る。そこには確かに十年以上も見てきた顔があつた。格闘技の大会だつたというのに一撃も受けないみたいだつた。それに階段から落ちたと聞いていたけど、顔は綺麗だ。むしろ白くなつた顔は、どこかこの世の美とは違つ美しさがあつた。きっと頭を強く打つたのだと思う。

「みんな……あんたバカだよ。気持ちわかるけどさ……死んじゃつたらなんの意味もないじゃない。……みんな……ねえ、目を開けてよ……あと少しで夢が叶うんじゃなかつたの？　あと少しで念願だつたりトルウォーズに参加して、優勝して……みなが作った格闘技

が最高だつて、証明するんじやなかつたの……？

「

みなは何も答えてくれなかつた。少しずら動いてくれなかつた。手を握つたみんなの手は温かさがなかつた。

「……子供は無事だつたんだつて。良かつたよね、みなはきっと喜んでるよね？」かなは、かなは、正直嬉しくないよ……。

……みなと一緒に料理するの、凄く楽しみにしてた。ねえ、みな……最後のお願い、ううん、「ワガママ」一度だけで良いから、一緒にお料理しようよ。かなの……最後のワガママだから、もうワガママ言わないから……」

「

「…………わかつてゐる。わかつてゐよつちくしょ、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……ちくしょう……」

私は感情を抑えきれず、その勢いのままに、みなが寝かされるベッドを力一杯に叩いた。握つた手から血が滲み、白い布を染めた。そして、感情のままに泣いた。

私は、みなに比べるとあまり良い所がないお姉ちゃんだった。きっとここに泣いていても、慰めてくれるのはいつもみなだつた。そのみなの温もりが好きだつた。でもその温もりはもう無くて、代わりに伝わつてくる冷たさが私の悲しさをさらに大きくしていった。一体どれぐらいの時間が経つたのだろうか。わからなくなる程、私は泣いていた。もうどんなに泣こうとしても涙は出なかつた。もう心を縛る悲しみという鎖は無かつた。流すだけの涙を流し終えた私の頭はスッキリとしていて、ある考え方だけが私の頭の中を支配していた。

「みな……『みな』に比べれば何もできない『かな』だけど、できるかな？」じんなかなだけビ、途中からなら「ゴールできるかな？」みな……行こうよ、ゴールまで。みなが示してくれた道は、かなが歩くよ。……かなとみな、で……一緒にゴールしよう！

唐突な考え方かもしれない。でも、やろうと決めた。みなのが技術は、

かなの体で実践する。心は一緒。一人でやれば「ゴールできる。

高校生限定の大会、リトルウォーズ。残りの猶予は約三年、いや

ほぼ一年と考えて良い。

「一年……でもやるよ。みな……行くよ！」

みなが残した星蹴拳。やつてみせる全力<sup>マックス</sup>で。

## みんなの星蹴拳！

「 つはー？」

田を覚ましたかなは、ベッドに寝ていた。時差が生じているような感覚に襲われ、一体これは夢なのか、あるいは現実なのか、それすらもはつきりとしない。ただ一つの声でそれは確信へと変わる。

「お姉ちゃん、起きた！？」

自分の部屋の前で大声を上げている少女の声に田を覚ます。この大きな声はみなだと直感的にわかつた。と、いう事はこの世界は夢なのだ。先ほどまで見ていたのは現実の過去であり、夢の夢。これは夢の世界のはずなのだ。本当の相沢みなはもうこの世にはいないのだから。

「みな……？」

「うん、入るよ」

みなはかなーの部屋に入ってくる。思い出も夢も、見知ったみながそこにある事に、かなは涙が出そうになる。そんな感情を抑えながらも、しつかりとみなを見る。

「どうしたの、みな？」

「…………うん。もうそろそろだ、お別れの時だから最後にお願いがあるの」

「えっ！？」

みなが放った言葉の意味がわからなかつた。かなの夢の中のみなは、夢とは思えないぐらいに感情のこもつた言葉を、かなに向けて言い放つたのだ。限りなく現実に近い夢の世界といつ考えが、かなの頭で真っ先にひらめいた言葉だつた。

「ちょっと、お別れの時つて……どうこう？」

「じめん。お姉ちゃん、この世界は自分の夢だと思つてゐよね、きっと？」

「違う……の？」

「うん、夢に近い世界ってのは間違つてはいないね。ただこの世界は限りなく死後の世界に近いの。今のみなが、お姉ちゃんに会つ為にはじうするしかなかつたから」

今まで自分の夢だと思っていたものは、みなに連れてこられた限りなく死後の世界に近い世界。いきなりそんな事を言われて困惑すると思つていた頭は、思いの外透き通つたようにその事実を受け入れていた。まるでみんなの考えが、直接かなの頭にリンクしているような感覚さえ覚えていた。

「みな……」

「実はつ、実はね、お姉ちゃんが戦いの世界に来るのは反対だったんだよ。お姉ちゃんにはそういう事をしてほしくなかつたから……ずっと優しいままのお姉ちゃんでいてほしかつたから……。でもお姉ちゃん、悔しかつたんでしょう？ 悔しくてしようがなかつたんでしょう？ だから……」

「…………みな。それで天国から降りて来ちゃつたつていうのかな？ みならしいけど、かなは大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないよっ！」

いつもとは違うみなの大聲。元氣の良い声ではなく怒つている。姉妹として一緒に暮らしてきたかなだが、みながかなに対して怒りの声を放つたのは初めての事だつた。かなはその声に驚く。

「お姉ちゃん、今ままじゃ絶対にまた負けるよ。お姉ちゃんは星蹴拳を覚えたみたいだけど、みながら言わせればまだまだだよ！」

「みな……。でも……どうしろつて言うの！？」

「…………ふつふーん。お姉ちゃん、みなが何の為にこの世界に引っ張つてきたと思つ？」

「えつ……ー？」

みなは相変わらずの悪戯な笑みを浮かべる。かなはそれに困惑の表情を浮かべる。

みんなの残した星蹴拳。これをマスターする為に残された資料や、それに通じる格闘技を血の滲む努力で覚えてきた。自信過剰かもし

れないが、当時のみんなの星蹴拳を更にアレンジして改善し、オリジナルを超えた星蹴拳にしたつもりだった。

しかし悪戯なその表情とは裏腹に、みなには何かの秘策があるのだろうか。その口調は自信に満ちている。かなは自分には無い、この絶対的な自信の正体がわからないでいた。

「みんなの星蹴拳！ お姉ちゃんには体で覚えてもらひよ！」

みんなは星蹴拳の構えをとる。「冗談ではない顔つきが言葉を真実のものにしている。

「……お姉ちゃんには戦わないでほしかった……けど、今こいつやってお姉ちゃんの意識に触れて、みんなの考えも大きく変わったの。お姉ちゃんは言った『一緒に『ゴールしよう』つて。……今度はみんなから言わせてほしいの……お姉ちゃん、一緒に『ゴールしよう』…』

みな一人の戦いだつた。志半ばでこの世を去つたみなに繼いで、実姉のかなが歩き始めた。そして一人はついに一人で『ゴールを目指し始めた。この戦いは一人でやつっているものではない。二つの星蹴拳は今、一つになる。

「みんな……手加減はしない、つていうよりもできないからね？」

「遠慮しなくて良いよーだ。みんなお姉ちゃんに負けないもん！」

「言つてくれちゃつて！」

かなも星蹴拳の構えをとる。まるで鏡に合わせたよつな二つの構えがそこにあつた。だがよく見ると二つの構えは少しだけ違う。かなの構えはやや上半身をやや後ろに傾けている。みんなの構えは完全に前傾姿勢。言つなれば守護姿勢のかなと、攻撃姿勢のみの構図だ。

「行くよ、お姉ちゃん」

「どこからでも良いよ」

そのやり取りを合図にみんなは飛び出す。かなも同じく飛び出しが、元の姿勢が前傾姿勢のみの動きが勝る。

「はつ！…」

かけ声と共に、走つた勢いのままに強烈な後ろ回し蹴りを繰り出

すみな。その後の事など全く考えていないような豪快な大振りを繰り出す。だがこの大振りはただの大振りじゃない。速度、キレが半端ではなく大振りで隙だらけの技なはずなのに、まるで小技のようなモーションである。

「…………！？」

その回し蹴りをかわすが、あまりの技としての性能に息を呑む。大振りの隙を恐れるかなにとつては、全くやらない動きである。

「せいっ、やつ！」

その圧倒的なみなみの技に見とれているわけにもいかず、かなも応戦していく。ロー、ミドル、とキックを小刻みに繰り出していく。その鋭くコンパクトな攻撃に、みなもただ避けるしかない。避ける、といつても文字通りただ避けているわけではない。攻撃する機会を、勝つ為の手段を伺っているのだ。その勝利の執着心というオーラが、みんなの体から湧いて出る。そのオーラに気圧されてか、かなの動きが一瞬止まってしまう。

「隙有利……！」

そのわずか一瞬の間を見逃さずに、再び豪快な蹴り技が空を切る。かなのコンパクトな蹴りとは対照的な蹴り。その迫力だけで人が倒せてしまいそうな勢いである。

かなはその蹴りを避けている内に、徐々に恐怖心を抱いていく。ここに自分自身の技と、みなみの技に差があるのだと少しづつ実感してくる。あまりに丁寧にまとまりすぎているからこそ、そこに意外性というプレッシャーが無いのだ。

「…………」

「…………ふふふ、どうやらお姉ちゃんも少しづかってきたみたいだね」

「かなは…………星蹴拳をただ改悪しただけなの…………？」

「違うよ。改悪なんてなつてないよ。これも星蹴拳だからね

「これも、星蹴拳？」

「そう、星蹴拳は型に囚われない自由な戦術。みなみの星蹴拳みたいに攻撃的な戦い方もあるが、お姉ちゃんのように小さく戦う方法も

ある。それら全てをひっくるめて星蹴拳なの。……但し、お姉ちゃんの星蹴拳じやあ最後の技は体得できないの」  
かなは呆気にとられる。みなが残した資料の技に関しては全て目を通し、全てを体得したつもりだつた。しかしみなの言葉で全てを体得していなといいう事実が露呈した。

「最後の、技……？」

「うん、最後の技。それが星蹴拳奥義の流星  
みなはかなに最後の星蹴拳を伝える。

## 三回戦の舞台へ！

「良い、お姉ちゃん。星蹴拳の奥義はね」「これが星蹴拳の全て。星蹴拳は文字通り「星を蹴る技」であり、そしてその奥義は「星を落とす技」である。みながら伝えられる星蹴拳の奥義。

「…………すう…………まつ…………！」

突然の意識の田覚え。明らかに夢とは違う感覚に、これが現実の目覚めなのだと悟った。

随分と長い時間の間、夢の中にいたような感覚が襲つ。実際に時計を見ると眠りについたと予想される時間から五時間近くも経っている。時刻も十九時を過ぎている。窓から見える景色も暗くなり始めている。

「…………みな」

部屋に飾つてある写真を見つめる。その当時の元気いっぱいみなみの写真。

「…………よし！ もう一回やり直し。そうでしょ、みな？」

二人の世界で教わった「みなみの星蹴拳」とその「奥義」。今だからこそもう一度、一からの出直しである。

七月二十四日。長かつた昨日が終わり、今日が始まる。

「さつて朝だぜ！」

毎度の事ながらの夏の暑さ。ただ立つているだけでも汗をかいてくる。だがそんな事も気にもしない様子でワタルは氣合の大声をあげる。なんだかんだで大変な一日だった昨日だが、一日眠ればすっかりどうでもよくなっていた。

昨日、つまりは二十三日はマックスハート内で試合を行い、やや険悪なムードのまま、かなと桐華の試合が終了。その後、かなとの連絡もとれず、代わりにきた連絡はヒロキの三回戦の不参加という

知らせのみ。リーダーとして悶々とした夜を過ごしたワタルだつた。顔を洗いに部屋を出て、洗面台の前まで移動する。そこで軽く身支度を調えると自宅前のポストを見に行く。三回戦の日程が書かれた郵便物が来ていないかの確認である。

「お、あつたあつた！」

早速、封筒の中身を確認する。

「なになに……三回戦の日程は七月二十五日、か。って、明日かよ！」

早朝の住宅街にワタルの声が響く。

通知が来てから、次の口に試合をやるといつ日程組みに、目を丸くする。とりあえず携帯を取り出し、全員に連絡をしようとする。しかし時刻がまだ六時である事を考慮し、後で連絡をしようと決める。とりあえず時間潰しの意味も込めて、朝食の用意にとりかかる。「やっぱ日本男児なら朝は米の『』飯食わないとな！ 朝食抜きとかパンだけとか信じられねえぜ」

独り言を発しながら米を洗う。洗い終わるとそのまま電子ジャーの中に、釜を入れて電源を入れる。しかし米を炊こうにも、おかげが無い事に気がつく。米だけを食べるのも味気ない為、ワタルは早晨マラソンついでに、コンビニへおかず探しに向かつ。時刻は六時半を指していた。

「コンビニ行つて戻つて飯を食う。適当に落ちついたぐらいに、時間も良い頃合いになるだろうな」

ワタルはトレーニングウェアに着替えて、颯爽と家を飛び出した。向かうコンビニはワタルの家から最も近いコンビニである「セブンハンドレットイレブン」というコンビニである。ワタルいわく「食品はここが一番美味しい」との事。

しばらく走ると見知った顔がそこにあった。

『あつ……一？』

二人して同じ反応をする。

「かなつペ、朝早いな、どうしたんだ？」

「え、ちょっとね」

昨日の事もあって、お互に気まずさが漂つ。朝の爽やかな空気が、一変して重い空気に変わっていく気がする。

「……聞いて良いもんかちょっと悩んだんだけじよ、昨日の事は、大丈夫なのか？」

「……うん。ごめんね、なんか険悪なムード作っちゃって。ちょっと思つところがあつて、頭に血が上っちゃつたみたいでさ」

「そりが。トーロとの事も大丈夫なのか？ 喧嘩にはなつてないか？」

「喧嘩？ それはないない、誓つてないよ。……むしろあの子にちよつと救われた氣もある」

かなの表情はやや曇りもあつたが、晴れやかだった。何か少しだけ吹つ切れた感じを、ワタルは受ける。

「それにしてもメンバーの関係チェックとは、なかなかリーダーしてんじゃない？ ワタル君」

「バカ。こう見えて面倒見は良い方なんだよ…」

「普通は自分で言わないよ、そういうの」

かなにツツ「//」を受けるも、本題を思い出し真面目な会話をする。「そういや、ちょっと真面目な話、てか、三回戦の話があるんだけど良いか？」

「あ、うん」

「三回戦の日程は突然だけど明日、時間は午前十一時……まあほぼいつも通りの時間とみていいな。これは良いんだが、その……三回戦にはヒロキは出場しないんだ」

かなは突然の知らせに驚く。

「え、なんで？ どこか具合でも悪くなつたのかな？」

「いや、ちょっとヒロキも、思つところがあるみたいだ。一週間は戻つてこないって」

「そつ……つか。まさかこのままで悪くなつたりはしないよね？」

「そんな事をオレサマが知るか。それにそんな事はありえねえさ。

オレサマとヒロキはすつと一緒だつたんだ。これからだつてそうさ、オレサマ達は一人で優勝目指してんだぜ？　いや今は二人だけじゃない。かなつべに、トーコもいてくれるんだ！」

まるで自分達みたいだと、かなは一人に投影していた。そしてそのワタルの言葉はそつくりそのまま、かな的心に響く。そう「二人でゴールしよう」と言つたが、今はこんなにも頼りになる仲間達がいる事を、かなは大きな実感を得た。

「ま、そういうわけだから、三回戦はオレサマにトーコ、そしてかなつペ。この三人で挑んで勝つぜ！　ヒロキが戻ってきた時に、負けました、なんて格好悪い事はできないぜ」

「それは当たり前！　頼りにしてるよ、リーダー？」

「おう、頼れ頼れ！　オレサマも同じぐらい、いやそれ以上に頼つてやらあ！」

いつしか笑顔で話をしていた。先ほどの重苦しい空氣は、ワタルの勘違いだった。

その後は適当な雑談をしながら、一人でランニングをした。お互に体力面に抜かりはない為、結構なハイペースでの移動をして、コンビニにはすぐに到着した。

かなは家に戻るという事で、コンビニにて別れる。適当なおかずを購入し、ワタルも自分の家へと戻る。思いの外、かなとの会話が長かつたようで時刻は七時半を回っていた。

「トーコの事だから多分起きてそうな気がするが、でも寝てたら悪いからやっぱりもう少しだけ待つか」

電話をするよりも朝食を優先する。買つてきたのは主に総菜で、それを白いご飯と共に食べる。これだけでも少し味気ないと思つたのか、冷蔵庫から生卵を取り出し、いわゆる「卵かけご飯」にして食べる。おかげを三回ほどして、ようやくワタルの朝食は終わる。食器を片づけて、時計を見ると八時を回っていた。

「よし、電話してみるか」

携帯で桐華の番号を検索する。サ行の知り合いがあまりいないワ

タルの携帯は「桜井桐華」の名前を探すのは一発で見つけられる。数回の呼び出しコール音の後に、桐華の電話に繋がる。

「……はい」

「お、トーロか。ワタルだけど」

「……おはよう。三回戦の事？」

「さすがに察しが良いな、ご名答だ。それと他にも一つ……」

ワタルは先ほど、かなにした会話とほぼ同じ内容の事を、桐華に伝える。

「……そう、川崎君が」

「ああ、ま、心配はいらぬいぜ。きっと自信をつけて戻ってくるつ

て」

「……そうだといいけど」

いつも以上の長い沈黙の後に、桐華はそう告げた。何の変哲もない一言だったが、何故かワタルはその一言がいやに引っかかるつた。

「とりあえず明日は頼むぜ！」

「……うん。がんばる」

桐華との電話を切る。一体あと何回の予選をこなせば良いのかは、全くわからない状態だが、今は一つ一つを大事に勝つていく事が、優勝への最大の近道だった。明日は予選第三回戦、微妙な曲者と評価されるディーパーディーパー戦である。

## キャラ紹介・全力編（前書き）

本編のネタばれ有り。

ご覧になる際は、その辺りにご注意を。

全力編とは、チーム・マックスハートのメンバー紹介になります。

戦闘能力などにある数字の横の括弧書きは話数になります。

## キャラ紹介・全力編

> .i 1 1 4 1 6 — 1 1 9 8 <

名前：響ワタル

生年月日：7月23日

年齢学年：高校三年生、18歳（物語開始当初は17歳）

血液型：O型

身長：172cm

体重：65kg

武器：木刀（我流一刀）

利き腕：右利きの両利き

戦闘能力：110（1 33）、120（35）

必殺技：ぶつたぎり！・掴んでぶつたぎり！

初登場：第一話「赤いハチマキの男！」

解説：この物語の主人公。基本的には前向きなキャラクターであり、最近ではあまりウケがよろしくない熱血型の主人公。持ち前の身体能力で敵を圧倒する力を持つ。だが意外にも精神的にやや打たれ弱い一面もある。

トレードマークはサブタイにもなっている赤いハチマキ。

生年月日は占いによる作者の運命の人の誕生日（だが適当な占いの為、アテにならない）

身長体重は数年前の作者に近いものを設定。

> .i 1 1 5 4 6 — 1 1 9 8 <

名前：川崎ヒロキ

生年月日：11月3日

年齢学年：高校一年生、16歳

血液型：A B型

身長：162cm

体重：51kg

武器：木刀（一刀）

利き腕：右利き

戦闘能力：85（140）、130（41）

必殺技：みだれうち！・ヒロキ式ぶつたぎり！

初登場：第一話「赤いハチマキの男！」

解説：主人公ワタルの弟分であり、ワタルを兄貴と慕う少年。ワタルと違い、基本的には温厚で冷静。頭を使うのが苦手なワタルの代わりに頭を使う。憧れているワタルの戦い方を真似て、パワーファイトもするがスタイルが合わないらしく、このパターンになると良い成績が残らない。

トレードマークは青いハチマキ。

生年月日は「良いさ」で「11月3日」である。

実は余談だが、ヒロキの父親は「川崎真治」で、母親は「川崎八代」である。つまり作者の他小説の「時をこえて」の主人公ヒロインの息子である。

名前：相沢かな

生年月日：3月8日

年齢学年：高校三年生、17歳

血液型：B型

身長：163cm

体重：秘密かな（ありきたり！）

武器：星蹴拳（かな式、みな式、かなみな式）

利き腕：左利き

戦闘能力：110（132）、135（33）

必殺技：星蹴撃、連星撃、落星撃、真・星蹴撃

初登場：第二話「天才蹴撃少女！」

解説：物語序盤から現在にかけて、多大の戦禍を上げてくれているマックスハートの切り込み隊長。

物語当初は圧倒的なまでの性能を見せてくれていたが、最近では敵が強くなつた事と、とある悩み……といつかジンクスみたいなものと戦つてゐる為、その傾向は薄れています。

死別した双子の妹「相沢みな」の意志を継いで、リトルウォーズ優勝を目指す。

元来は家庭的で、おしとやかな女の子である。その為、家事全般は基本的に得意分野。

小柄で妹みたいな存在でもある結衣とは、その後姉妹のよつに仲が良くなる。

名前：桜井桐華

生年月日：4月1日

年齢学年：高校二年生、17歳

血液型：A型

身長：168cm

体重：秘密（秘密は良い女の（r y）

武器：魔法銃（コルトガバメント& a m p ; デザートイーグル）

利き腕：右利き

戦闘能力：80（19 26）、85（27 36）、90（37

51）、95（52）

必殺技：跳弾する弾、水壁、跳弾する弾達

初登場：第一七話「夢の中の少女・前編！」

解説：マックスメンバーの中では、ヒロキよりも前に、ワタルとの接点のあつたキャラクター。

基本的には冷静沈着、表情は常に無表情という、明るめなキャラ多

めなマックスハート内では、かなりの冷静担当キャラ。

実はワタル達とは唯一一人だけ違う学校に通つており、本人は語らないが結構な名門校に通つている。

さりげなく、運動も勉強もソツなくこなせてしまう才色兼備な人である。

ワタルに対して遠い過去から、恋愛に似た感情を持っているかもしないが、はたしてどうなる？

名前：織部結衣

生年月日：1月12日

年齢学年：高校一年生、16歳

血液型：A型

身長：155cm

体重：秘密にしろって言われました（いわすもがな）

武器：具現化能力

利き腕：右利き

戦闘能力：40

必殺技：特になし

初登場：第四十話「不思議絵師 一筆！」

解説：不思議絵師、織部結衣ちゃん！

本当ならメインヒロインだったキャラクター（プロット練り初期当時）

MAXはバトルものではなく、ハーレムものの予定だったのだ。（タイトルはMAXではないけども）

その名残あつてか、あまり恋愛というジャンルを表に出さないMAXだが、織部ちゃんに至つてはモロ恋愛傾向になる。

ちなみに織部ちゃんは一切、本編中で戦わないのよろしく！  
具現化能力の元は、タイプムーンの「月姫」などにある「空想具現化」になります。

他では「ケロロ軍曹」の陸実（美？）の描いたら実体になるペンなど。

## 最凶の悪寒！

七月二十五日。十時五十分。予選三回戦ディーパー＝ディーパー一戦である。

今日の試合日程は、第一試合からマックスハート対ディーパー＝ディーパーにあたる。待ち合わせ場所にて、ワタル、かな、桐華の三人は集合し、試合が行われるバトルリング付近にて待機する。

「さすがに三回戦ともあれば、ギャラリーも凄えな」

これを言ったのはワタルである。確かにワタルの言うとおり、朝早くから色々な地方の人間が、この試合を、大会の行方を見に来ている。予選一回戦とは、うつてかわった雰囲気が漂っている。

「……なるほど」

「ん、どうした？」

桐華の視線の先に彼らはいた。あの天才三崎や速水仁「ほど」ではないにしろ、纏うオーラは確かに強者の感覚を持つている。一筋縄ではいかない事は確かである。だがどこか微妙な雰囲気もある。

「なるほど！」

ワタルは一人で納得した。いや正確にはその場にいた、かなと桐華も納得していた。

試合時間が近くなり、黒子から各チームリーダーの招集令が出された。ワタルは二人を残して、バトルリング中央へと向かう。

「君が、マックスハートのリーダーの響ワタル？」

「ああ、そうだけど」

「ふーん。君が、ね」

目の前の男。ディーパー＝ディーパーのリーダーは嫌らしい目つきで、まるで品定めでもするようにワタルを見る。寒気のするような視線に、警戒の色を示す。

「おいこら、いきなり人を呼び捨てにしておいて、テメエは挨拶も無しか？」

「いや、ははは。じうせ、負けるようなチーム相手に名乗る必要があるのかなってね」

「バカか、そういう台詞は負けフラグってんだぜ？」

「負けフラグ、か。思えば私達もここまで長かったわ……」

何かを語り始める田の前の男。別に興味も無いし、時間の無駄だと判断したワタルは、黒子に田配せし、止めさせるように訴える。

そして男の口調が嫌だつた為、止めさせる意味も含まれている。

「こら、芹川香澄。せりかわかすみ無駄口を叩くな。まずは試合ルールを決めて！」  
どうやら田の前の男の名は、芹川香澄というらしい。男なのに一人称が「私」であり、どことなくそつち系な趣味でもあるのではないかとも思える。仕草の一つ一つがやけに色っぽい。帽子を被つている為に、髪が長いのか短いのかさえもわからない。つまり総合して、いまいちわからない人間であるという事。

「やれやれ……せっかく私の苦労話を聞かせてあげようと思つたのに、OK！ サッサとルール決めちゃいましょう」

「まあ、やっぱ基本的な1on1で良いか？ ルール的にもわかりやすいし、お互imenツも三人できつちり終われるだろ？」

「良いわよ、それで」

三回戦、対ディーパーティーパー戦はいつも通りの1on1戦で行われる事になった。リーダー集合時の細かな事が終わった為、ワタルはマックスハートの控え場所へと移動する。戻る途中、芹川に声をかけられる。

「ねえ、響ワタル」

「なんだよ、オレサマはお前と話す事なんてねえぞ！」

「響ワタルが無くても、私にあるのよ。……響ワタル、貴方……私の好みだわ。試合の結果と関係なく、貴方を食べちゃいたいわ  
「…………うう…………！」

今まで感じた事のない寒気がワタルを襲う。この悪寒は、あの三崎と出会った時なみ、いやそれ以上であると後のワタルは豪語する。前言撤回、微妙どころではない。

「あれ、どうしたのワタル君？」

「いや、オレサマは今最凶の悪寒と戦っている……」

心配するかなと桐華を余所に、一人で震え出すワタル。

「うーん。ちょっとしつかりしてよね、誰が先鋒戦やるとか決めてないんだよ！」

「……私が行く」

仕方がない、といった表情で桐華が名乗り出す。

「つて、桐華ちゃん、良いの！？」

「……はい、一応考えがあつての行動です。任せてください」

桐華は愛銃である魔法銃、ガバメントとデザートイーグルを装備する。そのまま中央のバトルリングへ向かう。

向かつた先には相手チームの先鋒がいる。髪型もいわゆるロン毛であり、服装など見た目もチャラい。とてもじやないがスポーツや格闘技をやるようには見えない。仮にやつていたとしても、桐華の苦手な、いや、最も嫌いなタイプである。

「へえ、何。相手チームに可愛い女の子が多いと思ったら、僕の所に来てくれちゃうってわけ？」

「……桜井桐華です。よろしくお願ひします」

「僕の名前は純。<sup>じゅん</sup>ま、漆黒の純って読んでくれよ。かつこいいだろ？」

別にどこにも漆黒というワードが当てはまるものがない。単純明快にかつこいいからだろうか。意味もなくかつこいい名前を付けたがる人間が多くて鬱陶しい、と桐華は思う。

「こら、無駄口を叩くな！ つたく、ディーパーディーパーの連中は無駄口が多くて困る！」

「あら、これはすいまつせーん」

黒子の注意に、反省した素振りを見せない純。その姿を見て、明らかに不快な表情をする桐華。やはりこの手の人間は嫌いだと、再認識する。

「それでは予選第三回戦、マックスハート対ディーパーディーパー

の試合を行う。先鋒戦 始め！

半ば無理矢理だつたが、黒子により始まりの合図が出される。

桐華は手始めにガバメントを構えるが、純は何も構えていない。いやむしろ武器と呼べる代物が見あたらない。

「さつて、あまり女の子を虐めたくないけど……始まつちやつたとあれば、やつちやうよ？」

虐めたくはない、と言つたあたりに、純の性格の悪さが見える。純は表情を一変させ、恐らくは背中に隠していたであろう武器を構える。その武器というのは、桐華と同じく銃である。最も桐華の魔法銃とは違い、通常のニアガンであると予想される。

そのコンパクトなハンドガンのような、形状から推測できる純の武器は、恐らく「MP7A1」である。簡単な話、電動コンパクトマシンガンと呼ばれるものであり、ハンドガンとそう変わらぬサイズながら、アサルトライフルなどと変わらぬ連射性能を持つ。

桐華の持つ銃はガバメントとデザートイーグル。そして銃ではないが、水が入った小型のボトルケースである。いくらコンパクトマシンガンといつてもハンドガンと比べれば、攻撃力は雲泥の差がある。つまりは手数ではどうあっても勝てない。

「踊りなよつ、子猫ちゃん！」

純はそのままマシンガンを躊躇いなく、桐華に向けて放つ。魔法銃の水弾と違い、BB弾という非常に小さな弾を使って撃つ為に、軌道が非常に見えにくい。仮に見えたとしても、弾自体は非常に軽い為、風によって更に軌道が変わる可能性も高い。つまり避けようと思つて避けるのは、ほぼ不可能に近い。

それでも、避ける為には動くしかない為、桐華は体を動かし的を絞らせないようにする。小気味良い空砲の音が会場に響く。相手も狙いをつけて撃つている為、ある程度の弾は桐華に命中する。弾は当たるたびに一瞬、針が刺さつたような痛みを桐華に与える。

「はつはつは、気分良いよねえ、女の子をいたぶるのってさあ…」

調子に乗り、更に鋭く桐華に弾の雨を浴びせる。

「……なるほど。黒い、漆黒ね。腹黒さが……」

「腹黒いか……最高の讃め言葉さ」

そのまま撃ち続けていると、純のマシンガンは弾切れを起します。

「チッ……！」

「……銃には弾があるんだから、弾数管理はガンナーの基本」

弾切れになり、手数が無くなつた事を見極めて、桐華は反撃の一撃を与えようとする。

「……最も私の銃に関しては、弾切れって呼ぶのかはわからないけど」

ガバメントのメモリは最大出力。その強力な水弾が、純に向かつて放たれた。

## ウォーターウォール！

「ちょつ、まつ……！」

弾切れを起こし、そのリロード最中の純。勿論、リロード中は攻撃する手だが無い。桐華はそんな純に対して、全くといって良い程、無感情、いやあるいは気持ちのこもりすぎたショットを放つ。

「うわっつ……！」

最大出力のガバメントのショットは、純の頬をかすめるようにして、通り過ぎていく。

「……次は、外さない。痛い目にあいたくなれば、ここで降参。どう？」

無表情な桐華が、めずらしく不敵な笑みを浮かべながら言う。その表情は正に不敵。今まで攻められながらも、余裕というのが目に見えてわかる。

予選三回戦にして、圧倒的な力の差を見せつける桐華に、会場の熱気も一気にヒートアップする。熱気の最大の原因とも思える、大歓声が会場を包み、その大音響が心地よく体を支配する。

「トツ、ウツ、カツ、ル・オ・ヴ・エ トツ、ウツ、カツ！」

そんな心地よい大歓声の中で、異質な応援が聞こえてくる。桐華含め、マックスハートのメンバーは全員がその方向を見る。すると明らかにスポーツマン、という雰囲気ではない方々がいた。その歓声は明らかに、どうみても桐華一人に向けられている。

「……うげ……！」

桐華らしくない声が漏れる。それ程、桐華にとつては悪い意味で衝撃だったのだ。

「ハツハツハツハ！ トーロ、良かつたじゃないか、ファンクラブなんて簡単にできるもんじゃねえぞ！」

ワタルはさも他人事、といった感じで、桐華をおちよくる。かなも笑いはしているものの、後が恐いと判断してか、目立たないよう

に徹している。

「……ワタル」

「ははは……ん？」

「……後で覚悟」

冷静に淡々と発したその言葉に、異常なまでの殺気がこもつていた。ワタルの笑いは一瞬で止まる。

そうこうしている内に、純のリロードも終わり、試合の中に再び緊迫感が生まれていた。

「むかつくなあ。人がやられている間に、アンタは大歓声かよ、気に入らねえ！」

「……ふう、最も貴方みたいなスタイルでは、どんなに凄いプレイをしても歓声を受ける事は無いと思うけど」

「ああ、そうだろうよ。でも俺は自分の快樂に対して素直でね、やっぱり女をいたぶるのは最高だよっ！」

再び桐華に向けられるBB弾の雨。全く容赦なく、桐華に攻撃の全てを注ぐ。再び、攻撃する純。避ける桐華の構図になる。やはり一発の攻撃力に優れてはいるものの、圧倒的な手数を誇る純との戦いは、相手のガス欠を待つしか無くなつてくる。

「……そう。性格さえどうにかすれば、貴方、結構かつこいいのにね」

「……えつー？」

この言葉のやり取りで、純の攻撃の手が一瞬だけだが止む。

その隙を桐華は見逃す事なく、反撃を試みる。狙いは純ではなく、その手に持つMP7A4である。ただ桐華には、この口撃により純が隙を見せるという確信があつたのだ。

「チイツー！」

ガバメントから放たれた水弾は見事に、純の持つマシンガンを狙い撃つ。大きく後方に吹き飛ばされた銃を拾いに、純は走るしかない。

「……計画通り」

相変わらず無表情に言い放つ。言い換えるなら相変わらず極めて冷静。

「……この技はトリックワーンみたいに、手軽じゃないから少しだけ困る。……第一の技、トリックツー」

出た言葉は、第二の技と呼ばれたトリックツー。メンバーであるワタルとかなでさえ、知らない隠された芸術技。シークレットアート本人しか知らぬ、その技の存在を全員が固唾を呑んで見守る。純はいまだに、飛ばされた銃を取る為に走っている。その視線に桐華の姿はない。桐華はどこからか、ボトルケースらしき物を取り出す。そしてそれを空高く放り投げた。

「くそつ、よくも！」

飛ばされた銃を取る事に成功した純は、そのまま桐華を狙い再び弾丸の雨を当てようと試みる。

「……残念だけど遅い。トリックツー、跳弾する水壁！」

自身が投げたボトルを撃つ桐華。耐久性は脆いのか、そのボトルはあっさりと壊れ、ボトルの中に入っていた水が、一気に外へと弾けるように飛び出す。純の撃ち込んだBB弾は、その水の壁が威力を吸収する。

「……威力は抑えておく。でも当たると痛いから」

威力調節でやや弱めに設定したガバメントで、自らが展開した水壁を撃つ。威力を弱めた事により、ハンドガンでできる限りの連射をする。それら全ての弾は純のBB弾と同じく、水壁に飲み込まれた。

「偉そうな事を言つておきながら、全然攻撃になつてないじゃないか！」

「……貴方には見えないの？ 水壁を跳弾する水弾の姿が」「水壁を跳弾する水弾……だつて！？」

この間わずか数秒の出来事。ほんの一瞬の出来事なのだ。

水の壁から放たれた水弾は、桐華が放った軌道とは、明らかに違う軌道で放たれていく。右に左に、上に下に、全ての弾が予想もつ

かない方角へと飛んでいく。

「う、う、うわあああああ！」

その内の何発かが純に命中し、その場に悶絶したかのよつに倒れ込む。

「……ごめんね。水壁の中で跳弾する水弾は見えるんだけど、その後にどこに飛んでいくのかは、私でもわからないの」

水壁となつた全ての水が、地面に落ちる頃。それが先鋒戦の終わりを告げる合図になつた。そして再び巻き起こる大歓声と、桐華ファンクラブの声援。特筆すべきは観客の歓声の色合いが、まるで戦いを見たというよりも、手品を見たかのような反応だった事だろう。「うつ……」「ほつ……、なんて事だよ、そんなあり得ない超常現象が存在するなんてよ……」

「……信じられないのも無理はない。でも、世の中には知られていないだけで沢山の、ありえない、が出回っているの」

「今のトリックもその中の一つだつて？」

「……うん」

「そうか、なるほどな……。いや、そんな事はどうでもいい。ってか惚れたぜ……」

純は走る激痛をこらえながら、出来る限りの笑顔を見せる。桐華もそれに呼応するように優しく微笑む。

「……ごめん。無理」

糸切れた人形のように倒れ込んだ純を放つておき、桐華はマックスハートのメンバーの元へと戻る。

「やつたな、トーハー！」

「さすがだね、桐華ちゃん！」

勝利を祝福してくれる二人を見ながら、桐華は一人誰にも聞こえない声で叫ぶ。

「……本命は裏切れないと

三回戦先鋒戦は桐華が第一の技、跳弾する水壁 ウォーターウォールで勝利をあげる。

そして中堅戦、相沢かな対三木亮輔の戦いが幕を開ける。

予選第三回戦、先鋒戦は見事に桐華が勝利を収め、そのバトンを中堅のかなへと託す。一回戦と同じく、ここでかなが勝利する事ができれば、ワタルの出番は再び無くなり、マックスハートは次の戦いへと駒を進める事ができる。

「かなっぺ、ここで勝つてさうと次へ進もうぜ！」

「うん、そうだね」

「どうした、なんか元氣がないじゃないか？」

「そんな事ないよ。ただちょっと考え事……ワタル君、もしかしたら出番が回つてくるかもしだれないので、その時はようしぐー！」

「……はあー？」

当然の如く、かなは勝つて戻つてくるという前提で話をしていたワタルは、かなの意外な言葉に目を丸くする。かなの顔つきは決して自信が無いというわけでもない。むしろ自信ややる気は目に見えるのがわかる。ワタルには何故なのかはわからない。

「わかるか、トーロー？」

「……さあ」

桐華はわかつているような、わかつていよいよのような、つまりは無表情で答えた。

「相変わらずのポーカーフェイスだな。まあ、試合が終われば全てがわかるってやつだ」

ワタルと桐華は、バトルリングへ向かうかなを案じた。

そしてリング中央には、中堅戦、かなの対戦相手である三木亮輔の姿がある。見た感じは相手チームの前一人、つまりは芹川と純ほど際だった特徴も無いように見える。いや見た目の特徴点だけならば、純に限り普通だつただけに、見た目で判断は良くはないのかもしない。見た目で判断するな、という言葉があるように、最終的な結論は拳を合わせるまでわからない。

「宜しく。三木です。リーダーと純にはキャラが濃いという理由で、迷惑をかけたと思うが……」

「あ、いや、そんな事はないかな。かなに限り……」

戦いをする者としては、少しお洒落が過ぎるとは思えるが、残り二人よりも幾分地味であり、むしろ軟派なイメージよりも硬派なイメージが漂う好青年な第一印象だった。肌もやや褐色であり、良い意味では最近のスポーツマンといったところか。体つきもよく、何かハードなスポーツあるいは格闘技をやっている事が伺える。

「それでは中堅戦 始め！」

半ば強引に試合が始まられる。どうやらこの黒子は、選手の事情は気にしないらしい。

「さてさて……行こうか、ねえ？」

かなは誰かに問いかけるように呟き、いつも通りの星蹴拳の構えをとる。しかしこともと違うところは、実妹みなのように前傾姿勢の構えであるという事。それでも、みなのは星蹴拳ほどの前傾ではない。

三木の構えはキックボクシングだろうかムエタイだろうか、各二つの中間のような構え。星蹴拳のようにオリジナルに昇華させた技であろう。そうなると速度という事に関しては、ほぼ互角と考えても良いだろう。

「女性とはいえ容赦はしない……行くぞ！」

ボクサーとして鍛えたフットワークだろうか。屈強な見た目とは裏腹に、一瞬にして間合いを詰めてくる三木。かなもそれに呼応するように、前へ飛ぶように走る。

(……前傾姿勢な分、加速力は早い。この勢いのまま攻撃すれば威力は高くなる感じかな)

かなは勢いのままに左ミドルキックを繰り出す。文字通りランニングミドル。三木もその蹴りを見て反応し、同じく左ミドルキックを繰り出す。一足の蹴り足がその場で交錯する。

「つう……！」

「むつ！？」

二人は蹴りの威力のままに、後方へと下がる。お互いに想像以上の重さが、足に残る形となる。

「痛う……さすが男の子って感じかな。威力や重さに関しては向うの方が上だね」

「大したものだ。よもやこれ程の打撃力を有するとは……」

今のたつた一撃の攻防で、両者が持つ武器の性質がわかる。かなは繰り出した左足に激痛と重さが残ったのに対し、三木はどこか余裕すら伺える。むしろこのぐらいは当然、といった顔つきもある。

「今の攻防で足を痛めたようだな。ならばこれは俺の勝機だつ！」

三木の速度に衰えはない。かなの蹴りは、三木にほとんど聞いていないのだ。一気に接近され鋭い拳の弾幕を降り注がれる。かつての相手 リバティーズの西岡住吉の拳を超えるキレの良さである。

更に拳すらも重そうに感じさせる攻撃に、めずらしくかなが畏縮していく。唯一、今のところ全ての拳を避けられているのは、三木の攻撃が全て頭だけの攻撃しか来ていない為だろう。

「せいつ！」

「……つ！？」

そう思つたのも矢先、ヘッドハンティングしか来なかつた攻撃が突如、足への攻撃へと変わる。いわゆる足払いをされた格好で、かなはその場に倒れる。

(……やられた。頭狙いは凶だ……)

「おとなしくしていれば、痛みはないぞ」

全く容赦なく、倒れたかなの顔面に向けて拳を振り下ろす三木。

(避ける、かな！ 避ける避ける避けるお！)

真横に転がるようにして、振り下ろされた拳を間一髪でかわす。空振りに終わつたが、殴られた地面には鈍い音と共に、拳が下ろされていた。かなはその拳が直撃していたらと思うと、体に緊張が走つていて。

「なるほど。反応速度はズバ抜けて良いようだ。まるで数年前に戦

つた、相沢みなを思い出すな……」

三木から出たその名前に、かなは敏感に反応する。

「ちょっと……みなを、知っているの？」

「む？ ああ、あれは中学三年の頃だつたか、ある大会で俺は相沢みなと戦つた事がある」

「……中学三年の頃、みなと……」

「……！？ そうか、相沢……君はもしかして相沢みなのが妹なのかな？」

「……うん」

「やはりか、試合中に何だが、相沢みなは元気なのか？ あれ以来全く姿を見る事が無くなつた……、俺はあれ程の強さと才能を持った選手を他に知らない」

かなは少し黙つた後、不意を付くように一気に責め立てる。

「今は試合中！ 無駄なお喋りはいらないんじやないか……つな！」

語尾に力を込めながら、かなは星蹴撃を繰り出す。それを十字防クロスア御ムでガツチリとガードする三木。

「そうだ、思い越せばその奇妙な構えも、相沢みなが当時やつていた構えにそつくりだな」

「星蹴拳 連星撃！」

一撃で駄目ならば、連續で攻撃をする。しかし放たれた連星撃はかつての連打が見る影もなかつた。無論、ボクサーとしてもムエタイ格闘家としても、鍛えられた三木に勢いの無い連星撃は、回避する事に造作もない。

「だが一つ一つの技のキレはそつくりとはお世辞にも言えんな。なんだこの出来損ないの技は？」

「くうつ……！」

三木の言葉に悔しさからか、唇を噛みしめるかな。その言葉の呪縛から逃れるように、かなは大空を舞う。

「喰らええ、落星撃！」

空から落とす無数の蹴り。真っ直ぐに三木を狙つて落ちていく。

だが、余裕の笑みすらも浮かべずに、それをただ作業のように避ける。星蹴撃、連星撃、落星撃といった技を全て攻略された。かなは地面に着地し、一人息が上がっている自分に気が付く。

「ふむ、再び相沢みなと戦えるかと思い、勝手ながら期待をしたが……お前は相沢みなのが劣化コピーに過ぎん」

一度決めかかっていた心が、再び揺らいでいる事に気が付く。この世でたった一人だけ、いつまで経っても相沢みなのが幻影というプレッシャーを受けているのだ。

「コラア、かなっぺ！」

いつの間にか塞ぎ込んでいた心に、バカみたいな大きな声が響く。

「…………み…………な…………！？」

かなが声をする方を向くと、そこにいたのは相沢みなではなかつた。そこに見えたのは赤いハチマキ、響ワタルの姿だつた。

「テメエ、かなっぺ！ 何を中途半端な事してんだつ、お前に何があつたのか、何を考えてるのかとか、オレサマはそんな事は知らねえ！ だけど、何があろうとお前はお前だ、相沢かな！」

会場中に響く声で、ワタルは叫んだ。

「…………あと五分。がんばつて」

桐華も応援した。気づけば体を支配する緊張は、全てでないにしろ無くなっていた。

(……ワタル君の言う通りだ。今は中途半端な事は駄目。できない事はできない、やれる事をやるの。良いね、かな！？)

再び構えなおした星蹴拳の構えは、いつもの構えだつた。

残り時間あと四分四十秒。

それは全力オーラ！

「かなつペ！ あと四分ちょっとだ、行けえ！」

周りの大歓声に負けない、大きなワタルの声が響く。その声と共に、かなは三木に向かつて飛び出す。

（わかつていても……他人ひとが作り出すみなみの幻影が、私を縛る……）  
「先ほどと比べ速度が少々落ちたな……相沢みなはもつと速かつたぞ！」

三木は高速の左拳を、かなに向けて放つ。いつもの構えに戻つた為か、引き気味に構えている影響なのか、その高速の拳を完全に見切る。

（二人で『ゴールしよう。そう誓つた……かなのは星蹴拳、みなみの星蹴拳と……どつちだけをやつってても駄目だし、どつちが消えても駄目なんだよね……）

左拳を避けて、その交差法でカウンターの一撃を見舞う。しかし三木もこれを見切っていたのか、咄嗟の動きなのか、このカウンターの左足での蹴りはきつちりと防御されてしまう。

「ふん、威力においても先ほどの方が……んー？」

「うああ……あああああ！」

（かなとみなみの星蹴拳を合わせた新しい星蹴拳……それを、創る！）  
氣合一閃。カウンターの左蹴りをジャブにして、軸足に使つた右足から空中での星蹴撃を見舞つた。

「ぐ、つは……！」

その一撃は三木の土手つ腹に深々と突き刺さり、大きく後退する。空中で放つた為、攻撃したかなも地面へと叩きつけられるように落ちる。

「……凄い」

「ああ、やべえな……！」

その攻防を見て最も驚いているのは、かなの技を知つてゐるワタ

ルと桐華の一人だつた。いや知つてゐるからこそ余計に驚いたのだ。

「……本来、星蹴撃のような技は、蹴り足よりも軸足が要となる技。その技の性質上から考へても、星蹴撃を空中で放つのは良い方法とは言えない」

「それを最初の蹴り足である左足をジャブのように使い距離を計り、そしてその蹴り足を軸足へとシフトさせる。……つまりは地面は相手、軸足に使つた右足も蹴り足にシフトさせたつてか。つたく、オレサマとした事がアイツ（かなつペ）の呼び名を忘れてたぜ……」

「……呼び名？」

「ああ、あいつは紛れもなく、天才蹴撃少女だよ！」

三木は相当応えたのか、その場にもんどうつて苦しんでいる。かなも何かを感じたのか、倒れたまま全く動かないでいる。いつの間にか、歓声も二人を応援する声から、かなを応援する声に変わつていた。巻き起こる「かな」「ホール」に、かなは何かが開いていく感覚を得ていた。

「残り時間三十秒！」

黒子によつて知らされる残り時間。予選は十五分の時間制限がある。

「あと……三十秒……！」

震える体に鞭を打ち、かなは三木に向かつて走る。時間を聞き、三木もダメージが残る体を押して立ち上がる。

「勝つんだっ！」

ロー、ミドル、ハイ。回し蹴りに踵落としなど、思いつくままに蹴り技の集中砲火を浴びせる。

余程のダメージが三木の体を支配してゐるのか、先ほどの余裕の表情とは一変、防戦一方になる。

「3、2、1！」

会場が一体となつてのカウントダウン。そして。

「そこまで！ 時間切れ引き分け終了！」

わずか十五分だったかもしれない。しかしここにいた人にとって

は長い十五分間が終わる。中堅戦の結果は時間切れ引き分けに終わる。

たつた今戦っていた二人は、お互に息を荒げていた。攻めも攻め疲れ、守りも守り疲れ。お互いにたつたわざかの攻防だったが、肉体的にもそうだが、精神的な疲労困憊が目に見えていた。

「……はあ……はあ……！」

「……どういう事だ。最後の最後で放ったあの技は、相沢みんなのものなのか？ 相沢みなは俺の知らない間に、新しい技の開発に成功したのか？」

「新しい技の開発なんてしてない。……みなは、もういない」

冷静な表情を崩さなかつた三木は、驚きの顔を見せて言う。

「もういないと！？ ……ま、まさか、いや……すまなかつたな。一番辛いのは君だ」

「いえ、強いみなを知つていてくれる人がいて、微妙に辛いけど、嬉しかつた」

「…………俺の敗因は、相沢みんなの幻影に縛られ、それを克服できなかつた事。そして、相沢かなに負けた事、か」

三木は静かに“ディーパー”“ディーパー”的控えベンチがある場所へと下がつていく。

「強かつたぞ、相沢かな！ 君の次の試合に期待する」

それだけを言い残し、三木は振り返る事もなく歩いていった。かなは、自分でも気が付かない間に、三木に頭下げていた。そして、かなもマックスハートのベンチへと戻つていく。

「お疲れ、かなつペ！」

「…………お疲れ様です」

「…………ふう。あとがとう！ ごめん、何となく予感はしてたんだけど、勝てなかつた……」

複雑な表情をしながら、俯き気味に話すかなに、ワタルは努めて明るい表情で接する。

「バカ、でも負けてもいないだろ？ かなつペのミスは次のオレサ

マが補う。でもこいつから先でオレサマがミスしたものは、かなつぺが補ってくれる。オレサマ達は仲間だ、チームだ。そんなんでも……良いんじやねえか？

ワタルの言葉に同意を示すように、桐華も小さく頷いていた。

「……うん。ありがとつ……」

流れる程でもないが、自然とかなの目にうつすらと涙が出ていた。「ま、それに仮にも無い話だが、例えばオレサマが大将戦で負けたら、こっちも向こうも、完全に一勝一敗一分けになる。そうなつたらサドンデスって形で、最後に時間無制限の一本をやるからな。そうなつたらトーコかかなつペ、どっちかにラストマッチの指名が飛んでくるかもしんないぞ？」

「……プレイヤーは任意で選べないの？」

問い合わせたのは桐華だ。

「ああ、サドンデス戦は大会本部…………てか黒子が独自で決めるらしいからな。例えば大将戦を戦ったプレイヤーと、先鋒戦を戦ったプレイヤーとでは、前者の方が体力面で不安が残るしな」

「運が悪くても良くてやるつきやないって事かな。全力で！」

かなの言葉に、ワタルは大きく頷き応える。

「へつ……わかつてきただじやねえか。そういう事だ、状況も糞もへつたれもねえ、やるつきやないのを全力でな！」

そうこうしている内に、中央にいる黒子から呼び出しがかかる。大将戦が始まるのだ。

「さつて、とつととオカマ野郎を倒して次へ行こうぜー！」

「ファイト、ワタル君！」

「……がんばれ」

見ると既にディーパー・ディーパーの大将の芹川はいる。優雅に派手な扇子を仰いでいる。更に手には、まるで蛇の柄にも似た鞭を持っている。恐らくはそれが、芹川の武器であろう。

ワタルも愛用の赤いハチマキを一発巻いて気合を入れる。そして木刀一本を片手に、バトルリングへと向かう。

「よお、待たせたな。一回戦では出番が無かつたからな、暴れさせてもらひや?」

「あら、響ワタル。貴方、普段はおちゃらけて軽い印象があるけど……今の貴方、素敵よ」

「お前に好かれたつて嬉しくはないぞ」

「オホホ……そう。でも、本当に今の響ワタルは素敵よ。全身からオーラがビンビン出るもの。あの王者や天才とは違う毛並みよね。扇子で顔半分を隠しながら、品定めでもするような嫌らしい目つきで言い放つ。

「へつ、王者オーラに天才オーラか。なら覚えておけよ、このオーラはその王者や天才を超えていく……さしづめ全力オーラだ!」

ワタルは力一杯の握り拳を作りながら、その言葉を高々と言ひつ。

「全力オーラ……覚えておくわ。でもそのオーラもここで私に食べられたらそれでお終い……蛇は案外と丸飲みしちゃうものよ?」

「丸飲みはできねえ。こんなでつけえオーラを飲んだら、テメエの腹を突き破るぜ!」

二人の気合を見切つてか、黒子が高らかに右手を挙げて宣言した。

「それでは、予選第三回戦。マックスハート対ディーパー・ディーパーの大将戦 始め!」

前一試合の激闘を終えて、遂に大将戦が始まる。

## 舞う木の葉。舞うオカマ！

始まりの合図。それは第三回戦、マックスハートピティーパーティーパーの、大将戦が始まった合図。

その合図と同時に、一瞬にして芹川の懷へと踏み入る。そのままに止まらぬ高速ダッシュは、全試合の三木を遙かに超えたダッシュ力である。

「あら……」これは驚き。響ワタル、貴方うちの三木ちゃんより全然強いのね」「

「つたりめえだ！ オレサマは……」

懷に飛び込み、左腰周辺に木刀を置き、まるで抜刀術のような構えをとる。

「優勝する男だぜっ！」

そしてワタルらしい力任せの攻撃を繰り出す。繰り出す攻撃は、左から右へ薙ぎ払うように走らせる。

「さすが響ワタル。そう言ってくれなくっちゃね」

芹川はワタルの攻撃を、扇子を用いてまるで風を切るように、右から左へ仰ぐ。

ワタルの木刀は、まるで芹川を通り抜けたかのように、空振りしてしまう。

「なつ……！？」

「オホホ、言つてなかつたけど……私、強いわよ？」

まるで木の葉が風に飛ぶように、優雅に後方へ飛び、右手に持った鞭を展開させる。蛇の柄のよつた鞭は、展開させると正に蛇そのものにも見える。そして芹川はその鞭をワタルへ向かって放つ。風を切りながら、飛ぶその鞭の音が、まるで蛇の鳴き声のように聞こえる。

「つあつ！」

鞭による攻撃は、ワタルの左腕から背中にかけて、巻き付くよう

に命中する。

「オホホ、皮膚の表面が焼けるように痛いでしょ？ そりやつてジワジワと蛇の毒にやられちゃいなさい。そして、弱つたところで美味しく食べてあげるわ」

「……蛇の毒、か。へへへ、ははは、はははは、はーはははははははははっ！」

ワタルは一人、大爆笑をしている。会場中が何事かと、ワタルに視線を集中している。

「……何を笑っているの、響ワタル。全力になりすぎて頭でもおかしくなったのか？」

「いやいや、オレサマの頭は正常だぜ。ただな……もつと強く、そして毒のある蛇に遭遇してつと、な」

「気にくわないわね、響ワタル。仮にそうだったとしても、貴方はここにで私に食べられるの」

言葉通り、やや口調に苛立ちを込めながら、ワタルに向かつて鞭を振るう。その木刀とは全く違った軌道で飛んでくる鞭だが、この芹川の攻撃を難なくはじき飛ばす。

「だから言つてるだろ？ お前の蛇はきかない、その鞭で俺を倒したかつたら速水仁以上の蛇を用意してくるんだな！」

「……なるほど。響ワタル、貴方は私と遭遇する前に、良い経験をしたようね。でも逆を言わせてもらえば、それは私とて同じ事よ。勢いは確かに侮りがたいけど……響ワタルのように大振りな戦い方をする人間なんて、いくらでも見てきたわ」

苛立つていた口調は、会話と共に冷静になつていいく。恐らくはこれまでの戦いの経験を、思い出しての事だらう。予選といえども、仮にも三回戦のチーム。かつての最高戦績はベスト8に入った事もある。そうは見えないが、芹川という人間は、戦いにおける感情の制御を心得ている。

「……堅つくるしい奴だな。そんな事はどうでも良い話さ。戦場では、理屈うんぬんよりも、強かつた奴が勝つ……違うか？」

「ウフフ……いえ、全くその通り。だからこそ貴方は私には勝てない。この大将戦を勝ち、サドン・デスをいただき、次に進むのは私達よ！」

再び鋭く鞭を、ワタルに向けて振るう。ワタルも負けじと鞭を木刀ではじいて、それと共に一気に接近する。

「でもそれも違う。ここで勝つて次に進むのは、オレサマ達だ。お前らも踏み台にして、もつと前に行くぜ！」

再び懐に入り込んだワタルは、先ほどの攻撃と違い、今度は斜め右上から左下にかけての袈裟切りを繰り出す。が、その袈裟切りも空を切るようにならず、空振りしてしまう。そしてワタルが芹川を見る頃には、木の葉のように舞い後方へ飛び、鞭の適正距離から攻撃を仕掛けてくる。今度ははじかずに、ワタルも後方へ大きく飛び、鞭も届かない位置まで下がった。

「あら、怖じ気づいたの？ そんな所じや鞭はあるか、剣なんて届くわけがないわよ」

「わあーってらあ、そんな事っ！」

距離を大きく離したのは、一度間を置いて考えたかったからである。

（本当に木の葉みたいな奴だ……あいつのオカマキャラからは想像し難いけど、良い言い方をするなら、舞子のように舞つて戦う華麗なタイプだ。戦い方自体は江藤に似ているな……江藤は必殺のぶつたぎりで倒せたが、あのオカマは……はてさて）

「考えているのね、無理もないわ。正直私も考えているもの。お互に攻めては捌かれの攻防……決め手が無いものね」

ワタルは今の言葉から、あらかたの戦略をたてた。お互に決め手がない、という言葉。嘘か誠かは定かではないが、仮にこれが本当だとしたら、不意打ち効果でぶつたぎりは効果があるといえよう。いずれにしてもパワーの面では圧倒的にワタル有利。技術の面では圧倒的に芹川が有利。ワタルは当たれば一撃だが当たらぬ。芹川は当たっても必殺の一撃が無い。戦局は互角のように見えるが、

倒すか倒されるかという観点で見れば、倒せる技がある分だけワタル有利と見るべきであろう。

「よつしやつ、やうないで後悔するよつは、やつて後悔しようじやねえか！」

ワタルは自分の両頬を両手で強く叩き、ワタルなりの気合入れをする。

「それに……ヒロキも待つてやがる事だしなつ！」

「ヒロキ……？ まあ、どうでもいいわ。覚悟は決まつたようね、

響ワタル」

「おうよー、馬鹿と言われようと、オレサマの戦い方はこうだぜ！ 木刀に持てる力を注ぎ込みながら肩に担ぎ、腰を深く落とし重心を低く、そして全体重を地面に乗せる。

「……す、凄いわ、響ワタル。今の貴方のオーラは特大級よ！ ……でも技はどうかしらね」

「へつ、技も特大級だぜ！」

ワタルは大きく飛翔した。下半身に溜めた力で一気に飛び上がる。上半身では文字通りぶつたぎる為の力をまだ蓄積している。

「なつ、なんて体のバネしてるのよ、人間技じやないわ！」

あまりの飛翔距離に、冷静な表情が一変、一気に驚き慌てふためく。芹川は右手に持つ鞭を、がむしゃらに振りまくつた。しかしこだ飛んでいるだけではない、その必殺のぶつたぎりは、移動中はそのまま体当たりでもしているかのように、体に当たる鞭をはじき飛ばしていく。

「いつてえ……けど。当たれよ、必殺のお、ぶつたぎりいい！」

前に進む事により生まれる突進力。山なりに飛び事により生まれる落下の慣性。そして持ち前のバネと鍛え抜いた肉体から繰り出されるパワー。これら三拍子が揃つての必殺のぶつたぎりである。

「なるほど、攻撃に特化した技ね。しかも当てる事を念頭に置いてないで、当たった時の事を考えた一種の博打技ね……。さしつづめ大振り台風つてところよつ！」

芹川はぶつたぎりの軌道に合わせ、左手の扇子を舞わせる。これ以上ない程の轟音と共に、空振りをせられる必殺のぶつたぎり。一人豪快空振り劇を、華麗に捌く舞子。見ていた客は誰もがそう思つた。

そして相手が押した分だけ、舞うように引く。台風の強力な風により、吹つ飛ばされる木の葉だが、結局はのらりくらりと威力を回避したのだ。

「なあつ、避けやがつたな、ド畜生！」

「響ワタル、貴方は馬鹿ね。これ以上ない程の馬鹿だわ。そんな馬鹿な所がちょっと好きだけれど……舞い落ちる葉に、力任せに棒を振つたつて当たらないわよ」

「……力任せに棒を振つても当たらない！？」

「ええ、そうよ。そりやまぐれ当たりはあるかも知れないけども、そんなまぐれ当たりなんて期待するのは、三流のやる事よ」

ワタルの脳裏に何かが走つた。それは、ひらめきの閃光。

「よつしゃ！」

「ん……？ 今度は何をする気かしら？」

「へつへつへ。ぶつたぎり」

ワタルは再度、ぶつたぎりの構えで立つ。ただ一つ違う所があるとすれば、木刀を担ぐ手が、従来の両手で構えるのではなく、片手で構えている事だった。

## 勝利を掴め！

「また、ぶつたぎり？ 韶ワタル、貴方は進歩って言葉は無いのかしら……さすがに馬鹿すぎると私も貴方の事を、見放してしまつかもしれないわよ」

扇子で口元を隠し、顔は上半分しか見えないが、その口調と表情は呆れ顔である。

「つるせえってんだよ！ それに馬鹿は馬鹿でも、オレサマは大馬鹿だ。大馬鹿はただの馬鹿と違つて、何をするかわかんねえぞ？」

「……良いわ、そんなに言うのなら信じてみても良い。大馬鹿の足搔きつてやつを見せてみなさい」

芹川は右手の鞭を展開し、左手の扇子はいつでも捌けるように、優雅に舞わせている。ワタルも右手で木刀を担ぐように構えるのは変わらず、通常のぶつたぎりとは違い、左手は使わずにその左手をパーにして、照準でも合わせるかのように、その中心点に芹川を置く。その姿は若干形こそ違うが、テニスプレイヤーがテニスボールを打つ際の、左手の構え方に似ている。

現在の適正距離は、鞭を扱う芹川が有利である。ワタルが攻撃を当てる為には、再び芹川が繰り出す鞭の雨をかいくぐらなくてはならない。攻撃を当てるといった話は、そこからなのである。

「行くぜ？ ……アンタのキャラは好きではないけど、アンタとの戦いは面白かったぜ」

「もう試合は終わるつて言いたげな言葉ね。あまり調子に乗るんじやなくつてよ？」

二人の時間が一瞬の停止をする。次に動き出したのは、数秒にも満たない程の突風が吹いた瞬間だ。

弾けるように動き出した時間。距離適正が出ている為、芹川はその場から鞭による攻撃を開始する。ワタルは通常のぶつたぎりと同じく、その場から山なりに飛び出す。

「本当にぶつたぎりなのね……。なら貴方はここで終わりよ。決め手が無いと言つたのはフェイク、本当の狙いはコレ」

芹川は放つた鞭に手首のスナップをきかせ、鞭全体に捻りを加える。捻りが加わった鞭本体部分から、真っ直ぐに伸びていく。その捻りの波が、鞭の先端まで伸びた時、その姿は見る者に鞭と、認識させない姿へと変貌する。

「終わりよ、響ワタル。これが奥の手……ランスロットスネイク蛇槍！」

捻りが加わり針のようにピンと伸びた、その芹川の鞭の姿は、長さも相まってまさしく槍に変貌する。

「アンタの事を誤解していたようだ。オレサマはアンタの蛇を速水仁以下だと言つてしまつた。だけどそれは違つた、何故ならアンタの蛇はあいつとは全く違つ性質だからだ」

「……響ワタル？」

「アンタはあいつと違ひ、その技の通り真っ直ぐな奴だつて感じた。だから……オレサマの勝ちだ」

ワタルに向かっていた蛇槍は、途端にその軌道が逸れてしまう。決して逸らしたのは、芹川ではない。逸らしたのは、ワタル本人である。

「響ワタルっ、貴方！」

空いている左手で、自らが額に巻いていたハチマキ。これを蛇槍に巻き付け、軌道を逸らす。

「そ、そんな馬鹿な事……あ、まさか！？」

「そう、そのまさかだ！ ただのハチマキなら、簡単に巻き付いたりはしない。けど汗を吸つてビショ濡れになつた生地は、案外と張りつくもんだぜ？」

蛇槍に巻き付いたハチマキを、力一杯に引っ張る。力の勝負では、ワタルに分がある。芹川は取り上げられたように、その蛇槍を手放してしまう。

「左手はこうする為のものだつたのね！？ でもまだ私には扇子がいるわ。両手だらうと片手だらうと、ただ大きく振り回す攻撃なん

て捌いてみせるわ」

「へへへ。半分正解、でも半分ははずれだ

山なりに飛んでいたワタルは、芹川の目の前に着地する。

「残った左手は……勝利を掴む為のものだ！」

「あつ……！」

ワタルは左手で、芹川の胸元を掴んだ。こうする事により、芹川が後方へと逃げる事を防ぐ。元よりパワーに関してはワタルの方に圧倒的な分がある為、一度捕らえてしまえば、逃がす事はほぼ無いと言つて良い。

ワタルは芹川を狙つていたぶつたぎりの軌道を、手に持つ扇子に  
変えてはたき落とす。そして掴んだ胸ぐらを突き飛ばすように離す。

病

「アガハ、しゃなくて女たてたのが

突き放されるように、後ろへと倒れた芹川はまるで、かよわい少女、といった雰囲気が立ちこめている。サラシを巻いている為か、特に目立たなかつたが、胸ぐらを掴んだ際にワタルが触った物体の感触が、左の手の平に色濃く残っている。

「言つたかしら？」

「だったらそのオカマ口調は一体なんだ！？」  
超典型的なオカマ口調しきりでさつてからに…」

「そういうオカマが大好きな女の子もいるって事よ、人の趣味に他人が口出しする事ではないわ」

「いや、そりやそつだけど……」「

「名前だつて芹川香澄つていう女の子の名前でしょ？……それよりも、こんな事はどうでもいいわ。さっきの胸ぐらを掴んで荒々しく私の事を突き飛ばした貴方……肉食の獣つて感じで素敵だつたわ」

うつとうと恍惚の表情を浮かべている芹川。

「それに、戦っている最中に貴方の汗が私の肌を打つの……ああ素敵」

「ヒィイイイイイ……お前は変態かっ！」

その場の雰囲気に流され、ワタルは芹川にツツツツミを入れる。

「あ……痛い……」

「あ、悪い」

「ううん。良いのよ。今のお貴方の私を物みたいにひっぱたくその攻撃性……もつと私をひっぱたいても良いのよ？」

「いや、ひっぱたくつて……あれはツツツツミだ。それにオレサマはそんな趣味はねえ！」

「そのオレサマ主義。ああ良いわ……やっぱり男は女をひっぱたいてでも言つ事を聞かせる強引さが無いと……」

もう収集がつかなくなっている芹川から離れる為に、ワタルは黒子を捜す。

「おい、黒子！」「こいつは武器を持つてねえし、戦う意志も無いだろー？」

「う、うむ。戦意喪失と見なし、大将戦は響ワタルの勝ちとする！」  
ようやく出された勝利宣告。会場からは歓声もあるが、笑い声が多かった。

止まらない芹川を止めて、三木と純が来てくれる。純になだめられるように、控えベンチへと戻っていく。

「大したチームだな。マックスハートは……」

その場に残った三木が、ワタルに話しかけてくる。

「先鋒戦を戦ったあのガンナー。それに相沢みなの意志を継ぐ相沢かな。そしてそれを束ねるリーダーの響ワタル、か  
「何、お前らもなかなか曲者揃いだったぜ。良い経験をさせてもらつた、ありがとう」

「ああ、次の試合もがんばってくれ。微力ながら応援させてもらつ」  
ワタルと三木はガツチリと握手をかわし、お互にその場を離れ

た。

控えベンチに戻ると、かなと桐華が向かえてくれる。

「お、ラッキースケベの『帰還だね！』

「ラッキースケベ言つな！」

「……ワタルのスケベ……」

「いや、トーコ、むしろオレサマは被害者だぞ！？」

一人に茶化されながら、帰り支度を済ませる。ディーパーディーパーのメンバーは既に姿は無く、中央のリングでは、今日の一回戦目が始まろうとしていた。

「……よっしゃ、帰るか！」

「うん、帰るわー。」

「……うん」

予選第三回戦。対ディーパーディーパー戦は三戦二勝一分けにて、マックスハートが突破する。

そして帰りの電車の中で、ワタルは「この言葉をもらした。

「…………やべ、次の対戦相手の事を調べるの忘れてた……」

電車はそんなワタルの意志とは関係なく、ただ走る。線路が続く限り。

## 本当の意志は！

人里離れた豪華な彩りの、館内にそれはあった。豪華な外装とは裏腹に、まるで剣道の道場のような内装、所々がよく使い込まれておりお世辞にも、綺麗とはいえない作りである。

「ふむ……想像以上だな、君の実力は……。どれ、ヒロキ君。今度はこれだけの数のターゲットを見事かいぐぐる事ができるかな？」

その道場にいたのは、ヒロキと謎の老紳士だ。老紳士はリモコンで操作し、数十個にもなるターゲットとなるであろう筒状の物を、ヒロキに放つ。まるでバッティングマシーンのような形状の機械から放たれる、無数の筒の速度はかるうじて田で追うのがやつとの速さである。

「さあ、ヒロキ君。この弾幕をかいくぐり、ワシが持つこのリモコンを見事、はたき落としてみせてくれ！」

ヒロキは手に持つ木刀を構え、低い姿勢で老紳士を田指す。この時に特筆すべき事は、ヒロキの動きとその速度である。かつての面影がない程の身のこなしと速度で、筒状の物を避け、あるいは木刀で迎撃していく。それでいて前進していくスピードは全く変わることなく、余裕の表情で全てを捌いていく。

そしてあつという間に、老紳士の持つリモコンをはたき落とす事に成功する。

「なんと……！？ 最大レベルの魔力式強化マシーンを難なくクリアするとは……」

「はあ……、でも本当に強くなったんですか、これで？」

「馬鹿を言つてはいけないよ、ヒロキ君。今の君のレベルはあの少年と互角か、あるいはそれ以上のものになっているのじゃぞ。当初の予定はきつちり一週間で強化するつもりじゃったが、今日は七月二十七日で五日間の強化で全ての修行を終えている、まだ一日残してこれは凄い事じやよ、ヒロキ君」

「そつなんですか、今の状態で兄貴と互角か、それ以上？ とても実感が湧かないんですけど…… それにここに来てからの五日間、基礎的な体力測定や、今みたいなバッティングマシーンのよつな物を使つた修行しかやっていませんでしたよ？」

老紳士は滑稽だというように、一人で笑つてゐる。

「魔法を使つたからな。通常のトレーニングで同じ事をしても、実力が上がる事はせんよ。それにワシは魔法を使つたが、キッカケを与えたにすぎん。そこから強くなるのには一種の才能が必要なのじや。才能の無い者はいつまで経つても弱い。クズ同然じやよ…… それに引き替え君は、才能の塊じやよ、君は…… ワシの最高傑作じや！」

「……僕にはその魔法つていうのがわかりません。この現代において魔法とかつて架空の設定で……」

老紳士はヒロキの言葉を遮るように、自分の言葉を言つ。

「魔法はつ、庶民共が知り得ないだけで、この世界は魔法で満ちあふれておる。魔法が架空の設定？ いやいやそれは違つ、魔法は、実在するのじやよ」

不思議な目つきでヒロキを見る老紳士。何かに誘われるような錯覚を覚え、それを振り払つように目線を離す。

「ふむ、信じられないか。では身近な所でいくつか教えておいてやろう。まずは君のチームメイトの一人が魔法を使つているな」

ヒロキは自身の記憶を遡り、思い当たるフシがある事に気が付く。「そしてヒロキ君の」両親、君がどうしてそこまでの潜在能力を持つていたのが、わかるな」

「父さんと母さんが！？ …… 一體貴方は何なんです？」

「ヌフフフ…… ワシはアバター。但し言えるのはこれだけじや。この世には数人のアバターがある、そしてワシはその数人の中の一人じやよ。但しワシはその中でも嫌われ者のアバターじやがな」

「……アバター……。わかりましたアバターさん。修行をしていただいた事には素直に礼を言わせていただきます。ですが僕とアバタ

一さんはこれ以上関わる事はありません。身勝手かもしれないけど……」

老紳士から感じ取れる不思議な雰囲気。その雰囲気の正体はわからぬが、嫌な感覚がヒロキを支配している。その感覚にめずらしくヒロキが他人に対し、敵意の目を向けている。

「構わんよ。君がそうしたいのならワシは構わん。だが君の感覚はワシを求める。下界に下りて戦い続ければ、嫌でも思い出す。君は一体何の為に強くなりたかったのだ!? ..... ワシは君の為にあと数日は待つ事にしよう。だがこの機会を逃せば次にワシがここへ来るのは何年か先じゃ。わかつてあるな、ヒロキ君?」

「…………ありがとうございました」

軽く一礼をして、ヒロキはその部屋から、その館から出て行く。目指すはヒロキを待つマックスハートメンバーの元だ。

「来るよ、君は。君の本当の願いはあの少年と優勝を目指す事だったのかね? それは違う。君にとってあの少年は『超えるべき壁』だったはずじゃ。その感情はいつしか少年への『憧れ』へと変わつていった。わずか五日間の付き合いでじやつたが、ワシにはわかるのじやよ。君はワシと似ている……君は……再び明確な意志を持つてワシの前に現れるじやろう。絶対にな」

七月一十七日。ディーパーディーパー戦から一日後。

ワタル達、マックスハートメンバーは、大会本部からの連絡がいまだに無いという事で、息抜きにピクニックをしていた。場所は相変わらず、学校の屋上である。

「さあ、どんどん食べてほしいかな!」

シートの上に、かなの作った色とりどりの弁当が並ぶ。

「……相沢さん、凄い」

「おお、さすがだな、かなつペー。これなら良い嫁さんになるぞ!」

「良い嫁さん? もらってくれるかな、ワタル君?」

「いや、それはない。浮氣したらその蹴りで殺されそつだから」

他愛の無い話と、笑い声がその場に響く。天気もおおむね良好である。

すると、誰かが急ぎ足で階段を上ってくる音がする。その場にいた三人は一体誰が来るのだろうと、出入り口を見ている。そして見知った顔が姿を現した。

「やっぱりここにいた

「ヒロキ!?

そうそこにいたのは、ヒロキだった。食事を中断して、三人はヒロキの元へと集まる。

「帰ってきたよ、兄貴!」

「一週間つて聞いてたけど、早かつたんじゃねえか? それにしてもどことなく変わったな。五日間で一体何をしたんだ?」

「うんうん、見るからに強くなつたって感じかな

「……ん?」

思つままに言葉を投げかけるワタルとかなに對して、桐華はヒロキに何かを感じ取つていた。

「とりあえず三回戦は突破したぜ。次からはパワーアップした二コ一ヒロキを見せてくれよな!」

「二コ一ヒロキだなんて、それに僕自身も本当に強くなつたのか実感わかないんだよ……」

「でもどこかが変わつたぜ? どこがとは明確に言い難いけど、強くなつた感じがする。……強いて言うなら感覚が

「……感覚……。そうだ、試合に備えて色々と準備しないと、僕はこれで帰るよ

思い出したかのよ、足早に帰つていぐヒロキ。

「あ、おい、弁当は食べていかないのか? めちゃくちゃウマイぞ!

!」

「『めんね!』

来た時と同じような、階段の音をたてながら、ヒロキはトりいく。

「……ワタル。ちょっと待つて

「ん、どうしたんだよ、トーコー?」

桐華はヒロキの後を追うように、階段を下りていく。

「一体なんだってんだ?」

「さあ?」

途中から走るのをやめたのか、桐華はヒロキにすぐ追いついた。

「……川崎君!」

「ん、桜井さん。どうしたんですか?」

「……川崎君。一体誰に教わったの? 貴方に残る微かな力が見える

る

「やつぱり、桜井さんにはわかつたんですね? 僕を教えてくれた人は魔法を使つたって言つてました。それつて桜井さんの魔法銃と同じですね? そしてその人はアバターって言つてました」

「……アバター。何のアバターかは言つてなかつたの?」

「何のアバター? いえ、ただアバターとしか言つてなかつたです」

「……川崎君。私の魔法銃もアバターが作ってくれた。名前はマジックアバター。……そしてその人から聞いた事があるの、アバターは常に人間に味方をするけど、中には魔法を悪い事に悪用するアバターもいるって。そしてそういうアバターの大半は自分の名を名乗らないって……」

「……! ?」

「……川崎君。精神を強く保つて、それがアバターの魔法に対抗する手段だから」

「ありがとう……」

ヒロキは残る階段を下りる。桐華はヒロキをただ見ている事しかできなかつたのだ。

不思議絵師　一筆！

「よお、トーゴ。かなつペの弁当無くなつちやうわー。」

「……うん」

戻ってきた桐華は、何かに考えふけるように座り込む。何があつたのかわからないといった様子で、お互に顔を見せ合つワタルとかな。

「なんだ、何かあつたのか？」

「かなかが知るわけないでしょー。」

「そりやそうだ」

桐華は突然立ち上がり、鋭い目つきでワタルとかなを見る。

「ど、どうした、トーゴ？」

「……ごめん。先に帰る」

返事を待たずに、桐華は走り去つていつてしまつ。二人は桐華をただ見送つた。

賑やかだつた空氣は一変し、静寂に包まれる。一人とも無言だったが、ワタルは何事も無かつたかのように、弁当の残りに手を付ける。

「ちょっと、ワタル君」

「何だい、どうした？」

「今、シリアスな雰囲気。お弁当をバクバク食べてる感じじゃないでしょーに！」

「ああ、そりやわかつてゐるけど、シリアスな雰囲気つて苦手でな……それにー……ん？」

ふと、目の端に何かが入る。そこをよく見ると、遠目だが小柄だとわかる女子生徒が視界に入る。だがそこに映つたのは女子生徒だけではなかつた。

「女の子……それに……ぞうさん！？」

「はあー？」

ワタルの突然のその言葉に、素つ頓狂な声をあげてしまうかな。

「いや、あそこにさ、いるだろ？ おーい、お前！」

屋上の人目に付かない端の端。文字通りの端っこに大声で呼びかけるワタル。

「つ……！？」

呼びかけられた女子生徒は、余程びっくりしたのか、大きく体を硬直させる。そしてその生徒の目の前にあつた白い紙らしきものを、乱暴に丸めてしまう。

「あれ、消えた……？」

女子生徒が紙を丸めた瞬間、その場にいた小さな像らしきものは煙の如く消えてしまう。そしてワタル達に目を合わせないようになり、まるで小動物が逃げるかの如く出入り口に走り込む。小動物という例えがふさわしい程の小柄な少女。やや茶髪がかつた髪の毛を髪留めで留めている。ふわふわした印象のかわいらしい少女だと、ワタルは一目みて思う。

「あ、おいつ！」

「ごめんなさいっ、勝手に入つて、もうしませんからっ！」

ワタルは少女の手を、極力優しく掴む。たつたこれだけの事に、少女の表情は脅えている。

「別に何もしねえよ。オレサマ達だって勝手にここ使つてるんだから

「うう……！」

それでも少女は脅えた表情を変えずに、やはり小動物のように体を小刻みに震わせている。

「ほら、ワタル君つてやっぱりおつかないからねえ」

「なんだと、かなつペ！」

「ほらほら、そういう所とかね」

いつまでも脅えられているワタルに、心底面白いと思つたのか、かなは腹を抱えて笑つている。

「えつ……響、ワタル……さん？」

「ん……？」

少女の震えは止まっていた。ワタルはかなに気を取られて、少女の腕を放してしまった。

「ごめんなさい！」

勢い良く、少女は階段を下りていく。

「……今日はなんとも、慌ただしいな」

「そうだね。なんか階段の使用頻度がやけに高い感じかな」

この田の慌ただしさも相まり、弁当の残りを処理した後、お開きになる。

私の名前は織部結衣。おりべゆい何の変哲も無い、東京の高等学校に通う高校一年生です。

何の変哲も無い、といつても、それはあくまで外見上の事。私にはある時から、その世界に無かつたものを存在させる力、正しくは具現化させる力を持ちました。

この力を手に入れた時期、覚えがあるのは小学生低学年の時です。この時期には既に具現化せる力はあったのです。しかし明確につ、どこで、どういうふうに、手に入れたのかは全く思い出せない状態です。

私は小さな頃から、絵を描くのが好きでした。この絵を描く事も、『力』と同じでいつからなのかは、わかりません。ただ一つ言える事は、絵を描いてる時が私の全てであつた事。私の頭の中の空想を絵にする事。それが大好きだったのは覚えてます。いつからか手に入れた具現化する能力を、私は自分の絵に使ってみる事にしました。小さな私にとっては一つの大きな大冒険でした。

「ぞうさん、ぞうさーん」

初めてそれを試した時は、少しの怖さがあつたけど、鼻歌交じりで楽しかつた。

そして私は自分で描いた絵を、具現化させる事に成功したのです。それから私は、両親に買ってもらつた、ぬいぐるみなどよりも、自

分で描いた絵を具現化させた友達と遊ぶ事が多くなりました。

私は小さな頃から極度の人見知りで、当時から友達と呼べる女の子の友達はいなかつたし、男の子の友達なんて手の届かない夢物語でした。でも私の描いた絵は、私を裏切らない。いつまでも、これからも私と一緒にいてくれるのだと。

時が経ち、私も小学生中学年へと上がりました。この時期になると私の人見知りもそれなりに影を潜め、数人の友達ができました。ある時、教科書に落書きをする遊びが流行った時に、ある一人の女の子が言いました。

「私の教科書にみんなの絵を描いてみて！」

私を含めた数人の友人は、上手いなり下手なり笑い合いながら、教科書に落書きをしていったのです。

勿論、その落書きをしてしまう事によって、私の能力が知られてしまふ事も考えていました。しかし、具現化能力は、私が「望む事」によつてその力が作用されると、推測しています。つまり、私が望みさえしなければ、絵が具現化する事はない。幼いながらに、私が推理した事でした。

しかし、そんな私の考えは容易く崩れ去る事になりました。

「えつ……ちょっと何これ？」

「織部ちゃんの描いた、絵から、え、何で？」

そう私の考えは甘く、私の描いた絵は教科書の上で具現化してしまつたのです。その場にいた友達達は突然出てきた、私の絵の具現化したモノにびっくりしていました。一瞬で終わつたと脳裏によぎりました。こんな光景を見て、私を友達のように扱ってくれるとは思わなかつたからです。ですが、私のそんな考えは再び良い方に裏切られたのでした。

「やだつ、これ、かわいいよ！」

「絵なのに触れるの？」

小学生の中学生年。そんな年頃であつた事も手伝つてか、私の能力は受け入れられました。そこが賑やかになり出すと、クラスメイト

達は、ほんの一瞬で集まりだして、私は瞬く間にクラスの人気者になりました。

この集まりを見て、先生が何事かと確認をしにきました。さすがに、これはいけないと思いましたが、時は既に遅し。先生はすぐそこまで来てしました。

「先生見て見てっ、絵が本物になるんだよ！」

「絵が本物！？ おいおい、先生に嘘はついてはいけないよ。それに教科書に落書き、あとで職員室に来なさい」

「どうして、本当にここにいるのに……」

友達ががつかりした顔で、私が描いたモノを触っていました。確かに具現化されている、それなのに先生には見えなかつた。つまりは大人には見えないという一つの結論が出ました。

「まあいいや。先生には見えるけど、私達には見える。私達だけの秘密だよね！」

「私達だけの……秘密……。うんっ！」

私達だけの秘密。その言葉が友達の少ない私には、くすぐつたくなるような嬉しさを感じました。

しかし、そんな楽しい一時は、長くは続かなかつたのです。

## 不思議絵師 一筆！（前書き）

注意：この話の内容は、貴方にとって嫌な事を思い出すかもしれません。要素で満ちています。閲覧の際は、この注意して閲覧してください。

## 不思議絵師 一筆！

時が経ち、小学生高学年になつた時の事です。

私の具現化する絵は、少しづつですが良いように見られなくなつてきたのです。中には私の力だけではなく、私の事を影で悪く言う人も出てきたのです。その時期の私は、それに耐えられずに、泣き続けていた思い出だけがあります。

「結衣ちゃん、みんな羨ましいから、文句言つてるだけだよ」「泣いてばかりの私に、友達の女の子はいつも励ましてくれていました。

しかし、悪い噂は一度流されると、一瞬で広まり続け、いつの間にか私の周りには人がいなくなつていきました。また数人の友達との学校生活が始まりました。私達はいつも、私が具現化した絵と遊びました。

ただ一つ心を痛めた事があります。それは私の周りにいた事で、数人の友達もグループから疎外された事です。

「ごめんね……私のせいで、みんなまで仲間はずれにされちゃつて……」

「そんな事は気にしなくて良いよ。私達、結衣ちゃんと遊ぶの好きだもん！」

その言葉がとても嬉しかったです。やつぱり私のせいで、という氣もありましたが、それよりも友達のその言葉の嬉しさが勝っていました。私の具現化する絵を喜んでくれる子は、今では少なくなつたけど、私にはまだこんなにも素敵な友達がいるのだと、改めて知りました。

それは私が小学生五年生だった時の事でした。

そして時の流れは早いもので、私は小学生六年生になりました。この時期になるとクラスメイトの仲間はずれは明確な虐めへと変わ

つていきました。私達は休み時間になると、教室から追い出される  
ような陰湿な虐めをされるようになりました。

「ねえ、結衣ちゃん。図書室に行こう。あそこなら図書室の先生も  
いるし、大丈夫だよ、きっと」

「……うん……」

私達は逃げるように、図書室へと移動しました。そこにいる人達  
は、とても虐めをする事とは無縁そうな人達で、その雰囲気はと  
ても落ちついていました。図書室の先生も、とても優しくて、私達  
は休み時間になればすぐに図書室へと移動をするほどになつたので  
す。

図書室へ移動をするようになつてから、約半年が過ぎた日の  
事です。

「……あれ、他のみんなは？」

「あ、うん……なんか用事があるからって、来ないんだって……」

三、四人はいた友達は、いつの頃からか、図書室に現れなくなり  
ました。私の友達は、いつの間にか一人だけになつていきました。  
「大丈夫だよ、結衣ちゃん。みんなが来なくなつても、私はちゃんと  
ここにいるよ！」

「……っ、うん、ありがとう！」

本当に嬉しかった。その言葉を聞いた時に、図書室で、私は人の  
目も気にせずに泣いていました。周りの子も私を見ていたし、先生  
も心配して様子を見に来ました。でもこれは、悲しい涙ではありま  
せん。嬉しい涙です。

それ以来、小学校を卒業するまでの残りの半年間を、私達は親友  
のように過ごしていました。

ただ、卒業も間近だったある時の事。私にとっては不可解な  
事がありました。いつものように図書室で絵を描いていた時の事で  
す。

「あ、遅かったね。委員会の仕事でもあったの？」

「あ、うん、ちょっとね……」

「今日はね、こんな絵を描いたんだ。どうかな？」

私は絵を描いたものを、具現化して田の前に出したのです。

「へえ、結衣ちゃん、今日はどんな絵を描いたの？」

「え……あの、ほら田の前に……あるよ？」

「えつ、あ、本当だ。やだつ、私ったら田の前にあるのに気が付かないなんてね」

これが小学生生活の最後に起きた不可解な出来事です。改めて思い直してみれば、不可解な事はまだありました。それは図書室内のみんなの反応です。私は絵を具現化していました。先生は大人だから見えないにしても、図書室内にいた他の子達が、具現化した絵に気が付かないはずは無いはずなのです。気が付かなかつたにしても、半年間ずっと見なかつたはずは無いのです。

そして、この不可解な出来事の正体を、もっと早くに気づくべきだったのかもしれません。

この出来事の正体に全く気が付かないままに、私は中学へと進学したのです。

そして私にとつては、地獄を見るような日々が始まつたのでした。それは小学生の時の虐めとは比べ物にならない程の事です。小学生の時は、具体的には仲間はずれが虐めの主流でしたが、中学生になると、反抗期の鬱憤も相まって、その苛立ちの、はけ口に私が使われたのです。

「織部エ、アンタ放課後にちょっと来なよ。来なかつたらわかつてんだろうねえ！」

「…………は、はい……」

何をされるのかは、わかつていきました。でも行かないといけなかつたんです。行かないともつと酷い事をされてしまうから。彼女達は決まって放課後の女子トイレを指定します。

「アンタ見ると、ムカつくんだよっ！」

「てか、チョーキモくない？ いつも一人で絵なんて描いちゃって

れー！」

五、六人ぐらいで私を囲んでの暴力行為です。手の空いている人は口で、思い思いの言葉を乱暴に言い放ち、そしてその内の二人ほどは私の事を殴つたり、蹴つたりは日常茶飯事、いえ空氣を吸うのと当たり前の事ではなかつたのかとも思えます。

「…………うつ、ゴホッ……ゴホッ……」

ひとしきりの暴力で鬱憤を晴らし終われば、彼女達は満足げに帰つていくのです。少しの時間が経つて、動けるようになつてから、私も帰宅を開始するのでした。そして校舎を出て、校門に近づいた時です。

「結衣ちゃん……」

「あ……」

そこには小学生の時からの、親友の女の子がいました。

「結衣ちゃん……大丈夫？」

「…………うん、大丈夫だよ、平気だよ」

私は不安にさせないように、笑顔を作りました。本当は笑顔になつていなかつたけど、私の中では、満面の笑みを浮かべたつもりです。

「…………結衣ちゃん」

「本当に大丈夫だから、本当だよ？ 今日は帰るね、ばいばい」

私は精一杯に手を振り、別れ、帰宅しました。いつからか、私はその子とあまり会わなくなりました。一つの答えとしては、私が逃げていたのです。こんな虐められた姿を見たくなかつたから。それに私と一緒にいる所を見られて、その子にも虐めの手が回つてほしくはなかつたからです。

しかし私のそんな考えは、無惨に裏切られました。それは虐めグループに再び呼び出された時の事です。

「相変わらずムカつくよ、織部は、さつ！」

言葉に力を込めながら、私のお腹や背中を蹴り飛ばしてきました。痛がる素振りを見せると、喜んでエスカレートし、反対に我慢する

と、反応が無い事が苛立つのか、結局暴力はエスカレートするのです。

「「」のペンがあるからさあ、「」こつがキモチワルく一人で絵を描くんだよ」

「良いよ良いよ、壊しちゃいないよ、キヤハハハ！」

暴力を振るわれ、動けない私は簡単に、愛用のペンを取られてしましました。そしてそのペンは無惨にも、蹂躪されるように踏みつぶされ、壊されてしまいました。私は悲しんでる暇もありませんでした。その日の暴力は、いつもよりも激しく、私は私の意識を保つている事で精一杯だったからです。

「ちょっとヤバくない？ 織部の奴、もう意識が無いんじやないの……」「れ以上やつたら死んじゃうんじや」

「良いんじやない、死んじやつても？ 「」こつが死んだって悲しむ奴は『もういない』んだからさ！」

薄れゆく意識の中で、彼女の言葉はしっかりと耳に入りました。私が死んでも、悲しむ人、はいない。そんなはずはない、こんな私でもきっと悲しんでくれる人はいるはずだ。

「おつと、織部。意識が無くなっちゃう前に紹介しておくよ、私達の仲間の……だよ」

彼女が指差す方を、がんばって見てみました。もう視界はぼやけていて、一体誰なのかは確信を持つて言えませんでしたが、それは私の知った顔であり、最も信頼していた顔でした。

「ちょっと……何も、「」こつまで……結衣ちゃんが死んじやつたらどうするの！？」

「ああん？ テメエせつかく仲間に入れてやつたんだぞ、約束通りテメエが織部にトドメさせよ…」

「……結衣ちゃん……」

聞こえてくるのは、彼女達の下品な雄叫びでした。何を叫んでいるのかは全くわかりません。

「早くヤレつて言つてなんだろつー！」

「つ……！」

大きな罵倒するような声が聞こえたと同時に、私の体に最後の激痛が走り、そして私のからうじて保たれていた意識は、闇の中へと墜ちていきました。

そして本当に最後の最後。私の意識は一瞬ながら、泣き声と謝罪の声で目覚めたのです。

「……ごめん……」「めんね、本当にごめんなさい。……何回謝っても許してはもらえないかもしれないけど……」「めんなさい。結衣ちゃんとの仲を切らないと、酷い事をするって……脅されて、恐くて……だから私、こんな事……」

言葉は一部始終は聞き取れなかつたのです。最も、その時の私の頭に浮かんだのは、裏切られた、という言葉だけでした。こうして私はまた本当に一人になつてしまつたのです。

ある人を見るまでは。

## 不思議絵師 三筆！

意識不明になる程の重体となる虐めの結果、私は親の意向もあり転校という事になりました。虐めグループと「あの子」のその後はわかりません。そもそも意識が無くなつた私を、誰が病院に運んだのかもわからないのです。いずれにしても転校してしまえば、その学校の事は私とは一切の関係が無くなります。

転校した先の学校でも、私に友達ができる事はありませんでした。その代わりというべきなのか、虐められる事もありません。残りの中学生生活である一年間、人との付き合いも無いままに過ぎていき、そして私は中学を卒業しました。卒業式の日、卒業生のほとんどが友達と記念撮影をする中で、私だけがたつた一人の卒業式でした。

ただ一つ。転校してからの中学生活の中で、わかつた事がありました。それは具現化した絵の事。小学生、中学一年と通して、具現化させた絵が見えないのは、大人であるからだと判断していました。しかしそれは違つたのです。正確には純粹で信じる心が無ければ、具現化させたモノは見えないので。中学生活の中で具現化させたモノを見れたのは、たつた一人だけです。学年が上がるにつれて、私の具現化させたモノを見れる人は少なくなりました。恐らくはもう一緒に見れる人は、滅多な事では現れないのでしょうか。

そして高等学校への進学。父と母は、とても心配していましたが、将来的にも安心させる為には、高校、そして大学へと出ておきたかったのです。

それに高校になると、人間的にも落ち着きが出た為か、あるいは偶然的にもそういう事をしない人が集まつた為か、虐めをする人はいなかつたのです。虐めは無くなつたものの、小さな頃からの一つのトラウマでもあつた人見知りが、ここに来て最大の敵となりました。高校生活を送つて半年が過ぎても、私には友達と呼べる人間は

いませんでしたし、クラスメイトの人達とも喋る機会はありませんでした。

私は既に当たり前となっていた、逃げるように教室を出て、一人太陽の照りつける裏庭に立っていました。時期も六月の中旬を過ぎ、そろそろ夏の太陽が顔を出す季節。暑さにやられないように、日陰へと移動し、誰にも目につかないように、小さくその場で絵を描いていました。最近ではあまりやらなかつた、具現化をして自分の描いた絵と遊んでいました。私は何故か小さな頃から、像が好きだった事もあり、下手な像の絵を描いては、その像と遊んでいました。

「君は可愛いよね。私とは大違い……」

何も喋らない像に話しかけるのが、いつしか癖になつていました。むしろ何も喋らないからこそ、何でも話せたのかもしません。

「…………！」

すると、突然遠くの方から大きな声がしました。しばらく聞き耳を立てていると、その声の主はどんどんこっちへ近づいているようでした。声だけではなく、足音も聞こえ、足音から来るのは一人だとわかりました。近づくにつれ、声の内容も掘めできました。

「オイコラ、待てえ！」

「やだよ、だつて……僕が……！」

どうやら大きな声の人気が追いかけているみたいです。一人の声から察するに男の人でした。少しづつ近づいてくる一人に、私は見つかならないように身を潜めていました。

すると追いかけられている人が、そこを通過しました。見た目是非常に優しそうな人です。そして、それを追いかける大きな声の人が通る瞬間でした。

「あっ、ぞうさん、だめ……！」

私の描いた像は、勝手に歩き出し、今そこを通りうとしている人の前に出てしまつたのです。

「うわっ、なんだコイツ！？」

像を避ける為に、急ブレーキする音が聞こえ、その瞬間に大量の

砂埃が舞つていました。

「ケホツ、ケホツ」

「ん……？」

「……あ……！」

咳き込んだ為に、その人に見つかってしまったのです。幼い頃からの人見知りと、中学の頃からの虐めにより、私は人と接するのが恐くなつていました。できれば今も見つからずに過ぎてほしいと、切に願つていました。

砂埃が晴れてくれるとき、その人の姿が確認できるようになりました。とても元気そうな印象で、特徴的なのは額に赤いハチマキを巻いていた事です。そして手には木刀を持つていました。私は過去の体験から、その木刀で暴力を振るわれるのではないかと、心臓が爆発するのではないかと思うほど、脈打つているのがわかりました。

「……ふむ。これ、お前のか？」

赤いハチマキの人は、私の描いた像を軽く持ち上げました。

「……はっ……はい……」

私の声はひどく上擦っていました。それ程の緊張が体に走つていたのです。

「ふうん……可愛いゾウだな。でもちゃんと管理しどけよな。危うく踏んじゃうとこだつたぜ？」

「は、はい……すみませんでした……」

「おう！……さてヒロキの奴を追わないとな。今日はヒロキが弁当当番なのに逃げやがって。……それじゃあな！」

「は、はい！」

赤いハチマキの人は、ヒロキという人を追つて凄い速さで走つていきました。私はしばらく立ちつくしていましたが、体に走る緊張が取れませんでした。いえ、それどころか、ハチマキの人を見てから私の心臓は、うるさいぐらいに鼓動を刻んでいました。

「……響、ワタルさん、か」

私はめずらしくクラスメイトに話しかけ、ハチマキの人の事を聞

いた結果、その人の名前を知りました。

「織部さん、響先輩の事を狙つてるの？」

「えつ……そ、そんな事はない、です」

「うそつれ。織部さん、響先輩の名前を出してから顔が赤いよ？でも残念だよねえ、無理だと思うよ。響先輩ってあんな性格してるとから誤解されやすいけど、結構、学校人気ある方だからねえ」

その人の言葉に、少しの焦りの気持ちと、響ワタルさんが誉められて嬉しい感情があつた。

そして七月二十七日の事です。

響ワタルさんは、学校の屋上でよく昼食を取るという事で、私は響ワタルさんを待つていました。像を避けてくれた事のお礼も言いたかっただし、やっぱりもう一度会いたかったからです。それに夏休みが始まって、響ワタルさんも屋上へ来るのが不定期になつているらしいので、正直なところは会えるとは思つていませんでした。

何もない屋上で待つのは退屈で、私はいつの間にかに眠りに落ちてしまつていきました。次に目を覚ましたのは何分後かはわかりません。でもそう長くない時間だと思います。私は半ば日常になりつつある、像の絵を描き、それを具現化させて話し相手になつてもらつていました。ある程度の話が終わつても来なかつたら、帰ろうと思つていたからです。

すると遙か後ろの方から、よく通つた大きな声がしました。

「おーい、お前！」

「つ……！？」

私は急に呼ばれた為、身を固くしました。本来は入つてはいけない屋上に、入つたのが先生に見つかってしまったのだと思いました。とりあえず逃げよう、と判断し、像の絵が描かれた紙を乱暴に掴み、出入り口に向かつてできるだけ速く走りました。

「あ、おいつ！」

「『めんなさい』、勝手に入つて、もうしませんからっ！」

あと少しで出入り口に差し掛かるという所で、私は腕を捕まってしまいました。

「別に何もしねえよ。オレサマ達だって勝手にここ使つてるんだから」

「うう……！」

腕を掴んだその人は、何かを言つていましたが、既にパニックになつてゐる私には全く聞こえていませんでした。

「ほら、ワタル君つてやつぱりおつかないからねえ」

「なんだと、かなつペ！」

「ほらほら、そういう所とかね」

男の人の声の他に聞こえた、女人の声で、私は我にかえりました。何よりもその女人が言つた名前に反応したのでした。勇気を出して、私の腕を掴む人の顔を見てみました。

「えつ……響、ワタル……さん？」

「ん……？」

私の腕を掴んでいたのは、響ワタルさんだったのです。私の中でそれまで体を支配していた恐怖が、消えていくのがわかりました。

「ごめんなさい！」

気が付けば、腕が放されていて、私は流れ作業のように謝り、そして出入り口から階段を下りていきました。ある程度下りた所で、私は息を切らせながら止まり、捕まれた腕を見ました。腕にはまだ響ワタルさんの暖かさが残つているような気がして、何故だか私の心まで、温かくなつていくような氣さえしたのです。

## ワタルと結衣と……！

慌ただしく時間が流れ、結局お開きになつてから一日が過ぎ、日は変わり七月二十八日。

ワタルは昨日の少女の事が気にかかっていた。特別な感情は特に無かつたが、何故か気になつていて。

「うーん……どこかで会つたと思うんだけどなあ……」

布団の上でゴロ寝しながら、無い頭を振り絞つて思い出そうとする。一番近しい感覚といえば、桐華の時のパターンに近い。そうつまりは過去に会つているような感覚である。しかし何度も考へても、全く思い出せない上に、キッカケも見当たらなかつた。

「ええい、ヤメヤメ！」「ういつ時は外でもブラつけば何か閃くだろうよ！」

布団から飛び起き、勢い良く部屋を飛び出す。そのままの勢いで外に出ると、真っ先に自宅ポストを確認する。

「ふうむ、大会関連の連絡はまだ無いのか……」この辺のズボラな所はいけないよなあ、本当に」

ポストを確認し終わると、宛ても無く思いつくままに歩き出す。夏休みで近所の子供は市民プールが、海にでも行つているのか、思ひの外、静かなものである。時間は十時半過ぎ、この時間では人の出歩きは、それ程無いものだつた。ワタルの学校の生徒も、学校に用のある者は、もつと前の時間に学校に到着している。ワタルはひたすら一人で歩く。

そのまま歩き続けると、見慣れぬ制服を着た、女子高生らしきグループ、一、三人ほどが歩いていた。

「でさー、アタシらがやつちやまざいワケじやない、だからソイツにやらせるつてわけよ」

「チヨーウケる。でもさあ、その子逃げやがつたんでしょ？ 今さら言つ事聞くワケ？」「

「バー力。言う事聞かせるんだよ、無理矢理にでもさ。大丈夫、そこまで逆らつてくるんだつたら、またボコして半殺しにしちゃえれば良いんだからやー。」

「アンタすつこいオーー！ キヤハハ！」

聞く気が無くても、聞こえてしまうぐらいの大きな声で、その女子グループはワタルの横を素通りする。

「……いまだに、あんなのがいるんだな。それにしても女らしくない下品な、っていうか危ない会話してやがんな、こんな朝のうちから半殺しなんてデカい声で言いやがって」

そうは言つものの、その女子グループとは関係無いと判断し、ワタルも気にせずに歩き始める。結局、歩き続けるといつも通りに、学校に着いてしまう。

「つて、おいおい……結局は学校かよ、響ワタル。お前はいつからそんなに学校が、好きになつたんだってよ！」

しかし、元より宛ての無い散歩だったので、ワタルはとりあえず校門を過ぎる。校舎内はありきたりだと判断し、せめて外を歩こうとこう結論に達して、校舎周りを一周しようと考える。校舎周りの花壇には、夏の時期にピッタリな印象の向日葵が咲いている。事務員のオジサンが、花壇に水をやる為に、ホースから勢い良く水を出している。その光景がなんとも清々しい。

向日葵に見とれて歩いていると、ワタルの足に何かを踏んだような感触が残る。

「ん……？ 何か踏んだかな？」

足下を見ると、上手いとも下手とも言えない、絵に描いたような姿をした像がいる。

「何だコイツ？」

ワタルはその像を拾い上げる。何の抵抗もしないどころか、ワタルに好意を寄せるように懐いている。

「……あ、ぞうさん」

「ん……誰かいんのか？」

声のした方を見ると、そこには像の持ち主がいた。相変わらず物陰に隠れるように、小さくなっている。

「……あ、お前は昨日のー?」

大きな声で言うと、持ち主の少女、織部結衣はびっくりしたように、体を硬直させる。

「そんなにビビんなつて。別に何にもしねえって! 丁度良いから何か話でもしようぜ?」

立ち話もなんなので、ワタルは結衣の隣に、腰を落ちつかせる。隣に人がいるからか、それともワタルがいるからなのか、結衣はいつも以上に体を硬直させ、緊張していた。

「…………」

「…………」

長い沈黙だった。恐らくは五分程、何も喋らずに座っている。ワタルは空を見て、結衣はずっと地面を見ている。

「そういやさ…………」

「はつ、はいっ!—」

突然のワタルの話しかけに、気が動転して声が上擦った返事をしてしまう結衣。

「ははは、ちょっと落ち着けよ。んでさ、何で昨日は屋上にいたんだ?」

ワタルにとつては何気ない、結衣にとつては、確信をつかれたも同然な質問である。

「…………本当に『めんなさい』」

「いや、本当に怒つてないんだって、別に来たかつたら来れば良いや」

「…………はい。…………『めんなさい』。それは、言えない、です…………」

「ふうん。まあ、良いよ、言いたくないんだったら、無理には聞かねえさ」

話はそこで止まる。変わらずにワタルは空を、結衣は地面を見続けている。一人の間に再び沈黙が訪れる。今度は長く、十分間はお

互いに何も喋らない。

「そういうやさ、お前の持つてるそのゾウツて何だ？」

「えつ、あつ、見えるんですか……？」

「いや、見えるから聞いてるんだけどさ」

「そ、そうですよね、ごめんなさい……これ、私の描いた絵なんです」

結衣は白い紙に、像を描いてワタルの前で具現化してみせた。

「へえ、凄いな、まるで魔法みたいだな！」

「え、魔法……？」

「ああ、魔法。だつて絵を描いたらそれが実体化するなんて魔法じやねえか？ オレサマの仲間にも魔法使う奴がいるけど、これもこれで凄えな！」

「あ、はい……ありがとうございます」

結衣はワタルの言葉が、心の底から嬉しかった。顔も少し紅潮しているのが、自分でもわかり、何よりもしばらく出てこなかつた笑みが、自然と外へと出ていた。

「なんだ、お前笑うと可愛いじゃん！」

「えつ……！？」

「なんか会う度……って言つてもそんなに会つてないけど、いつも暗い顔してるからさ。ひょっとしたら笑わないのかも、とか思つてたけど……笑えよ、お前。笑つてる方がめつちゃ可愛いぜ？」

「え……え……あのつ」

結衣はこれ以上無いぐらいに、体が小刻みに震え、顔が燃えるような熱さを感じていた。体の中から、外に向かつて、何かが爆発しそうな感覚が結衣の体を支配している。

「それに何でお前、いつも一人なんだ？ 教室に友達ぐらいいるだろ？」

結衣の表情は一瞬で暗くなつてしまつ。

「友達は、いません。私……人見知りだから、友達できないんです。

それに……それに、中学の頃に虐められて、人と付き合う事が怖く

「……」

「……オレサマが言えた口ではないのかもしれねえけど、  
「……はい？」

「お前、戦つたのか？ 人見知りだと、虜められたと言つてゐるけど、  
お前は戦つたのか？」

「……あの、その……」

「ただ待つだけじゃ、ただ逃げるだけじゃ、道は開けない。辛いか  
もしけないけど、戦つて、戦い抜いて、勝たないと、道は開けねえ  
ぞ」

「……！」

「つむじてしまつてゐる結衣の表情は、ワタルからは一切見えな  
い。

「……オレサマ達は定期的、でもないけど、基本的に屋上でダベつ  
てる。仲間も他に三人いるけど、みんな心の底から良い奴だと言え  
るぐらいに良い奴だ。オレサマはお前にも来てほしい」

「えつ……？」

「だつて、お前の可愛い笑顔つてずっと見ててえもんな！」

無邪気な笑顔を浮かべながら言つ。そして勢い良く立ち上がる。  
「悪いな、辛いのはお前なのに、何か説教みたくなつちやつて」

「あ、いえ……」

「オレサマは響ワタル。今年のリトルウォーズで優勝する男だ！」

「私は……織部結衣です」

「そうか、じゃあオレサマはそろそろ行くわ。じゃあな、織部！」「  
ワタルは颯爽と走り去つていいく。結衣にとつては、約一ヶ月前の  
光景だつた。そしてワタルに讃められた事と、名前を覚えてもらつ  
た事で、結衣の心は満たされてゐる。

ワタルの通つた後を、なぞるよつに結衣も校門の方へと歩く。  
そして校門を過ぎた所で、結衣を呼び止める声がする。

「やつと見つけたよ、織部。久しぶりじゃなーい？」

「え、この子が探してた子なの？ キヤハハ、ウケル！」

「あ……！」

そこにはかつて、結衣に暴力を振るつた虐めグループのリーダー格の女がいた。

「ちよつち顔かして、つてかアタシの言う事聞けるよね？ 中学の時にアタシ自らがボコしてあげたんだから、さあ？」

偶然なのか、必然なのか、この出来事を見てる人間は、一人もいなかった。

声にならない叫び！

誰か助けてください。

それは少女の誰にも届かない叫び。

誰でも良いから助けてください。

少女の叫びは深い闇の中へと。

誰か私を……助けてつ！

届かぬ叫びの代わりを残す。

結衣は人気のない廃工場へと連れてこられる。そこには数人の男子と女子がいて、連れてこられた結衣を品定めするように見ている。全員が明らかに不良とわかる顔つきである。中には薬物でもやっているのではないかと思える程に、危ない人間もいる。

異様なその場の雰囲気に、結衣は自分が何をされるのかわからぬ恐怖に、身を竦ませている。何よりも自分自身の過去の体験が、頭の中でフラツシユバツクしている。今、自分をここに連れてきた人間は、人間を半殺しにしても何とも思わない人間なのだ、と。結衣はこの連中に殺される事を覚悟する。いや、そう考えた方が、これから起きるであろう恐怖より楽だつたのだ。

「早く来いよ、このクズッ！」

「…………ハツ…………！」

あまりの恐怖に、呼吸をしたくても思うように呼吸ができない。何よりも体が金縛りにあつたように動いてくれない。半ば強引に、引っ張られるというよりも、投げ飛ばされるように、不良グループのいる場所へと連れてこられる。

「おい、そのガキがテメエの言つてた奴なのか、コラ？」

「そうだよ、コイツはアタシの言う事を何でも聞いてくれるぞ。なあ、織部？」

「…………！」

「……なんとか応えるよ、このクズ野郎があ！」

恐怖に体の自由を奪われている結衣に、容赦の無い張り手を顔面に浴びせる。結衣は抵抗もできず、その場に吹き飛ばされるように倒れる。

「クズで絵しかお友達のいないアンタを、わざわざアタシ達の仲間にしてやるうつて言つてんのさ。返事ぐらいしろうてんだよつ！」

「…………！」

倒れた結衣に、更に腹部に蹴りを見舞う。鈍い音と結衣のうめき声だけが、廃工場に響く。

「ケケケケ、おい、飼い主が犬の躰もできねえのかよ。こりゃ傑作だぜ？」

「なんだと、コラア！」

激しく言い合つ、男と女。苦しむ結衣の事など構い無しに、自分の感情だけをぶつけ合つていて。

「ケケケケ、もう良いよ。おい、お嬢ちゃん。こんなアマ女の事は放つておいて、俺の犬になれよ、可愛がつてやるぜ？ ケケケケケ！」

「うつ…………！」

涙を必至にこらえ、終わらぬ恐怖に耐える。そんな結衣の表情を見て、男は卑しい表情をする。

「良いよ、じつとしてなよ。すぐに終わらせてやるぜ？ ケケケケケ！」

「やめろ…………」

奥の方から聞こえる威圧感のある声に、卑しい男は脅えた表情で後退していく。

「あまり調子に乗るな。大切なお客様さんだ」

恐らくはこのグループのリーダー格であろう。本当に人を殺しかねない顔つきをしている。身長も180cmはあるであろう体格で、結衣を見下すように見ている。

「このガキか？ テメエの飼い犬は？」

「そうだよ、コイツなら何でも言う事聞くし、何よりもアイツを騙

すには打つて付けだからね」

「ふんっ、そういうわけだ女。テメエにはちょっと騙しをやつても  
らうぜ?」「

どうやらここに結衣が連れてこられたのは、とある人間を騙す為  
らしい。

そして目の前の男は、胸ポケットから一枚の写真を取り出し、結  
衣に見せつける。

「この写真のクソ野郎は、最近俺らの事を裏切つて逃げやがった。  
コイツには見つけ出して制裁を加えないといけねえんだよ」

「織部え、少しあは覚えてるだろ? 中学の頃、アンタを裏切つてア  
タシらの仲間になつたあの子だよ」

少しどころの話ではない。結衣にとつては恐らく、生涯で忘れら  
れない人間であろう。

「自分を裏切つた人間を、今度は搜せつて、キャハハ、マジウケる  
んですけどー」

中学時代に自分を見捨てた人間。その人間が不良グループから逃  
げ、探し出して制裁を加える為だけに、今更のタイミングで結衣が  
呼びだれた。結衣にとつては、こんな馬鹿な話はない。

「あの野郎も織部なら、気を許すはず……そこで捕まえて制裁開始  
つてわけよ。織部も裏切られたんだから、あの子に一発と言わず気  
が済むまで殴れば?」

「…………わ、私は、そんな事…………」

結衣が全てを言い終わる前に、見えない所から拳が飛んでくる。  
その威力のある拳に、結衣は人形のように吹っ飛ばされる。

「そんな事……何だ? 嫌とは言わせねえ、テメエみたいなクソガ  
キでも今は立派な計画の一部、逃げ出すならテメエも処刑だぜ。俺  
も暇じやねえんだ、あまり手を煩わざわざさせないでくれねえか?」

一般人の結衣にすら、容赦なく拳を入れる男。殴られた結衣は顔  
面が歪むような錯覚に囚われる。事実、たつた一発の顔面への拳は、  
それまでにやられた暴力が震む程の威力である。あまりの激痛に、

意識を失うどころか、更に意識が覚醒していく。泣きたくても泣いているのかわからず、声を出したくても出ているのかもわからない。

「…………っ…………！」

普通に暮らしていれば、あまり見る事のない大量の出血。口の中が切れ、そこから出血したものが、自分の手を伝つて地面に落ちる。「おつと、悪いな。何分話し合いは得意な方じゃなくてな。ついクソガキ相手でも拳が出ちまつ。……ま、ここから抜け出そうって言うなら、更に痛い目を見るつて良い教訓になつてくれれば良いか、ハツハツハツハ！」

言つだけ言って、男は奥の方に置いてあるソファに腰掛ける。恐らくはどこからか盗んできた物であろう。そして結衣を連れてきた虐めグループの女が、結衣に近づいてくる。

「アンタも本当にクズだよね、織部。素直にハイって言つておけば、痛い目みないで済むつてのにさ。ま、運が悪かつたと思いなよ、これでクズみたいなアンタにも仲間ができるんだからさー！」

「…………うつ…………すんつ…………うう…………！」

ゆつやく涙が出てくる。顔にも痛みと激しい熱を持つている。何

よりも殴られた右半分が腫れてしまい、痛々しくなつていて。

「チッ、さつさとそのガキ連れていけ！ こんな所で泣かれぢや、イライラしちまつて一人ぐらい殺しちまいそうだぜ！」

ソファに座つた男の声が、恐ろしいまでに響く。不良グループも男が恐ろしいのか、何も手が出せない。

「早く立てよ、コラ。早くしないとアタシまどじばつちつ受けちまうだろ！」

「…………うつ…………！」

恐怖と、殴られた事により、完全に足が動かない結衣。

「このつ…………早く立てつて言つてんだよ、グズ！」

女は焦りと苛立ちから、結衣を蹴り飛ばしても移動させようとすると。

その時、廃工場の扉が荒々しく開かれる。全ての視線が、そこに集中した。

「ここにいたのか、織部。探しちまつたぜ」

「誰だテメエは！？」

近くにいたグループの男が、入ってきた人間に罵声を浴びせる。  
「オレサマか？ 大丈夫だ、安心しろよ。オレサマは別に正義の英雄でも、かといって悪の手先でもねえ！」

「つだと、コノヤローがあ！」

「オレサマはオレサマ、響ワタルサマだ！ ょおく、覚えておきやがれよ！」

そこには赤いハチマキに、木刀一本を握りしめたワタルが立っていた。

## お前の声で俺を呼べ！

数時間前の事。ワタルは自宅に帰り、ポストの中を見てみる。「おお、来てるぜ、リトルウォーズ！ 嫌な予感しかしないけどなあ！」

内容は予選第四回戦の事である。

「ふむ、対戦相手はフォースアラート。そして日時は……明日だとお！ フザけんな、明日試合になるなら、もつと早く連絡よこせってんだ！」

ワタルは大会本部から送られてきた封筒を、地面に叩きつけるよう投げる。が、冷静になつて再び自ら取る。

「はあ……まあ、事実は事実。ちゃんと受け止めないといけないな。やれやれ……」

ワタルは携帯を取り出し、メンバー全員にこの事を伝える。全員が驚きの表情と、適度な文句を言つている。桐華に至つては呆れ口調でもある。

「そういうわけだから。うん、明日は頼んだぜ！」

全員に連絡を回すと、ワタルは最後に大きく溜息をついた。

「本当に、いつまで続くんだろうなあ、この予選は……ん？」

何ががワタルの足に触れる。まだ少し明るいこんな時間から幽靈か、と思いながらも、恐る恐る足下を見る。するとそこには見た事のあるもののがいる。

「お前……確かに、織部の描いてたゾウじやねえか、どうしたんだ？ 物言わぬ像は、ただ事ではない様子でワタルに訴えかける。ワタルは像の伝えたい事の真意はわからなかつたが、その様子を感じ取る。

「ちょっと待つてろ、すぐに戻るから」

像に連れられ、ワタルが来たのは一つの廃工場だったのだ。

「とりあえず織部を返してもらいに来たぜ、そいつはお前達のよつな奴等と一緒にいる子じゃねえんだ！」

ワタルの通つた大きな声は、廃工場中に響きわたる。

「……響、さん……？」

「おう、待たせたな！」

結衣は涙を流し、痛みに堪えながら大きく頷く。

すると、ソファに座つたリーダー格の男は、明らかに殺氣を含みながら言う。

「もういい……ガキも、今入ってきたクソ野郎も、殺れ」

その場に緊張が走る。不良グループは怒りの矛先が自分に向かないよう、ただ従つだけの姿勢だ。

「おい、ボス猿！」

「……アア！？」

「今言つた事、後悔すんなよ。織部もこんなにしやがつて、テメエだけはオレサマの全靈にかけてぶちのめす。一度と悪さできねえようにな！」

ワタルは持つていた木刀を、突き刺すように男に突きつける。

「テメエは誰に向かつて口をきいてんだ！」

近くにいた男が殴りかかってくる。それを難なくかわし、鋭い木刀の一撃を振り下ろす。鈍い音と共に、男は倒れそのまま動かなくなる。そのあまりの一瞬の出来事に、不良グループは静まりかかる。

「テメエ……一体何者だよつ！？」

「オレサマが、さつきも言つたけど正義の英雄でもなければ、悪の手先でもねえ。……強いてあげるなら、チームマックスハートを率いる完全無欠のリーダーにして、今年のリトルウォーズを制覇する男……響ワタルだ、よおく覚えておきやがれ！」

ワタルの声につられるように、男の笑い声が響く。

「なるほどな、リトルウォーズの参加者か、どおりで少しは強えわけだぜ。それで、テメエはこのガキを取り戻しに来たつてわけか？ チームメンバーだから仲間に手を出したら許せねえって、ハツハ

ツハ、ガキくせえ理屈だぜ

「ボス猿だから少しば頭が回ると思つたら、馬鹿のボスはやつぱり馬鹿だったな。オレサマはただお前らのよつた馬鹿と織部じや釣り合わねえって言つてんだ！」

怒りに満ちた二人の男の声が、その場の緊張の糸を、更に張りつめさせる。

「……ちょっと待ちなよ、織部はアタシ達の仲間なんだ。変な理屈でアタシらと織部の関係を壊すんじゃねえよ！ なあ、織部？」

女は結衣を、威圧するように睨み付ける。既に拒否はできない、といつた形相の女。

「……そうなのか、織部？ お前がこいつらが仲間だつて言つなら、オレサマは引く」

「……えつ、あの……その……」

結衣の頭の中は完全に真っ白だつた。今まで全ての選択から逃げてきていた。その全てのツケが、ここに終結したよつた状況に、結衣が応えられるはずもなかつた。

「本当にクズだねえ、アンタは！ セリセとハイつて言えつてんだろ！」

我慢しきれずに、女は結衣の空いた頬を張り飛ばす。

「…………」

その光景を静かに見ていたワタルは、ゆっくりと口を開いた。

「……織部。オレサマを呼べ、逃げるな。お前にしかできない、今のお前がするべき戦いをしろ！ 逃げて……掴める未来は無えんだぞ！」

（ただ待つだけじゃ、ただ逃げるだけじゃ、道は開けない。辛いかもしれないけど、戦つて、戦い抜いて、勝たないと、道は開けねえぞ）

かつて聞いた言葉と、今のワタルの言葉が、結衣の中でよぎつている。ただ泣く事しかできない結衣の心は、恐怖と、小さな希望の火との間で戦つていた。不良達の言葉を拒否すれば、間違なく酷

い事をされるのは目に見えている。だが、結衣は本当の心の奥底で叫んだのだ。いや叫び続けていたのだ。

「……響、さん……私を助けてください……」

「なんだと、テメエ、織部エ！」

「私を……助けてください……！」

女の威圧的な声に負けないように、結衣は自分が持てる最大の感情を、声に出して叫んだ。叫んだ声を無理矢理にでも消そうとするかのように、女は再び結衣に張り手を見舞う。しかしその女の手は、咄嗟にワタルの手に止められる。

「ふぐっ……！？」

途端に女の腹部に衝撃が走り、女はそのまま意識を失う。

「ア、アナタ、女に手をあげるなんてサイテーよ！」

「……女に手をあげるのがサイテーだあ？ フザけんな、悪い事したら老若男女関係なくブツとばすのがオレサマの流儀だ。何でもかんでも女だからってよ、調子ブツこいてんじやねえぞ、コノヤロー」鋭い眼光を光らせるワタルに、近くにいた不良達は完全に畏縮してしまう。

「めんどくせえから、全員かかつてこい。テメエら全員、オレサマ自らによるオシオキタイムだぜ？」

ワタルのその言葉を口火に、不良グループは全員でワタルに襲いかかる。ワタルと同じく木刀を持つ者や、拳で仕掛けてくる者、中にはビール瓶まで持ち出す者もいる。殴つて殴られの攻防戦は、ものの数分で全てが片づく。文字通り男も女も容赦なく、オシオキされて倒れている。

「さて……あとはお前だけだぜ、大将？」

体中に傷を作り、至る所から血を流している。赤いハチマキは、ワタルの血を浴びて深紅に染まる。

「テメエ……何者なんだ……？」

「だから言つてんだろ、響ワタルだ。こちとらこれから化け物じみた奴等を、相手に戦つてかなきやいけないんだ。こんな所で小悪党

が何人いようと負けるわけにはいかねんだよ！」

言葉の終わりと共に、ぶつたぎりの構えで男に突っ込んでいく。そのあまりの突進速度に男は何もできずに、ただ直撃を受ける。結衣が殴られた場所と同じ箇所をぶつたぎられる。男の口から数本の歯と共に、血が吹き飛び、そのまま地面に倒れる。

「…………！」

「ふう……終わつたな。大丈夫か？」

ワタルは全ての不良が倒れているのを確認し、結衣に安否の声をかける。

「は、はい……」

「つたく、凄い腫れてるなあ。立てるか？」

まだ足に軽い震えがあつたが、結衣は何とか立ち上がる。そのまま一人で廃工場を後にする。

「まあ、あいつらも、もうお前の所に来ないさ、もしも來たらオレサマが返り討ちにしてやる……ぜ？」

ワタルは途端に膝から崩れ落ちてしまう。結衣に支えられるようにして、ワタルは地面に寝転がる。

「響さん、しつかり！」

「あちや……予想以上に効いてたみたいだぜ……。さすがにビール瓶で殴られちゃあな。まあ良いや、織部……ちよつと

「はい？」

ワタルは結衣の膝に頭を乗せて、そのまま寝そべっている。

「あ、あのつ、響さん、ちよつと……！」

「良いじゃねえか。あれだけの事やつたんだ、少しさはサービスしてくれよ、な？ それに響さん、なんて他人行儀に呼ぶんじゃねえ。もう、お前はオレサマ達の仲間だぜ？」

「え……あの、では何て呼べば？」

「ワタルで良いよ、代わりにオレサマは結衣って呼ぶから」

結衣は顔を真っ赤にしつつ、かなり困惑した表情を浮かべる。

「ほら早く

「え……と、わ、ワタ、ル……さん」

「さん、はいらぬっての。……でもまあ良いか、ハハハ」

「ハへへ……『めんなさい』

混濁する意識の中で、一人の小さな天使を見たような気がする。

「……やっぱ結衣は笑ってる方が可愛い……な」

一夜の惨劇は終わり、日が沈む。再び日が昇る時が新たな戦いの幕開けである。

ワタルの旅は、織部結衣といつ仲間を入れて、まだ続いているのだ。

## 反撃の鐘を鳴らす者！

「い、一体……どうちまつたんだ、こりや？」

朝日が眩しくなつてくる早朝。その廃工場には、数人の不良グループが倒れている。その廃工場にやつてきた三人がいる。恐らくは彼らの仲間だろうが、一人の不良は倒れている人間の介抱に回っているが、その内の一人はこの光景を見ても、表情も変わらずに王立ちしている。

「に、二之宮……か？」

顎が碎かれ、会話もままならぬ不良グループのリーダーが、その男の名前を呼ぶ。

「……なんだ、このザマは？」

二之宮は凍てついた殺氣に満ちた眼光を、半死半生の男に浴びせる。

「へマしちまつたぜ……だが、次はこうはいかねえ。あの野郎……絶対にぶつ殺してやる……！」

「……あの野郎？ 誰なんだ、あの野郎つてのは？」

「響ワタル、とかいう野郎だ。……赤いハチマキに木刀持つた……」

そういうや、あの野郎、リトルウォーズ参加者だとか言つてた、か……

「リトルウォーズ、だと？」

二之宮はその言葉に、わずかな反応を見せる。何か怒りとは違つ負の感情である。

「クソッ、絶対にぶつ殺してやるぜ！」

「その必要はない」

「えつ！？ ……お、おい、何をするんだ、二之宮よー！」

二之宮は男の碎かれた顎を、左手で軽々と持ち上げる。左手で顎を潰すような勢いである。事実、男の顎からは次々に骨が砕けるよう、気持ちが悪くなる音がする。

「ギャアアアアアアア！」、「一之宮ア、な、何をする気だ！？」

「……前から俺はお前が気にくわなかつたんでな。丁度良いからここで貴様を叩き壊させてもらうぜ？」

「テ、テメエ、俺がこんな状態だからって……ヒテヒ小悪党野郎だぜ！ なあ、一之宮よお！」

一之宮の左手に更に力が込められる。一之宮の連れの一人は、その光景を齎えるように見据えている。

「ウツ……ギャアアアアアアアアアア！」

「お前がこんな状態だから？ 笑わせるな、お前のような小悪党……」

「いつでもヤレたんだ」

一之宮は空いた右手で、弓を引くように構える。そしてその右手を勢いよく男の顔面に喰らわせる。口と鼻から大量の血をまき散らしながら、男は吹き飛ぶように倒れる。

「行くぞ」

「で、でも、一之宮さん。こいつら放つておいたら……」

「構うなよ。それで終わつたらそれが、こいつらの器だ。……それに、こいつらは何の関係も無い、一般人の女の子を使つたんだろう？」  
「ええ、そういう計画だつて数日前に聞いてます」

「なら、良いじやないか。それがこいつらの罪滅ぼしだ」

一之宮は言葉通りに、不良グループに全く構つ事無く歩いていく。  
「フツ……響ワタルか。くだらねえぜ」

二人の不良ど、一之宮小次郎。朝日を背にして、彼らは響ワタルを目指す。

七月二十九日。ワタルと結衣は、廃工場から全力で走っていた。

「やべえ、これはまずいぜ！ 早くしないとリトルウォーズに遅れちまうぜ！」

「ワ、ワタルさんっ、一体どうしたんですか！？」

「結衣、お前は親が心配してるだろ、それに怪我の手当でした方が

良いぞ！」

結衣は急に立ち止まる。それを見てワタルも走るのをやめる。

「ワタルさん……あの、私……ワタルさんの、仲間……ですか？」

「……ああ。お前はオレサマの仲間だ」

「なら、なら私もワタルさんと一緒に行きます。確かに両親は心配してるかもしいれけど……でも、私はワタルさんと……あの、そ の、一緒に……いたい……で、す……」

一人、顔を真っ赤にしながら、ありつたけの勇気を持ってその言葉を言ひ。

「……そうか、わかつた。その代わりに約束しろ。会場に着いたら、親に連絡する事。あとはちゃんと傷の手当てをする事。腫れたままの顔じや、台無しだぜ？」

「あ、は、はー……！」

ワタルは基本的には鈍感なのだ。そして残り少ない時間で、予選会場を目指す。

しかし結果的には、急いで甲斐もあり、十分前には会場に到着する。あとはマックスハートメンバーを探すだけである。

「ちくしょう、こう人が多くちゃ見つけにくいぜ！」

「……あ、あれじゃないですか？」

ワタルと反対の方角を見ていた結衣が、メンバーらしき人影を見つける。

「わかるのかー!?」

「はい、この間屋上でチラつと女の方を見ましたから」

「屋上……かなつべか。ナイスだ結衣！」

結衣の見ていた方角を調べてみると、確かにメンバー全員がいるのを確認できる。ワタルは結衣の手を引き、そこまで走っていく。小柄な結衣一人では、いつまで経つてもそこまでたどり着ける事はできないであろう。

「おう、みんな来たな！」

突然後ろから、大きな声で呼びかけるワタル。

「兄貴！？」

「ワタル君？」

「……ワタル」

三人が三様の反応の仕方をするのを、楽しんでいるワタル。

「全く、どうしようかと思ったよワタル君！ 全然来ないから心配したんだからね！」

一人やけに怒っているかな。ヒロキと桐華はそう見ると冷静なのだ。

「悪い悪い、ちょっと色々とあってな」

「兄貴……その顔は、それにその子も、一体何があったのさ？」

「とりあえず今は時間が無い。オレサマの怪我の事は放つておいてくれ。それよりも、かなっぺに頼みがあるんだ」

「んつ…………？ 何かな？」

「この子の名前は織部結衣。自己紹介はまた後ほどやってやつだ。かなっぺは今回の出場は無し、この子の顔の手当てをしてやってくれないか？」

勢いのままに喋るワタル。かなは結衣の顔の腫れを見ると、冷静に怪我の具合を見る。

「……顔の他にも打撲があるね。わかった、私はこの子の手当てに今回は回るよ！」

「悪いな、かなっぺ！ ……そういうわけだ結衣。かなっぺは何だかんだで優しいから安心してくれ」

「誰が、何だかんだで優しい、って、ワタル君？」

顔は優しい表情を浮かべているが、どう見ても怒っている。

「……！」

結衣は突然のメンバー顔合わせに、軽い緊張が体に走っている。何よりも結衣の体に染みついているトラウマが、結衣の体に緊張を走らせるのだ。それを見かねてか、かなは結衣に近づいていく。

「……織部、結衣ちゃんだけ？ 大丈夫、かなに任せて。何があつたかわからないけど……ここには結衣ちゃんをこんな目にあわせ

る人は誰もないよ」「

結衣は何かを吹つ切るよう、頭の中の葛藤と戦っている。そして静かに口を開く。

「……うん。よろしくお願ひします、えと……」

「相沢かな。かなで良いよ！」

「では……かなさん、よろしくお願ひします」

「了解！じゃあワタル君、手当てが済んだらベンチに向かうから。みんな、負けちゃ駄目だよ！」

軽い激励をして、かなは結衣を連れて、手当てのできる場所へと移動する。その一人を出場メンバー全員で見送る。

「おっしゃ、といつわけでヒロキと桐華。四回戦の試合をよろしく頼むぜ！」

「……うん」

「わかっているよ、兄貴」

「それで順番だが、先鋒戦は安定感が高い桐華。そして中堅戦にオレサマ。大将にヒロキだ！」

ワタルの言葉に一瞬間が空いたが、その言葉にヒロキが反応する。「僕が大将戦！？」兄貴、正気で言つてるの？」

「本気も本気、大本気だ。オレサマは見ての通りボコボコで、大将戦で勝てる程の体調が整っていない。それに、お前には修行の成果を見せてもらいたい。やれるか、ヒロキ？」

「……わかったよ、兄貴。修行の成果を見せて、大将戦を勝つてみせる」「

ヒロキ自身も試してみたかったのだ。アバターとの修行が、一体どれ程の力を備えさせたのか。失礼だと思いながらも、ヒロキについて今の自分の実力を確認する良い一戦である。

「続いて、予選第四回戦。マックスハート対フォースアラートの一戦を行います」

アナウンスにて、両チームに招集の連絡が流れる。いよいよ予選第四回戦の始まりである。

「うしつ、気合い入れて行くぜ！」  
ワタル、ヒロキ、桐華の三人は、試合の行われるバトルリングへ向かう。

## 負けられない想い！

予選も既に四回戦。ここまで上がつてくるチームとなれば、皆強豪チームであり、素人の観客でさえ、その雰囲気に圧倒されてしまう。その中には長年の間、大会を見てきた玄人もいれば、トーナメント敗退チームもいるのである。様々な思惑が交差する中、ワタル達マックスハートは四回戦の舞台へと上がる。

「響ワタル」

バトルリングへ向かう途中、何者かがワタルを制止する。

「ん……？　あ、お前は『ディーパー・ディーパー』の芹川。一体こんな所へなんの用だよ？」

「ウフフ……愛する響ワタルを応援しに来たの。愛する人には勝つてほしいと願うのは当然でしょ？　顔のボコボコ具合が気になるけど置いとくわ」

芹川はワタルにウインクする。オカマの印象が強い為か、ワタルはその行為に悪寒を走らせる。

「うつ……いやまあ、そうかも、しれないけどよ」

「それにね。ちょっと貴方にアドバイスがしたいのよ、今回の相手は今までに比べて一筋縄ではいかないわよ」

「アドバイス？　そんなもん必要ないぜ。最終的に勝つのはオレサママ達だぜ！」

軽い微笑と共に、その言葉を受け止めている芹川だが、明らかにその表情の奥に隠されたものは、一つの心配事である。

「……その言葉を信じてあげたいのも山々なのよ。でもね、今回の相手はそうはいかないわ……実は表だっての知名度こそ低いものの、知っている人間は知っているというプレイヤーが今回の相手、なのよ」

「知っている人間は知っている？　……誰なんだ、オレサマすら知らない奴なのか？」

「ええ、多分知らないわ。実はそのプレイヤーは今まで外国にいて、つい最近、日本へ帰ってきたみたいね。自称天才プレイヤーらしいけど、でも実力は文字通り天才の名をあげても良いぐらいの、モノを持つているみたいね」

「……ふーん。天才が相手だか知らねえけど、倒さなきゃ優勝はできないぜ。とりあえずサンキューな」

「ウフフ……応援してるわ。願わくば私の響ワタルに勝つてもらいたいものね」

芹川は優雅に手を振り、マックスハートメンバーを見送る。

バトルリングに先にたどり着いたのはマックスハートの方である。フォースアラートは少し離れている場所で、話しているように見える。

「ええか、マックスハートは今大会から出場してたからって、甘く見たらいけへんよ？ あそこのリーダーの響ワタルちゅうんわ、なかなか良い筋してはるからね！」

「エエ、ワカツティマスヨ。ゴアンシンシテクダサイ」

「僕たちは、貴方の為に、貴方に恩返ししたくて、ここまで来たのですから」

「…………」

フォースアラートのメンバーらしき数人が、輪になつて集まっている。しかしその集団は、色々な意味で目を引く。その理由はすぐわかる。車椅子や松葉杖などを持つ、障害者の人達が集まっているからだ。リトルウォーズの場に違う色を持つ集団は、明らかに注目の的になつている。

「みんな……もう、めっちゃ泣かせるで、ホンマに……でも、ここまで来たらみんなで優勝やで。みんなで勝利の達成感を味わうんや！」

その集団の中に一人の少女がいる。身長は150cmもあるのか怪しいぐらいに小さい。夏の風になびくツインテールが活発なイメ

一ジを漂わせる。少女の激励に、その場にいた全員が呼応する。

「よっしゃっ！ みんな勝ちに行こー！」

その少女について選手と思わしき一人がついてくる。その後ろには十人は超える数の人があり、恐らくはこれら全てが応援団のようなものなのだろう。

少女がリング中央に向かう事に合わせて、ワタルも中央へと向かう。遠目からでも小さな女の子だと感じていたが、近づいてくるにつれ、少女の小ささは更に際だつてくる。そして二人は中央でよいよ向かい合う。少女の身長はワタルの半分しか無いのでは、と思えてしまう程の小ささである。

「確認してえんだが……お前がリーダーなのか？」

「なんやあ、もしかしてウチの身長が小さいからって舐めてるんやないか？」

田の前の少女は小柄な体の割に、似合わない霸氣を以てワタルにくつてかかる。

「いやそれは無え、オレサマは老若男女問わず、田の前にいる戦うべき相手とは、全力で戦つてみせるぜ！」

「むふう。それでえんや、ウチも手加減なんてされたらかなわんね。……あつ、ウチの名前は梓<sup>あずさ</sup>＝クウ＝コードベルや。宜しくしたつてえな！」

「何か難しい名前してるな……アレか、日本人と外国人との間に生まれるつていう？」

「そりやで、せやから田だつてオッドアイやろ？ 名前はいわゆる仮名や、ウチは家の都合上で本名は出せへんからな！」

田の前に少女、梓に言われた通り、よく見ると梓の田の色は左右で違う。茶系の色と青い田をしている。しかし見た田は言われなければ、純血の日本人だと思つてしまつう程である。

「そんな事よりも、名前は何ちゅうんや？」

「ああ、オレサマは響ワタルだ。ワタルつて呼んでくれて構わない

ゼ

「ワタルかあ、良え名前やないの、覚えとくわあ！」

「……君達、自己紹介はそれぐらいにして、そろそろ試合ルールなどを決めてくれんかね？」

これからの進行時間も見かねて、黒子が一人を急かす。黒い布きれを被つている為、表情は伺えないが、声色からして時間が押しているのが見える。

「まあ、何の変哲もないけど、10分で良いよな？」

「構へんよ、ここまでずっと10分やさかい。ほとんどのチームが10分しかしてへんのちゃうの？」

「では予選四回戦。マックスハート対フォースアラートは10分の試合形式で開始します！」

自己紹介に、試合形式も済んだので、二人はお互にチームベンチへと戻つていぐ。しかしワタルは黒子に聞きたい事もあり、再び中央に戻つてくる。

「黒子さん、聞きたい事があるんだけどよ？」

「ん、何だね？　できれば早く戻つて先鋒戦の準備をしてほしいんだが……」

「まあちょっとだけ。あの対戦相手の梓つて子、本当に高校生か？　見たところ小学生に近くねえか？」

「ああ、彼女はいわゆる飛び級なのだよ。歳は確か今年で十一歳だったか十三歳だったか……定かではないがね」

「そ、そんな子がリトルウォーズ！？　おいおい、時代は変わったなあ」

「うむ。そんな事よりも早く戻りたまへ！」

納得しながらも、焦りから苛立ちをこめてワタルを急かす。これ以上の行為は最悪、何かしらのペナルティを受ける可能性があるので、おとなしく黒子の言つ通りにするしかなかつた。

急いでベンチに戻ると、桐華は既にスタンバイはできているようである。相変わらず二丁の魔法銃である「ガバメント」と「デザー

トイーグル」の装備だ。

「阿波の政治、何事?」

「いやあ、どうやら相手さんのリーダーは飛び級で、天才兒。そし

て歳は十一、二歳からして

「そんな女の子が、リトルウォーズの参加チームのリーダー！？」

凄いな、僕にもできるかな

何誰てるんだ、ヒロキ。お前はマック

そんな事を心配しなくとも良いだろ？」

「外見と比口井の会話を無視するよりは準備を整え終わる桐華

同種の色

桐華は緊張の色も見せず、リング中央へと向かう。フォースアーラートからも人が一人向かつてくる。身長が高く、やせ形のスラフとした風貌の男である。持つている武器は、持ち主に非常に似た細長い長刀の木刀である。何よりもその男は、目を開けていない。それが唯一、不気味な所である。

「……目が見えないので？」

「エエ、ジブンハオサナイコロカラ、モウモクデス」

「ダイジヨウブテスヨ、ジブンハソレテ、ジュウブンニタタカエマ  
ス」

「…………！？  
…………私の心を読んだの？」

北の門が、同様に縣の門也、

「メガミエナイ。ソソカワリー、ジブシハミガイイ。」

人、キヨリナラバ、シンオシフキクノハタヤスイデス

「……………そうですか。よろしくお願ひします。私は桜井桐華です」

「ジブンハ、フジサワシンジ、デス」

軽い挨拶を済ませ、それ以上話す事はない、といったように桐華は距離を離す。

「……アナタハ、マケラレナイオモイ、ガ、アルヨウデスネ。シカシ、ソレハ、ジブンモイッショデス。ワガリーダーデアル、アズサ

サンノタメニモ、マケラレマセン

「……………でも負けられない想いは、それだけは私は絶対に負けるつもりはない」

「ソウデスカ。イイシアイヲ、シマシヨウ」

黒子の旗が高く掲げられ、そして大きな声で始まりの合図が宣言される。

「それでは予選四回戦の先鋒戦 始め！」

旗が降ろされると同時に、四回戦の試合が切って落とされる。

## トリックハキカナイ！

盲目の男。藤沢信一が、予選四回戦での桐華の対戦相手である。

藤沢の身の丈とそう変わらぬ長い木刀を持ち、盲目の為に目線による攻撃の先読みができない。

(……あの人も誰かの為に負けられない戦い。でも私も……私も約束した、あの日あの場所で)

桐華は容赦なく、目の前の対戦相手であり盲目の男、藤沢に対し愛銃ガバメントを向ける。藤沢も剣道の中段の構えを維持する。音だけで桐華のいる方角を向き、そして長い木刀を構える。

「ソレディイノデス。ジブンモ、ホンキノアイテタタカイ、ソシテカチタイ」

「…………行きます」

桐華はガバメントから水弾を射出させる。牽制程度に三発の弾を藤沢に放つた。通常の相手ならば余裕で避けられる攻撃であるが、藤沢は違う。桐華は最後に確かめておきたかったのだ。本当に音により、相手の攻撃がわかるのかを。仮にも目も見えず、聞こえもしていなかつたら、大怪我では済まない事になる。

当然のように、藤沢はこの水弾を回避する。避け方も最小限の動きで避けている。

「サキホドモイイマシタガ、ジブンハ、メガミエナイカワリニ、ミミガイイ。コノテイドノコウゲキデハ、ジブンラタオスコトハデキマセンヨ?」

「…………」

そんな藤沢の指摘も気にも止めず、桐華の表情は極めて冷静沈着である。そして桐華は藤沢を中心点として、時計回りに走り始め、動きながらの水弾連射を始める。

(……音で判断するなら、立ち止まつていては駄目だ。……自分の音を消せば弾の音だけに、神経を集中させられて避ける事を容易に

されてしまつから。……自分の足音と射撃音、そして弾の音とこれだけの音で、かく乱すれば耳が良いといつても避けにくくなるはず！）

無数に放つた水弾が、藤沢を襲う。藤沢も長い長刀を利して、水弾を受け流すように捌いていく。

「オトヲナガセバ、オトハヌケテイキマス。ジブンニ、ナミノコウゲキハ、キキマセンヨ」

その流麗な動きからなる受け流しは、そこで見ている者に目を奪う。まるで激流に逆らう事無く、身を任せ同化しているように見える。流す、というよりもすり抜けている、といった表現の方が正しいのかもしない。

（……これで良いの。彼はその性質上、自分から攻撃を仕掛けてくる事は無い。……後の先を取る事ができても、先の先や、先の後を取る事はできない。……音で判断するという事は、逆に言えば、音がしなければ攻撃も防御もできないのだから。……そしてそれは彼と同じ接近戦をする人ならの話、遠距離主体で戦う私と彼は絶対的に相性が良いのだから）

桐華はどんなに受け流されようと、水弾を藤沢に射出し続ける。変わらぬペースで、藤沢も桐華の弾を受け流し続ける。

「フフフ、オソラクハ、アナタノカンガエドオリ、ジブンハコチカラ、セメルコトハ、テキマセン。コノショウブ、ハジマツタシユンカンカラ、ゼッタイテキアイシヨウニヨリ、アナタノカチハメニミエティマス……ソウ、コノコウボウハ、ジブンノタダノアガキデス。シカシ、ジブンニモ、カツホウホウハアリマス」

「……時間切れ引き分け」

「ソウデス。アナタハセツキンセンガデキナイ。ワタシハ、ジブンカラセツキンセンガデキナイ。シカシ、ゼッタイテキアイシヨウノナカデ、アナタハ、ジブンヲ、タオスケツテイリヨクガナイ。ヒキワケニモチコムコト。ソレハ、ケツカテキニハ、ジブンノカチヲイミシマス」

最初から相性的に勝てないのなら、時間切れ引き分けを狙い、勝ちも負けも無かつた事にする。それが藤沢のとつた作戦である。そして藤沢の言う通り、桐華は接近戦ができない分、敵を倒す決定力に欠けてしまうのだ。

（……彼の狙いは時間切れ引き分け。……確かにこのままでは時間切れに持ち込まれてしまう……）

桐華はわずかな一瞬で、時計を見て、試合開始時刻と現在の時刻を計算する。

（……始まりから六分経過、一試合十五分だから残りは九分。……万が一に備えて勝負をかけないと）

通常の藤沢に合わせた軌道の他に、桐華は照準を地面に向かって始める。

「ム、ナニカスルツモリデスカ！？」

「……トリックワン。リフレクターバレット」

通常の軌道の他に、トリックワンによる跳弾させた軌道を混ぜて、藤沢に攻撃を仕掛ける。

「ミズガジメントアタルオト！？ シカシ、ソンナコトヨシテモ、ムダナコトデス。ドンナキドウヲエガコウガ、サイシユウテキニ、ジブンニムカツテクルノナラ、ヨケルノハタヤスイコト」

最低でも一通りの軌道を描き、襲いかかる水弾。そんな攻撃でさえ何の変哲もない攻撃だと、容易く避けてみせる藤沢。そんな最中、桐華のガバメントも水切れを起こしてしまった。

「ウチオワリデスカ？ コンナゼッタイテキ、コウゲキチャンスデサエ、ジブンカラコウゲキデキナイノハ、クチオシイデス」

「……貴方にどんなハンデがあるうと、私は私の想いの為に負けるわけにはいかない。残り時間をフルに使って貴方を倒します」

「エヒ、ジブンモ、アズササンノタメニ、ナントシテモ、コノイッセンヲ、シシユシテミセマス」

ガバメントのリロードが完了すると、桐華は水の入ったボトルを取り出す。これは三回戦時に、水壁を出した時と同じ物である。そ

してそのボトルを空高く投げる。

(……通常の軌道と跳弾の軌道だけでは駄目ならば、水壁を使った三つ目の軌道を使う。……いくら受け流しが上手くても、これだけの弾幕を回避するのは、容易ではないはず！)

通常の射撃、跳弾する射撃、水壁を使う射撃、の三種類の攻撃をかける。ガバメント一丁ではどうあっても足りないので、桐華は今まで使わなかつたデザートイーグルを装備する。威力調整は最低にまで落としてあるが、それでも致命打を与えるかねない銃である事に変わりはない。

利き腕である右手にデザートイーグルを、左手にガバメントを装備し、弾幕形成を開始する。右手のイーグルで通常の軌道と、トリックワン。左手のガバメントも通常の軌道と、トリックツーで射撃する。上と下と、真ん中から藤沢めがけて襲いかかる水弾。

「……アナタハ、トンデモナイヒトデス。イママデノタイセンアイ

テダッテ、コンナコトヲヤツテノケルテキハ、イマセンデシタ」

桐華を認める発言をしながらも、聴覚と長刀により、その弾幕を受け流していく藤沢。

「アナタノワザハ、オソラクハシカクニ、ウッタエルワザデス。メノミエナイワタシニハ、アナタノワザノコウカハ、ハンブンノコウリヨクニシカナラナイ」

藤沢の指摘も最もな話である。トリックワンもトリックツーも跳弾、あるいは水壁による視覚的奇襲効果が高い。通常ならあり得ない軌道で襲つてくる弾を、視覚で判断してしまう事によって、回避を困難にさせるというのが大きいのだ。視覚で判断せずに、聴覚で弾の軌道を読む藤沢にとっては、直進軌道でも跳弾軌道でも一つの攻撃の軌道にして変わらないのだ。

「……真っ直ぐいっても、跳弾させても、貴方に当たる瞬間の弾は真っ直ぐに変わらない。……恐れ入りました」

「アキラメルノデスカ？ ソレデモ、コレホドノダンマクヲケイセイデキル、アナタハ、トテモスバラシイプレイヤーデス」

「……ありがとうございます。……でも諦めはいません」

「ナニカ、ヒサクテモアルノデスカ？」

「……秘策……私はあの人を優勝にまでのし上げる為になら、どんな秘策でも卑怯な手でも考えてみせる」

先ほどまで形成された弾幕は無い。水壁も完全に下に落ちている。嵐が過ぎ去ったような静けさだけが、リング中央に訪れている。一丁の銃のリロードを完了し、桐華は再び藤沢に銃口を向ける。

「……行きます 第三のトリック」

「ダイサンノ、トリック！？」

残り時間は一分を切る。デザートイーグルとガバメントから再び水弾が発射される。

## リフレクターバレツツ！

ガバメントと「ザートイーグル」二丁の銃から放たれる水弾。二丁合わせた水弾の弾幕が、再び藤沢を襲う。

「コレガ、ダイサンノトリックデスカ？ コレガ、トリックナラバ、ヒョウシヌケデス！」

「…………」  
弾幕の中には、トリックワンの跳弾も含まれている。しかしこの軌道の過程プロセスでは、一番煎じにすぎない。聴覚で判断し、受け流しに關して最高の技量を誇る藤沢の前には、例え上下左右、仮にも軌道が跳弾しようと円を描こうと、関係がないのである。

「…………第三のトリック。…………トリックスリーはもう始まつてゐる！」

「ハジマッテイル？ ……ムツ！？」

一瞬飛んできた一発の水弾に藤沢は、間一髪でかわす。たつた一発の弾に、初めて藤沢がよろめく。今までの攻防から、桐華の持つ軌道バリエーションの中に、藤沢の体勢を崩す一撃は無かつたはずなのだ。

「ナ、ナンド、イマノハ！？ オトガ……オトガ、カワツタ！？」  
「…………トリックスリー。…………跳弾する彈達リフレクターバレツツ」

残り時間も一分が過ぎ、藤沢に引き分け決着させるわけにはいかない桐華は、第三のトリック リフレクター・バレツツで攻勢に出る。全ての攻撃を余裕で避け続けていた藤沢の顔から、余裕の表情は既に無くなっている。むしろ正体不明のこの攻撃に、苦悶の表情さえ浮かべるぐらいである。

その正体不明の軌道は、遠目で見ているワタル達にははつきりと見える。

「リフレクター・バレツツ。跳弾する彈達……ねえ。あの藤沢って奴には天敵な技だな、こりゃあ……」

「うん、トリックワーンとツーは視覚奇襲効果技。そしてこのトリックスリーは視覚にも聴覚にも有効。その技の性質は、名前の通り跳弾する弾達。跳弾する弾であるリフレクターバレットとの明確な違いは……例えば障害物に当てて、弾を跳弾させ軌道を変えるトリックワーン。その性質上と使用場所から跳弾回数は一回。故に藤沢さんのように音で攻撃を、判断するタイプには弾の来る方向が違うだけで、通常の軌道のそれと何ら変わりはない。でもトリックスリーは違う、あれは……その名前の通り、地面に当たった跳弾を更に弾によつて跳弾させている。跳弾した弾を跳弾させた弾で、更に跳弾させているから、視覚でも聴覚でも判断するのは極めて困難だよ」

「凄え長い説明だな……しかも難しい」

「最近は出番が少なかつたんだ。ちよつとぐらりと出番をくれよ、兄貴」

「クウツ、コウゲキガ、ヨメナイ……」

かろうじて攻撃を捌ききれっていた藤沢だが、ついには直撃を許してしまった。水弾の威力は落としていても、それなりの威力がある為、一撃くらつただけでも足を止めるには十分すぎるダメージを『えら』れる。

「ガハッ……！　マ、マルデ、オトガシホウハッポウカラ、オソックルヨウダ、ウグッ！」

一撃の威力が高かつた為か、その一発で冷静さを失いてしまう。最も、音で戦つ藤沢の聴覚を狂わせ、視覚で判断できない為、水弾の襲つてくる恐怖からパニックに陥つても仕方のない事である。ただ小さくなり、急所への直撃を避けるように、防御して時間を稼ぐ。

「アト、スウェジュウビヨウモタエレバ、ジブンノカチダ。ソレマデ、ナニガアツテモ、タエテミセル！」

意氣込んで防御に専念した藤沢の耳に、一つの足音が後ろから聞こえる。

「マサカ……ソンナコトマデ、シテクルトハ……」

「……これで終わりです。ギブアップしてください」

桐華のガバメントが、藤沢の頭に突き立てられる。防御の為に体を強張らせている藤沢には、咄嗟に攻撃に転じる事はできなかつた。何よりも、そんな事をしても対戦相手となつた桐華は、そんな隙すらも見逃さないプレイヤーだという事は、戦つた藤沢本人が痛い程に痛感している。

「ダイサンノトリックデ、チョウカクヲミダシ、チョウダンノオトデ、ジブンノアシオトヲケシタ……イヤ、チュウイヲカンゼンニ、ソラサセタ、トイウワケデスカ。……フウ、ワカリマシタ。ギブアツプシマス」

藤沢自らのギブアップにより、予選四回戦、先鋒戦の一戦は残り時間一秒を残して、桐華が勝利を納めた。

「サクライトウカ」

「……はい？」

「アナタホドノプレイヤー、ソコマテノオモイヲ、イダカセルヒトトハ、イッタイナニモノナノデスカ？」

「……さあ？ 実のところ私にもよくわかりません。……ただ、その人と一緒に夢を見たいし、追つていきたい。そう思つたから私はここにいます」

「ソウデスカ。ジブンのオモイハ、ハタスコトガデキマセンデシタガ、アトノフタリガ、カナラズハタシテクレマショウ。……サクライトウカ」

「……まだ何か？」

「イエ、ジブンハ、コノグライトカケレバ、シンオンガキコエルグライノ、チョウカクヲモッテイマス。ソコデヒトツオセツカイナガラ、アドバイスヲ」

「……アドバイス？」

「ジブンノココロニスナオニナリナサイ。イマ、デハナクテモイイ、シカシ、オモイハツタエナケレバ、ツタワラナイノデスカラ」

藤沢はその言葉を残し、静かにリングを後にする。桐華はその後

ろ姿を、静かに見送り、そしてマックスハートのベンチへ戻つていく。

戻るとヒロキと、ボコボコの顔をしたワタルが待つてゐる。かなと結衣は、まだ戻つてきてはいらない様子である。

「お疲れ様です、桜井さん！」

「トーコ、ナイス！」

ワタルは、その言葉と共に、桐華に向けて親指を上に突き上げる。ボロボロな体で、精一杯な笑顔をジジ自分に向けているのを見て、桐華は「一人にわからないような、小さな笑みを浮かべていた。

「……ワタル、当たり前。……私は、私の仕事をしただけ」

それだけ言うと、桐華は汗を拭う為に近場の水道へ向かっていく。

「相変わらずクールだね、桜井さんは」

「ああ、だけどトーコはあんなので良いんだよ。オレサマはチームで一番トーコを信頼してるぞ！」

「……一番の信頼……それは強さっていう意味で？」

「強さ……つていう面でもそうだが……まあ、色々とな」

ヒロキはワタルとの会話に、何かの引っかかりを感じていた。その正体がわからないヒロキには、静かな苛立ちが満ちている。行き場がわからない感情が、ヒロキの中で渦巻いている。

「……つ！」

その小さな苛立ちを、舌打ちにして外にはき出す。

「どうしたんだ、ヒロキ？ お前が舌打ちするなんてめずらしいな

「……いや、何も。……ねえ、兄貴？」

「どうした？」

一呼吸置いて、ヒロキは口を開く。

「今マックスハートって、何て言うか賑やかになつたよね

「ああ、リトルウォーズ開幕前の状態が嘘のようだぜ。オレサマとお前しかいないくて、マサとケン誘つたけどオレサマが怒つて却下しちゃつてさ」

「あははは……あつたあつた」

「それで、かなつペ誘つて、トーゴが来て、気がついたら結衣まで入つて……いつの間にか五人！」

「うん……」

「だから行こうな、優勝決定戦の舞台へ。そして優勝の栄光へさ……」  
ヒロキはワタルを見ると、まるで光を見ているような錯覚がする。  
ワタルの良さは常に前向きに物事を捉え、且つ目標がはつきりとして純粹にそれに向けて走れる事なのだ。だからこそ今のヒロキには、ワタルの光は眩しそぎたのだ。

「兄貴、もしも……もしも、だけどさ」

躊躇いながらも、心にうつすらと浮かび上がつていての正体を、口に出してみようとヒロキは思う。理性では、言つべきかは迷つていてが、理性よりも感情が勝つていてるかも知れない。

「もしも、僕が兄貴の敵だつたら……いや、敵じやなくとも、僕が兄貴の対戦相手なら、僕がマックスハートを抜けて、僕のチームで優勝を目指したい……って言つたらどうする？」

そのヒロキの言葉に、何かを感じたのか、ワタルは真っ直ぐにヒロキの眼を見た。

「ヒロキ……？……もしも、お前がそういう事を言つたなら、リーダーとして、お前の兄貴分として、応援してやるさー。」

「ありがとう……兄貴」

ワタルとヒロキの会話はそこで終わる。数分の沈黙の後、リング整備が終わり、黒子から中堅戦の合図がされる。

「ふう……かなつべに結衣、それにトーゴも戻つてこねえか。……」

ヒロキ！

「えつ……！？」

「お前が何を考え、どうしたいのかはわからない。でも男なら自分  
の信じた道を進めば良い。その答えが正解なのか間違いなのかは問  
題じゃねえ、本当の問題は全力でやつてその答えに満足できたのか、  
だ」

「兄貴……」

「オレサマは進むぜ、何があろうとな。それがオレサマ響ワタル様だ！」

中堅戦始まりの為、いつもの赤いハチマキに木刀を持って、リンク中央へ向かっていく。

その背中には何が映っていたのだろうか。

## 私の声で貴方を呼ぶ！

予選四回戦。対フォースアラート戦。先鋒戦は、ほぼ十五分フルタイムを使っての戦いで、桐華が藤沢信一から第三のトリック、跳弾する弾達 リフレクター・バレットにより勝利を収める。

その戦いの激しさからか、バトルリングの簡単な整備の為に時間を費やされる事になつたが、その整備も数分で終わり、いよいよ中堅戦の始まりである。マックスハートの中堅戦のメンバーは、チームの大将でもあるワタルである。ワタルは愛用の赤いハチマキと木刀を持って、リング中央へと向かう。

「つ……！？　とと……」

歩いている最中、急にフラついてしまう。今までは、おとなしくしていたからか、体に残ったダメージが気にならない程度のものだつたが、いざ歩き出してみると自分自身のダメージがどれ程のものか、否応なしに実感してしまう。

「チッ……、さすがにあれだけ殴られたりすりや、オレサマでもこうなるか……まあ、言い訳にするつもりも無いけどな」

対戦相手にも、黒子にも、今の自分の状態を悟られないように、努めて普通を装い歩く。顔色もできる限り見られないように、前が見えるぐらいに下を向ぐ。うつすら見るその視界から、既に対戦相手は準備できているようである。

「よし、それでは中堅戦。響ワタルと梓＝クウ＝コードベルの戦いを始めます！」

さすがに四回戦というべきか、今のワタルには耳が痛くなるほどに響く、客席からの大歓声。何よりも、黒子の言葉に何かの違和感を感じて、顔を上げて対戦相手の顔を見る。ところが、目の前には対戦相手はない。それよりも少し下に視界をずらすと、あの少女がいる。

「ん……何でお前がここにいるんだ？」

ワタルは自分の心に素直になり、あるがままの感想を述べる。

「アホッ、ウチが中堅戦を戦うからやで！」

「お前はフォースアラートの大将だろ。大将が中堅戦なわけねえだろー。」

「ドアホッ、アンタかてマックスハートの大将なのに、中堅戦やつてるやん！」

「ああ、そういうやうだな……」

意識が飛びかけているせいなのか、あるいは目の前の少女のせいなのか、ワタルの頭の思考回路は若干ながら、おかしくなりかけているようである。

改めて向かい合つと、やはり小さいと感じる少女。作戦か、偶然か、本来ならば大将戦を戦うべき一人は、中堅戦の舞台で戦う事になる。少女、梓は自身の体格に比例した、小型の短剣にした木刀を持つている。身長もさる事ながら、武器のリーチ自体も半分か、あるいはそれ以下ぐらいの差がある。つまりリーチの上では、ワタルが梓よりも圧倒的有利という立場である。

「ウチを可愛い女の子思つて、あまり手加減したらアカンよ？」「だからどんな時でも、どんな相手でも全力なのが響ワタル様だ。  
……それに今は手加減できる程の余裕もねえ」

梓は手に持つ小刀を逆手に持ち、構えをとる事で小さな身長が、更に小さくなる。ワタルもそれに呼応するように、構えるがどこか辯々しい構えになりつつある。

「それでは中堅戦 始め！」

黒子の合図と同時に、梓が向かつてくる。その突進力は、今まで会ったプレイヤーの誰よりも速い。いや、速く感じるのだ。低い身長に低い構えを利用して、圧倒的なすばしつこを感じさせる。事實上トップクラス並に早いが、視覚効果で更に速くワタルは感じている。

「そんなフラフラした構えで、ウチは倒せへんよ！」

「ぐつ……！」

まるで絵に描いた盗賊のような動きで、ワタルに斬りつけ、そして離脱していく。元々のパワーはそれ程でもないが、加速力をつけてその勢いのままに攻撃をしてくる為、それなりの威力になつてゐる。何よりも受けたワタルの手には、やや大きめな衝撃が残つてゐる。

「どうしたんや、響ワタルっちゅうのは、もつと凄い奴やつて聞いてるよ！」

「へつ、ガキンちょのくせに調子乗んなつて！　こいつから行くぜ！」  
今の自分では長期戦は無理と判断し、ワタルは一気に短期決戦を仕掛ける事にする。長期戦といつても、十五分間、だが十五分間も梓の速さについていくのは、今の体調ではきついと素直に判断する。ヒット＆アウェイの戦法で、ワタルから距離を離した梓を、追いかかるワタル。今の状態でも十分に、梓の速度についていけている。

「なつ……！？　なんちゅう速さや、ウチの逃げ足と同等やで！？」  
「オレサマは優勝する男。ガキンなんかに負けるかつてんだ！」

追い足の勢いのままに、今度はワタルの一撃。高く掲げた右手から、袈裟切りのように木刀を振るつ。

（こいつも逃げ足の、着地硬直……とつた！　ガキ相手には手痛いかもしけないが、我慢しろよ！）

「……にひひ。甘いで、ワタルさん」

着地硬直を狙い突進してくるワタルに対し、余裕の笑みを浮かべた梓。そしてそのまま、ワタルを馬跳びのようにして、攻撃を避けながらすり抜ける。おまけに飛ぶと同時に、小刀でワタルの背中を突き刺した。

「うぐっ……！？」

突然、背中に走る激痛に、ワタルは体勢を崩し悶絶する。対して梓は軽やかなステップで、ワタルとの距離を再び離しにかかる。

「ウチの逃げ足より速いスピードで追ってきた時は、正直ヒヤつとしたわ。でも残念やな、いまいちキレのない斬撃やつたで、ホンマ

に

速度はトップクラス。しかしその点で言つのなら、ワタルもそれぐらいに速さはあるのだ。梓の優れている点は、小柄な体格を利した小回りの良さなのだ。

(ちい……あのガキ、みぞおちの部分を攻撃しやがった……。ただでさえフラつくつてのに、息がつ……)

「なんやワタルさん。まさか今のでへバつたんぢやうか?」

普段のワタルなら問題なく耐えられる攻撃である。しかし、今のワタルにはほとんどの攻撃が致命打になりうる。そして梓の言葉も満更ではなかつたのだ。

「ああ、正直言うとへバつた……」

「なんやて!? まさかアンタ、調子悪いんか? ……思えば顔もやけにボコボコやで」

「へバつたけどよ……何でもねえよ。ガキンちょに心配される程、オレサマは墜ちてねえ!」

ワタルの言葉に、今まで明るい表情を浮かべていた梓の顔つきが変わる。少し怒りを露わにしている。

「ウチはガキやない! 梓つちゅう名前があるねん、ガキ扱いは許さへんよ!」

「へへへ、ガキ扱いされてムキになるところがガキだつての。……まあ、ちょっとは可愛い一面もあるんじやねえか?」

「ムキー! もう許せへん、絶対にアンタに勝つて、鼻を明かしたりわ!」

梓はもの凄い速さで、ワタルに向かっていく。一撃目は様子見といつのがよくわかるぐらいである。トップクラスの速度と、事実上トップの小回り、旋回性能をフルに活動させている。

ナイフのような小刀で、まるでパンチを打つように振るつてくる。逆手に持つた小刀はいつもとは違つたりズムで襲つてくる為に避けていく。それでも避ける、あるいは木刀で盾にしなければ、こんな小柄な少女の攻撃でさえ致命打になりかねない。何よりも、梓は可

愛らしい見た目と裏腹に、牽制以外の攻撃は、全て急所を狙ついている。

「くそっ……！」

「ウチの事をガキ扱いする割には、大した事ないでえ、響ワタルさん！」

なんとか引き離したくて、小回りにおいて梓が絶対的有利の為、旋回性能で引き離せない。かといって、迂闊に攻める事もできなれば、後方へ飛んでも下手な隙を見せてしまう。

気力、体力面において、今のワタルが梓を引き離す要素が無いのである。

「何、ちょっとワタル君……もしかして押されてるのかな！？」

その第一声を発したのはかなである。その後ろには治療を終えた結衣、それに桐華の姿もある。

「かなさん？　はい、何かいつものキレも氣迫もどこか無いんですね……」

「対戦相手の、あの女の子も凄いのはわかるけど、ワタル君の動きが悪いのは明確かな」

「……ワタル」

いつも見ているヒロキ、かな、桐華の三人が見ても、明らかに動きが悪いと判断する。

「わ、私のせいです……」

「結衣ちゃん、どうしたの？」

そんなワタルを見て、涙を浮かべる結衣に、かなは優しく話しかける。

「私を助けようとして……ワタルさん、悪い人達に殴られたりしたから……」

「そうか、兄貴がボロボロなのはそういう事なのか」

結衣の言葉を聞いて、ワタルの理由を知る三人。そんな中、桐華は無表情の中にも僅かな怒りを見せていた。

「あんな状態で戦つたら危険です、止めないとワタルさんは……

！」

「ここまで結衣が言つと、桐華はそれを制止する。

「……今、ワタルを止める事は私が許さない。……それに今、止めた  
たらワタルもきっと貴方を許さない」

普段見せない桐華の怒りの表情に、結衣は勿論、ヒロキもかなも  
恐さを感じ取る。

「ふう……はいはい、桐華ちゃんも、結衣ちゃんもそれでお終い。  
今辛いのはワタル君だし、それにワタル君なら、確かに今、止めた  
ら女の子でもぶつ飛ばされちゃうな？」

「でも……それではどうしたら……」

「じついう時こそ応援！ 結衣ちゃんみたいな可愛い女の子に、本  
気出せない男なんて男じやないよー！」

シリアルスになりかけた雰囲気を払拭するように、かなは満面の笑  
みで、結衣にアドバイスし励ます。

「確かに、兄貴ならじつこうシチューハーションで女の子の声援があ  
つたら燃えるね！」

ヒロキもかなに合わせて、明るく同意する。結衣は桐華の方を見  
ると、目線を合わせ静かに頷いた。

「で、では……がんばります！ ……すう、ふう……」

爆発しそうな程、脈打つ心臓を静めるように、大きく深呼吸をする結衣。

「…………っ……ワタルさああああん、がんばれえええーっ！」

恐らくは一生の中で一回しか出してないというぐらいの、大声で  
ワタルの名を呼ぶ。大歎声にかき済まれるように飛び、結衣の声は  
真っ直ぐにワタルに向かっていく。

## 数秒間の攻防戦！

（自称天才プレイヤーらしいけど、でも実力は文字通り天才の名をあげても良いぐらいの、モノを持っているみたいね）

その言葉は一体誰の言葉だつただろうか。防戦一方になるワタルの頭の中に、その言葉が確かに実感となつて襲いかかっている。そう対戦相手の少女、梓＝クウ＝コードベルの事である。

ワタル自身の体調不良は、言い訳にならない。それは今現在、戦っているワタルが正直に感じた事である。梓は間違いなく天才、あるいはそれに匹敵する実力を確かに持つている。弱冠十三歳の少女が、これ程の能力を持つているのだ。仮に万全の状態で、能力的にワタルが勝っていたとしても、近い将来、自分を超える実力を以て、立ちはだかるであろう少女。

「ワタルさん、もうここいらでギブアップとちやうー!?」

「…………！」

たった今まで梓の攻撃に耐えてきた理由。それはこの小さな攻撃故の攻撃力の低さ、確かに小柄な割に攻撃力はある方なのかもしないが、ワタルはもつと強い攻撃を何回も受けて耐えてきた。

そしてもう一つは、自身の夢の為。優勝する男は小さな石にもつまずかない、というプライドの為である。しかしそのプライドも、一人の男に託す事により、今まさに折れんとしていた。

（へへへ……なるほど、こいつは天才級だ。仮にオレサマの体調が万全だつたら……いや、そんな事を考えるのは、この目の前の凄い相手に失礼だ。……でもどっちにしても、今の状態でこいつに勝つのは不可能だ、大丈夫……次はヒロキだ……オレサマは知ってる、ヒロキなら必ずフォローしてくれる、と）

梓自身の圧倒的な旋回性能、小刀独自の手数と小回り、これらの要素から遂にワタルの口から一つの言葉が出る。

「悪いな、ヒロキ……後は任せる。……ギブアッ

その時、周りの大歓声に今までにかき消されんばかりの小さな、それでいて感情の集約された声が、ワタルの耳に微かに届く。

「黒子さん、ワタルさんはギブアップしたんちゃうか！？」

「むつ……！？」

攻撃を仕掛けながらも、ワタルのそんな小さな言葉を聞き取る余裕が、梓にはある。そんな梓の言葉通りのものなのか、黒子も注意深くワタルの様子を見る。最も、このまま防戦一方が続いてしまうと、黒子からのTKO<sup>テクニカルノックアウト</sup>もあり得てしまう。

（なんだ、何が聞こえた……？　もう一度、言つてくれ……）

「……さん、がん……！」

（もう一回……もう一回だけで良い……、もう一回だけ言つてくれ！）

その願いは届いたのか、かき消えそうなその叫びは、確かにワタルの耳に届いた。

「　ワタルさああああん、がんばれえええーっ！」

（　結衣！？）

一瞬だが、ワタルは声が聞こえた方向を見る。そこにはいたのだが、ヒロキが、かなが、桐華が、そして結衣が、全員がワタルを応援しているのが見える。

「チッ……何を他力本願になつてやがんだ、オレサマはよ

「ワタルさん？」

「うつ……おおおおおおおおりやああつ！」

「きやあつ！？」

被弾を覚悟で、全力で木刀を薙ぎ払う。その攻撃は防御されてしまつたが、小柄な梓には防御を貫通してダメージを与える。何よりも、ワタルのパワーを抑えきれず、この試合中初めて大きく後退させる。

「オレサマとした事が……うつかり自分の信念を忘れてやがったぜ」「うう、この力……ほとんど死に体だった人が、そない馬鹿な事があるなんか……？」

「よお、ガキンちょ。覚えておけよ……オレサマ達はマックスハート、マックスハートは全力の心！ 全力でやればできねえもんなんてねえ……そして、体力がやばいなら気力で補え、言い訳はしねえ。常に全力、それがマックスハートだ！」

薄れゆく意識に勝つ為に、声と共に気合いをはき出す。その気合いで梓は一気に、自分が精神的に飲み込まれていく感覚を覚える。「こ、これが、噂に聞くマックスハートのリーダー……響ワタル……す、凄い気迫や」

この年齢にして、この強さと技量を兼ね備えた少女ではあるが、ある意味ではこの精神力が梓に足りないものなのかも知れない。

「残り時間も無い事だしな、一気に行ぐぜ……」「ノヤロー！」

「ひつ……！」

ワタルの気合一閃。その一撃で梓は精神的に追いつめられてしまう。

（と、いつでもまいっただな……結衣の一言で、切れそうだった精神はつなぎ止めたが、残念ながら体のダメージはそうはいかねえときたもんだ！）

ワタルは再び木刀を構える。いや正確には構える事しかできないのだ。自分から攻撃をする事は勿論、まして大技ぶつたぎりなどは使う事はできない。同じくして梓も萎縮してしまっているのか、変に身構えてしまい、攻めてくる事がない。

「どうした、さつきみたいに攻めてこないのか？」

「…………うう…………！」

「残り時間はあとわずか……先鋒戦はオレサマ達が取つて、そして仮にこの中堅戦を引き分けたとしたら、お前達のチームはかなりの痛手になるぜ？」

「そ、そないな事はわかっとるわ！」

これはワタルなりの駆け引きである。気力は充実しても、体力的に動けないワタルが狙うのは、梓の動きに合わせたカウンターである。そして仮にカウンターのチャンスが来ても、結局は大振りは禁

物。梓は確かに精神的には年相応な部分はあるが、タイプ的には速水仁タイプであり、確實に仕留めなければならないのだ。

(さあ来い！ 引き分けても別にオレサマは痛手にはならないぜ、何よりもお前みたいな凄い奴とは、お互の持てる力をぶつけて終わらせたい……早くしろよ、オレサマの意識もいつまで保つてられるかわからねえからな)

(ど、どないする！？ アカンわ、怖くて足が竦む……こないな恐怖を埋め込んできたプレイヤーは初めてや……いや、アイツ（・・・）に似とるわ。あの王者……松原要にっ）

試合はそのままお互いに見合つたまま膠着状態となってしまう。ワタルと梓にはその時間が何分経過した出来事なのかはわからない。それでも時間は気にしていられない。お互いに気を抜いたら、ワタルは精神を保つていられない、梓はいつも攻められるかという疑心暗鬼にかかりてしまっているからである。

「どうした二人とも、残り時間はあと一分を切つたぞ！？」

時間の感覚が無くなっていた二人は、黒子の言葉でその概念が戻つてくる。

(あと二分、か。……一分、……長い、さつきから意識が飛んでんだぜ、早く来い！ 何もしないで一分は耐えられねえぞ……)  
(そ、そうや、残り一分しかないんやで！？ 梓、今動かんでいつ動くんや、行くんや、ビビるな梓！)

長いワタルの呪縛を克服したのか、梓はようやく構えが前傾気味になり、攻撃のタイミングを伺い始める。だがワタルは勝利を確信している。梓本人は全く気がついていないようだが、恐怖は払拭仕切れていない、それ故の固さが構えから見て取れる。

「行くで、響ワタルッ！ 最後の勝負やで！」

最後の勝負、その言葉通り、小柄な体格に似合わないステップを踏み、一気にワタルとの間合いを詰めてくる。その速度は、この試合でみた梓の最高速に、勝るとも劣らないぐらいの速さである。

「クッ……！？」

これはワタルの誤算である。何故なら梓はこの試合終了まで、多少の畏縮が残るものだと予想していたからだ。その畏縮により、梓の速度は飛躍的に落ちる予定だった。その誤算というのは、梓は動き出せば吹っ切れてしまうという点である。恐らく、梓の頭の中にはワタルへの恐怖の念が、今だけとはいえ克服されている事だろう。

「そうや、何をしてたんや、ウチは！ 相手はほとんど死に体や、氣合いだけで肉体のダメージはどうにかなるもんぢやうで！」

「……氣合いだけで肉体ダメージは、か。……いや全くその通り、だから来てもらつぜ、勝利にな！」

最後の攻防戦。ラストスパート。残り時間数秒の、ワタルと梓の戦いは終局を迎える。

## 再戦の約束！

わずか数秒の攻防戦。ワタルの気合いの喝により、恐怖に支配された体を押す梓。満身創痍ながら、精神でそれを補い、勝利に奔走するワタル。互いの持てる力を全てぶつける試合となる。

今だけといえども、畏怖の念を振り払った梓の動きは衰える事なく速い。それどころか、ある意味では吹っ切れていて単純な速度の点では、この試合中で最速のスピードかもしれない。この動きに、意識もどぎれかけているワタルは、攻撃を普通に当てる事は至難の業を判断し、急所を狙わせないように防御態勢をとる。

「ウチが勝つんや！」

必至の形相で小刀を振るう。やはり少女の腕力である点が、ワタルを倒しきれない大きな理由である。しかし、この攻防は今のワタルを倒すには十分すぎる意味がある。

（耐える……耐えろよ、体！　もっと引き寄せろ、勝利を引き寄せろ！）

表情、攻撃の仕方を見る限り、梓の心の焦りはやはり消えてはない。むしろ、時間と共に蘇つてきているのだろう。少しずつだが、梓の攻撃は大ざっぱになりつつある。ここが一つ目の勝機である。（だけど、それだけじゃ勝てねえ……オレサマはこの試合でこいつに一撃も致命打を当てるない。つまり精神的にはビビらせたが、肉体的には何も追いつめられてないんだ）

だからこそワタルは耐える。絶対的に当たられる距離に梓が入るまで待つ。ただでさえ機動力と小回りに優れる梓に、肉体的には何のダメージも無い。下手に攻撃を仕掛ければ、逆に梓の調子を元に戻しかねない。それ故に、梓に攻撃を仕掛ける際は、まず一撃必倒でなければならないのだ。

そしてワタルにも、それを行つ上での課題があるのだ。まずは時間との戦い。このまま防戦で終了しても、引き分け決着であり、実

質そこまでの痛手にはならない。勿論、この戦法でいく事が安全に事を終える方法の一つでもあるだろ？。

しかしこの戦法をとる上でも、やはり課題が残る。それはワタルの残り体力と精神力。残り時間数秒といったところだが、既にそこまで耐えられるかも自身でわからない程に消耗している。気を失つてしまつては敗北である。それだけは何としても防がなければならぬ最悪の事態。だからこそワタルは決断したのだ。意識がある内に、梓を確實に仕留める事、と。

「ワタルさん……やっぱりアンタは凄いわ。何で最初からボロボロやつたんかは知らんけど、それでもそんな状態でよう戦うわ！」「

梓はワタルに賞賛の声を向けると同時に、今にも襲つてくる恐怖を払拭し続ける為に、言葉を発する。一瞬でもワタルの気合いによる精神攻撃を思い出せば、間違いなくつけ込まれるからである。

「でもワタルさん……覚悟してもらうで！」

残り時間による焦りか、勝利を確信したのか、梓もワタルを確實に仕留めようと、一気に踏み込んでくる。手を伸ばせば当たる距離の戦いは、全ての攻撃が一撃必殺の威力を持ち合わせる。しかし、ここでリーチの差が出てくる。リーチに勝つてしまうワタルは、超接近戦になるこの場で、最大の威力を發揮できないのだ。むしろ超接近戦になったこの状態こそ、梓の小柄な体格を活かす最大の位置取り（ポジション）である。梓もそれがわかっている為、踏み込んだのだ。ワタルの懐へ、確実に仕留められる一撃を与える為に。しかしそれがワタルの狙いである。

「へへへ……来たぜ、勝利！」

「な、なんやて！？」

ワタルは木刀を持つ右手を、防御といつ名田の田隠し（ブラインド）を作り、残る左手を死角から一気に梓に伸ばす。どんなに機動力が優秀な梓でさえ、突然の反撃に加え、自身は一直線に攻撃を仕掛けてきている、かわす事は間違いなく不可能なはずなのだ。

「くうっ……！」

突然、死角から伸びてくる左手に、咄嗟に反応し急停止しようとすると、ワタルの手は一瞬の間に、梓の胸ぐらを掴む。

「……掴んだぜ、勝利……」

「うう……！？」

「掴んで……ぶつたぎるつ！」

「……キヤアッ！」

一度掴まれてしまつては、梓にこの攻撃を避ける手段は無い。仮に力業で強引に抜け出そうと考えても、力で勝るワタルの呪縛から抜け出すのは困難。まして抜け出そうと暴れている内に、ワタルの攻撃は梓に届く。

梓はワタルの馬鹿力を受け止める覚悟は無かつた。それ故に、防御姿勢にもならない、ただ手で壁を作るよう、攻撃が来るのをただ待つ。その時の恐怖心からか、目は開けている事ができずに、ただひたすら強く目を瞑っている。

そして残された力をその一撃に込めた攻撃を、ワタルは捉えた梓に一気に振り下ろす。

「そこまでっ！」

突然の停止の叫びと同時に、いやその少し前にワタルの攻撃は止まる。そしてその声を発したのは審判である黒子だ。

「十五分経過した。この勝負は引き分けとする！」

黒子の宣言の終了と同時に、客席からはお互いを称えるように祝福の歓声が響く。しかし、それとは裏腹に、戦つていた二人の時間はまだ止まっている。梓の掴まれた胸ぐらは、服が伸びてしまつている。そしてワタルの木刀は攻撃が当たる前に、梓の真横に落ちている。そして、そつとワタルは掴んだその手を離す。

「終わつちまつたな……不本意な結果だが、結果は結果だ。仕方がねえ……」

ワタルは落ちた木刀を拾う。しかし握力も入らない程に疲労していたのか、ワタルは木刀を掴む事ができず、さらにはその場に座り込んでしまう。

「あらりりり……」じつや もつ駄目だな、こゝまでやられたのは生まれて初めてだぜ」

「な、なんでや……？」

「どうした、何か不満か？」

「あるに決まってるやろ！ 最後の一撃、何で当てへんかったんや、当てればアンタの勝ちやつたんやで！？」

梓は納得できない苛立ちと、先ほどまでの軽い恐怖心から、声が少し震えているようにも聞こえる。

「見ての通りだ、最後の一撃はあと一步の所でオレサマの体が力尽きた。当てなかつたんじゃない、当てたくても当てられなかつたんだ」

「う、嘘や、ウチがまだ子供だからとか、そんな理由で攻撃せんかつたんぢやうか！？」

「……バカヤロー。そんな事あるかよ、オレサマは老若男女関係なくぶつたぎる天下のワタル様だぞ？ ガキの女が相手だらうが、容赦なくやる……」

「でも、でも……！」

「だあああ、ウザつてえぞ！ だつたらじいじよう、リトルウォーズが終わつたら……お互いに体力も回復したらよ、再戦しようぜ。正直言うとお前みたいに強い奴とはあまり一回も戦いたくねえが、挑んでくるなら何度も戦つてやる。それまでに、そのガキンちょ並の精神の脆さを何とかしとけよ！」

「ガキみたいな、は余計や、うつさいわアホ！ ……でもその時はワタルさんも、本気の戦いをしてな、約束やで？」

「ああ、約束だ……」

いまだ少し納得できない表情を浮かべていた梓だが、ワタルとの約束の指切りをかわす。

こうしてお互いのチームの大将同士による、中堅戦は幕を閉じる。結果は時間切れ引き分け。この結果により、マックスハートは次の試合に勝てば四回戦突破。仮に負けてもサドンデスマッチ。流れは

多少ながらマックスハート有利に傾いている。

## 最速の男！

十五分フルタイムを使っての、大将同士による中堅戦。結果は引き分けとなつたが、判定決着ならば、ワタルが確実に負けてしまう。だが状態は良くなかつたが、スポーツマンシップに乗つ取り、全力で戦い負けた為、悔しい感情よりも、楽しい感情が上回つていた。

自力での歩行も困難な程、消耗していたワタルは黒子の手も借り、何とかマックスハートのベンチに戻つてくる。戻つてくると、かな達が水を用意してくれていて、それをワタルは適度に飲んでいく。「さてヒロキ、後は頼んだぜ！ もしもお前が負けでサドンデスになつて、オレサマに回つたら負けちゃうぜ！」

ワタルは冗談交じりで言う。そんな事を冗談とわかつているから、かな達も笑つている。みんなヒロキなら大丈夫だ、と信じていた結果だつた。

「……兄貴、僕はそんなに弱く見えるのかい？ 僕は……負けるつもりは、ない！」

そんなワタルの言葉を、ヒロキは力強く否定する。

「ヒロキ……一体どうした、緊張でもしてるのか？」

「いや、ごめん。ちょっと緊張してたみたいだ……。行つてくるよ、みんな」

ヒロキは自分の木刀を持ち、軽い準備運動をしながら、リング中央へ向かっていく。そのリングへ向かうヒロキの表情は、誰にもわかる事はなかつた。

「……あれ。ヒロキ君、このハチマキ忘れていつてるよ  
かなは青いハチマキを見つける。青いハチマキは確かにヒロキのものだ。

(体調不良があつたとはいえ、兄貴は負けた。……兄貴ほどの実力

がありながら、ここから先の戦いは負ける可能性が否応なしにつきまとうんだ。やはり僕は……このままでも良いのかな?)

まとうんだ。  
やはり僕は……」のまま食いのかな？）

ヒロキはそう考えている。つい最近になって、ヒロキの頭の中に  
は、不思議な感情が出てくるようになつていて。その正体が依然と  
してわからぬまま、その葛藤と今も戦つている。

(精神を強く保つて)

そうヒロキに言葉を投げかけたのは、同じチームの桐華である。最初はその言葉に救われていたのだ。精神を強く保ち、自分のすべき事を強く全面に押し出す。しかし今はそれをして、ある一つの感情が湧き出てくる。

落ち着けよ、ヒロキ。今は勝つ事を考えるんだ。それ以外は

ヒロキがバトルリング中央へ着くと、同じくしてフォースアラー  
トからも対戦相手が来る。

—  
...!  
?

「……その表情だ」

えつ?

「俺を見る時の対戦相手の顔だ。頃、すべからくその表情をする。中には、楽勝だ、と俺の目の前で言つ輩もいたがな」

相手側のそういう態度に慣れているのか、無表情に、淡々とした

「……驚きはしましたけど、生憎と僕も手加減はしていられないん

፲፭፻፻

・そひするへきた相手が、

「はい、僕は川崎ヒロキです。よろしくお願ひします」

「俺は真田浩介だ」

二人は、お互いに手に持つ木刀を、力強く握りしめた。そのタイミングを見計らい、黒子は大将戦の始まりの合図をする。いよいよ

予選四回戦、最後の戦いの始まりである。

試合開始と同時に、隻腕の剣士、真田はヒロキに向かっていく。  
(隻腕の剣士……左手が無いという性質上、僕から見て右方面の攻撃範囲は、極端に悪くなる。セオリー通りに、まずはこの性質を利活用させてもらいますよ、真田さん！)

襲いかかる真田の攻撃を、ヒロキは逆時計回りに動く事によつて、回避していく。

「そうだ、それで良い。左腕が無いからと同情されでは、この俺が惨めじゃないか！」

真田も、左腕側に移動していくヒロキを、何とか捉えようと攻撃をしていくが、やはり攻撃範囲の狭さが出て、当てる事ができないでいる。

(この人はやはり左方面に逃げられる事に慣れている。事実、攻撃は少しずつ僕を捉えにきている)

(ちい、事前に調べた情報よりも、遙かに速い！一体、この短時間の間に何があったんだ！？)

試合展開は、始まりから数分、逆時計回りに動くヒロキと、それを追う真田の構図になる。あまりに同じ展開の為、客席からは数力所からブーイングが起こり始めている。そんな客のブーイングも気にする事無く、一人は同じ展開を繰り返す。

「そうだ、それで良い。客程度の野次で俺とお前の戦いは終わらせない！」

「はい、僕も同じ考え方ですよ、真田さん！」

二人は一人の読み合いと、駆け引きをしていた。それが一人の謎の高揚感を高めている。

(真田さんの回転率は凄まじい……。避けているだけに見られるけど、事実、手を出す暇がないっ)

余裕で避けていたヒロキだが、その真田の攻撃は、除々にヒロキの体をかすめ始める。

(よおし、そろそろだ。お前の速度に俺の体が慣れてくる。捉えて

みせるぞ、川崎ヒロキ！）

少しずつだが、綺麗な逆時計回りの円は崩れていく。上から見ると歪みはじめているように見える。円を描くような回避運動は、その内後方へ下がりながらの回避に変わっていく。気が付くと、正面から真田の攻撃を避けるようになっている。

（ つ！？）

「不思議か？ 僕の死角に回り込み、速度においてもお前が速い。なのに何故追いつかれるか！」

ヒロキは再び、逆時計回りに動く。綺麗な円を描くように移動するヒロキに対し、真田は直角に移動し、その軌道はまるで六角形のように移動している。

「そ、うか、僕の描く円の中で、最短距離を移動していた！？」

ヒロキがその結論に達する瞬間、真田は完全にヒロキを捉える。「左死角の読み合いもお終いだ。お前は俺が捉えるまでに、時間がかかる……。なかなかのものだつたぜ、川崎ヒロキ！」

「くつ……！」

袈裟の軌道をとる真田の剣線。鈍い音が、リング中央にいる者の耳に届く。

「 ぐつ、はつ！？」

しかし真田の剣線は、誰もいない空を切っていた。田でヒロキの後を辿るが、どこにも姿は無い。

（ ……バ、バカなつ、奴の姿はどうこー？）

腹部に突然の激痛が走る。どうやら攻撃されたのだと、真田は咄嗟に判断する。悶絶し混濁する意識の中で、いまだに見つからないヒロキの姿を追う。すると真田の後方から、砂利を踏んだような音が聞こえ、真田は急いで振り向く。

（ ……何だとつ！？ あいつは一体どんなスピードで俺を斬つたといつのだ！？）

真田は完全にヒロキを捉え、そして攻撃を加えた。しかし結果としては、攻撃は空振りさせられ、自分が攻撃を加えられる。

(やられたと思った……。でも体が咄嗟に反応した、これがアバタ  
ーさんの修行の成果なのか、な？)

あまりの速度で反撃を喰らった真田が最も驚いただろうが、その動きを実現させたヒロキ自身も驚いていた。咄嗟の出来事すぎて、自分自身でも何が起こったのかわからなかつたのだ。

(……でも、これだけの速さで動けるのなら……！)

ヒロキは真田に振り向き直り、その手に持つ木刀を構える。真田もヒロキの攻撃姿勢を察知し、いまだに悶絶する痛みを堪え、防衛の構えをとる。

(ちいっ、まざい……。奴の異常なパワーアップは認めよう、事実は事実だ。しかし、負けるわけにはいかないんだ！)

「 真田さん、行きます……！」

ヒロキは見違える速度で、一気に真田との距離を詰める。そしてその速度を見た、一人の観客は言つ。「今大会中、最速」だと。

## 予選トーナメント終了！

バトルリングに一陣に疾風が走る。高速で移動し、圧倒的なスピードを以て、敵を斬りつけるその様は正に疾風迅雷。電光石火。

戦っている本人である、真田は素直にこう感じじる。戦っているのは人ではなく、風であると。

「…………くそっ！」

試合序盤の空振りとは明らかに違う。先ほどは文字通り避けられていたが、今の攻防はそれとは違う。攻撃を仕掛けたそこにヒロキの姿はないのだ。呆気にとられる間もなく、前後左右からの攻撃が襲ってくる。

「何だつてんだ、お前はっ！ どんな事をしたらそんなに速くなれる！？」

既に真田の剣は、ヒロキを狙っていない。ただ振り回しているだけの攻撃。しかしそうでもしなければ、風のような男<sup>ヒロキ</sup>に攻撃を当てるられる可能性が皆無である。

（まだだ、まだトップスピードを上げられるぞ。まるで、まるで自分が自分じゃないみたいだ……）

現にヒロキは少しづつ、最高速度を上げていつている。当然、真田はそんなヒロキの動きに対応できない。できる事は見てからかろうじて防御するのみ。反撃に移った瞬間には、既に姿が無いからだ。（ここだ。真田さんがこの攻撃を空振りさせた時に……一発！）

真田の空振りを見極め、一撃を当て、そして離脱していく。形勢は完全に逆転する。

「お、俺の……俺の攻撃に合わせてカウンターを取れるっていうのかあー？」

完全に見切られた戦いに、一人憤怒の念を抱く真田。後手に回った戦い方では勝ち目はないと判断し、自ら先手で攻撃に出る。ただ

ひたすらに、愚直にヒロキを追つ。しかし逃げ足のヒロキに、追いつの真田は全く追いつけない。

「くつ……、ふざけんな、そんなデタラメがあるかあつ！」

右手に持つ木刀を、何も考えずにただ振り回し、ヒロキに接近戦を試みる真田。この真田の行為を、完全に見極め、自分から攻撃を打つて出るヒロキ。ダッシュスピードにハンドスピード、ありとあらゆる点でヒロキは真田を凌駕する。先に仕掛けた真田の攻撃は一撃も当たらず、ヒロキだけが攻撃を当していく。

「お前……化け物か！？」

「実際のところ、僕も驚いています。……僕のどじで、こんな事ができる力があつたのか、と」

「それは俺みたいな人種から言わせると、ただの嫌みだ」

「……すみません。でも、こう沸き上がつてくるんです。僕の中から何かの感情が……」

いつもの冷静な表情で、淡々と言葉を出す。あれ程の動きをして、いまだに疲労の色が見えない。そんなヒロキを真田は冷静に見た結果、ある一つの決断を下す。

「……悪い、俺はここでギブアップだ」

「えつ……ー？」

突然の降参宣言にて、驚きの表情を浮かべる。しかし真田を見る限り「冗談ではなく、諦めた顔つきがありありと見てとれる。

「だつてそうだろ？ 他人事として見ても、俺とお前の実力差は明らかだ。俺がどう足搔いたって今のお前には勝てねえよ。……でも解せないな、どんな才能の溢れる奴だつて、この短期間でそこまでの実力は身に付かないはずだ。お前、一体何をしたんだ？」

「……ごめんなさい。それはどうしても言えません」

「だろうな。そんな良い方法を知つたら、誰だつて強くなれるわな

真田は自分チームのベンチへ歩いていく。後ろ手を振り、それがヒロキへの別れとなる。

「……ではそこまで。予選四回戦、マックスハートの勝利とし、マ

ツクスハートは予選トーナメントを通過。ベスト8への進出を許可します！」

黒子からの予選終了宣言。いよいよマックスハートはベスト8に進出する。会場からは雨のように降り注ぐ、拍手の雨が飛び交っていた。その拍手の雨は、ヒロキの心の中にある迷いを、一瞬の時だけとはいえ洗い流す。

ベンチに戻るまでの道で、ヒロキは一人の老人の姿を目撃する。

（……あれは、アバターさん！？）

そう見かけた老人は、ヒロキの能力を飛躍的に上昇させる事に成功させた張本人。アバターその人である。

「ヒロキ、やつたな！ 濃えじやないか、一体どんな特訓したんだよ、こいつめ！」

ワタルは歓喜の表情で、軽い拳を作り、それをヒロキにぶつける。ヒロキもワタルの拳を軽く平手で受け止める。

「アハハハ、これで何とか予選通過したみたいだね」

「ああ、みんなでここまで来たんだぜ。このまま行こうぜ、優勝にさ！」

ワタル達は喜びを隠しきれなかつた。予選四回戦。たつた四回の戦いだが、色々な人間と出会い、そして戦つてきた。ワタル達は、今まで戦つてきた人達の上に立つてているのだと実感する。そしてその人達の為にも、何よりも自分達の為に、これからも勝ち続けていこうと決心し、結束力を強めていく。

「さつて、じゃあ予選通過祝いとして、女だけのパーティーでも開こうか！」

「パ、パーティーですか、何だかドキドキしますね

「……わーい」

マックスハートの女性陣は、かなを筆頭として盛り上がりを見せていた。

「何だよ、女だけがよ、かなつペ！」

「当たり前でしょ、ワタル君。男子は禁制なの！」

「はいはい、わかつたよ。……んじゃ、ヒロキ！ オレサマ達は男同士で打ち上げでもしようぜ？」

「あ、うん……。兄貴、ちょっと『ゴメン』、すぐに戻るからー。」

「先に帰る準備してるぞ！ 早く、戻ってこいよおー。」

ヒロキはワタル達と別れ、先ほど見つけたアバターを探す。アバターはまるでヒロキを最初から待っていたように、すぐにヒロキの前に現れる。

「アバターさん……」

「やあ、ヒロキ君。この試合はお疲れ様だつたね」

「いえ……、この試合に勝てたのは、貴方の修行のおかげです」

「ふむ……。それでこの試合を得て、心変わりはしないかね？ ワシは今でも君の事を待っている。だが、君を待てるのもあと一日が限度じやな」

「あと、一日……」

ヒロキは迷っていた。アバターの特訓は確かにものであり、アバターは更に修行を積めば、ヒロキの強さは飛躍的に上昇するとさえ言つ。しかしその修行を受けるという事は、ワタル達とのリトルウォーズを諦めなければならないのだ。逆にいえば、申し出を断れば今まで通りに、ワタル達と共に戦つていけるのだ。

(僕は何を迷っているんだ。このまま兄貴達と一緒にリトルウォーズ優勝をする、そう兄貴達とも約束したじゃないか。……でも)

「そうだ、ヒロキ君。君の本来の目的を思い出すのだ。君は本当に、あの少年達と共に優勝する事が目的だったのかね？」

「僕は……僕の、夢は……。ごめんなさい、あと一日だけ、一日だけ良いんです。時間をください」

「構わないよ。明後日の朝八時にワシは移動する。それまでに全ての答えの決着をつけてくれ」

そう告げると、アバターは大勢の人の群れに消えていく。ヒロキ

に一つの決断が下されようとしていた。

## もう一つの四回戦！

七月二十九日。この日、ワタル達は対フォースアラート戦を勝利で飾り、予選トーナメントを突破する。その他、数チームが予選突破の名乗りを上げる中で、もう一つの予選第四回戦が行われていた。

「 そこまでつ、予選四回戦の先鋒戦はFエンゼルの池勇の勝利とする！」

そうマックスハートとは別会場にて、優勝候補の一角であるFエンゼルが、予選通過を目指し奮戦している。対戦相手はハッピーハピネス。チームレベルとしては、とてもまとまっていて、順当に行けば予選を無事に通過する程の実力を備えたチームである。

「ナイスッ、池！」

「当然だ、俺達はこんな所で止まるわけにはいかないだろ？？」

Fエンゼルリーダーの三崎と、先鋒戦を勝利で飾った池は、祝福のハイタッチを交わす。一人の信頼関係が成せる絵である。池はハッピーハピネスの先鋒戦の選手である阿部を、わずか三分で倒すといつ速く、且つ的確な戦いで盤石の勝利を收めている。

この光景に、顧問としてチームをまとめている石田先生も、にこやかに見守っている。そして石田の隣は、Fエンゼルの蛇童である速水仁に向いている。

「おい仁よ。わかつてるのは思うが、あまり気張らんで良いぞ。自分でペースで試合を構築すれば良いのだよ？」

「……チツ、誰に向かつて言つてんだ、ジジイ！　仮に何かのハンデがあるうと、俺がこんな雑魚レベル相手にやられるとでも思つてるのかよ！」

先鋒戦の勢いに乗り、Fエンゼルの中堅戦選手である速水仁が出る。ここまで戦いの経過から、速水仁の名前は圧倒的に、今年度リトルウォーズに響き渡つており、仁がバトルリングに向かうと、

一種の殺伐とした歓声が起きている。見物客のノリも、良い試合が見たいのではなく、仁が相手選手を容赦なく蹂躪する様が見たいと、ノリが多くなっている。

「 それでは中堅戦、速水仁と坂本明の試合を行います！」

「 仁と戦う相手は、坂本明という。武器は木刀。元々がちやんばらである事と、リーチ的有利な問題で、予選四回戦ともなると、木刀を主流とするプレイヤーが増えてくる。

「 速水仁、かなりの実力者らしいが、君にはここで消えてもらつよ？」

「 ……言葉つていうのは、その野郎の人となりを表すには的確なものだな」

「 ……何だと！？」

仁の言葉に、坂本は険しい顔つきで、仁を睨み付ける。「ここまで来たプレイヤーだ。その眼光で並の相手は、威圧で押されてしまうだろう。しかし仁に限っては例外である。仁はむしろ、そんな相手の狂氣の風を受け、逆に心地よく楽しんでいる。口元がうつすらと笑う。

「まあ良い、早く来い。俺はお前みたいな奴と遊んでいる暇は無いんだ。……この後、今日発売の最新作のゲームを買いに行かなければならねえからな」

「 なつ、貴様……！ ならお望み通りにしてやるよ！」

坂本は挑発のままに、仁に向かっていく。四回戦レベルとしては、スピードはそれなりに速い。そして木刀を振るう旋回力も、並以上ではある。しかしその程度では、仁にとつて避けるのは容易な作業である。流れるような流麗な動きで、その一つ一つの攻撃を避けていく。その正確に似合わず、しなやかな体躯は、見る者を虜にする美しさがある。

「 くそつ、これだけ攻撃して、何故一発も当たらない！？」

「 ……ふつ、はつはつはつは… おいおい、そんな事もわからねえでここまで来たのかよ！」

「な、何っ！」

仁は鋭い攻撃を避けながら、高笑いする余裕を見せつける。

「一発も当たらない理由は簡単だろ、おい？ 僕が強く、お前が弱すぎると、ただ一つの簡単な理由だろ、馬鹿がつ！」

「仁、この野郎つ、いくら優勝候補のメンバーだからって舐めるのも、いい加減にしろよ…」

「仁の安い挑発は、今の坂本に火をつけるのは十分だつた。ただでさえ十分すぎる攻撃の弾幕は、怒りと共にその速度を増していく。

（これだよ、これ。この怒りを俺にぶつけてくれよ。最つ

高の気分だぜ）

「……だがお前の狂氣も、飽きたな。俺を樂しませるには、お前の狂氣ははした金にならねえ」

ただその場で避けるだけだつた仁は、初めて大きく後退する。いや後退して間を離し、自分が攻撃する上での適正距離へ移動したのだ。小回りは利いていたが、やや大振り気味になつていた坂本は、大きくその体制を崩してしまつ。

「覚えておけよ、怒りのままに戦うのは所詮、三流のやる事だつてよ。……シャアアアア！」

「は、速水、貴様あ！ …… つふうぐ……！」

その蛇の鳴き声のようなかけ声と共に、一気に坂本のみぞおちを突き刺す。仁にとっては当然の話だが、みぞおちを突いたのはわざとである。そして、みぞおちを突かれた坂本は、声にならない声を出し、腹部に走る痺れるような激痛と、そこから襲つてくる鈍痛に、ただ悶絶し倒れる事しかできない。

「ただ悶絶し倒れる事しかできない。

「そこま

「ちょっと待てよ、審判よお！ …… 仁の野郎は、まだ降参してないぜ？」

言葉が喋れないほどどの、痛みと戦い、ただ悶絶しながら倒れるだけの坂本に、仁はゆっくりと近づいていく。坂本は田の焦点が合つておらず、近づいてくる仁を見る暇もない。

「お楽しみは、これからだろ？」

仁は坂本の顔面を蹴り飛ばした。気持ちの悪くなる鈍い音が、リング中央から響く。加減無しに蹴り飛ばした為、坂本の鼻は陥没し、大量の鼻血が噴き出している。

「やめなさい、仁君。テクニカルノックアウトだ、それ以上攻撃するなら、君だけでなく、チーム全体を失格とするぞ！」

「……わかりましたよ。やめれば良いんでしょう、どちらにしてもやめてましたけどね。トドメをさした獲物に用はない」

仁は不敵に笑いながら、リングから離れていく。蹴った右足には、坂本の返り血がべつとりと残っている。

こうして波乱の展開を続出させながらも、優勝候補チームであるFエンゼルも、予選通過の名乗りを受ける。しかし栄光の歴史に彩られた天使チームには、ここまで仁の戦いによる評価により、戦いに勝利した後は、必ずブーリングが起きるようになっていた。

「俺達は、お前らなんて認めねえぞ！」

「天才の名も、墜ちたもんだなあ、三崎！」

「Fエンゼルじゃ、T-O-Tエイカーには勝てないぜ！ 今年も天使は墜ちてしまえよ！」

いつからか、このようなブーリングがつきまとっているのだ。酷い時には、物を投げる人間もいる。

「仁、お前は……。あんな戦い方いい加減にしないか！」

激しい怒りを見せつけ、仁に怒声を浴びせるのは池だ。

「ああ？ 倆は別に不正はしてねえだろ、言いがかりはよせよ、先輩」

「そうじゃない、最後の顔面蹴りは必要無い行動だつただろー！」

「戦いはまだ続いていた。それに戦っている相手にトドメをさすのは、当たり前の話だろ？」

「そりだつたとしても、あの行動はやりすぎだ！」

浴びせられるブーリングの中、池と仁はお互いの意見を引かせず、言い合いになる。その勢いは言い合いで止まらず、今すぐにでも

殴り合いに発展してしまつ勢いである。最も、今ここで試合外の喧嘩になつてしまつたら、Fエンゼルの大会失格は目に見えている事である。

「おこ止めないか、一人とも。今ここで、喧嘩になるのはまずい。頭を冷やすんだ！」

「しかし三崎つ！」

「良いんだぜ、喧嘩になつてもよ。この先輩面した野郎に、一度と先輩面させねえようにするからよ」

「……仁もやめろー。この事は、明日に反省会をする。とにかくこので騒ぎを起こすな！」

栄光の道を歩んでいたFエンゼルだが、予選トーナメントを波乱の展開で終了する。天使は過去最高に荒れているのだ。

## その後の処分！（前書き）

随分と長い時間をかけての久々の投稿！  
三ヶ月間の間、更新されていません扱いになってしまったので、これはイカント。

本格的な再開は夏になつてからでしそう。（恐らく五月、六月あたりから本格再始動）

## その後の処分！

七月三十日。F・H・ンゼルの、予選通過から翌日のことである。予選通過はしたものの、仁の反則スレスレの戦いは、栄光の道を歩いていた天使達を、どん底に落とすには充分すぎるものであった。結局は、試合が終わつた後も、池と仁の口論は終わらずに、次に田に反省会を行うところ三崎の判断により、その場は収められた。そして今、F・H・ンゼルのレギュラーである、三崎、池、そして仁の三名と、顧問の石田先生が集まり、史上稀に見る、険悪な反省会が行われていた。

「ま、反省会だから、言い争いの続きをじりつてわけじゃないからね、一応」

最初に牽制したのは、冷静に状況を見ている三崎である。最も、一日経つた事により、二人はかなり落ち着いているようである。それに念の為に、三崎から池に対して、安い挑発に乗らないよう、「こ、厳重注意がされていた。

（仁は利かん坊だからアレだけど、池なら止められる……って思いたいけど、池はあれで短気だからなあ……）

顔には出さなかつたが、一人、心の中で苦笑いを浮かべる。

「で、先輩よお、わざわざ呼び出したんだ、言つ事はあんただろ？」

「えっ、ああ……そうだけ？」

「仁、お前は先輩に対する、口の聞き方を考え？」

やはり予想通りの展開になりつつある。チラリと横田で石田先生を確認すると、これはこれで呑気に茶をすすつてゐる。普通ならば、これだけ言い争いをしている生徒を、田の前にしたならば、止めるのが普通の教師だが、石田先生はどうもそれを楽しんでいるようにも見える。

（ははは……何か最近、こんな役田ばっかりだな）

三崎は内心で苦笑いしつつも、状況を高速で整理する。

「えーと、とりあえず二人とも、何があつても喧嘩はやめやめ。まづは昨日の一件、あれに関しては僕もやりすぎだと思つていい。仁は今後こういう事がないよう……」

と、横目で仁を見ると、全く聞いていないような素振りを見せる。続いて反対方向を見ると、池がそれに対する睨みを利かせている。

「……ごほん。それで大会本部からは次に一度でも、昨日のような事があれば仁の出場停止、二度あればチームとしての出場権利剥奪、つて事になつた。ようはスポーツマンにあるまじき行為があつたら、その時点でアウトという事だ。良いね、二人とも？」

交互に一人を見ると、お互いが沈黙を決め込んでいた。

池は当然といつ認識の為か、仁は読み切れない。更に石田先生を見ると、こちらはこちらで何を考えているのかわからない。

「まあ、そういう事で。今日はこれで解散ね、次のベスト8戦は石田先生からの連絡網で伝わるはずだから。……では石田先生お疲れ様でした」

一礼をして部屋から出て行く三崎。それに連なつて池も一礼してから出る。

やや遅れて椅子から立ち上がった仁だが、「待ちなさい、仁」と、石田先生に呼び止められる。

「何だよ、じじい。あんたも説教かよ？」

「仁をまあまあ手で制すると、仁もそれに従い椅子に座り直す。「どうするかね、仁」「何が？」

「あと一回、昨日のような行動をすれば、出場停止処分だ。そうなつたら私との約束を、守れないねえ」

石田先生の言葉に、仁はただ無言で聞いていた。「仁は私との約束を果たそつと、少しやる気が溢れすぎてしまっただけなんだよね」

「ぐだらねえ、はつたおすぞつ、じじい！」

「そうつ、その気迫だよ！ 若いんだから無駄に冷静じゃイカン。

……まだ氣性の荒さは田立つが、仁はやうして暴れ回るへりこの元

氣がないとね」

「……氣持ち悪い奴だ」

「はつはつは、期待しているよ？」

その言葉に仁は「ケツ！」と懸念をつき、部屋から出て行く。

「困った困った」

一人残された石田先生は、うつすらと、しかし力強く笑っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0113m/>

---

MAX HEART!

2011年4月19日23時40分発行